鞠智城シンポジウム 2013
成果報告書

古代山城鞠智城築城の謎を探る

古代山城の成立と鞠智城

1. 律令国家への道と東アジア（東京会場）
2. 築城技術の源流（大阪会場）

熊本県教育委員会

鞠智城シンポジウム

目次

鞠智城シンポジウム【東京会場】

報告　「鞠智城跡の調査と成果」　能登原孝道【東京会場】・矢野裕介【大阪会場】　5

はじめに　6

一、鞠智城跡の概要　6

二、鞠智城跡の内部構造　10

三、鞠智城跡の出土遺物　12

四、鞠智城の変遷　14

おわりに　15

講演一　「律令国家と古代山城」　荒木敏夫　17

はじめに　18

一、七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造　18

二、「白村江敗戦後」の倭国－中大兄「称制」下の非常時の王権－　21

むすびに代えて－鞠智城が象徴するもの－　28

講演二　「古代山城は完成していたのか」　亀田修一　31
はじめに　32
一、完成していたと思われる古代山城　33
二、未完成の可能性がある古代山城　45
三、完成した古代山城と未完成の古代山城　47
おわりに　49
講演三　「鞠智城の建物跡について」　小西龍三郎　51
はじめに　52
一、鞠智城跡の建物跡　52
二、古代の倉　55
三、鞠智城の建物と大野城の建物　58
四、鞠智城の建物の建造時期と存続期間　62
パネルディスカッション　67〜89
コーディネーター・パネラー紹介　68

鞠智城シンポジウム【大阪会場】

講演一　「古代の東アジアの動向と鞠智城」　酒寄雅志　95

はじめに　96

一、七世紀後半の東アジアの動向と鞠智城――白村江の敗戦と鞠智城――　96

二、七世紀末の東アジアの動向と鞠智城　99

三、八世紀の東アジアの動向と鞠智城　103

四、九世紀の東アジアの動向と鞠智城　105

おわりに　108

講演二　「古代山城のフォーメイションと鞠智城」　出宮徳尚　111

はじめに　112

一、日本古代山城の祖型たる高句麗山城　112

二、律令体制下の古代山城の倣傚たる唐代前期の山城　115

三、西日本の古代山城　117

四、天智紀の山城（第三期）　118

五、律令体制の整備と山城施策　120

講演三　「韓国古代城郭からみた鞠智城」　向井一雄　125

はじめに　126

一、韓国における城郭調査の進展　126

韓国と日本の山城の比較　126

新羅の山城　127

高句麗の南進拠点の遺跡　129

百済の城郭　131

伽耶の山城　134

列石について　135

二、韓国古代城郭と鞠智城　137

パネルディスカッション　139〜163

コーディネーター・パネラー紹介　140

付録

・大阪会場資料　73〜122
・東京会場資料　1〜72

【資料篇】

【追記】

●東京会場・大阪会場において行った能登原孝道・矢野裕介（歴史公園鞠智城・温故創生館）の報告は内容が重複するため、東京会場分（付録含む）に掲載しています。

●今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料篇」として巻末にまとめました。

鞠智城シンポジウム【東京会場】

古代山城鞠智城築城の謎を探る

古代山城の成立と鞠智城－律令国家への道と東アジア－

鞠智城東京シンポジウム

古代山城鞠智城築城の謎を探る

古代山城の成立と鞠智城－律令国家への道と東アジア－

一．開催日時等

日時：平成二五年七月二八日（日）午後一時～午後五時

会場：東京国立博物館（平成館大講堂）

東京都台東区上野公園一三―九

主催：熊本県、熊本県教育委員会

共催：熊本県文化財保護協会

二．講演等プログラム（記録）

・あいさつ

・報　告「鞠智城跡の調査と成果」

能登原孝道（熊本県教育委員会　歴史公園鞠智城温故創生館）

・講演一「律令国家と古代山城」
荒木敏夫（専修大学教授）
・講演二「古代山城は完成していたのか」
亀田修一（岡山理科大学教授）
・講演三「鞠智城の建物跡について」
小西龍三郎（元九州造形大学教授）

・パネルディスカッション
コーディネーター　佐藤　信（東京大学大学院教授）
パネラー　荒木敏夫（専修大学教授）
亀田修一（岡山理科大学教授）
小西龍三郎（元九州造形大学教授）

報告　鞠智城跡の調査と成果

報告者紹介【東京会場】　能登原　孝道（のとはら　たかみち）
九州大学大学院卒業。熊本県文化課を経て、現在、
熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園温故創生館」勤務。鞠智城発掘
調査に従事。

報告者紹介【大阪会場】　矢野　裕介（やの　ゆうすけ）
同志社大学文学部卒業。熊本県文化課を経て、現在、
熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園温故創生館」勤務。鞠智城発掘
調査に従事。

・報告「鞠智城跡の調査と成果」

矢野　裕介　・　能登原　孝道（熊本県教育委員会）

はじめに

皆さん、こんにちは。熊本県教育委員会、歴史公園鞠智城・温故創生館の能登原と申します。私のほうからは本日、鞠智城跡の調査と成果と題しまして報告をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず鞠智城跡では、昭和四二年から約半世紀にわたりまして、発掘調査を実施してまいりました。その間、平成一六年の二月には、日本の歴史上重要であるということから国の史跡に指定され、また、現在発掘調査の成果を基に、歴史公園の整備を現在進めております。また昨年の三月には、これまでの発掘調査の調査を総括した調査報告書を刊行いたしました。本日はその報告書の成果を含めまして、鞠智城跡の調査と成果についてご報告したいと思います。よろしくお願いいたします。

一、鞠智城跡の概要

まず鞠智城の概要ですが、鞠智城というのは七世紀後半、今から約一三〇〇年前に、大和朝廷によって築城さ

れた古代山城になります。この城が築かれた契機となったのは、西暦六六三年に朝鮮半島で起こりました白村江の戦い、「はくそんこうのたたかい」とも言いますが、その戦いになります。その戦いの原因となったのは西暦六六〇年、朝鮮半島の南西部にございました百済という国が、中国の唐と、それから百済の東隣にありました新羅によって滅ぼされます。当時日本は、百済と友好関係にあり百済を復興させるために、日本は朝鮮半島に出兵をいたします。そして、現在の韓国の西海岸の白村江という場所で、新羅と唐の連合軍と戦うのですが、大敗してしまいます。当時の日本の天皇は、大化の改新で有名な天智天皇です。天智天皇は唐と新羅の連合軍が勝利の勢いに乗じて、日本に攻め込んでくるのではないかということを考えまして、西日本の各地に山城を造っていきます。鞠智城はその時に造られた山城の一つということになります。つまり鞠智城は、古代日本の防衛体制の一翼を担った城であるということが言えるかと思います。また鞠智城は七世紀後半に造られまして、一〇世紀中ごろまでの約三〇〇年間存続した城で、古代山城の中でもかなり長期間使われた城になります。その間の変遷は五期に分けられることが明らかになりましたが、それについてはあとからまた詳しくご説明をいたしたいと思います。

写真1　能登原孝道氏（東京会場）

こちらは古代山城の分布になります。白村江の戦いでの敗戦のあと、西日本各地に山城が造られるのですが、それは唐と新羅の連合軍が攻めてくると想定されるルート、つまり最前線の対馬、そして北部九州、それから瀬戸内海沿岸から近畿にかけての地域に

造られます。現在までのところ、全部で二二の城が確認されておりますが、その中でも鞠智城は、一番南に位置している城になります。

つづきまして、鞠智城跡の位置ですが、鞠智城跡は熊本県の北部に位置しております。熊本県に阿蘇山という山がございます。阿蘇の外輪山から有明海に向けて流れる菊池川という大きな川があり、鞠智城はその菊池川の河口から内陸に約四〇キロ遡った地点にございまして、現在の山鹿市と菊池市にまたがって存在しております。ところで、古代の九州の中心は、大宰府という場所でした。

これは現在の福岡県の太宰府市にあったものですけれども、そこから鞠智城は南に直線距離で約六三キロ離れております。また熊本県は古代においては肥後国と呼ばれておりましたが、肥後国の中心、国府があった熊本市周辺部からは北に約三〇キロ離れた場所に位置しております。

こちらが鞠智城跡を南東方向から撮影した航空写真です。赤の線で示した範囲が鞠智城の城の範囲になります。ここは標高約一四〇メートルの、通称米原台地と呼ばれます台地上にこの城は位置しております。鞠智城以外の山城が、標高四〇〇メートル以上の高い所に造られているのに比べて、この鞠智城は山城といいながらも、かなり低い場所に築かれているのがその立地の特徴として挙げることができます。

また、鞠智城のことは古い文献や歴史書にも残されております。奈良時代から平安時代にかけて国の歴史を記しました六つの国史、国の歴史書がございます。いわゆる「六国史」と呼ばれるものです。その最も古いのが『日本書紀』になりますが、日本書紀の次に編纂されました、『続日本紀』というものに鞠智城の名前が出てまいり

ます。どのように出てくるかと申しますと、大宰府に、大野城、基肄城、鞠智城の三つの城を修理させたという記事になります。これが、鞠智城が文献に出てくる最初の記事になります。残念ながら、鞠智城が築城されたという記事は残されておりません。その後九世紀、平安時代になってからですが『日本文徳天皇実録』、そして『日本三代実録』という歴史書にも、鞠智城のことが出てまいります。この時は、菊池城院、または菊池郡城院という名前で出てきます。その内容としましては、鞠智城にありました武器庫に保管してあった鼓が勝手に鳴ったという奇怪な現象や、あるいは鞠智城の中にあった不動倉、これは米倉のことですが、その米倉が一一棟火事で焼けた、という記事が残されております。その後、西暦八七九年の『日本三代実録』の記事を最後に、鞠智城のことは文献からは消えてしまいます。ですので、鞠智城の修理から、その八七九年までの約一八一年間は鞠智城が存在したということが、文献から知ることができます。

写真2　矢野裕介氏(大阪会場)

つづきまして、こちらは鞠智城の平面図になります。太い線の、赤い線、青い線、黒い線で囲った範囲が、鞠智城の範囲になります。城内の面積が、約五五ヘクタール、これは東京ドーム約一二個分の広さで、かなり広い面積になります。周囲の長さは、約三・五キロメートルです。そして冒頭にも述べましたとおり、昭和四二年から、三二次にわたる発掘調査を熊本県で実施してまいりました。その結果、城の中心部、台地の平坦部に当たる場所、この場所から合計で七二棟の建物跡が見つかりました。また、城の南側からは、三ヶ所の城門跡が見つかっております。これは東から、深迫門、堀切門、池ノ

尾門と呼んでおります。また、城内の北側の谷部には、貯水池跡が見つかっております。この場所になりますが、現在は完全に池は埋もれていたのですが、発掘調査の結果、ここに約五三〇〇平米の池があったことが分かりまして、発掘調査では、土器や瓦、木製品、そして木簡や、百済系銅造菩薩立像といった貴重な遺物が出土いたしました。

二、鞠智城跡の内部構造

こちらは平成九年度に撮影いたしました長者原（ちょうじゃばる）地区の航空写真で、この地区は最も建物跡が集中して見つかった地区になります。白い点々で見えるのは、建物跡の柱の跡です。鞠智城から検出された建物は掘立柱建物と礎石建物の二種類がございました。掘立柱建物というのは、穴を掘って、そこに柱をそのまま立てるタイプの建物で、礎石建物というのは、柱の下に大きな石を敷くタイプの建物です。掘立柱建物から礎石建物に変遷していったことが、鞠智城の調査からも分かっております。

そういった建物がある中で、大変特徴的な建物というのが、赤い丸で示しております、平面八角形を呈する建物跡になります。これは南北二棟分が見つかっております。また、その北側からは、片仮名のコの字形に配置されました建物群が見つかっております。こういったコの字形配置の建物は、古代の役所などに多く見られるものでして、おそらく鞠智城のこの場所にも、城の運営や管理をつかさどった中枢施設があったものと考えられます。そして、この長者原地区の台地を下りて行った所には、貯水池の跡が存在しております。

つづきまして、これは建物跡を近くから撮影した写真になります。上の左側の写真が、南北二棟見つかった八角形建物のうち、南側から見つかった建物です。真ん中に大きな心柱がございまして、その周りを柱が八角形状に、また三重にめぐっております。上の右側の写真は北側から見つかった八角形建物でして、これも同じく真ん中に心柱がございます。その周りを八角形状に柱がめぐっておりますが、南側が三重に柱がめぐるのに対し、北側は二重にめぐっているという違いがございます。また下の写真は四九号建物跡と呼んでいます礎石建物跡で、こちらは縦横の長さが二一・六メートル×二一・七メートルという、鞠智城の中でも最大規模の礎石建物跡になります。

つづきまして、城門の説明に移らせていただきます。これは城の最も西側から見つかりました、池ノ尾門跡の写真になります。両側から尾根が迫っており、尾根に挟まれた谷部に門が造られております。谷部を遮るように石塁が造られておりました。残念ながら、一部を残してほとんど崩壊していたのですが、この石塁の下からは、通水溝が見つかっております。通水溝というのは、城内の水を城外に流すための暗渠状の溝になります。また、この調査区の中からは門の跡は見つかりませんでしたので、おそらく画面の右側、現在道路が通っている所に、古代の門、城門があったのではないかと考えております。

つづきまして、写真の左側は堀切門跡の調査中の写真になります。これは三つある城門のうちの真ん中に位置しております。奥に見えておりますのが、門礎石と言いまして、門の下に敷いていた、石になります。これは一つの石に二つの軸摺穴（じくずりあな）、軸摺穴というのは扉の軸を入れ込むための穴で、それが二つ彫り込まれている大変珍し

い形式のものです。また堀切門跡からは、城の外から中に入る側溝を持つ道路の跡が見つかっております。また右側が、深迫門跡、最も城の東側から見つかった門で、ここからも門の礎石のほか、門の両側に広がる土塁の跡が見つかっております。

つづきまして、これは貯水池跡の写真になります。左側は貯水池跡の池尻部を調査している時に撮影した写真になります。左右の両側に尾根がございまして、その真ん中の低い部分、もう現在では埋まっていますが、ここは全て貯水池があった場所になります。右側の写真は調査中に撮影した写真で、柱などの建築用材の出土状況の写真になります。貯水池跡というのは、飲料用の水ももちろん溜めていましたが、それ以外にもこういった建築用材などを保管する貯木場としての役割があったことも分かっております。

つづきまして、こちらは土塁の写真になります。鞠智城は周囲三・五キロメートルですけれども、そのうち、西側と南側から土塁線が明確に確認されております。土塁というのは、ほかの古代山城にも見られるように、版築（はんちく）土塁（どるい）という土塁が造られております。これは性質の違う土や砂を交互に突き固めていきまして、強固な城壁にしたものです。右側の西側土塁線の写真を見ますと、土塁の一番下に石を並べまして、その上に土を盛っている状況が分かるかと思います。

三、鞠智城跡の出土遺物

つづきまして、鞠智城跡から出土いたしました遺物について紹介、説明したいと思います。鞠智城跡から最も

多く出土しているのが、土器になります。土器とはお皿などの器のことです。左の写真は、須恵器と呼ばれます高温で焼かれました土器になります。右側の赤茶色っぽい土器は、土師器と言いまして、須恵器よりも低温で焼かれた素焼きの焼物になります。こういった土器の形態的な特徴から、例えばその土器が出土しました建物跡などの時期、年代が分かってまいりますので、土器は大変重要な遺物になってまいります。

つづきまして、これは木製品の写真になります。これは貯水池跡から出土しました。貯水池跡では、柱などの建築用材も保管していたのですが、それ以外にこの写真のような平鍬や横槌といったものも見つかっております。

つづきまして、これは貯水池跡から出土しました木簡になります。木簡とは、細長い板に墨で文字を書いたもので、この木簡には、上から「秦人忍口五斗」という文字が書かれておりました。解読できなかった四文字目に、おそらく米という文字が入るだろうと考えておりまして、秦人忍という人が、米を五斗、鞠智城に納めましたということが書かれていると解釈されています。

つづきましてこれは瓦になります。この瓦は建物の軒先を飾る、軒丸瓦と呼ばれるもので、蓮の花の模様がデザインされております。

つづきまして、これは平成二〇年に貯水池跡から出土しました百済系の銅造菩薩立像になります。写真ですと少し大きく見えますが、実際は高さ一二・七センチ、幅三センチの小型の仏像になります。これは形態的な特徴から、七世紀後半に朝鮮半島の百済で造られたものと考えられております。

四、鞠智城の変遷

次に鞠智城の変遷に移ります。これは冒頭に述べました、昨年三月に作成しました調査報告書の中で明らかになってきたことになります。鞠智城は七世紀後半から一〇世紀中頃まで三〇〇年間変遷したと分かっておりますが、その中で五つの時期に分かれるということが明らかになりました。そのうち最初の時期が、鞠智城Ⅰ期になります。これが七世紀第3四半期から第4四半期。四半期というのは、一〇〇年を四分割したものになりますので、七世紀第3四半期は、西暦六五〇年から六七五年の時期になります。この時期は鞠智城の創建期でして、掘立柱建物が造られます。また城門、貯水池、土塁も造られます。この時期は、古代山城としての最低限の機能が備わった時期だと考えられております。

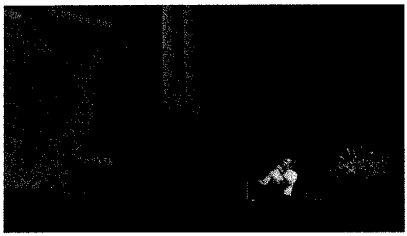


写真3　矢野裕介氏(大阪会場)

つづきまして、鞠智城Ⅱ期になりますけれども、この時期には八角形の建物が出てきまして、またコの字形配置の建物群も出現します。内部施設の充実化が図られた時期であると考えております。また、『続日本紀』に記載されました鞠智城の修理の時期も六九八年とありますので、この鞠智城のⅡ期に該当すると考えられます。

また鞠智城Ⅲ期は、礎石建物が出現してくる時期になります。ただし、城内から土器が全く出土しませんので、城の活動は停滞していたものと考えられます。

つづきまして、鞠智城Ⅳ期は、礎石建物が大型化する時期になります。また、倉庫と考えられる建物が多いことから、食糧備蓄施設としての機能を持っていたと考えており

ます。

そして、鞠智城の終末期にあたる鞠智城Ⅴ期は、建物の数が減少しますが、新たに大型の礎石建物が建てられていることから、倉庫としての機能が主体的に維持されたと考えられております。

おわりに

このような発掘調査成果を基にしまして、鞠智城ではこれまで歴史公園としての整備を進めてまいりました。これまでに合わせて四棟の建物跡を復元整備しております。左側の写真は、南側の八角形建物跡を復元しました、八角形鼓楼になります。右側は、上から米倉、兵舎、板倉といった建物を城内に復元しております。また、城内には、ガイダンス施設としまして、温故創生館を設置しております。その中では、鞠智城の歴史や変遷について分かりやすく説明したパネル、また実際に鞠智城から出土しました土器や瓦、また木製品といった遺物も多数展示しております。まだ鞠智城に来られたことがないという方は、是非一度、鞠智城に来ていただきたいと思います。少し駆け足になりましたが、以上で私の報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

講演一　律令国家と古代山城

講演者紹介

荒木　敏夫（あらき　としお）

早稲田大学教育学部　卒業。愛知教育大学講師、助教授を経て、一九八七年　専修大学文学部教授。

二〇〇二年～二〇一〇年まで文学部長・副学長を歴任。

専門は日本古代史。

・講演一「律令国家と古代山城」

荒木 敏夫　（専修大学教授）

はじめに

ご紹介いただきました、専修大学の荒木でございます。

私は、主として文献から、この鞠智城ができる歴史的背景と鞠智城の遺跡としての「終焉」をお話したいと思います。とりわけ、留意したいのは－本日の最後に述べることですが－、鞠智城が本来果たすべき役割を終えてもなお時代、時代によって刻印される鞠智城の機能であります。こうしたことを申しあげるのは、地域の歴史を考える時、こうした視点は、極めて重要と考えるからであります。

一、七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造

『続日本紀』文武二年（六九八）五月条に、「大野城・基肄（きい）城・鞠智城の三城を繕治する」という記事があります。これが、文献史料にみえる「鞠智城」の初見史料です。鞠智城の他に二城に修理を施したことを知らせる史料です。

鞠智城のような古代の山城の分布は、九州、そして西日本に点在しています。かつては、これらを朝鮮式山城

といったり、神籠石といったりしておりました。本日は「古代（の）山城」で統一して、この鞠智城のできる七世紀後半がどういう時代状況・時代背景であるかを、まず、お話しします。

皇極女帝が重祚して斉明女帝（在位・六五五年～六六一年）の即位する七世紀後半は、東アジアに、百済滅亡、そして白村江の戦い、高句麗の滅亡という大きな変動がありました。西日本から九州にかけて、古代山城が築造される契機は、この時期であろうというのが、大方の一致する見方です。

この白村江の戦い、国内ではなく国外に出て行った大がかりな戦争です。戦争は、「王事（おうじ）」と理解する考えがあるように、究極的には王自らが戦争に赴く（親征）形式が基本的なものです。

写真４　荒木敏夫氏

斉明女帝は斉明七年（六六一）に亡くなっていますから、天智二年（六六三）八月の白村江の戦の大敗は、中大兄皇子（葛城皇子・後の天智天皇）が、最高指揮官であったとみなければなりません。斉明天皇が亡くなって、戦争を中止することもできなくはなかったが、中大兄皇子は、戦争に突き進んでいき、遂には、壊滅的な打撃を蒙っています。

白村江の戦いは、その前段階からみれば、斉明女帝の戦争として位置づけられる戦争となります。

『日本書紀』の「斉明紀」の記述で、留意すべき点を一点だけ押さえておきたいと思います。

白村江の戦いは、倭国が久方ぶりに大量の兵士を外に送り出した戦争でした。そういう戦争のきっかけを作ったのが、斉明女帝です。

斉明女帝の「斉明紀」は、『日本書紀』に編纂者によって多く手が加えられており、ある種のストーリーがあると考えられています。私は、そのストーリーを次のようにみています。

「斉明紀」は、「鬼神に魅入られた女帝の話」とみると、「斉明紀」の全体が理解できます。

まず、「斉明紀」は、その冒頭に近いところで、奇妙な話を載せています。それは、空中に、龍に乗っている者がいて、顔かたちが「唐人に似た」、異国の人です。その唐人が青き油の笠を着て、葛城の峰より生駒に向かって北上し、生駒からは西に走って、住之江へ飛んでいる。関西の地理を、少し思い起こしていただければ、奈良県の南部の葛城から北の生駒へ行き、さらに生駒の西に行くと、住吉神社のある住吉です。さらに、この龍に乗っていた者は、住之江から一気に西に向かって行った、との話である。

こうした話を「斉明紀」の冒頭近くに置く一方で、その最後に近いところでは、斉明天皇の葬儀の話が置かれています。それは、斉明が死んで、皇太子の中大兄が仮の葬儀を朝倉でやっていたところ、その夕方に、朝倉山の山上に大きな笠を付けた鬼がその仮の葬儀の模様をじっと見ていた、という。

この鬼と先の異人は、イコールの関係で結べます。斉明の死を予感して、異人・鬼神は西の筑紫の地（福岡県）へ先に飛んで待っている。斉明は、福岡の地で「おいでおいで」の手招きをしている異人・鬼神に引き寄せられるかのごとくに、筑紫の地に着き、筑紫朝倉の地で亡くなってしまう。「斉明紀」に記された斉明女帝の話は、

天皇が外地で死ぬという、非常に珍しい話になっています。

二、「白村江敗戦後」の倭国-中大兄「称制」下の非常時の王権-

中大兄は、筑紫朝倉で斉明女帝の仮の葬儀を行いましたが、直ぐに次の大王に即位できませんでした。中大兄の即位は、天智七年（六六八）ですので、斉明天皇の死後からこの時までの間、天皇位（厳密には「大王位」ですが、煩瑣になるので、「天皇」で話を進めます）は空位です。この間、中大兄は「素服称制」で事態に対応します。これは、「素服」（日常普段の服）で-戦時中でもあるので、わざわざ喪服のような特別の服を着ることなく-、「称制」（大王の代行）をおこなった、ということです。注目してよいのは、この時期に、多くの所で山城が造られているのです。

さらに、中大兄が「水表之軍政」をとったとありますが、白村江近海での海戦を想定して、特別に書き表したものと考えられます。

天智二年（六六三）八月の白村江の戦いは、大敗を喫しますが、その理由についても、中国海軍を侮っていた、準備不足など、いろいろな点が挙げられていますが、負けた事実は変わるものでありません。

『日本書紀』天智三年（六六四）一二月条は、「対馬、壱岐に防人と烽（とぶひ）を置き、大宰府に水城を築く」と記している。これもまた、その年次に大きな誤りがなければ、中大兄の称制下の政策と捉える必要があります。

中大兄がまだ天智天皇になる前の大王代行の段階ですが、天智四年（六六五）、白村江での敗戦後、倭国がど

のような対応をしていたかをうかがえる記事が「天智紀」にあります。

「天智紀」は、実録的な記事が多く、信憑性の高い記事も多いのですが、『日本書紀』編纂段階での錯誤か、同じことを二箇所に書いたり（重出記事）、文章に混乱が見られたりする箇所があります。

そうした「天智紀」の記事の中で、戦勝国の唐と新羅の動きで、特記すべき記事がいくつかあります。その一つが、天智四年（六六五）、唐国が、劉徳高（りゅうとくこう）・百済禰軍（くだらねぐん）・郭務悰（かくむそう）らの一団二五四人を倭国に送ってきた、とする記載であります。ずいぶん大規模な人数の来倭です。

同じく天智四年には、一二月に筑紫に大野城、基肄城を築いております。先程の鞠智城を含む三城の事との関係から行けば、少なくとも鞠智城は、ほぼ同時竣工着工というふうに見てよいと思います。発掘調査でその事実を否定するような資料も出ておりません。このようなことから、おそらく天智四年（六六五）、少なくても創建の時期はこの辺りに求めてよろしいものと思います。

劉徳高らが帰国する時、劉徳高らを送る使いとして、遣唐使を派遣しています。それを物語るのが、この年、守君大石（もりのきみおおいし）を大唐に遣わすという『日本書紀』の記述です。

さらに近年驚くべきことに、厳密に言うと二年前ですが、『日本書紀』に出てきていた人物である禰軍、百済系の中国人の墓誌が発見されています。墓誌には、「日本」という文字が書いてありました。「日本」と刻した国号を示す非常に古い資料が出てきたということで、日本の学界でも大変喜びました。ところが、この「日本」は国号の「日本」ではなく、「日（ひ）の本（もと）」というような意味で、ｏｒｉｅｎｔ（オリエント）、東方の、という意味

であろうということが改めて指摘されています。

逆にはっきりしてきたのが、禰軍の墓誌の発見によって、七世紀第3四半期にまでに遡って、どうやら我が国は「日本」と呼ぶということはなかった、ということが言えるようになりました。これは禰軍墓誌の「日本」が、百済のことをさしているように、唐から見て東のほうの人達を、日本語でいう「日の本」の意味で捉えて、唐では「日本」という語句を使っていたようです。中国の初唐の頃の漢詩文の中にも、同趣の用例のあることが指摘されています。

これは、「日本」の国号が、どのような経緯で使用されるようになったかを考える上で大変貴重な金石文資料となると思えます。

天智が正式に即位して四年後の天智一〇年（六七一）-もう天智は即位していますが-、この時の「使節等」は二〇〇〇人です。通常『日本書紀』を扱う時には、あまり数字の細かいところはこだわらないのが通例ですが、この記事の二〇〇〇という数字には大きな意味があると思えます。唐国使人の郭務悰が来倭した目的は、大量の人員が、多くの船で行くと、倭国を攻めるために来たと誤解されると困るので、大量の人のいくことを予め都に知らせてくれと伝えるためです。

沢山の船団を組んで、この場合は七隻ですが-、大量の人が倭国に来ており、その中には、捕虜になった者、その他百済の難民なども、連れてきたのではないかとも推測されています。戦勝国の唐とのやり取りの中で、捕虜の交換から始まって、おそらく倭国の使者も彼の地に行って-戦後の処理をどうするかの対応をしております。

こうした交渉が行われている一方で、他方では、非常時の戦争に備えて城造りをしている、というのがこの頃の実情です。

白村江の戦いで捕虜となって戻ってこられなかった倭国兵もいることは、『日本霊異記』に載せる説話からもよく知られた事実です。

中大兄は、天智六年（六六七）、近江に遷都します。大和の高安城、讃岐の屋嶋城も築かれますが、天智六年に即位ですから、これも中大兄称制下の造築となります。この頃には、鞠智城も造られております。

白村江には九州の人達が相当数、国造の指揮する軍隊（国造軍）に兵士として徴発されて、従軍したはずです。そうした兵士らも戻ってきております。こうした条件も整う中で、防衛体制の一環として、防衛施設である山城ができ、水城ができるのです。

唐国が襲ってくるであろうという、強い確信。その確信は、最高の軍事指揮官であった斉明女帝が亡くなって、全軍の指揮官としてのリーダーシップを取らねばならなくなった中大兄が、最も強くもっていたものと考えられます。万が一、攻めてきたならば、という想定のもとに、比較的短期間で山城ができていったのではないでしょうか。

そしてもう一つ、負けた倭国は、中大兄が必死になって唐や新羅と交渉をしていたことを先に述べました。これは、敗戦という非常に不利な外交条件で行う交渉ですから、展開次第ではとてつもない悲劇をさらにもたらします。

ところが、東アジアの国際情勢は、倭国にとって不利な外交条件を転換させる事態が天智七年（六六八）におきます。高句麗の滅亡です。これによって、朝鮮半島の領有をどうするのかということで新羅と唐とに意見のずれが生じます。

『日本書紀』によれば、天智七年九月この時、新羅が六五六年以来、倭国王に形式上、臣下の礼を取って出す貢ぎ物である「調」を持って来ました。これは、新羅が高句麗滅亡後の朝鮮半島の領有を有利に進めるための外交で、倭国と手を結ぶための外交とみることができます。

新羅は、六六五年に泉蓋蘇文が亡くなった時点で、高句麗の瓦解を見通していたと思いますが、この年、即位した天智に、わざわざ貢物である「調」という形式で持ってきたことになります。新羅は、時に、こういう対等の関係でない屈辱的な外交を新羅の国内・国際条件を加味して使い分けてきました。そうした新羅の外交からすると、非常にこれは一歩も二歩もへりくだった対応になります。その理由として、結局、半島の支配を、中国に任せるのか、自国でやるのかに関わり、この点をめぐって、唐と新羅の対立が深まったため、こうした外交をとらせたものと思えます。

唐は一旦安東都護府を平壌に置きますが、後に遼東に移します。その一方で、新羅の文武王が唐国や倭国への巧みな外交を仕掛けながら、半島の統一を本格化させます。そして、こうした外交政策が功を奏し、天武五年（六七六）頃には、事実上、唐も新羅の半島支配を認めることになり、新羅による半島の統一が完成します。これは、都護府を設置し、地方支配を行う唐国の東アジア支配の政策が、頓挫したことを意味します。

六七二年に王位をめぐる争い、壬申の乱が起こります。これは綱渡りの外交とはいうものの、一応の外交のめどもそれなりに立ってきていればこそ生じた内紛です。天武が、王位継承の争いで、天智から大友皇子に継承される王位を簒奪するわけですが、わずか数か月で終わった内乱とはいえ、内乱をしている時間など普通ならばなかったのにも関わらず、内乱をおこせたのも、それなりに前の段階で一定程度の外交上の見通しが立っていたからだと思います。

持統女帝の時に、飛鳥浄御原令ができあがり、都も飛鳥の地から藤原に地に遷都され、段々と本格的な、古代国家・律令王権ができてきます。

文武は、六九七年に即位します。その翌年の文武二年（六九八）五月に鞠智城などが、「三城繕治」とあります。繕い治すという意味になります。ですから、鞠智城は当然この前の段階にできていなければならないわけです。

「繕治」の記事で感じるのは、山城を造るのも大変なわけですが、維持、管理していくことはもっと大変です、ということです。『報告書』によれば、鞠智城は何期かに分けられるということですが、一〇世紀半ば以降、大体つまり第五期に当たる段階になってくると、さすがに活動は終息するようです。修理というのは、必要だからこそ修理をするわけです。

おそらく称制下の中大兄は、相当な勢いで命令を発して、また強い命令を下して造らせたと思います。そうでないと、称制下の時期に大王の権力が、あそこまで達しているということは、おそらく各地域の豪族の協力を強

く要請したからです。その要請の中でなんとか都までの防衛ラインを固めることができたわけですが、問題はいつまでも臨戦態勢にあるわけではないということです。一時的に緩めた体制をとっても、そのまま緩めたままでないことが、九州の大野、基肄、そして鞠智、この三つの城の繕治の記事から読み取れます。そして九州だけではなく、高安城の修理も行なっていることにも留意すると、この時の「修理」が、「緊張感」を秘めたものと考えることもできます。それは、遣唐使を派遣していない唐との外交の空白期が、もたらした国際関係の理解の浅さ・不案内によるものとも考えられ、この点にも目を向けておく必要があると思います。

白村江の敗戦で、もう一つ留意したい点があります。日本の八世紀以前は、あまり注目されていませんが、大量の兵士が海を渡っています。海外派兵の歴史というのは八世紀以前の段階は規模の小さい例も含めれば、決して少なくないということです。これは、日本の古代史を考える上で、また対外関係を考える上で知っておかなければならない事実です。白村江以降、海外派兵は、極めて稀になってきます。

海外派兵という事実は、古代史に関係ないと思われがちですが、白村江だけでなく、それ以前の段階でも、いざという時にはありました。そうした時の軍隊を『日本書紀』は「救軍」と記しています。倭国が、勝手に称しているだけではなくて、おそらく朝鮮三国との関係の中で、「救軍」と呼ばれていたと思います。救軍は、招聘する側の、例えば、百済、任那（伽耶諸国）のような国からすれば、まさにこの言葉に相応しいものでした。そして、こういう「救軍」としての派兵が、欽明天皇の時代にあたる六世紀から七世紀にかけてみられ、また、「救軍」という語句は、八世紀に入っても使用されたようで、七六六年の百済王敬福の薨伝に出てきます。

「救軍」は、朝鮮三国や伽耶間の抗争の時に、倭国軍として肩入れしますが、多くの場合はおそらく筑紫、太宰、九州に駐留します。崇峻が殺された時の話で、内の乱れ、天皇が殺されても九州の兵隊を動かしてはいけないとあります。なぜかというと、外からの守りの為、目的がはっきりしているのだということですが、このような筑紫の兵の性格は、救軍という役割がありました。

むすびに代えて - 鞠智城が象徴するもの -

白村江の大敗から受けた危機感に煽られる中で造られた鞠智城は、一〇世紀で役割を終えます。

そこにいたる以前の九世紀の中頃、当初の期待された鞠智城の機能とは、異なるものが史料からうかがえる。それを示すのが、『文徳實録』天安二年（八五八）閏二月二四日条の「肥後国言す。菊池城の院の兵庫の鼓、自ら鳴る」とする記事と同年六月二〇日条にも「肥後国菊池城の院の兵庫の鼓、自ら鳴る」とする記事である。

いずれも「兵庫の鼓自ら鳴る」と記されています。この「兵庫の鳴動」と言われるのは、政治・世の中の異変を知らせる鳴動です。この鳴動が、ストレートに予見したわけではないが、その後の天変地異を予兆する一つとして、鞠智城の兵庫が鳴ったと考えられます。阿蘇の大爆発が、その十数年後に起きます。貞観の大爆発です。東北の貞観の大津波、そして鳥海山の爆発。それに連動して、京都、そして阿蘇も爆発を起こしますが、そういう大きな揺れの中で、実際に日本の歴史は、大きな変化を生み出しています。清和天皇・陽成天皇など幼帝の即位、藤原良房・基経らによる「摂関体制」の構築は、天変地異の頻発する社会不安の高まりを背景にして生まれ

たものです。

こうした状況下で鞠智城が「鳴動」をしていることの意味は、重要です。当初、七世紀後半に外からの危機に備え築造した鞠智城の兵庫が、九世紀に「鳴動」する。それは九世紀中葉に至ってもなお、鞠智城が「動く」-この場合は、予兆としての「鳴動」ですが-と、肥後の人々に何かを訴えるだけでなく、京の天皇・貴族らも耳を傾けざるをえない影響力をもっていることを意味します。この点のより深い検討が望まれるところです。

鞠智城があったこの地は、山城のあった軍事的拠点でありますが、時代の変化とともに他の歴史的な意味を持つようになります。

その一つに、鞠智城内で沢山の建物群が出たところを長者原（ちょうじゃばる）と言っております。地名が語る歴史の痕跡は、「長者原」にも残っており、国が大がかりで造った公的施設の衰退した跡地に「長者伝説」の残っている割合は少なくないです。

鞠智城の地にも、「長者原」の名が残り、なおかつ長者伝説等が地元に伝わっています。失われていく部分があるのは、やむを得ないにしても、「長者伝説」が今でも残っている点は、鞠智城の地の重要性を考える時、もっと、大切にされてよいものと考えます。

史跡というものは、特定の時代の特定の機能に絞って評価していくことが必要であるが、地域の歴史にとっては、特定の-例えば古代-時代だけでなく、その後の時代においてもその在り方に注意を払って考えていくことが重要です。幸いなことに鞠智城跡は国の指定にもなっており、そして公園化がどんどん進んできており、現在、

学術的な調査も進んでいます。

それがなお進んでいく中で、あの地のもつ多様な歴史的意味がもっと明らかになってくることを期待しています。どうもありがとうございました。

講演二　古代山城は完成していたのか

講演者紹介

亀田　修一（かめだ　しゅういち）

九州大学大学院修士課程在学中に、大韓民国忠南大学校に留学。

現在、岡山理科大学生物地球学部教授。専門は考古学。

・講演二「古代山城は完成していたのか」

亀田　修一（岡山理科大学教授）

はじめに

岡山理科大学の亀田でございます。よろしくお願いいたします。

今、荒木先生が文献の方から細かなお話しをしていただきましたが、私は考古学のほうからお話をさせていただきます。先程の荒木先生のお話にありましたように、古代山城の研究はかなり進んできております。特に、鞠智城に関しましては、いろいろなことが解ってきております。しかし、あまりにも大きな城でありますので、細部のことにつきましては、やはりまだ解らないところがあるようです。

本日、このようなテーマにさせていただきましたのは、実は、神籠石と呼ばれているグループに関しましては、以前から未完成だったのではないのかということが、言われているからです。特に、一〇年程前になるでしょうか、まさに私の田舎なのですが、福岡県の唐原（とうばる）という所で山城が発見されました。ただ、列石、石を並べている状況は確認されるのですが、どうも土塁が見当たらない。調査を進めていくと、水門（水を通すところ）は見つかったのですが、土塁は見当たらない。完成していないのではないだろうか、という話になりました。

そして、二、三年前でしょうか、古代山城を主に研究していらっしゃる向井さんという方が、もともと見える

部分しか造る気がなかったのではないかという論文、いわゆる「見せる城」を意識された論文を発表されました。古代山城が「見せる城」であるという考えは、私もそのように思っています。ただし、当初から一部分だけしか造る気がなかったのか。それとも、なんらかの理由で、途中で造ることが止まってしまったのか。先程、荒木先生がおっしゃっていましたけれども、これだけの規模のものを造ろうとすると、やはり時間とお金と労力が掛かりますので、完成までの道のりはそう簡単ではなかったと私も思っています。そこで今日はそのような目で古代山城を見るとどのようなお話しができるのか、お話ししてみたいと思います。

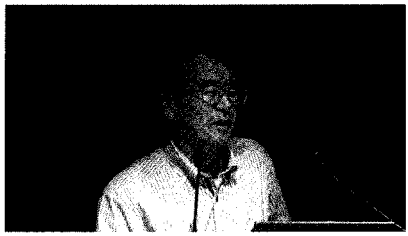


写真5　亀田修一氏

一、完成していたと思われる古代山城

完成していたと思われるものとしましては、筑前の大野城、肥前の基肄城、肥後の鞠智城、対馬の金田城、備中の鬼ノ城、そして豊前の御所ヶ谷神籠石があります。御所ヶ谷に関しましては、少し気になる点もありますが、ひとまず入れておきます。

それから、未完成の可能性があるというか、少なくとも完全にはできていないと推測されますものが、今申しました豊前の唐原、そして筑前の阿志岐、筑前の鹿毛馬、筑後の女山、肥前のおつぼ山、播磨の城山などです。この播磨城山城跡は、中世の有名な赤松氏の拠点のお城の一つです。

そしてここで扱います古代山城はスライドの通りですが、三角形のものが名前の分か

る、いわゆる朝鮮式山城です。それから赤いマルが名前の分からない神籠石系のものです。

朝鮮式山城は百済からの亡命貴族がやって来て指導して築いたという記事が『日本書紀』などに記載されております。そして六九八年の鞠智城などの繕治記事とともにもう一つ大事な記録が、『続日本紀』の七一九年条にあります。備後国（現在の広島県の東部）に築かれた茨城と常城（つねき）を停めるという記事です。つまり七一九年に古代山城の一部は少なくとも一度は機能しなくなるということです。

それから、名前が分からないお城に関しましては、一六ヵ所あります。大きな特徴としましては、列石（石が並んでいること）、「城内に建物がない」ということです。鞠智城にはたくさんございますけれども、城内の建物が分からないということは神籠石系の山城の特徴の一つでございます。

それでは、完成していたお城を見ていきたいと思います。

この写真の山に大野城が築かれています。手前が水城です。次にこの図は阿部義平という先生が以前に出された論文によって描かれた図ですが、この図の大きな特徴は大野城跡と基肄城跡を繋ぐ羅城があったということです。羅城は百済にもありまして、城壁がずっと王都周辺を取り囲むようにめぐらされています。その後、阿志岐山城が発見されまして、このような図になっております。水城の西側には小水城と言う小さい土塁がありますので、ある程度線的に城壁が繋ながれていたことは間違いないと思われます。いずれにしましても大野城と基肄城という二つの城と水城によって大宰府が守られるという配置になっていたと思います。

この写真は大野城の有名な百間石垣です。これは太宰府口城門で、発掘調査されまして、復元図が公開されて

います。この門に関しましては、先程の鞠智城でも出てきましたが、当初、掘立柱建物と言いまして、地面にそのまま柱を埋める方式を採用しています。昔、電信柱を立てるときに穴を掘って木の柱を埋めましたが、あれと同じようなやり方です。そして次の段階に礎石立ちの方式に変わります。下に石を置いてその上に柱を立てる、そういう方式に変わります。この時期ですが、掘立柱式のⅠ期が七世紀後半で、礎石立ちのⅡ期が八世紀前半頃と考えられています。このように変遷しますが、この変遷が先ほどの繕治記事と関わるのか、関わらないのか気になるところです。いずれにしましても、礎石建物に途中で変わるというのが分かっています。

この写真は城内の状況です。主城原地区です。「主城原」という地名ですので、主な偉い人がいた場所ではないかと言われています。掘立柱建物がまずあり、のちに礎石建物に変わることが確認されています。この写真は礎石を使った建物の倉庫群です。七〇棟くらいあると言われています。この礎石建物群の時期について、最近若い研究者の方々から、これはすべて八世紀以降のもので、七世紀代にはこういうものはなかったのではないか、という意見も出ています。この図面は大野城の城壁の断面図です。大野城跡は、数年前でしょうか、大雨で城壁がかなり壊れました。それで福岡県の担当者の方が、頑張って調査を進めまして、確認された城壁の積み直しの様子です。中央右に下がる太い線の右側が積み直したものと考えられています。つまり、本来この太い線の右側にも城壁はあったのですが、何等かの理由で流れてしまい、そこをもう一回積み直したと理解されています。これが、先程の「繕治」に当たるのか、単なる「修繕」なのか、よく分かりませんが、いずれにしましても、積み直しがあるだろうということが、ここで確認されています。

大野城跡の瓦です。この一番左の瓦が鞠智城跡の瓦と多少近いと言われております。これが、先程の主城原というところの、掘立柱建物に使われたと考えられておりまして、まさに六六五年頃の瓦ではないのかと言われております。この資料は、お手元のレジュメの三一頁のところに図を添付しております。この④番の瓦ですが、老司式と言いまして、奈良の藤原宮関係の瓦の影響を受けたものだと言われています。これが六九八年の繕治のときのものなのか、もうひとつ後の、八世紀前半代まで下がるのかどうか、よく分かっていません。②番、③番の百済系単弁瓦と呼ばれているものが、七世紀後半の瓦と考えられていますが、大野城創建時の六六五年まで遡るのか、六九八年の繕治の時期のものなのか、細かいところはよく分かっていません。そしてこの写真の右側の瓦が鴻臚館式と言う瓦で、大宰府の政庁、大宰府のメインの建物が、八世紀前半に礎石建物に変わって、本格的な官衙に採用される「コの字形」配置の建物群で使用されたと考えられているものです。先程の老司式瓦はこれよりは少し古いと言われています。そういう意味で少し微妙なところの瓦が、ポツポツと出ている状況になります。

次に基肄城ですが、このように土塁がありまして、有名なものが写真の水門です。この石積みが最近壊れてきたので積み直すことになり、発掘調査をいたしましたら、新たな水門（水の排水口）が三つ発見されました。そしてこの基肄城跡におきましても城内で礎石建物が見つかっております。この第九地点の建物を発掘しましたら、大野城のものと類似した礎石建物が見つかりましたが、この建物の横でこのような瓦が出土しています。これは九州の小田富士雄先生という、瓦の権威の先生が、以前からこれが六六五年か、または六九八年のどちらか、少

なくとも七世紀後半の瓦だ、とおっしゃっている瓦です。そして、この瓦がこの礎石建物の横で出ますので、素直に考えれば、この礎石建物は七世紀代のもの、下がっても八世紀初頭くらいまでのもので、いわゆる繕治に関わる可能性も考えられているものです。

そして、基肄城に関しましては、木簡が大宰府で見つかっております。この木簡の中に、基肄城の米を筑前と筑後と肥国に出すという内容が書かれていて、そのような倉庫的機能が基肄城にあったと注目されている木簡です。

そして先程の瓦のお話ですが、これらの瓦を創建時にするのか、繕治時にするのか、やはり大野城跡の瓦と同じように難しいところです。この①、②番の単弁瓦とこの④番の重弧文瓦が普通セットになると言われています。この⑤番の瓦は、東北門跡の瓦で、老司式です。③番の瓦は残りが悪いですが、大宰府では八世紀の前半と考えられておりまして、老司系で⑤番などの瓦と組み合います。つまり、これらの③番と⑤番の瓦は八世紀前半の瓦と考えられます。これらの状況を素直に考えれば、七世紀の後半から末ころの瓦と、八世紀前半の瓦があるということになります。つまり、明らかに八世紀前半代に何かの建物を建てるなり、修繕するなりの仕事をしていることが、瓦からは想像できるということです。

この図は基肄城跡内で出土した土器です。①番と②番は、口の縁の内側が飛び出しています。「かえり」といいますが、このような形のものですと、大体七世紀の終わりくらいの土器と考えられます。そして、③番から⑪番のものは八世紀代、一部九世紀に入るものもあるようです。その中で興味深いものが③番です。蓋の上の面に

「山寺」と書かれています。この山寺が基肄城の中にあったのか、あるいは別の所からこの土器を持ってきたのかわかりませんが、とてもおもしろい資料です。実は各地の古代山城が城の機能を失った後に、お寺さんやお宮さんになるということが結構あります。九州の方で有名なものでしたら、高良山神籠石が福岡県の久留米にあります。そこには高良大社があります。お宮さんです。それから山口県の石城山神籠石にも、延喜式の式内社である石城神社がございます。それから、香川県の屋嶋城、源平の戦いで出てくる屋島にありますが、あそこは屋島寺というお寺になります。

次に、対馬の金田城のお話をします。現在も調査・整備が徐々に進んでおります。写真に見られますように、立派な石垣が残っています。このように城壁すべてを石で造っている山城は、基本的には金田城だけです。そういう意味では特異な城といえます。ただし城内に土塁が一部ございます。あと、もう一つ興味深い点は、ここに人が立っていますが、三ノ城戸（城門）の城外です。中が内側で、ここに壁がございまして、この人の頭くらいの高さに門の床がございます。右側は大水で流されてしまいましたが、ここを復元しますと、下の図の点線のようになるようです。そうしますと、人が立っている足下の高さと想定される門の床面の高さで、百何十センチか、段差があることになります。このような城外と門の床面に段差がある門を「懸門」と言います。岡山県の鬼ノ城、讃岐の屋嶋城、そして大野城でも分かってまいりました。このような門の造り方は、今までの日本の古代山城では分かっていませんでしたが、朝鮮半島と比較研究の中で新たに分かってきたものです。

そして、この写真には、「雉城」と書いてありますが、鬼ノ城では「角楼」と呼んでいます。中世のお城に詳

しい方はよくご存じかと思いますが、このように少し飛び出している部分があると、攻撃された時に守りやすい構造になっています。実はこのような構造のものは先ほど言いました、金田城と屋嶋城、鬼ノ城だけにあります。それが最近、これまた大野城でも分かってくるようになりました。そしてこの雉城ですが、このスライドにも書いてありますように横長型といいまして、横幅と奥行きの比で、横が長いグループは、車勇杰（チャヨンゴル）さん、という韓国で古代山城の権威の方が百済地域に多いということをおっしゃっています。そうしますと、この金田城跡は百済系のお城の造り方をしているのではないかということが推測されます。このように、考古学でもいろいろなことが言えるようになってきています。

それから金田城には、城内に土塁がありまして、その土塁の内側に掘立柱建物群があります。このオレンジ色の帯状のところが土塁です。この土塁の切れたところに門の礎石があります。この年代が争点の一つになっています。土塁の断面図を見ますと、土塁の下のところに石があります。金田城は記録に名前が出ていますので朝鮮式山城のグループですが、土塁基部の石を見ますと、神籠石の石のように見えます。こちらは略図ですが、今の巨石遺構につながる土塁の後ろ側に石列がありまして、その上層に別の土塁が被っています。つまり、この部分もやり直しをしているわけです。では、このやり直しは、先程の城壁の石垣とどのように関連するのか。このあたりがよく分かりません。さらに、この土塁の内側に建物があります。すごく小さい柱です。鞠智城にあるような、立派な倉庫になるとか、鼓楼になるとかそういうものではなくて、どうも本当の兵舎、兵隊さんがここで見張りをしていたのではないかという、そういうようなものが見つかっています。さらにこの金田城跡で興味深い

点は出土している土器が、このあとご説明する鞠智城の土器よりも古い段階のものが多いということです。正確に言いますと、鞠智城跡で出土する土器の一番古い段階から次の段階くらいのもので止まっていまして、鞠智城跡で比較的多く出土しています奈良時代以降のものは現時点ではよく分かっておりません。さらに対馬ならではですが、七世紀の朝鮮半島系のもの、新羅土器が入っています。

次に、肥後鞠智城跡についてお話しします。鞠智城は西側と南側に土塁が累々と築かれていて、門があり、東側は崖がそびえていると言われています。そして城内に建物群が多数あります。

この図はその城内の様子を復元して描いたものです。この建物群の左下のところに鼓楼（八角形建物）があります。これもよくご存知だと思いますが、朝鮮半島のソウル近くの二聖山城で、同様のものが見つかっていまして、この鼓楼も朝鮮半島との関係でよく理解されています。また、この建物群の中には兵舎と想定されるものがあるのですが、先程の金田城のものより明らかに立派です。そういう意味では、金田城と鞠智城には違いがあるのかもしれません。そして、鞠智城では、先程の話にもありました百済の仏様、秦人と書かれた木簡などが出土しています。この木簡も先程、佐藤先生から伺ったのですが、地元菊池の人達の中にこのような朝鮮半島と関わる人がいて、お米を持ってきたものと思われます。

私は岡山におりますので、岡山の鬼ノ城のことなどを研究しています。この鬼ノ城ではおそらく城造りに朝鮮半島系の人が動員されたと思っています。といいますのは、当時の日本人だけではお城は造れないと思っているからです。当然、地元の人々はこのような形の山城は知りませんし、その図面を描くことも、監督することも無

理だと思います。そしてこの地域は古代に賀夜郡に属しておりまして、まさに朝鮮半島の伽耶につながる地域と考えられています。おそらくこの地元に定着した朝鮮半島系の人達が動員されて、他地域にないような構造物を造ったのではないかと思っています。

そして、掘立柱建物と礎石建物の関係ですが、礎石建物の中には一部古いものがあるのではないかと思っています。このスライドはその礎石建物の内の一部古いと言われているグループの中の六四、六六号建物跡と出土土器の図です。これらの土器ですと、②番が七世紀の後半ないし終わり頃、④番が八世紀に入るくらいですので、まさに繕治の時期に当たるのではないかと私は思っています。このように、礎石建物の一部はそういう時期にあると思っています。

この図は、鞠智城・温故創生館におられる木村さんが作成された出土土器数のグラフです。七世紀前半まではあまり多くはないのですが、築城時と考えられている七世紀第3四半期に少し増え、さらに七世紀末～八世紀初めの繕治の時期に急に増加します。この増える量をどう考えるのかということがポイントになります。六九八年の「繕治」を単に修繕と捉えるのか、ある程度新たなことをしていると考えるのかによって遺物の数の理解の仕方が異なると思います。先程の礎石建物の問題などを含めますと、私は当然修繕も行い、そして一方で何か新たなことをしている可能性を考えています。つまりその繕治の時に礎石建物を新たに建てるなどということもあってもいいのかなと思っています。少なくとも、この土器の多さは、やはり何かをしていないと多すぎるのではないだろうかと思っています。

そして、八世紀第2四半期、第3四半期、つまり八世紀の半ば前後には、空白があって、また八世紀の終わりくらいに増えています。土器というものは、どうしてもその使っている年代の幅があったりしますので、そう簡単ではありませんが、九世紀後半の土器は記録とも合いますので、やはり何かを表していると思っていいのかなと思います。

さらに言いますと、六四号建物跡の所で出土している瓦ですが、百済系だ、新羅系だという意見がありますが、時期的にはさほど新しいものではなく、八世紀の初頭くらいまでしか下がらないと私は思っています。おそらく七世紀の後半と考えるのが一般的だと思っていますが、まさに繕治の段階に該当するのかなと思っています。

次に、岡山の話に移ります。こちらは地元の山陽新聞が作った鬼ノ城の模式図になります。城の周りを城壁で囲み、中に建物群があるという構造です。鬼ノ城の門や城壁は写真のように一部復元整備されています。各地の古代山城で様々な整備が始まっていて、鬼ノ城も整備が進んだうちの一つだと思っています。この右側の建物が西門で、この左側のものが角楼と呼んでいるものです。この茶色の部分が城壁を復元したものです。

これが西門の中の状況ですが、床面に花崗岩を敷いた立派な門です。外から中に入り、階段を登ると、正面に板壁があります。同じような壁があるものとしては大野城があります。そして門扉の部分にこのような礎石があります。唐居敷という言葉を使いますが、柱を地面に埋める掘立柱式のもので、四角い柱を穴に埋めて立て、この石を添えます。そしてこの小さい四角の部分、この四角い穴が方立用の穴で、柱と扉の間の隙間から攻められないように造ったものです。このマルで囲んだ所は軸摺穴と言って、扉の軸をここに入れて回るようにする場所

です。数年前に大野城で、その下の金具が見つかりまして、すごく注目を集めました。そしてこの軸摺穴の有無というのが大事でして、鬼ノ城もありますが、中国地方の山城にはない例がかなりあります。軸摺穴が無くても門の開閉はできないことはないのですが、古代の場合、だいたい軸摺穴はついていますので、ひとまずこの鬼ノ城のものが標準的なモデルだと思っていただければと思います。

また、城内にこのような建物群がございます。この写真は発掘調査中のものですが、山の斜面をカットし、礎石を並べ、建物を建てています。先程、鞠智城で土器の話をしましたが、鬼ノ城も、担当の方が頑張って土器を集成してくれています。右側にありますのが、千葉県佐倉にある国立歴史民俗博物館の林部さんが、以前、飛鳥京を掘っていた時の土器変遷図です。図を見ますと、中央少し下がったところの、飛鳥Ⅲの「飛」の字の横方向にちょうど土器が並べられていない空白部分があります。林部さんは、まさにこの空白を天智天皇が大津に都を動かした時期に該当すると考えています。つまりこれが六六七年くらいの話になるということです。そうしますと、鬼ノ城の①～③の土器はそれより古く、④、⑥～⑫の土器はそれより新しくなります。器の椀の大きさが、小さいものから大きくなる境目がまさにここにくるのですが、鬼ノ城の土器を素直に見れば、やはり六六七年頃築城という可能性は当然考えられるわけです。ただ、土器といいますものは後まで残りますので、これらをすべて含めて七世紀の終わりという考え方もあります。確かにそのような考えは成立しうると思いますが、素直に見れば私が述べましたように六六七年頃の築城はあり得ると思っています。

そして、もう一つ大事なお話しをします。この石垣部分を高石垣と言いまして、先程の門の横に復元されてい

ます。今、綺麗に復元されていますが、この写真が復元される前の状況です。この石垣の横の部分はもう流れてしまっていますが、石垣の部分は比較的よく残っています。現在復元されているものの上部はそれを基に積み直したものです。皆様方のお手元の資料ではお分かりいただけるかと思いますが、この網をかけております部分が修復、整備をする時に、積み直した部分です。一番上の図が上から見た図です。石垣を積む時、普通に積むのでしたら石垣の線に沿う形で土塁の外面を切り、石を積むのですが、ここはこのような弓なりになっています。このような様子は、壊れたことによるのではないかと、私は思っています。担当者の方はそうではないと言っていますが、少なくともこの部分に関しましては、私は積み直している可能性があると思っています。この積み直しに関する記事はありませんが、「修繕」「繕治」している可能性はあると思います。

このような積み直しや設計変更と推測される例が、豊前の御所ヶ谷神籠石でもいえそうです。こちらは少し特異なのですが、中門の西側部分を発掘調査しましたら、途中でどうも土塁を造らずに、列石を並べた段階でやめてしまった、設計変更したのではないかと言われています。これだけの規模の大きいものになると、修繕や設計変更なども当然考えてもいいだろうと思います。この写真はよく知られている中門の横の所にある列石と、版築土塁です。このように高さ約三メートルやそれを超える土塁が築かれています。この写真が先程申し上げた中門西側の列石と土塁の状況です。列石は確実に据え置かれ、裏側に一部版築はしていますが、この高さ以上の土は積まれていないようです。この段階で積むことをやめて土塁・城壁の場所を変えたと言われています。

こちらがその中門西側を造り直した部分と推測されているところです。高さは立派に積んでいますが、ここに

は列石がありません。このように設計変更する中で、いろいろ変化が起こっている可能性も考えられます。さらにこの写真は第二東門です。一応完成した門といわれておりますが、今回改めて未完成を意識して、城外から中を見ますと、前に土の壁があり、通り抜けできません。さらに、柱の痕跡などもよく分かっていません。こうしたことから、もしかしたらこの門も未完成なのかなと、気になり始めています。このお城に関しては、城壁がひとまずおおよそ巡っています。出土した①番の土器から、担当の方は、おおおよそ七世紀の第3四半期、つまり大野城、基肄城と同じくらいの時期だと考えています。

ちなみに、②番のような土器も出ています。これはやや古く、また大きさによっては、七世紀の前半、中葉まで遡ります。やはりまだまだ検討の余地があるのかなと思っています。

二、未完成の可能性がある古代山城

こちらは福岡県の唐原山城跡です。この青い線が城壁想定線です。ただ土塁はありません。担当の方に伺うと、これは段を造っているだけだとのことです。この写真は城内南東部付近で、このように列石はありますが、土塁はありません。調査で明らかに列石を据えていることは確認されていますが、このような状況で止まっており、未完成としか言いようがないと思います。

次に阿志岐山城です。こちらは大宰府の横にあります。土塁はこの青い線との境目で止まっています。この青い線のところには土塁はないのですが、地形的にはこうではないだろうか、と推測されています。そしてこの一

二トレンチです。このようにきちんと積んだ石垣がありますが、そこから南東側はありません。そして出てくる土器ですが、これらはこれまでの資料より新しく、おそらく七世紀の終わりから八世紀の前半くらいの時期のものだと思います。少なくとも七世紀中頃まで遡るものはありません。

それから、福岡県飯塚市の鹿毛馬神籠石です。この神籠石も後ろ（右側）のほうで土塁が確認されていません。このため、前のほうだけ見せるために造ったという考え方があります。この後ろの方に関しましては、以前の発掘調査で、段状の部分が確認され、ここに石を置こうとしたのではないか、と想定しています。つまり、段は作ったが、石を置かなかったのではないかと考えられています。

福岡の筑後にあります女山（おやま）神籠石です。神籠石の西側に駅路が通っていますので、駅路（西）側しか土塁を造っていないという考えがあります。しかし、駅路に面する北西部も土塁がありません。さらに南東部で本来ならば、土塁があるはずのところになく、近くに古墳群があります。

それから、佐賀県武雄市にありますおつぼ山神籠石では、東側に駅路が通るので、東側のみ土塁を造っていると考えられています。しかし、現地に行ってみますと、西側にも点々と石が残っています。ただこの石はつながっていません。これもやはり未完成なのかなと、私は思います。

さらに、兵庫県の播磨城山城跡です。この城は中世に赤松氏に使われます。城壁線は黒い破線部が想定されていますが、石塁ａ・ｂ・ｃ・ｄ、それから門の辺り、これらの所は構造物がありますが、繋ぐ土塁が分かっていません。さらにここには先ほども言いました唐居敷がありますが、方立、軸摺穴がありません。これがなくても

できるという考え方もありますが、唐居敷自身、実際には置かれておらず、動いています。

それから、山口県の周防石城山神籠石です。これも土塁や石垣は確認されていますが、それ以外はよく分かっていません。ただし、南水門であるとか、東水門などの施設は確認されており、この北側の門の所では、唐居敷があります。ただ、ここも方立と軸摺穴がありません。香川県の讃岐城山跡は讃岐国府という当時の中心地が眼下にあるお城です。ここでは二重の城壁線が見つかっているのですが、未完成の城と考えられています。唐居敷は、柱に添えるコの字の刳り込み部分だけしかありません。つまり、方立や軸摺穴がありません。さらに柱に添える方形の刳り込みさえ、途中で止まっているものがあります。もう明らかに未完成です。このように讃岐城山城跡はどう考えても未完成といわざるをえないと思います。

このように古代山城は完成していたのか、城内の建物はどうだったのか。それから未完成にもどうもいろいろあることが解ってきています。完成した山城と未完成の山城の間でどういう意味づけができるのか。最後に繕治、これをやはりきちんと考える必要があるだろうと思っています。

三、完成した古代山城と未完成の古代山城

さて、結論です。完成した古代山城と考えられるものは対馬金田城、筑前大野城、肥前基肄城、肥後鞠智城、備中鬼ノ城があり、豊前の御所ヶ谷もその可能性があります。讃岐屋嶋城跡は詳細がわかりません。そして、長門の城、高安城も詳細不明です。素直に考えれば、朝鮮半島から攻めてくるとき、まず大宰府に来ることが想定

されます。そして倭は大宰府を当然守ります。さらに大和を守る場合の一番のポイントは、備讃瀬戸になるのではないかと思われます。すごく大事な場所で、交通の要所になっています。そこで六六七年に金田城などともに屋嶋城が築かれたものと思われます。またこれは偶然の結果かも知れませんが、源平の戦いの時も、この屋島が戦場になっています。やはりこのエリアはとても重要で、初期の段階にきちんと造った可能性があります。そして鬼ノ城もほぼ同じ頃に造られた可能性があります。

朝鮮式山城と言っているものは、六遺跡中の四遺跡はほぼ間違いなく完成していただであろうと思われます。さらにこれに、屋嶋城などを入れると、やはり朝鮮式山城という記録に載っているお城は、ある程度完成していたものと思われます。今日、あまりしっかりとお話しできませんでしたが、これらの城には基本的に門が存在します。そういう意味で、門がきちんとできているということは、やはり意味があるだろう思います。

それから、神籠石系のもので、実際に門が確実にあるのは、この鬼ノ城のみです。御所ヶ谷神籠石は確かにありますが、よく分からないものもあります。そういう意味で言うと、これらの完成したお城というのは、門がしっかりあるということが特徴の一つになると思われます。そして、鞠智城に、しっかりとした門がいくつもあるということは、意味があるのだと思います。

そして完成したお城は、それだけ大事な場所にあり、そういう意味で、やはり古い段階から造っているのだろうと私は思っています。それから、未完成に関しては、意図的な未完成と、しようがなしの未完成があると思っています。これは微妙ですが、考古学の中で、神籠石と言っているものは、これらの朝鮮式山城より古いのか、

新しいのか、さらに新しいとしたらいつ頃なのか、天武朝とか、持統朝ではないかという意見があります。どちらの考え方でも、未完成はあり得ますが、答えが見つかっていません。いずれにしても、「見せる」という意識の中での未完成というのは、十分あると思います。ただし、単に偶然の停止ではなく、やはり政治的なもの、社会的情勢を反映しているものと思います。

おわりに

実際に、お城を造るということは簡単なことではなく、そういう意味で、未完成と完成、それから未完成の諸段階における遺構の有無、多寡、つまり、中に建物があるか、あるいは遺物があるかどうかなど、そういうのもやはり大事な検討の余地なのだと思います。そして、先程から繰り返し申し上げているのは、繕治です。この時期の繕治の意味というのは、当時の国家情勢は当然安定しているはずですので、他のお城との性格の違いがあるのだと思います。だから、高安城に関しては、実は城壁がよく分からないので、今回外しましたが、やはり繕治記事があります。そうすると、やはりその辺の意味があるものと思います。そういう意味で、考古学的に言われている鬼ノ城の修理というのも、やはり意味を持っているのだと思います。そういう意味で、私の先輩でもある石松さんという方がおっしゃっていたのですが、未完成と皆言っているが、こうやってまとめて全般的に言ったものが無いので、それだけでも成果はあるかなと思っています。まさに、そういう見方、完成、未完成、繕治というのはお城を維持するということも含めて、意味があるだろうと思っています。

ちょうど時間となりましたので、ご清聴どうもありがとうございました。

講演三　鞠智城の建物跡について

講演者紹介

小西　龍三郎（こにし　りゅうざぶろう）

東京大学工学部建築学科卒業。九州造形短期大学教授を経て、現在、株式会社修復技術システム　代表取締役。専門は建築史。

・講演三「鞠智城の建物跡について」

小西　龍三郎（元九州造形短期大学教授）

はじめに

どうもありがとうございます。小西と申します。

私のほうからは、私の専門である建築史の立場から鞠智城の七二棟の建物と、同時代の古代山城の建物との比較を通して、鞠智城の建物の特徴ある建物のそれぞれの建設時期と、それから存続時期を明らかにすることによって、古代山城の姿というものの変異を見ていきたいと思っています。

一、鞠智城跡の建物跡

まず一つ、鞠智城における建物の配置と、文献に見える鞠智城の建物に関する記録になります。注目していただきたいのは、まず六九八年の「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕い治めしむ」というこの記事です。それと天安二年の、八五八年、約一六〇年後ですけれども、「同城」、これは鞠智城を示していますが、「不動倉十一字火」とあります。これは、いわば火災に遭いました、不動倉が燃えました、という記録です。さらに、八七五年になりますと、ここが少し違いますが、「菊池郡倉舎」となっています。菊池郡の倉と営舎が草ぶきだっ

たのですが、カラスがその草をかみ抜いてしまいましたよ、という記録です。だいぶイメージが違ってきています。この辺を建築的にどういうふうに対応していくのかというのを見ていきたいと思います。

こちらが、鞠智城のほぼ中央部にあります「長者原」と呼ばれるところにある七二棟の建物群です。もちろん周りには門もありますが、今回は、特にこの鞠智城の中心部にあります長者原の建物群について少し分類をしながら、解説をしていきたいと思います。

地域としまして、真ん中は長者原、西側に少し台形の部分がありますが、こちらは小高い山になっていて、長者山といいます。それと、東側にもう少し丘陵部があります。ですから、ゾーニングとして、長者原、長者山、東山丘陵と区分しながら、説明をさせていただきたいと思います。

写真6　小西龍三郎氏

まず、長者原の中央部にある建物群です。四九号と呼ばれる建物で、礎石の総柱建物になります。特に長いので、長倉と呼びます。この四九号は後程、大野城と比較ができるかと思います。周りに一号から一〇号がありますが、すべて掘立建物になります。ここで見ていただきたいのは、一号と五号、それから三号と六号、七号と八号、九号と一〇号、これは近接していて、非常に類似する形になります。掘立柱というものは腐りますから、だいたい耐用年数が二〇年から三〇年だというふうに言われています。ですから、二つあるのは、一方が先に建って、耐用年数が過ぎたので、隣に建て替えたというふうに考えたほうがいいということで、これは一気に一〇棟建てたというのではなくて、

順次建て替わっていったというふうに見るべきであろうと考えております。

これが四九号の礎石建物です。発掘をしますと、こういう礎石、ないしは礎石の抜き穴が出てまいりました。こういう建物は、高床式建物であると考えられています。下には、掘立の側柱建物の代表として一九号を挙げておりますが、発掘しますと、柱の穴、それと柱を立てる為の周りの掘方が見えてきます。この場合、真ん中に柱がないので、土間、ないしは低い床を持った建物であるというふうに考えていただければと思います。

次に一一号から一五号を挙げていますけれども、特に注目していただきたいのが、一一号と一二号です。これは真ん中の三間×四間は礎石総柱で、周りの四周、ぐるりと巡っている所は掘立柱となり、いわば礎石と掘立柱が併用されています。また、一三号というのは、これも掘立の総柱という特徴を持っております。

こちらは東側丘陵地帯の建物群ですが、左側に、二〇、二一、二二、二三号という建物が並んでいます。並んでいるように見えますが、実は二二号と二三号は、二〇号と二一号の下層にあります。二二号と二三号が建っていて、それが壊れてから二〇号、二一号が建ちましたよということです。ですから、二棟ずつしかここに建っていなかったということが分かってきます。特に、二〇号と二一号には、礎石に火災の跡が残っています。火災の跡といいますと、最初の年表でいいました天安二年の不動倉が一一棟焼けたという記録とどういうふうに繋がっていくかも少し検証していきたいと思っています。右側のほうに八角形建物が二棟あります。北側のほうが二重の八角形、それから南側のほうが三重の八角形になります。特に二重の八角形のほうは、当初三一号という掘立の建物があったのが、三〇号という礎石建物に変わっていくという特徴があります。

二四号と二七号は掘立の建物ですが、妻側から一間外れた所に間仕切りを持ちます。鞠智城の中で間仕切りを持つ建物というのは非常に珍しく、その二四号と二七号だけになります。これがどういう意味があるのかというのも考えていきたいと思います。

次に、長者山の上に建つ礎石建物です。これは、同じ向きに建っていますから、セット関係にある礎石総柱の建物群というふうに捉えることができると思います。ここにも、四五号を除いた、四六、四七、四八号にはやはり火災跡が残っていることから、先程の天安二年の火災との関係も見ていきたいと考えています。

最後にもう一つ、六二号と六三号を注目していただければと思います。このように六二号と六三号は直行する軸を持つ建物になります。それと、柱間ですが、ここで言う柱間が全く共通しているものというのは、一つは営舎、ないしは役所的な性格を持つ建物ではないかというふうに考えられています。総柱建物が三三棟、それから八角形建物が二棟ずつ、二期に分かれるので四棟、それから、側柱建物が二五棟になります。こういうものが、いわば鞠智城に見られる建物群であります。

二、古代の倉

これは、鞠智城と同時期に編纂された文献資料ですが、『和泉監正税帳（いずみのげんしょうぜいちょう）』といいます。要するに、のちの和泉国、大阪の泉南の辺りの国の、いわば会計報告と見ていただいて結構です。できたのは、七三七年で、国の名前や郡の名前、建物の用途、名称、それから建物の幅、奥行き、高さ、収納量、こういうものが詳細に記載された

ものです。これを少し見ていきたいと思います。

まず、建物の用途です。ここでは、二つの用途が書かれています。一つが不動倉、もう一つが動倉です。不動倉というのは、穀類を、国司や郡司が検封します。いわば封印をしてしまうわけですが、二度と開かないというものを不動倉といいます。それに対して、動倉というのは、動用倉とも呼びますが、これは日常の出納、出し入れをするために用意された倉であります。これは見ていきますと、不動倉のほうは規模が非常に大きくて、動倉のほうは小ぶりで、動倉は不動倉の三分の二くらいの大きさしかありません。そういう特徴があります。

この正税帳に書かれているもう一つの面白い特徴は、塞の大きさが書かれています。塞というのは何かというと、高床の倉があって、その入り口の部分に仕切りがあります。この仕切りの板を上げ下げすることによって、バラ積みの稲穀をどんどん積み上げていき、また一定の高さになったら、また板をさして、積んで行って、最後まで積み上げるのですが、要は、バラ積みの倉庫です。これは、非常にたくさんの稲穀を収納することができます。これに対して、この塞がないというとどういうことかと言いますと、稲の穂首のところを刈りまして、それを束にして、保存するというやり方になります。これはもう伝統的な収蔵の方法だったのですが、そういうふうに束にして収蔵していたものが、いわば稲穀として、もみ殻として収納するという違いが出てまいります。正税帳では、穎倉が二〇棟あるのに対して、一一棟が穀倉になります。

次に、倉の名前です。甲倉、丸木倉、板倉、法倉、屋と、全部で五つの名称が出てまいります。「甲倉」というのは、よく皆さんがご存知の東大寺の正倉院に見られるような、校倉造の建物のことを甲倉と呼んでいます。

それから、「丸木倉」、これはよく聞く、ログハウスでできた、丸木でできた倉になります。次に「板倉」、これは横長の厚板を、壁、柱の縦溝に落とし込みまして、壁を造るという、横はめ方式の高床倉です。これは甲倉のあとに開発された収納量の多い倉になります。甲倉の外見ですと、だいたい桁が六メートルくらいしかできないのですが、板倉になりますと、いくらでも継ぎ足して長さが取れますから、容量の大きい倉が造れるようになります。次に、「屋」ですけれども、これは側柱のみで、土間か低床の建物です。この場合は、幅と奥行きの比が二を超えるものが非常に多いということになっています。そして最後に、「法倉」。これは、板倉の一種で、非常に奥行きと幅の比が大きい、三を超えるようなものです。これは「長倉」というふうにも呼んでおります。こういうものが名前として残っているわけです。

続きまして、同じような会計報告ですけれども、越中国の交替帳と呼ばれるものがあります。これもやはり同じようなことが記載されています。だいたい一〇世紀初頭の記録ではないかというふうに考えられていますが、先程の和泉監正税帳に比べて何が違うかと申しますと、丸木倉が消えてしまいます。それから、法倉、先程言った細長い長倉も消えてしまいます。それから屋です。依然として使用されていますが、床面積の平均が、和泉監正税帳が約三〇平方メートルだったのが、越中国交替帳は、約六〇平方メートルと倍増します。すなわち、大規模な倉が増えたわけです。構造的に言うと、校倉が減って、板倉が増えたという特徴があります。

ここで示しましたのは、やはり鞠智城と同時期に造られた、福岡県小群市にある小郡官衙（おごおりかんが）です。第二期に特徴がありまして、北側に総柱建物が見え、東側の下のほうに、側柱がコの字形になったような部分、これは政庁と

言われている部分があります。そして、北西側のほうになりますか、館と呼ばれる直行する建物が何棟も並んでいる部分があります。この小郡官衙は、営舎、役所、日常的な役所と考えられており、政庁というのは、儀式の場ですが、それに正倉がつくというふうな形のものです。ここで申し上げるのは、同時代の官衙っていうものは、非常にその機能が政庁、正倉や館というもので、区分がはっきりしているというところを見ていただければよろしいかと思います。

もう一つ、一番左の下のほうに、縦に細長い建物があって、下から二段目のところに横線が引いてありますが、これは間仕切り跡です。これは三期の建物跡で、だいたい八世紀中期以降に、二四号や二七号と同じような間仕切りがある建物が見えてまいります。

三、鞠智城の建物と大野城の建物

これから全体的な、もっと個々の建物の比較をしていきたいと思いますが、比較対象として、大野城を選んでいます。所在地の確定した朝鮮式山城は全部で六つあるわけですが、長崎県の金田城、福岡県の大野城、佐賀県の基肄城、それから熊本県の鞠智城、香川県の屋嶋城、そして大阪府の高安城があります。そのなかで、特に、六九八年に「大宰府をして大野、基肄、鞠智城の三城を繕治せしむ」という記録から見ましても、この大野城、鞠智城というものが非常に近しい関係のあるお城であったということが分かるわけです。それの比較をしてみたいと思います。

大野城には、全体で七〇棟の建物があり、そのうち、掘立の側柱建物が二棟、掘立の総柱が二棟、それから礎石の総柱が六五棟あります。それからもう一つ、一間×一間の建物が一棟あります。

鞠智城の四九号は、礎石の総柱の長倉でありますが、これと類似するものが、大野城にはＳＢ六〇があります。やはり礎石の長倉で、版築基壇の上に建っているというのが特徴です。大野城のＳＢ六〇のほうに着目すると、その上の北の方に、実はＳＢ六四と六五という二つの建物があります。ＳＢ六四というのは、掘立の側柱建物です。これには天智四年、六六五年から六七〇年の間に製作されたと言われている瓦が伴っています。大野城の創建期とほぼ同時期の瓦になります。それがその後に、ＳＢ六五という掘立の総柱建物、長倉と言われているものが建てられます。要するに、ＳＢ六四が無くなってから、ＳＢ六五が建ったという関係です。

さらにもう少し考えていきますと、ＳＢ六五は掘立、ＳＢ六〇は礎石、同じ長倉です。やはりＳＢ六五からＳＢ六〇への変遷ということが一つ自然に考えられるだろうと思います。そうしますと、そこに掘立建物は、先程いいましたように、耐久性、耐久年数が二〇年から三〇年ですので、これを当てはめていきますと、ＳＢ六四は七世紀の後半、六六五年に非常に近い時期に建てられ、そして、それから二、三〇年経った七世紀のちょうど繕治の頃にＳＢ六五が建った。さらに八世紀前半に入り、ＳＢ六〇が建つという一つの変遷を考えることができます。そうすると、鞠智城と大野城がほぼ大宰府の政情下の中で造られていった、建設されたということを考えていきますと、鞠智城の四九号も、ＳＢ六〇と同じ時期、八世紀の前半、繕治期を想定することが可能ではないかというふうに考えられます。

同じような考え方で、今度は鞠智城の一一号と一二号を見ていきたいと思います。これと同様の建物、やはり大野城に七棟あります。そのうち、SB〇九五は、鞠智城の一一号、一二号が内側の三間×四間が礎石で、周りが掘立であるのに対して、内側の三間×五間が礎石で、周りが掘立という建物になります。規模が少し違いますけれど、よく似た建物です。これを見ていきますと、建物的には類似していますが、違いがございます。何かと言いますと、SB九五の方には掘立の四周の上に雨落ち溝があることです。これはどういうことかと言いますと、鞠智城のほうは、建った時は庇(ひさし)付きで建ち、ずっと庇付きで使われていたのに対して、大野城のほうは、建った時は庇付きでしたが、ある時から庇は撤去され、要するに高床式の三間×五間の倉庫になったという変遷を持ちます。特に、鞠智城のほうは、腐ってきた庇状の部分の柱を、わざわざ礎石で修理したりしていますから、かなり存続させようという意識がはっきりしています。これに関しましては、大野城では、礎石の長倉から、それから四周に掘立を持つ礎石倉、それから、規格性の高い三間×五間の倉に変遷していったという過程がありますので、その中で捉えていきますと、掘立長倉の次は、四周が掘立の礎石倉に当たります。一一号は、四九号とほぼ続く建物ではないかというふうに考えることが可能かと思います。

次に、二〇号から二三号の建物を見ていきましょう。先程いいましたように、二二号と二三号が、二一号の下層にありますから、二二号、二三号から、二〇号、二一号への変遷が考えられます。先に建った二二号は四間×四間の礎石建物で、二三号は、四間×六間の礎石建物ですが、桁行と梁間の柱間が非常に違います。長方形の柱も持っています。それに対して、二〇号は三間×四間の礎石建物、二一号も同じ三間×四間の礎石建物で、柱間

は八尺、約二・四メートルに統一されています。こういうことから考えていきますと、柱間が不統一な礎石建物から、柱間が統一された三間×四間の礎石建物に変遷したということが分かります。

大野城での変遷を見ていきますと、規格性の高い三間×五間の礎石総柱建物というのが、二期の最後のほうにできており、そのあと三期に、三間×四間の礎石総柱建物となっています。こういうことから見ますと、一〇、二一号のような規格性の高い建物というのは、後ろのほうでできたのではないのかなということが少し分かってきます。もう少し詳しく見ていきますと、鞠智城の三間×四間の建物に二〇、二一、三六、五九、七二号というのがありますが、三六号から九世紀以来の高台付の土師器が出ております。また、七二号から九世紀の後半を下限とする遺物が出ております。さらに、二〇号、二一号からは火災痕跡が見つかっており、九世紀の半ば頃の「不動倉十一字火」と呼ばれる火災との関連が考えられます。そうすると、鞠智城の三間×四間の総柱建物というのは、だいたい九世紀の半ば頃を下限とする建物ではないかという想定ができるわけです。

三〇、三一、三二、三三号の八角形建物については、実は大野城に類似例がなく、日本の古代山城全体をみても、他に類似例はありません。朝鮮半島の山城である二聖山城（にせいさんじょう）と丸都山城（がんとさんじょう）には類似例があります。二聖山城のほうは、九角形とか十二角形の建物も出ており、丸都山城のものは、同じ八角形と言っても、柱の並びが、鞠智城は放射状になっていくのに対して、マス目状に組まれて八角形を造っていくという点で少し違いがあります。このほか、法隆寺の夢殿難波宮の東西の八角形建物があります。これらは柱の並びが放射状の建物になります。時期的なものは、これだけの比較では分かりませんが、掘立のほうが若干礎石より前なのかなという観点から見ま

すと、この三〇号、三二号のあたりというのは、割と早い時期の建物ではないかというふうに考えることができると思います。

次に、鞠智城の四五、四六、四七、四八号を見てみます。四五号というのは、七二号の上に造られていますが、七二号というのは、四間×三間の規格性の高い総柱建物になります。このことから、四五号は、七二号よりも後にできた終末期の建物ではないかというふうに今、考えています。四六、四七、四八号につきましては、火災の跡があり、四五号とは違う建物ですが、九世紀中頃辺りの火災との関連を考えることが可能かと思います。

次に、二四号と二七号を見てみます。これは、大野城のＳＢ八〇という事例と類似しています。ＳＢ八〇というのは、やはり側柱建物なのですが、南側から二間目のところに間仕切りがあります。間仕切った南側に炉が実はあり、営舎的な建物であろうというふうに考えてられています。それとよく類似した形を持つ、鞠智城の二四号、二七号についても、どちらかというと、営舎的な建物ではないかというふうに考えられます。先程、小郡官衙の第三期にも、妻部分に間仕切りのある建物を一棟お見せしたのですが、あれも八世紀の中期以降の建物であるということから、二四号、二七号というのも、どちらかというと、終末期に近い建物ではなかったかということで、倉庫ではなくて営舎ではないかというふうなことが考えられます。

四、鞠智城の建物の建造時期と存続期間

鞠智城の出土土器の編年ですが、やはり土器の出土量というのは、その建物の時期の、人の活動量を示してい

る、というふうに、私達は考えています。例えば、建物を建てるという時は、地鎮祭があったり、今でも完成式があったりすると、素焼杯（かわらけ）で何かをしたり、色々なことがありますので、そういうことを考えていくと、建設とも少し関わりのある数値かなというふうに考えています。やはり七世紀の第3四半世紀に、その前期に比べると倍増した出土がございますし、七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期にかけては、すごい量の須恵器が出ています。そして、八世紀の第2、第3四半期には空白、いわばあまり人の活動が盛んでない時期、要するに建設がほとんどなかったのではないかなと思われる時期があります。それに対して、また八世紀第4四半期になると、再度、須恵器が出土してきます。やはり何か建設的なことが行なわれたというふうに考えています。また、九世紀に入りまして、第1四半期、第2四半期はないのですが、第三というのは、先程いいましたように、鞠智城の不動倉一一倉が燃えた時期です。その時期に合わせた後に、今度は須恵器ではなく、土師器のピークがもう一度来ます。ということは、これはもう一回建設が行われたのではないかなという意味ですけれども、要するにもう須恵器ではなくて、土師器に変わってきています。私は建築の主体が変わったのではないのかな、というふうに考えております。そういうことから見ると、先程、ご説明した「菊池郡倉舎」に関する記録は、このあたりで菊池郡のものと変わり、そういう機能に変化を生じさせながら存続したのではないかなと考えられるわけです。

それで、建築の各期を五期に分けています。まずは、創建期です。これが七世紀の第3四半期頃。それから、繕治期、これが第4四半期から八世紀の第1四半期。それから空白期というのを設けています。おそらく何もできなかった時期です。それからさらに八世紀の第4四半期に建築の再開が始まります。そして九世紀、もう少し

時間があれば二つの時期に分けたかったのですが、九世紀の第一、第二あたりは何もないのですが、第三あたりです。中期以降に今度は新しい形の建物となりますが、私は菊池郡の倉舎としての建物ができたのではないかというふうに考えています。

これを少し細かく見ていきます。まずは、創建期です。創建期をどういうふうに考えているかといいますと、まず長者原の中心部に、屋と呼ばれる側柱の倉庫群が建てられ、また、東丘陵と長者山に掘立の総柱の建物が建てられたという形になります。私は、その長者原の北にある一五号について、少し性格が違うのではないかなというふうには考えていますが、こういうふうな建物がまず建てられました。全て掘立建物で、緊急性が求められた築城が行なわれた時期ではないかというふうに考えています。

次に、繕治期です。ここでは、まず長者原の掘立建物の建て替えが行なわれています。そして、四九号といわれる礎石の長倉が建ちました。東側丘陵には、二二号、二三号の規則性を持たない礎石建物が建ち、さらに、その建物の東側には、八角形建物が建設されました。さらに、その北側には、営舎的な建物、六二号、六三号ですね。いわば役所のような機能を持った建物も、この時期に建設されたのではないかと考えています。これをまとめますと、まずは耐用年数を超えた創建期の掘立建物の建て替えが行なわれるとともに、もう一つはさらに強い律令制という意識の中で、本格的な整備が行なわれた時期ではないかというふうに考えられます。

次に、八世紀第4四半期の再開期です。要するに、もう繕治期からもう一〇〇年近く経っていますので、建て替えが行なわれたものと思われます。要するに、それも東アジアの情勢が緊急性を帯びた為に建て替えが行われ

たという状況であります。

最後に、終末期です。二〇号、二一号、それから長者山の礎石群が火災で焼けた後に建ったのは、礎石建物はわずか二棟のみで、あとはどちらかというと、側柱建物が中心となった建物群が建ったということになります。鞠智城としての機能は終了しまして、郡倉舎的な建物としての機能に変化した時期ではないかというふうに捉えております。

以上、鞠智城を通じて、大野城も含めまして、こういうふうな変遷が行なわれたというお話でした。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

【東京会場】

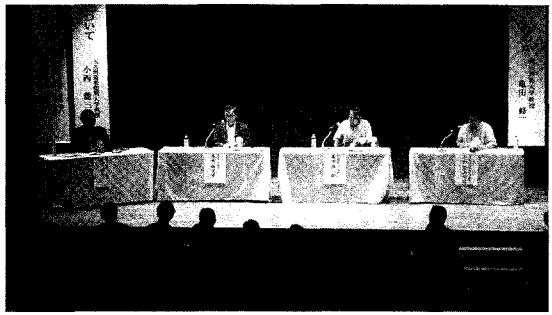


写真7　パネルディスカッション東京会場

コーディネーター

佐藤　信（さとう　まこと）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学助教授を経て、一九九六年より東京大学大学院人文社会系研究科教授。専門は日本古代史。文学博士。

パネラー

荒木　敏夫（あらき　としお）

専修大学教授。

亀田　修一（かめだ　しゅういち）

岡山理科大学教授。

小西　龍三郎（こにし　りゅうざぶろう）

元九州造形短期大学教授。

佐藤：三人の先生方の講演をずっと熱心に聞かせていただきまして、大変充実した思いを私もしております。鞠智城という古代の研究テーマが、もう止めども尽きないいろいろなテーマを提供してくれて、日本の古代史を大変豊かに描いてくれるなということを、改めて実感いたしました。

三人の先生方のお話を聞いて三つのテーマを、私のほうで考えてみました。第一番目のテーマは、六六三年の白村江の戦いの直後に、おそらく鞠智城が、大野城や金田城とほぼ同時期に築かれたということは、ほぼ説が動かないかと思いますが、それを六九八年、『続日本紀』に初めて鞠智城が見える時に、三〇年経ち、おそらく修理も必要になるし、あるいはどういう機能が変わったかということもそれとつながるかも知れません。それは、中央政府の命令で、大宰府をして「繕治せしむ」とありますが、これが亀田先生のお話にありましたけれども、単純な小修理なのか、もっと根本的な変化なのか。それは例えば、小西先生の話でもありました掘立柱建物から礎石建物に変わるようなことと対応するのかどうか。そういったことがどういう意味を持つかということが、大きな問題点としてあるかと思います。

写真8　佐藤信氏

そして、それは同時に、荒木先生がお話された、中大兄が大王代行である時に鞠智城を築いたというお話がありましたが、それが六九八年の繕治の時にどうなったのかということも含めて、律令国家にとって鞠智城がどういう意義を持つかということが話題になるのかなと思います。これは発掘調査の成果や建築史の成果ともリンクすると思いますので、鼓の鞠智城の六個々の八年

の全治の評価をめぐるお話を一つのテーマとして考えました。

そして二つ目は、若干重なるのですが、律令国家にとって、鞠智城がどういう意味を持ったかということです。これは繕治の意義をどう歴史的に理解するかということも含めてということになります。それから、荒木先生から後の時代の鞠智城の鳴動についてのお話があったかと思いますが、そういったことも含めて、律令国家にとっての鞠智城の意味についてを、二番目にテーマとしたいと思います。

そして三つ目は、東アジアの中での鞠智城ということが、やはり三人の先生方のお話の中でもあったかなと思います。もちろん白村江の敗戦との関係もあります。あるいは、百済系の技術、百済系の瓦の問題、あるいは八角形の建物や貯水池も朝鮮半島の二聖山城の遺構と関係しますが、渡来人がどのように築城に関わったか。渡来人がいなければ、おそらく築城もできなかったのではないかと、それに近いお話が亀田先生からもあったと思います。そういったことを総合してどう考えるかということで、それを三つ目のテーマにしたいと思います。

まず最初のテーマは、繕治をどう捉えるかということです。熊本県教育委員会の最近の報告書で初めて明らかになったと思いますが、出土した土器をすべて整理したところ、七世紀末から八世紀の初めの時期が、最も須恵器がたくさん出土する時期で、そのあとの時代、八世紀の第2四半期・第3四半期になると、土器がほとんど出土しなくなってしまいます。つまり、最も鞠智城に人がたくさんいて活躍して、おそらく土器の圧倒的部分が食器だと思いますが、その人達が活動していたというのが、ちょうど七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期で、ちょうど繕治の時期と重なると思うのです。

これをどう考えるかということですが、昔だと創建の時が最も対外関係の危機感を持って大規模なことを行ったと考えたと思います。おそらく国家的な築造だと私は思うのですが、繕治を創建と比較した形でどういう意味を持つかということが話題になると思います。ここら辺、創建の時と、繕治の時の、鞠智城の造営の違いについて、考古学的にどうかということを最初、亀田先生にお話を伺いたいのですが、いかがでしょうか。

その前に、能登原さんに土器の出土量についてお話をお伺いしましょう。七世紀末から八世紀初めの土器が明らかに出土量が多いことについてです。

それでは最初に、最近の発掘調査成果をまとめていただいたので熊本県教育委員会の能登原さんに、コメントをお願いしたいと思います。

能登原：熊本県教育委員会の能登原です。今まで先生方が述べられてきたとおり、先年の三月に作成しました、これまでの調査成果をまとめた報告書の中で、土器を再整理しましたところ、実は築造時期の土器というのは、それほど多くはありません。それで目立つのが七世紀末から八世紀の初めの時期が際立って土器の出土量が多いことです。また面白いのが、実はその後の八世紀の第2四半期、第3四半期は全くありません。一点もないというような状況がございます。幸いなことに、六九八年の繕治ということは以前から知られておりましたので、その七世紀末から八世紀初めの土器が多いことに関しては、これはおそらく繕治と関わりがあるものだろうというふうに報告書の中でも述べております。

また、その後の変遷で、土器が無くなり、そしてまた土器が出てくるというのは、おそらく鞠智城の機能の変遷と

大きく関わっているだろうと思っています。それが何なのかというのが、今後の課題になってくるのではないかというふうに考えています。

佐　藤：能登原さん、創建の時と、繕治の時との変化において、創建と繕治の間での鞠智城の機能の変化というのはいかがでしょうか。

能登原：そうですね、実際の出土遺物からはその間で創建と繕治で機能が変化したというのは、明確には言えないのかなという気はいたします。

佐　藤：あとで小西先生にも伺おうと思っているのですが、創建から繕治の間で、例えば掘立柱から礎石へという変化みたいなものは考えられるかどうか、というのはどうでしょう。いろいろな場合があるのでしょうか。

能登原：そうですね。八世紀の前半頃に掘立柱建物が、小型の礎石建ちの建物に変わるというふうには検討はしているのですが、もう少し礎石が遡る可能性もあるのかなというふうには思っています。

佐　藤：今おっしゃっていた繕治の頃に、掘立柱が小型の礎石建物になると言われたのですが、それは前提としては、そのあとの時期に、大型掘立柱建物になるということが前提でしょうか。

能登原：そのあとは礎石建物がそのまま大型化していくという流れです。

佐　藤：その年代はどれくらいですか？

能登原：そうですね、八世紀後半くらいで今とりあえずは考えております。

佐　藤：分かりました。亀田先生よろしいでしょうか。

亀田：はい。ありがとうございました。そうすると、小西先生にお伺いしたいのですが、創建期で一二棟、それから繕治期で二二棟くらい分類していますが、これがまさにその辺のということですか。

小西：創建期に比べますと、繕治期は倍増しているわけですが、例えば七号ですが、創建期にあります。七号は掘立柱ですから、二、三〇年経てば、もう耐用年数が過ぎてしまいます。そうすると、七号を解いて、八号を建てていく。そういう意味では、九号と一〇号の関係もそうですけれども、耐用年数を過ぎた建物を建て替えていくというのが、一つの繕治期の姿となります。もう一つは、一二号、一三号ですが、に礎石建物が新たに建てられています。そういう二つの要素を持って、倍増しているという、建て替え半分、それから新築半分というふうな形になります。その新築されたものは、ほとんどが礎石であるというふうな形で、この繕治期の建物を捉えています。

亀田：そういう意味で、まさに私もそういうことだろうなと思います。岡山県の鬼ノ城でも、土器は、量的にも、まさに鞠智城と同じような、鞠智城ほどは出ていませんが、動きとしてはほとんど同じ動きをしていると思います。鬼ノ城の場合、最初の段階、少なくても城壁を造るなど、当初、当然管理棟とか、建物を建てる為の管理とかそういうのもいったと思うのですが、作業小屋とかも含めて、その段階である程度できて、本格的にきちんと動くのが、やはり第4四半期、藤原宮くらいの時期なのかなと思っていますので、まさにこの辺もこちらの繕治の時期にあたります。逆に言うと、繕治以前から動いていても別に構わないのですが、少なくとも、この土器の量は、これだけの量が出るとそう考えざるを得ないと私は思っています。

佐藤：亀田先生、ついでにお伺いしたいのは、今日は完成した山城と未完成のままの山城に分けてお話があり、大変興

味深かったのですが、繕治したということは、一度完成したものを繕治しており、未完成のものはそのまま使われなくなったとお考えですか。

亀田：この辺がまさに問題になります。実際に、大野城でも、大宰府口で掘立の門から礎石の門に変わります。礎石の門に変わるのは、大宰府の場合は、八世紀の、例えば七二〇年頃とか、奈良時代になって少し後くらいだという理解をしています。そうすると、それ以前の段階、あそこに門があったのは間違いないと思いますが、それ以外の所も全部できていたのかというと、この辺は少し微妙なところです。といいますのは、大野城は今、門が九か所見つかってきております。すごく単純な話ですが、実際にどれだけの人数を使っているのかということによるかと思いますが、例えば三〇〇〇メートルの城壁を何人で造るかによって、例えば数年でできるのか、それともやはり一〇年単位くらいの話にしないといけないのかというのは出てくるのかなと思います。それを動かし方次第で、できているのか、できていないのかということになります。岡山の鬼ノ城の例で言いますと、門の柱が四角ですが、実は東門だけが丸です。これを時間差と捉えるのか、グループ差と捉えるのかで、またそこが違ってきます。それから、鬼ノ城の北門に関して言うと、礎石のその上面が、完全に削られずに岩の一部が残ったままという状況もあります。つまり、それはある面では、未完成と言われれば未完成ですが、ある面では、実はこれでいいやって、門の機能はできますので、そういうのもございます。実はまさにおっしゃったとおりで、実際にどこまでどうできていたのかというのは、すごく難しい状況です。ですから、もしかすると、この土器の数の少なさというのは、必死に城壁を造って一部はやったけれど、ほとんど城としての機能はまだまだ不十分だったということかもしれません。ただし、そうしている間に三〇

年も経てば、当然建物も傷むし、城壁も崩れるというので、繕治したのだと思います。その時に、大幅改造みたいなことも考えたのかなということも考えています。

佐藤：山城が完成したという姿をどこで認めるかというのもなかなか難しいです。一度造っても、また手弱なところは修理して、複雑にしたりしますよね、いろいろな技術を高めたり。

亀田先生は、例えば、創建の時は大野城、基肄城、金田城の場合は、憶礼福留（オクラノフクル）とか、百済からの亡命将軍達の技術の下で造ったという記事がありますが、六九八年は大宰府をして繕治せしむというので、百済の直接来た技術から、例えばそれが日本化したような技術、創建と繕治の間で技術的なそういう差があるかどうかなど、そういう点はいかがでしょうか。瓦が変わってくるとか。

亀田：瓦は確かに少し大宰府の場合は変わりますね。ただ、どうでしょう。なかなか明確に、だから六六五年、六六七年のところで、渡来系の人が関与しているのは、私は少なくとも間違いないと思っています。なぜかと言うと、そもそも六六五年、六六七年のところで、例えば熊本を例にしますと、版築をするというのは、熊本の古代神社でここまで遡るのはありますか。おそらく微妙だと思います。そうすると、熊本、いわゆる肥後国で、版築を誰もやったことがないとなります。そうすると、当然、指導者およびある程度現場監督クラスの人には、そういう人がいないと、それは無理だと思います。だから実際に指導する人は、地元の人でもいいですが、憶礼福留とかそういう人ではないにしても、関係する人達が実際に設計図を描き、こういうのをしなさいと言う人がいないといけません。そうすると、おそらく地元、それから中央からも人が来て、渡来系の人がその中に少なくとも関与しているものと思われます。

これは推測の域を出ませんけれども、先程も秦人の話がありましたし、入り口の所に松尾神社ですか、あれは秦氏ですよね、おそらく。実は鬼ノ城も伽耶と関係があります。だから、まさにそういうことも含めて、渡来系の人達が動員されている可能性は、やはりあるのかなと思います。少なくとも、六六五年、六六七年、その辺のところにはそういう人がまず入っていると思います。次の段階の六九八年になると、確かに国家が関与してきます。日本の人もそういう技術がどんどん進んできますので、それを区別できるかがありますが、今できそうなものというのは、本当に瓦と礎石建物、それと古代寺院も出始めてもいい時期になります。

佐藤：小西先生、今の創建と繕治の問題について、建築のほうからご覧になって、もう一度お話を聞かせてもらえないでしょうか。

小西：やはり掘立と、それから礎石というのは、非常に技術的に隔絶したものがあります。掘立というのは何かと申しますと、要するに地面に穴を掘って、電柱を埋めるように埋めて、それで直立した一本一本の柱をつないで、建物の構造を造るわけですから、上は意外とぐらぐらでもできてしまいます。ところが、礎石建物というのは、礎石の上に柱がのっているだけですから、上をぐらぐらに造ってしまうと、本当にぐらぐらで、これは壊れてしまう。ということは、きちんとした上物、梁と柱、それから桁です。これをきちんと組まないといけません。組物と言いますが、組まないと礎石建物はできません。その技術というのは、やはりそれは渡来系のものかどうかは別として、やはり優れた技術を持った人が、どこかから来て、地元の人と一緒に造っていったという形ではないかと思います。

佐藤：繕治の時に、礎石化したというお話がありますが、もう一つ、あとの時期の再開期というところで、礎石建物が

ずいぶんまた増えて、立派になる。こちらのほうが大型だと先程の能登原さんのお話にもあったのですが、この繕治期の礎石建物と、再開期の礎石建物というのは、全体の見方としてはどうなのでしょうか。

小西：大型化するという意味では、逆に繕治期の四九号という長倉は非常に大きいですね。これはやはり先程も和泉監の正税帳のところで申しましたように、法倉という長倉が出てくるのですが、やはり律令の初期の頃の倉庫になります。動倉と書いてあり、不動倉ではありません。規模が大きいのに、動倉になります。すなわち、何かあったら、例えば飢饉があれば、そういう時は出しますよと、これを使っていいですよという倉になります。そういう意味からすると、この四九号の長倉というのもある意味、律令の精神というのでしょうか、この倉があって、これは例えば飢饉があった時には開きますよという、そういう強い律令の力みたいなものを示そうとしている倉といえるでしょう。これはに、あとの一〇世紀の初期になりますと、無くなってしまうものです。そういうふうな一つの律令の力が非常に働いているっていうことと、もう一つは、やはりまだ技術的に礎石建ちが入ってきたばっかりだから、柱間も縦と横が合っていないなど、ばらばらです。そして、再開期になると、やっと技術的に完成して、碁盤目のようなきっちりとした柱間を持つ、規格性の高い礎石建物が建ってくるという違いではないかと私は建築的には理解しています。

佐藤：四九号のような建物は、お話にあったように、長倉とも言うし、法倉とか古代の史料では出てきます。関東地方の地方官衙の遺跡でも、正倉院と言いまして、国家的な倉庫の正倉がたくさん並んでいる中でも、一棟だけ特別に立派で、瓦葺きであって、巨大な倉庫が築かれる場合があります。これは関東地方の例だと、東山道沿いに東北に出征する兵士たちに見せるかのように並んでいる場合があり、国家の威厳を示すようなあり方です。この倉を見れば、困

った時にはいずれ国家がなんとか救ってくれるであろうというように思わせる、国家的な倉庫の最たるものだと考えられます。こちらの鞠智城の場合は、ほかの倉庫ももちろんそういう性格をもちますが、四九号などは、そういう格別な倉庫ではないかなと思います。

それでは今の創建から繕治についてのお話について、荒木先生いかがでしょうか。

荒木：文献データの場合には、これがどうなるこうなるという、そこまで言えるのはそうたくさんありません。ですから、体制はこうではないかというようなところで、当たらずといえ、遠からずみたいな話に、ついなってしまいます。

この繕治期と言われた六九八年、この時期、例えばこの年号一つ取ってみても、天智朝は遣唐使を送っているのですが、天智朝を過ぎますと、天武、持統朝と遣唐使は送りません。ちょうど遣唐使が行かない時期になります。八世紀に入って、文武朝に、遣唐使を送ってみると、なんと唐だったのが、辿り着いた者が聞いてみたら、国名が変わっていました。要するに、則天武后の治世下の中国に辿

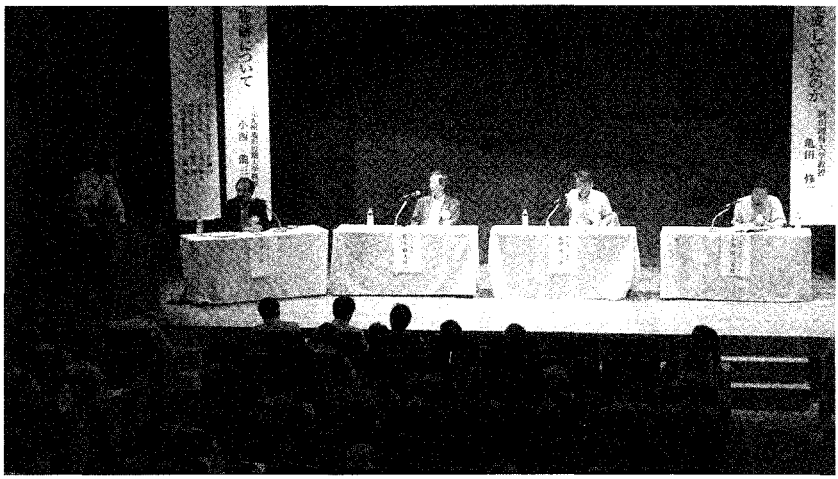


写真9　パネルディスカッション東京会場

り着いてしまったのです。そこのところを見ますと、実は山城をそれがどこまで完成したかどうかは、これは一つ一つの、朝鮮式山城であれ、神籠石系のものであれ、城の始まりがいつからで、どれくらい存続したかというのを丁寧にやるしかないと思っています。

ただ、文献からみていくと、中大兄の称制下に、おそらく相当な拍車がかかったものと思われます。では、斉明の時期に山城を造っていないのかというと、これもおそらく、どこかの山城については、基礎的な部分はやっているという可能性もないわけではございません。ですから、そこは遡る城も少しあるにしても、おそらく、かなりの数の拍車がかかったのが、一つはこの中大兄の称制下の時期になります。

そして、天武、持統の時期に遣唐使が行ってないということは、これは、現在のように行かなくてもある程度、情報が大量に入ってくるという時代ではありません。やはり現地に行って、間接であれ、情報が入る手段がない時、首脳部は、おそらく亡命百済人とか、高句麗系の者から入ってくる情報を基にしたものと思います。全くあの時期、文化が入ってこなかったっていうことは言えないことははっきりしているのですが、明らかに、情報はこの時期入っていません。それがある分、中大兄の称制下の危機感みたいなものが、ずいぶんあったと思います。その点で、東アジアの細かな状況判断というものを、天武朝、持統朝は、入ってくる情報は以前と比べて少ない中で、おそらく判断せざるを得なかった。そういう中で、かなり過分な評価をしてしまうものもあっただろうし、逆に過小評価をしてしまうこともあったものと思います。

実はこの時期行ってみて、初めて気づいたと言われている部分が都の造り方です。藤原京を理想と思って造った、

おそらく中国もそうであろうと思って行ってみたら、かなり違うというようなところがあり、藤原京をやめて、平城京に移っていく一つの理由にもなっているというようなことも一方で言われています。六九八年の状況ですが、まだ文武は二〇歳に届かない天皇で、持統が後ろで後見をするわけです。したがって、この時期の大きな判断というのは、文武朝で行けば、これ持統なのです。多くの判断は文武よりは、持統上皇、持統太上天皇におそらくあったというふうに見てよろしいのではないかなと思います。

白村江で勝利した側の新羅は、その前の時代なのですが、二人の女帝を出す時代でした。善徳、真徳という二人の女帝を出しましたが、善徳の段階で、内乱が起きます。中国からすれば、女帝の国、女性が統治する国と言って、やはり馬鹿にしたのですね。そうしたなか、奇妙な提案を中国側がするわけですが、新羅は、それを断ります。つまり女帝という統治の仕方は一ランク低い、ないしは、まだ未成熟な国がやるというふうに言っていた中国が、実はその時期、則天武后が統治していたからです。歴史の皮肉と言えば、皮肉なのですが、そういう時期であります。

その時期、日本では持統ですから、偶然です。持統が、正式に即位したのと、則天武后が即位したのが同じ年ですが、ただし中国へは行っていません。行ったら何か言われるかも知れないという思いがあり、文明国中国を遠くで見ていた可能性は十分あります。ところが、大宝年間に則天武后に謁見して戻ってきた使節団が、「びっくりしたことです、相手も女帝でしたよ。」と、おそらく帰朝報告をしたものと思われます。そのようなわけで、当時の国際関係から見た時の、この時期というのは、天武、持統の、おそらく彼ら自身も、見聞きしたその戦争体験というものが、それなりに生きていた。であるが故の所産というふうに見ていったらいかがかな、と思っています。

佐　藤：荒木先生は、古代の女性天皇に関するご著書も最近出されておりますが、白村江後の古代山城の築城が、いわば中大兄王の称制下、大王代行の下での事業だったというお話だったのですが、六九八年の繕治というのも国家的な事業でしょう。

荒　木：ええ、そうだと私は思います。

佐　藤：ちょうどその時期に、藤原宮期という言い方もありますが、鞠智城で最も土器が大量に出土して、活発に動いているという時期に当たるということです。築城と同時に、この繕治の時期というのも、鞠智城にとっては大変重要な注目すべき時代だということが見えてきたと思います。

もうすでに、律令国家にとっての意味という二番目のテーマにもう入っていただいていると思いますけれども、考古学的な方ではいかがでしょうか。山城が未完成なのも含めて、繕治される山城が、数限られているわけですよね。今日お話があったように、未完成のものが多い中で、一部完成したもの、あるいは完成をどこに基準を置くかちょっと難しいですが、少なくとも繕治して整えたもの、そして一〇世紀くらいまで鞠智城のように続くものと早く命を失ってしまうもの、そのあたりの区別というのは、どういうことで出てくるということになりましょうか。城の造営主体という課題もあるのかも知れませんが。

亀　田：先程申し上げた、以前から言われている神籠石系山城と言っているものが、記録に出ない理由は何なのかというのは、いろいろな方がやはりおっしゃっています。例えば、『日本書紀』を編纂する時期に、もう機能が完全に停止して忘れられてしまっていたからだ、という話もあるし、たまたまという話もあるのかなと思っています。

私がよく言っていることは、もし修繕されなかったら、文献に登場しないということで、鞠智城も神籠石系山城ですよね、今の定義で言うと。お分かりでしょうか。つまり、文献というのは、文献も当然書かれていないことはたくさんあります実は鬼ノ城も、六六七年くらいに一緒に造られていても良かったのかなというふうに個人的には思っています。

それから、これは以前から言われていることですが、讃岐の屋嶋城に関しては、郡名が入っています。これも以前から、出宮さんが言っていますが、讃岐にもう一箇所お城があるから、わざわざ郡名を書いたのではないかと言われています。それが、実は讃岐の城山、つまり国府の真後ろにあるお城であるのではないかという話もあります。やはり、文字資料に関して言うと、ないからどうの、あるからどうのと、当然あるのは当然ですけれど、ないというのもやはりそれだけの意味も含めてあるのかなと思います。

ただ、そういう中で行きつくところは、少なくともできあがっている城は、やはり重要なお城なのだろうと思います。

そういう認識ができるのかなというのは、実は今日申し上げたかった一つのことです。逆に言うと、完成しなかったと考えられるもの、よく分からないのはいくつか当然ありますが、明らかにもうできてないというのは、もし神籠石系のものというのが古いものであるならば、前から言われていますように、朝鮮式山城を造り始める段階に、神籠石系のものはまだきちんとした技術者、指導者がいなくて造り始めて未熟だったから、そこで止めたのだという意見があります。

それからもう一つは、新しい時代に絡むのですが、まさに天武、持統くらいのところになってきて、実は総領とか、大宰とかいう言葉があります。実は古代山城と言っているものが、対朝鮮半島のためではなくて、地域支配のために造り始めたのではないかという意見も出ています。先程、荒木先生が言われた、まさに天武、持統という時期がちょうど古代国家が各地域を押さえていくということにつながります。例えば、これで行きますと、肥後国の文献上の初見は六九六年ですが、まさに地域が前後とかに分けられる時期っていうのが、まさにこのあたりの時期です。まさに、そのあたりの時期に古代山城を造って、地域を支配しようとしたのではないか、とおっしゃっている方もいます。ただし、このあとすぐに出てきますように、八世紀の初頭くらいに、もうお城造るのをやめましょうとか、管理するのをやめましょうという話が出てきますので、だから止まったとおっしゃる方も当然いるわけです。だから、両方実は説明ができるので、なんとも言い難いのですが、ただやはり私は、拠点の所はまず造っているのではないかというのはありなのかなと思います。それで、のちにやはり管理もするということも含めて拠点だったからというのはあるのかなと思います。

ですから一つ言えるのは、対馬の金田城がその後よく分からないというのは、もしかしたら対馬の位置づけが、国家的な意味でも変わってきたのかなという気はいたします。やはりまず、大宰府　とかのほうをまずして、というような意味があったのかなという気もいたします。

そういう意味で、古代山城がある程度できあがっていただろうと思われる所というのはやはりその地域が中央にとって、大和にとっても大事だったということも示しているのかなという気はします。

佐　藤：金田城も六六七年頃に築きながら、繕治の時の記事には出てこないわけですね、逆に。

亀　田：はい。そして実際礎石建物が見つかってない、瓦がでないという話というのは、やはり少し気になります。

佐　藤：ある意味では、全部がそろっている古代山城の中で、鞠智城は一つの大きな基準の城になると言っていいでしょうか。

小西先生、律令国家の形成と、造営主体について、今日のご講演で九世紀のことまでお触れになったのですが、これまでの話を踏まえて、いかがでしょうか。

小　西：そうですね、阿志岐城というお城がありまして、これは大野城のすぐ真下にあると言ってもいいお城ですけれど、大宰府の防衛網に比べ少し後でできたのかなと感じています。特に目的がはっきりしていて、大宰府から田川を抜けて、いわば瀬戸内海へ抜ける田川道というのがあり、城の正面がその道のほうを睨んでいます。決して対外的な方向を睨んでいるわけではないお城です。そして、睨んでいる方だけはきっちりと造るのですが、睨んでない方は、何もないというのでしょうか、ただの山の尾線だけという造り方になっています。ということで、要するに対外的な防衛網として造った朝鮮式山城というものと、その神籠石の城、私は阿志岐城のことだけしか申しませんが、目的が少しずつ違って造られていたと考えています。そのため、例えばあとで編纂した『日本書紀』に載らなかったと捉えております。

建築的な話でしますと、いわば八世紀の末、私が言う再建期の前には、やはり唐の安禄山の乱とかですね、それから藤原仲麻呂が新羅出兵を試みるなど、結局出兵しなかったのですが、そういう緊張状態が八世紀の後半にありまし

て、それを受けた形で鞠智城の修理が行なわれたのではないかなと、再開期というのはそういうふうに生まれたのではないかなと考えています。

佐藤：八世紀後半、藤原仲麻呂の政権の時代に、唐の国が、安禄山・史思明の乱で壊滅状態になり、東アジアの大動乱の時代がまた出現しそうになった時に、北東アジアでも渤海という北の国が朝鮮半島の新羅の国を攻めようかという時に、日本と挟み撃ちにしようという話もあるくらいであり、そういった情報も踏まえて、藤原仲麻呂は新羅を攻撃する計画を立てました。これは『続日本紀』に書かれていて、間違いないと思います。その際に、ちょうど大宰大弐として吉備真備が大宰府に来ていて、怡土城を築城したとか、行軍式という軍隊の規範を作ったとか、いろいろな話があるわけです。その時代も、八世紀後半でありますが、北部九州はだいぶん緊張したと思います。それから九世紀代も、実は新羅の海賊が北九州まで攻めてくるということもあり、新羅との緊張関係が国家的な課題になった時もありました。そういう東アジアとの動きの中で、鞠智城の変遷も理解する必要があると思います。

最後に、東アジアとの関係の中での鞠智城という話をしたいと思います。これは造営の時の百済系の技術の問題があります。あるいは亀田先生の瓦の話もありました。また、百済で造られたと言われる小金銅仏の立像も出土しておりますし、朝鮮半島の山城に見られる八角形の建物とか、貯水池があるといったこともあり、城の造営に渡来人がどう関係したかを明らかにしていくことで、鞠智城のそれぞれの時代における歴史的な意義も分かると思うのです。そういった東アジアの中における鞠智城の位置づけ、あるいは創建期と繕治期で、それがどう変わっていくかということも踏まえて、まず亀田先生いかがでしょうか。

亀田：先程も言いましたように、創建と繕治の区別はかなり難しいものです。百済の仏像や「秦人」の木簡、それから築城時における版築。あと個々の唐居敷の穴を加工する技術も新しい技術だと思います。そういう技術的なものと、城の縄張りがあります。どういうふうに造るのかということですが、これは当然日本にはないものでしたので、当然そういうのは造り始めの時にあろうかと思います。

あと瓦に関しましては、意見が分かれるところがありまして、百済的なものと見るのか実は新羅という可能性も全く捨てきれないわけではないというのが、現実であります。それは、六六五年か六六七年か知りませんが、その時と見るのか、もう一つは、六九八年の段階にあの瓦を使っているのかというのも、実は検討の余地があります。特に細かな話ですが、瓦の造りで、瓦の丸いところの上に、これをそのまま被せるだけの技法というのは、実は今のところ日本ではほとんどありません。その技法は、百済と新羅の微妙なところに出てきますので、いずれにしても、そういう技術は新しく朝鮮半島系のものと理解していいのかなと思っています。あと強いて言いますと、玉名郡の立

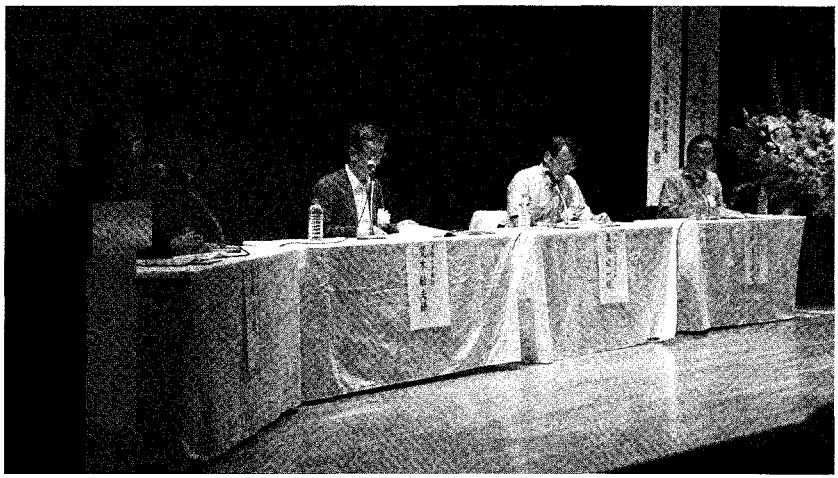


写真10　パネルディスカッション東京会場

願寺というお寺さんがあるのですが、ここの瓦は実は他地域であまり見ないもので、もしかしたら百済かなという造り方になります。技法面ではそういうのもありますので。実は菊池川エリアというのは、もともと朝鮮半島との関係も、ご存知のようにたくさんありますので、そういう背景というのはもともとある地域だろうなと思っています。

それで、本筋から外れるのですが、私は鞠智城ができるのは、単に大宰府の後背という感じだけではなく、やはり有明海が一つの大きな表玄関だと思っています。そういうのが先程の菊池川における朝鮮系の資料の問題もそうですし、それからもっと南のほうの話もそうですが、やはり熊本のエリアというのが、福岡から見れば当然後ろのほうですが、単に玄界灘だけではなくて、有明海からという南ルートというのもやはりあってというのが、鞠智城の築城以前にもあり、古くから朝鮮半島と関わった人達がこの地域にいてというのとも結び付くのかなとは思っています。

佐藤：こちらの東京国立博物館の平成館には、菊池川流域の江田船山古墳から出土した国宝の銘文大刀をはじめとする遺物が展示してあるわけで、熊本県と縁のある所だと思います。江田船山古墳の出土遺物も百済系の遺物で、そのままおそらく大王経由ではなくて、熊本県に来ているといっていいと思います。有明海が外に向かって開く日本の一つの大きな玄関だったということを含めて考える必要があると思います。

小西先生いかがでしょうか。

小西：最後に申し上げたいのは、鞠智城と大野城、金田城を含めた朝鮮式山城というのは、同じ画期を持っています。その画期というのが、要するに日本の対外的な緊張と非常に連動したものとなります。大野城もそうですし、鞠智城

もそうだということがはっきりしていて、やはり古代山城の誕生、それからその変容というのは、そういう対外的な大きな画期と連動しているのだということを最後に言いたいです。

佐　藤：荒木先生、東アジアの中の鞠智城ということについてお話を伺えますか。

荒　木：私も有明海を一方で見据えながらの鞠智城という位置づけは、これは相当大きな意味を持つのではないかなと思います。おそらく時代的にも少し細かく区切って、今後も突き詰めていけば、もう少し違う角度からの鞠智城の位置づけが出てくるのではないかなと思います。

ご承知かも知れませんが、八世紀、九世紀、そして一〇世紀になりますと、かつては、鴻臚館（こうろかん）が大陸半島への公式の窓口というふうに言われ、もっぱらそこに目が行きがちだったのですが、そのこと自体間違いないのですが、実はそこでの交易は、ほんの一部です。もう少し沖合でやる交易は、何も博多に限らないというようなことも、当然これは見ておかないといけないでしょうし、既に鈴木先生がご説明なさっていますが、張保皐（ちょうほうこう）という、これもまた新羅の、もう中国でも軍人経験があり、新羅王朝の所にお妃を出すくらいの、そして、一大海商でもある方がいました。こういう個人が大きなネットワークを張った交易網を持っていました。その一角に、北九州が確実にリンクしているわけです。文室宮田麻呂事件という、ほんの一端が出てくるのですが、根っこは実は、おそらく中国、朝鮮を含む、下手をすれば、おそらく東南アジアの方にまで及ぶ一大交易の中に、日本もまたリンクしている部分があるという点も見据えてやっていけば、おそらく当初の性格は対外戦争の中で、もし来たのであればという専守防衛みたいなところの性格の施設が時期とともにあり、多少なりとも使わない時期があったのではないかと思います。そして後にはお

そらく菊池郡の郡倉としての機能があったものと思われます。それでも単なる一地方の郡倉ではなくて、これは鳴動という予兆が国に乗っかり、菊池郡で鳴るということが、国家的な危機、王権の危機というものを、訴える一つのものに機能しているということの意味は、これは尊重しなければならないですし、確実に、都に通じる報知器を持っているわけです。その機能がまだ動いているということの意味は大きいでしょうし、そういう機能が消えていった時に、まさに今度は地域の中にどう生き、どう生きながらえていくのかという、そういう性格の遺跡ではないかなと思います。外もそうでしょうし、外との関係にもストレートに影響していた時期から、やや間接的な動きになってくるのではないかなと思いますが、地域を見る視点というのが、国内だけでなく当然のこととして外にも目を向けた鞠智城の研究というのが、今後も是非盛んになるように期待したいと思います。

佐藤：どうもありがとうございました。鞠智城をテーマにする研究として、いろいろな視角から、さまざまな研究がまだまだこれからもできるということが、お分かりいただけたのではないかと思います。今日は、鞠智城の創建期と繕治期とに焦点を当てて議論していただいたわけですが、熊本県では、鞠智城について大変熱心に調査・研究を進めていただいており、さらに成果が上がってくると思いますので、ご注目いただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

鞠智城シンポジウム【大阪会場】

古代山城鞠智城築城の謎を探る

古代山城の成立と鞠智城－築城技術の源流－

鞠智城大阪シンポジウム

古代山城鞠智城築城の謎を探る

古代山城の成立と鞠智城－築城技術の源流－

一．開催日時等

日時：平成二五年九月七日（土）午後一時～午後五時

会場：ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）

大阪市中央区大手前一―三―四九

主催：熊本県、熊本県教育委員会

共催：熊本県文化財保護協会

二．講演等プログラム（記録）

・あいさつ

・報　告「鞠智城跡の調査と成果」

矢野裕介（熊本県教育委員会　歴史公園鞠智城温故創生館　参事）

・講演一「古代の東アジアの動向と鞠智城」
　酒寄雅志（國學院大學栃木短期大学教授）
・講演二「古代山城のフォーメイションと鞠智城」
　出宮徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）
・講演三「韓国古代城郭からみた鞠智城」
　向井一雄（古代山城研究会代表）

・パネルディスカッション
　コーディネーター　佐藤　信（東京大学大学院教授）
　パネラー　酒寄雅志（國學院大學栃木短期大学教授）
　出宮徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）
　向井一雄（古代山城研究会代表）

講演一　古代の東アジアの動向と鞠智城

講演者紹介

酒寄　雅志（さかより　まさし）

一橋大学大学院博士課程修了。

現在、國學院大學栃木短期大学日本文化学科教授、栃木県文化財保護審議会委員なども兼務。

専門は日本古代史、東北アジア史。

・講演一「古代の東アジアの動向と鞠智城」

酒寄　雅志（國學院大學栃木短期大学教授）

はじめに

こんにちは。酒寄と言います。今日は「古代の東アジアの動向と鞠智城」というタイトルでお話をさせていただきます。

鞠智城を考える時に、いくつかの問題点があると思っています。①どんな事情で築造されたか。②なぜ菊池という地に造られたのか。③誰か造ったのか。④どういう変遷と事情があったのかの解明が基本的な課題となると思います。それらを私なりに考えてみたいと思います。

一、七世紀後半の東アジアの動向と鞠智城―白村江の敗戦と鞠智城―

『続日本紀』文武二年（六九八）五月甲申（二十五日）条に、「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」と、修築の記事が初めて出てきます。築城の記事ではなく、既に造られていたものが修築されたのが文武天皇二年ということです。それ以前は、大野城や基肄城などは天智四年（六六五）、いわゆる白村江の戦い以降に造られ、それも百済人の指導のもとに造られたことは皆さんもよくご存知のことと思います。鞠智城の築城

も、大野・基肄の二つの城とともに修築されていますので、この頃あたりに考えられると思います。

当時の国際情勢はどうかと言いますと、これも皆さんご存知だと思いますが、朝鮮半島では三国が並び立っており、高句麗が唐との戦いを繰り返していました。隋の煬帝の時には高句麗征討が行われていますので、隋以来のこととなります。その後、新羅と唐が互いに手を組んで、高句麗との戦いも繰り返していきます。日本、当時の「倭」の中大兄皇子は百済寄りの外交を行いますが、倭と百済は長らく両国の関係を強く維持してきました。石上神宮の七支刀などからも、四世紀後半代に百済との結びつきが強いことがわかります。

ところが六五九年に、唐に行った倭の遣唐使が抑留されています。それは来年百済を攻めるので、帰国させないということです。唐は「海東の政有らん」と言っています。その通り唐は新羅とともに百済を攻め、六六〇年三月に、百済の義慈王と王子の扶余隆が唐に降伏し、百済が滅亡します。

写真11　酒寄雅志氏

その後、倭は百済の遺臣である鬼室福信の要請や、倭に人質として余豊璋という百済の王子がいましたので、その王子を押し立てて百済の復興を目指して、大軍を送って唐と戦うことになります。そして斉明天皇をはじめ中大兄皇子たちが、九州の朝倉宮に入ります。白村江では、皆さんもよくご存知のように、「気象を観ずして」という戦況の判断が非常に甘かったのだと思いますが、猪突猛進的な戦いを繰り広げた、「朴市田来津（えちのたくつ）」が、「天に仰ぎて誓い、歯を切りて憤り、数十人を殺しつ」とあります。そして結局こ

の人も亡くなってしまいますが、百済王の余豊璋は数人と船に乗って高句麗に逃げ去ります。倭としてはその後の対応が大変なわけです。

白村江の戦いでは、『旧唐書』などをみますと、「煙焔天に漲り、海水みな赤し」というように大敗を喫したことがわかります。そしてこれをきっかけにして大宰府が成立することになったと思います。筑紫大宰府の佐官だった筑紫史益ですが、二九年前に大宰府ができたと言っています。これは六九一年の記録ですので、六六三年頃に成立したものと思います。筑紫大宰府というのは海辺防備が重要な任務だろうと思いますが、九州の行政、外交、防衛とすべてを担う最前線なっていきます。特に白村江の戦いの敗北で、防人や烽をはじめ水城も置かれます。そして長門、大野や基肄にも城が造られ、さらに対馬の金田、讃岐の屋島、大和の高安と相次いで西日本に城が造られます。最近では、神籠石系の山城の新たな発見も続いているかと思います。唐原山の山城などですが、鬼ノ城なども造られます。そして近江大津へ都を移したのもそうした一環だろうと思います。ちょうど逢坂山の峠を越えた琵琶湖の湖畔に引きこもってしまうように都を遷すのもそうした事情によるのだろうと思います。

そして鞠智城ですが、発掘成果の第一期に当たる七世紀第３四半期から第４四半期に、白村江の戦い以降の防衛体制が整備される過程で築造されたと考えざるを得ないと思います。有明海からの侵入に備えた可能性は高いと思います。筑後国府も有明海をかなり意識して造られていると言いますので、有明海が外敵の重要な侵入路と考えていたのだろうと思います。鞠智城は海からかなり入った平野に突き出た台地の突端にあるわけですが、興味深い場所に立地していると思います。築城した主体は、百済系の菩薩立像が発掘されていることから、百済あ

るいは朝鮮系の人々とするのが妥当かと思います。この写真は扶余で出土している統一新羅時代の小さな仏像です。百済の弥勒寺からも小さな金銅仏が出ています。こうした類例を集めて検討をする必要はあるかと思います。

それから鞠智城には八角形の建物群がありますが、非常に不思議な建物で、時期的には少し後になるのかもしれませんが、新羅の二聖山城に同様の建物があります。私はちょうど二聖山城の八角形の建物が発掘されている時に現場を見ました。それと中国の集安にある高句麗の丸都山城にも共通する建物があるかと思います。また群馬県の三軒屋という遺跡からも八角形の建物が出ています。私も発掘している時に見に行きましたが、なぜ八角形なのかよくわかりません。天武天皇陵なども八角形ですけれども、八角形に何か重要な意味があるのかもしれません。こうした点を考慮すると、鞠智城は朝鮮系の渡来人によって国家的な事業として造られたというように考えて良いのだろうと思います。

二、七世紀末の東アジアの動向と鞠智城

史料上に鞠智城が登場するのは、先ほども申しましたように文武天皇二年（六九八）ですが、修繕をしたという記事として出てきます。では、この六九八年という年に、なぜ修繕をしているのかということを考えてみようと思います。まず当時の朝鮮半島の動向を考えると、百済は既に滅び、白村江の戦いも終わりました。六六八年には高句麗は唐に滅ぼされます。倭は唐に使者を派遣して高句麗の平定を祝っています。この後の倭の外交は新羅との外交に限定されていくことになり、遣唐使もこの後、三〇年間ほど派遣されません。しかし高句麗が滅び

ると、唐は朝鮮半島の支配に乗り出してきまして、今の平壌に朝鮮半島を支配する安東都護府が置かれることになります。唐は朝鮮半島を直接統治するということになりますが、そうしますと今度はその朝鮮半島の人々は、この唐を追い出そうとします。軍事的な侵略をしてきた者に対して、それを何とか駆逐しようという運動が起こってきます。六七六年にその新羅の抵抗によって、安東都護府は遼東城に移転することになります。平壌からかなり北の瀋陽の南側の遼陽です。そうなりますと、新羅が朝鮮半島に残る唯一の国になります。しかしながら、唐は朝鮮半島の支配を諦めておらず、その後どうやって支配していくかを考えています。その一方で滅びたはずの高句麗から使節が、何度も倭に来ています。六七一、六七二、六七五、六七六年、さらに六七九、六八〇、六八二年に来ます。なぜ高句麗が倭に来るのかというと、朝鮮半島では高句麗の復活運動が続いていたのです。

剣牟岑という高句麗の遺臣が、元の高句麗王の高蔵の外孫安舜を立てて武装蜂起し、高句麗の復活を図りました。後にこの安舜が、擁立した剣牟岑を殺して新羅に逃走しましたので、新羅はこの安舜を自分の支配下に置き、高句麗を復活させたことにします。この頃、滅びたはずの百済王が倭にもいるのです。八世紀には、百済王敬福という人物がいますけれども、かつて存在した百済の王が日本国内にいて、その王の上に日本の天皇が君臨するということをしていますが、同じようなことが新羅でもあったのだろうと思います。新羅は安舜を高句麗王として復活させて、新羅王の支配下に置くのです。しかしこの安舜も逃走します。

則天武后の宰相の狄仁傑が、「高氏を復して君長と為す」と言っています。高句麗は一旦滅びたけれども、朝鮮半島の支配はやはり地元の人間を復活させたほうがいいだろう、そして新羅に対抗させようと考えたのだろう

と思います。「君長と為す」ということで、何度か高句麗の王を復活させて高句麗王にします。唐に下ったはずの高蔵を「遼東州都督・朝鮮王」に封じ、海東の国王にしたということです。ところが高蔵は、靺鞨という中国・東北地方に居住する人たちと通じて唐に反し、捕まって四川省に流されます。新羅に下った安舜のように高句麗を復活させたのではなく、唐が復活させた高句麗ということになります。しかし一回目は失敗します。さらに六八六年に高蔵の孫の宝元を朝鮮郡王に任じますが、これもうまく統治ができないままに終わります。そして六九八年、高蔵の子供の徳武を安東都督に任じて、本蕃、要するに高句麗の統治をさせますが、これもうまくいきません。これで完全に高句麗が滅びたことになります。そしてこの高句麗の末裔として復活させたのが、「渤海」だと思います。渤海に唐が高句麗の末裔として中国東北地方の支配を委ねたと私は思いますが、高句麗という国名は、ここで絶えることになります。

しかしそれだけではなくて、六九六年に契丹族の李尽忠が遼寧省朝陽というところで反乱を起こしています。この混乱の間に、当時振国と言いますが、後の「渤海」が興ることになります。

こういう情報が日本にも入ってきていたと思います。その情報源は、遣唐使として中国へ渡った人たち、あるいは白村江の戦いで捕虜になった人たちです。たとえば七世紀末に遣唐留学生の土師宿禰甥とか白猪史宝然が帰ってきますし、百済の役で捕虜になっていた筑紫三宅連得許も帰ってきます。六九六年には肥後国皮石郡の壬生諸石も帰ってきていますから、こういう人たちから情報を聞いて、東アジアあるいは東北アジアが混乱しているということは認識していたのだろうと思います。

そしてもうひとつ大事なことは、六九八年に鞠智城とともに三野や稲積城が修築されており、これが日向や大隅あたりだの城だとすれば、隼人に対置するような城として修築されたと思います。つまり隼人に対して稲積とか三野とともに鞠智城も修築された可能性は大きいと思います。この頃、日本は南島に領域を拡大しようとしていて覓国をしています。つまり新たに国を覓めているのです。それに対して薩摩とか多褹で反乱が起こっています。最もヒートアップするのが七二〇年で、陽侯麻呂という大隅国守が殺されるということがあり、大伴旅人、すなわち大伴家持のお父さんが、征隼人持節大将軍になって軍事行動を起こします。『和名類聚抄』という史料に、薩摩国高木郡の中に肥後国の郡名がいくつか出てきますので、この戦いに肥後国も大きく関わっていただろうと思います。そうした時期が鞠智城の第2期に該当します。この時期に建物がコ字型に配置されていくのですが、その配置はだいたい律令制下の官衙に多いので、鞠智城にも城司の官衙が置かれた可能性もあるのではないかと考えるわけです。またこの時期は土器が非常に多く出てきていて、鞠智城が一番盛んだったイメージを持つことができます。そうなりますと、東北アジアの混乱に対する危機感と隼人への対策上、北九州の山城の重要性を再認識して、鞠智城も修繕したものと思われます。

一般的に六七〇年以降はどちらかと言うと、新羅との関係あるいは朝鮮との関係は安定しており国際的な緊張がないと思っている方が多いのですが、そうではなくて、東北アジアの混乱は継続しており、また隼人政策上も鞠智城というのは非常に重要な地位を占めていたものと思われます。だから修繕をしたのだろうと考えるわけです。

三、八世紀の東アジアの動向と鞠智城

八世紀に入りますと、日本と新羅の関係はずっと緊張を増していきます。七二二年には、新羅では日本の賊路を遮断するために毛伐郡城が築かれています。慶州、つまり新羅の都の南、蔚山へ向かう関隘に関門城、これが毛伐郡城になります。さらに七三一年には、日本の兵船が東辺を襲うという記事が『三国史記』に残っています。さらに日本の天平六年（七三四）の「出雲国計会帳」が正倉院にありますが、それによると七三二年から七三四年に節度使体制が日本海沿岸にとられたことがみえます。山陰、西海の軍事体制を強化しているということから、やはり新羅との関係が良くないことを物語ります。また七三七年には、新羅征討が議論されています。しかし藤原四兄弟が亡くなりますので立ち消えになりますが、日本と新羅との関係が非常に悪化しつつあるということがわかります。一時期だけ関係が良い時があります。七五二年に、新羅の王子金泰廉が七〇〇人ぐらいの使節団を連れて来日します。この時だけ両国の関係は改善します。東大寺の大仏の開眼会の直後のことで、彼らは東大寺の大仏を見に来ている可能性があります。また貿易を積極的行っているのが、「鳥毛立女の屏風」の下貼文書からうかがえます。これは「買新羅物解」と言いまして、新羅の物品を購入しているリストが屏風の下に貼られていたのです。日羅関係に雪解が一時期ありますが、それも束の間で、七五三年には唐の玄宗皇帝の前で日本と新羅の遣唐使が席次争いをします。今の国連の議場のどこに座るかで争っているみたいなものなのですが、長安城の含元殿（がんげんでん）で並ぶ位置を争っています。西側の吐蕃という国の下に日本、新羅は東側で日本よりも上に位置づけられていました。新羅は東の横綱みたいな位置にあるわけです。しかし新羅は日本に朝貢する国なのだから、日本

のほうが下にいるのはおかしいと大伴古麻呂が抗議をして席を変更させたのです。これは新羅にとっては大変な屈辱で、その年の八月に「日本国使至る。慢して無礼」と言って、新羅に来た日本の外交使節に新羅王が会いませんでした。一方、大使の小野田守は、新羅はとんでもない無礼な国だと言って、両国が対立していたことがわかります。そうして藤原仲麻呂の新羅征討という軍事行動に発展していきます。「新羅を討たん」「三年の内に功を成さしむ」と、三年後を目指して新羅征討をするということで、吉備真備らを中心にして準備が進んでいきます。その中で注目すべきは、吉備真備が九州博多の西側に怡土城というのを造っていることです。糸島市の高祖山というところで、城壁が今でも残っています。糸島半島の古い地形は東側が湾になっていましたが、九州大学の移転にあたって元岡遺跡という遺跡を発掘しところ、大量の製鉄遺跡が発見されました。現在、その近くに周船寺という地名がありますが、古くは大宰府の主船司といわれる軍船を集める場所だったと思います。

そして怡土城ですが、新羅を攻めるための兵站を整える城だろうと私は考えています。当時、新羅との関係は良くありませんから、その緊張に備えて怡土城が造られます。そして新羅征討の計画が発案されますと、怡土城が非常に重要視されます。では、新羅征討計画は実効されたのかと言うと、そうした事実はありません。七六二年十一月に、香椎廟に奉幣をして新羅を討つと報告したところで終わってしまい、何も記録に残っていません。藤原仲麻呂はその後、道鏡と争って反乱を起こして亡くなり、新羅征討は沙汰止みになります。そこで新羅との関係は改善されたのかというと、この後、新羅との公式な外交関係は断絶してしまいます。

一方、大宰府は七六五年に水城を修復しています。水城を修理するということは、相変わらず新羅との関係は

良くないことを物語ります。そうした時期が鞠智城の第三期にあたります。その頃の鞠智城に関する史料はありませんが、怡土城や大宰府の後背にあって、新羅征討の食料などの物資の備蓄をする礎石建物が造られます。重いものを入れても耐えられるような礎石建物を造るのだろうと考えていますし、城内に「佐官どん」や「少監どん」という地名も、そうした時期の名残だろうと思います。

鞠智城は大宰府の管轄下にあったのかもしれません。そしてもう一つ考えておきたいのは、肥後国司などによる官物の不正使用・蓄財により、倉の中に十分な米が入っていないことがありますと、隠蔽工作として倉を焼いたりします。よく関東では正倉神火と言いまして、倉に雷が落ちて焼けてしまうという記録があります。それは役人の不正の隠蔽です。雷のせいにするのです。神様が怒って雷を落としたということです。そういう可能性もあるかもしれません。焼け米はかなり城内からも出ていますので、そうしたことに関係するかもしれません。

四、九世紀の東アジアの動向と鞠智城

最後に九世紀から十世紀の鞠智城をみると、この時期には鞠智城の兵庫が鳴り、さらに不動倉も焼けています。不動倉というのは本来備蓄用の米倉ですが、その米は国司などが奪取したのか、郡司が取ったのかはわかりませんが、その隠蔽工作をしたのかもしれません。

この時期、あちらこちらで庫が鳴動しています。あんまり良い兆候を示すものではありません。その倉が鳴るにあたって、東アジアの動向をみておきたいと思います。九世紀前半は朝鮮半島では張保皐が活躍する時期でも

あります。張保皐は最終的には反乱を起こして殺されて乱は収束しますが、張保皐は青海鎮に陣取って、貿易あるいは奴隷の売買を阻止するために青海鎮大使になります。そこは韓国全羅南道の島で莞島と言います。

この張保皐は中国の山東半島に赤山法華院と言って、日本の慈覚大師円仁も世話になる寺を創った人でもあります。いわゆる中国から東シナ海一体の新羅人ネットワークを作って貿易を積極的にして、日本との外交もしようとしました。しかし日本は、「人臣に境外の交わりなし」、いわゆる臣下とは外交関係を持たないと言って拒否します。まして張保皐は反乱を起こして殺されてしまいますから、新羅への恐怖感がつのります。新羅は「常に奸心を懐き、苞茅を貢ぜず」と、いつも商賈に事寄せて日本の消息を窺っているという被害妄想的な対外意識が出てきます。いわゆる新羅に対しての排外的な態度を示すようになるのです。それは、新羅に対する脅威の裏返しだと思います。

新羅に対する脅威は、色々な形で現実のものになります。少し後になりますが、八六九年には、豊前国の年貢を運んできた船を新羅の海賊が襲って略奪をするという事件が起きます。新羅の海賊が博多津に来襲するのですが、そうしますと日本側は、「国威を損辱すること、之を往古に求むるに、未だ前聞有らず」と、今まで聞いたこともないような恥ずかしいことである。「後来に残すに、当に面目無かるべし」と、非常に憤りをもって対応します。実はこうした新羅の動向が、応天門の変、伴善男が応天門に火を付けたという『伴大納言絵巻』でご存知かと思いますが、この事件も実は「隣国の兵、来たりて窺う」ことと関係しているのだと陰陽寮が占います。

同じことがあちこちで起こります。若狭国では、「印・公文を納める庫幷びに兵庫鳴る」と言っています。そ

れも「遠国の人当に来投有るべし」と、遠い国の人がやって来るかもしれないということと関連づけます。また「新羅の賊兵、常に間隙を窺う災変」という占いが出ます。新羅が襲ってくるかもしれないという恐怖感が常にあり、伯耆　出雲、石見、隠岐、長門諸国は新羅に近いので、常に警備をしていなければいけないというわけです。もうひとつは、「賊心を調伏」することを祈って経典を読むのです。この場合は最勝王経ですが、転読をして御敵調伏をしようというのです。どこか神がかってくるわけですが、実際に色々なことが起こります。たとえば肥前国基肄郡の擬大領の山春永が、新羅人と結んで対馬を奪取しようとします。また兵弩の器、機械を作る術を新羅に行って習った人が、対馬を取ろうとしていると言います。また隠岐国の浪人ですが、新羅人とともに謀反を企てたともあります。これは誣告で、あることないこと言ったということです。さらには「新羅国王と通じて国家を害せんと欲す」というように、新羅に対する不信感がますます強くなります。

そして大宰府から大鳥が兵庫の上に集まっていると報告があります。鳥が集まったことを占うと、「隣国の兵あらん」と新羅のせいにします。しまいには、「我々は神国だから戦わなくても勝てる」とまで言います。「然れども我が日本朝は所謂神明の国なり」、だから「何の兵寇近づき来るべし」と、新羅が攻めて来られるわけはないというのです。「神国思想」というのは、この頃から出てくるということになります。その後、遣唐使に任命された菅原道真が中国唐へ行くのを止めますが、新羅の海賊が横行しているということを、止める理由の一つにあげています。確かに八九四年に新羅の賊が襲来したという報告があります。当時、新羅では非常な不作で、新羅人たちが日本列島を襲うことは十分考えられるのです。

こうした時期が鞠智城の四期、五期にあたるものと思います。礎石建物が大型化してきますが、段々衰微してくる状況にあると思います。池ノ尾のあたりが廃絶になるというのもこの時期だろうと思います。しかしここで考えておきたいのは、まったくなくなったわけではなく、いくつかの大型建物や倉庫群などあるので、この地域は菊池郡の郡家、郡の役所の倉庫群として利用された可能性もあるかもしれないと思います。そうした倉庫群の兵庫が鳴るということは、鞠智城というのが元々対外的な軍事拠点であったので、そうした対外的緊張に備えるようにと警鐘を鳴らしているのかもしれません。兵庫が鳴っている状況は、日本中のあちこちで起こっています。先ほども述べましたが、八六六年に若狭国では、遠国の人、あるいは隣兵が様子を窺うというようなことで、朝鮮半島、つまり新羅に対する恐怖心が続いていることがよくわかります。こうしたことが度重なり新羅に対する脅威の現れとして「兵庫が鳴る」ということになっていくのではないかと思います。

おわりに

最後にまとめます。鞠智城がどういう事情で築造されたかと言うと、やはり契機は百済救援の失敗以降の国内防衛体制の充実と思われます。そして、なぜこういう場所に造られたかというと、水城、大野城、基肄城の後詰め、あるいは有明海の侵入ルートの遮断というのが当初の目的だろうと思います。誰が築造したかというのはわかりませんが、おそらく国家が監督したことは間違いないだろうと思います。しかも朝鮮系の渡来人が関与したものと考えられます。

そしてもう一つ大事なことは、考古学的な成果が段々と集積されてきていますので、その五期の変遷と対応したような東北アジアの動向、それから隼人対策などの国内の事情、日本の対外意識、そうしたものを総合的に考えて鞠智城を見直してみると、また新たな地平が見えてくるのではないかというように思われます。

ご清聴ありがとうございました。

講演二　古代山城のフォーメイションと鞠智城

講演者紹介

出宮　徳尚（でみや　とくひさ）

明治大学文学部史学地理学科卒業。

岡山市教育委員会文化財専門監などを歴任。

現在、就実大学人文科学部非常勤講師。岡山城天守閣展示物取扱責任者、古代吉備国を語る会、会長なども兼務。

専門は、日本考古学。

・講演二「古代山城のフォーメイションと鞠智城」

出宮 徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）

はじめに

ただいまご紹介に預かりました出宮と申します。私は就職から定年まで岡山市教育委員会で文化財行政を担当しておりましたので、遺跡の見方や考え方にどうしても行政というものがついて回ります。鞠智城もそういう行政の立場、行政的に見るとやはりどうなのかということをお話ししたいと思います。

一、日本古代山城の祖型たる高句麗山城

私は、古代山城の祖形になるものはやはり高句麗の山城と思っていますので、はじめに高句麗の山城をご紹介させて頂きます。

高句麗の山城は何かと言うと、基本的には逃げ込みの城です。形態にはいくつかの類型分類されていますが、要は先進的な中華帝国の支配に対して、地元の地域勢力がどう抵抗するかというのがコンセプトとして底流にあるという観点を持っています。ですから類型は別にして、基本的には中華帝国に押し込められた時に逃げ込むのが山城であるという、地元抵抗勢力の拠点という見方をしています。

これ（映像。以下同様の表記）が高句麗の第二番目の都と言われている中国吉林省の集安（国内城）の背後にある丸都山城の様子です。ここからずっと山を巡って城壁が築かれています。これが城壁の谷川に築かれている水門です。本来ここに城門があるのだと思いますが、遺構がはっきりしません。ここに水門がきちんとあるのがお判かり頂けるかと思います。このように深い谷間に築かれているということになります。これは簸箕型、つまり日本で言う簸箕の形をした谷間ということになります。ただ、この城壁自身が本当に高句麗時代のものであるかどうかというのは判りませんが、日本で言う重箱積みの石積みになっています。城壁の天場には、この様に通称「女墻」と呼ぶ遮蔽装置（造作物）がきちんと造り上げられています。この様に、近世の日本の城郭で言えば石垣の天場に設けてある土塀と同じ様な、防御に適した造り方になっているというのがお判り頂けるかと思います。それとは別に、これは国内城という王宮があったところの城壁です。これも同じように、いわゆる重箱積みで、石の積み方とすれば脆弱な工法といえます。中国の城には、敵方というのか、攻めて来る城外に向けて突出した、通称「馬面」と呼ばれているものがあります。この馬面が、国内城では整備をされています。馬面というのは本来、城壁に登ってくる敵兵を左右や背後から撃ち落とすという機能があるのですが、ここの場合はひとつだけなので、それがどの程度理解されて造られていたかどうか判りませんが、こういう馬面を造っています。

写真 12　出宮徳尚氏

最初の王都とされている桓仁のところ（中国遼寧省）にある五女山城ですが、これは

まさに屋嶋と非常によく似た地形の山です。この山城全域に城壁があるのではなくて、要所に城壁を築いています。これは今日の中国の遼寧省の研究者による形態分類では、山頂型になります。日本では頂部鉢巻き型と一般的に言われている種類です。これも前に示した山城と同じ様な石垣を築いていますが、この遺構の現況では、女墻を設置するのは如何がなものかという疑問を持っています。これは屋嶋城などでも言えることですが、天場より少し山腹に下りたところに防御線を設けています。つまり平坦部の端ではなくて、少し山腹に下りたところへ設けるという共通性を持っています。これも鳳凰城という、丹東から瀋陽に抜ける谷間に位置する山城で、型式で言うと築断為城型になります。谷渡りのところに本来この様な石塁を築いていて、右の山と左の山の間の谷間に城壁を設けて山間に城を造っています。この様な形態が築断為城型という城の分類になります。

次に、呉姑山城ですが、そんなに高い山でなく、緩やかな山地に築かれています。下のほうは遺構で、上のほうの石の新しくなっている箇所がみな修築をしている状態になります。ただ高句麗の山城の石垣の全般が、同じような重箱積みになっていますので、本当にこれが今問題にしている時期のものかどうかというのは、少し懐疑的な要素があります。

石台子山城は唐の高句麗制圧の時に落城していますが、馬面が定間隔できちんと造られています。この尺度から見ると五〇メートル間隔ぐらいでしょうか。これは弩ではなくて、やはり弓での対応であろうと思います。弩の有効射程は一〇〇～二〇〇メートルと言われていますから、間隔が短いということは弩ではなくてまだ弓であろうという見方をしています。これがその石台子山城の北門ですが、ここにきちんと馬面が設けてあります。構

築の様相が私には少し判らないのですが、重箱積みの上に乱石積みの石塁を設けています。これが当時のものか後のものかということを把握していませんが、門のここに門礎が設けてあります。焼けた門建物の木材が出土しています。日本の門に比べて、防衛に適するように狭い門を造っています。

二、律令体制下の古代山城の倣傚たる唐代前期の山城

次に、京口城です。今の南京の東方の鎮江というところにある城ですが、中国の南北朝時代の山城です。その土塁の城壁ラインは、もう開発が進んでいて、なかなかその形状を観察できないのが実態ですけれど、この時代になるとやはり中国の中心地にも、山城が出現してきます。

次に、石包城ですが、敦煌の南東六〇キロほどのところにある山城です。海抜は二〇〇〇メートルクラスの高地ですが、盆地内の丘の上に平らな城が築かれています。城門です。唐の時代は版築の城壁が多いのですが、この城は名前が石包城と呼ばれるだけあって、城壁が石積みで築かれています。おそらく良い粘土質の土が近隣で採取できなかったのだと思います。この画像がポイントです。中国の城は平地の都城ですから、都城の周りには日本城郭の外堀にあたる付帯防御施設を巡らせていますが、この城も丘の上にありながら、護城河という堀を巡らせています。平地のどこの城壁のすぐ外にも、こういう山の上であってもきちんと堀を設けています。つまり城造りのマニュアル通りに造っているのです。たとえ山の上にあっても、城造りは城壁と堀とセットで造るということをきちんと行っています。

次に、敦煌から五〇キロぐらい東に行ったところにある鎖陽城ですが、この城は唐代初期の激戦地です。これが馬面ですが、馬面が等間隔でずっと並んでいます。この間隔の距離が、両方から弩てばちょうど射程の中に入るという配置になっています。さらに、日本で言う版築という造成土層がよく見えています。こういう本格的な土木構築の城壁造りを行っているが、中国の築城のあり方になります。

この遺構そのものは明清時代なので　類例とするのは如何がかとは思いますが、これは松藩古城という、有名な九寨溝の近くの城です。これは吐蕃（とっぱ）、つまり唐帝国がチベットの周辺民族との交渉の窓口になるというのか、交易の場所になるところに造っている城で、今の城郭遺構は先程も言いましたように明清時代ですけれども、記録上では唐時代に出現した城になります。ですから、明清時代に唐の城跡を踏襲したのかどうかという問題はありますが、南門から西門まで山上にずっと城壁を巡らせています。山側の城壁の外側に溝状の凹みが伴っていて、これには護城河の名残と判断できます。あるいは、唐の時代の遺構かも知れません。このように、山上であってもいわゆるマニュアル通りの城造りをしています。

次に、洛陽の合壁宮ですが、岡山市と洛陽市は都市縁組をしており、考古学の交流を行っていますので、洛陽に行った時に見て来ました。洛陽は本来（唐時代）が副都ですから山城の様なものがないのですが、洛陽の文物工作隊の方が山城に類似する遺跡を探して、連れて行ってくれました。両脇にあるのが門闕になります。こちらの手前の方が正門になり、奥に正殿があります。その奥に烽台（のろしだい）＝烽火台が設けてあります。この場所は、洛陽城から一七キロの距離にあり、これは唐の軍防令に規定する烽火台設置間隔の三〇里のキロ数に当てはまりますの

で、洛陽では離宮にしていますが、離宮というよりも多分に軍事施設、つまり烽火台を伴う山城の一種ではないかというのが私の個人的な評価です。ここが烽台にあたり、こちら側に三箇所の段築を築いています。ですから、正殿、前殿、それから門闕という、いわゆる役所的な建物のセット関係になっているというのが中国都城の近隣における山城の在り様になります。

三、西日本の古代山城

高句麗の山城というのは、基本的には自国よりも組織や兵力や兵器も進んでいる中華帝国の侵入に対しての退避型、つまり逃げ込みながら抵抗する場となります。この図は、鴨緑江（おうりょくこう）より北側、今日の中国遼寧省と吉林省の山城の分布になります。もちろんこの他に渤海時代や後の金時代の山城もありますが、除外しています。ちなみに言いますと、この九九箇所の山城のうち、大型のものが一七箇所、中型が四〇箇所、小型が三五箇所という分類になります。つまり国家級のものが少なくて、地域社会の防衛拠点が多いということになります。日本の江戸時代の概念をここで持ち出すのがいいかどうか判りませんが、江戸時代の軍学者が戦国時代の城を評価するのに、城堅固の城、所堅固の城、国堅固の城という分類を行っています。その分類を当てはめると、やはり高句麗の山城は、地域社会を自分たちで守るというコンセプトで城堅固の城と所堅固の城が圧倒的に多くて、国家級の国堅固の城がごく限られた数になります。

ということは、制度的なフォーメイションはないにせよ、それぞれが中華帝国の侵入に対して兵力を分散展開

して迎撃戦を行い、結果として撃退するという戦略性がそこに秘められているという理解をしています。こういう山城の本質が、日本にどういう形で導入されたかということが本日私に与えられたひとつの課題です。今更私が申し上げることではありませんが、古代の山城は、神籠石系山城、これはもう呼び名をやめようという提唱も出ていますけれど、学史的に意味がありますからそのまま使います。神籠石系山城、つまり記録に現れない山城と、それから朝鮮式山城、これは白村江の惨敗の後に急遽設けた山城、また修築、廃城の史料（記録）の残っている城（山城？）もあります。

日本の山城は、記録上から見ていくと、少なくとも五期ぐらいの築城のファクターがあったのではないかという見方をしています。そのうちの第三期のファクターに基づいて出てくるのが、いわゆる天智紀記載の山城ということで、その前後に二期ずつぐらいの築城、あるいは城を整備する要因があったのではないかという見方をしています。ですから第一期、第二期に造られた城について、これは記録に残っていませんから、当然神籠石系の山城になります。

四、天智紀の山城（第三期）

古代山城の分布は、いわゆる歴史環境という様相から見ると、やはりそれぞれの地方地域の要点に伴って造られているということが言えます。これら山城の城壁のアップダウンの様相については、特に北九州の神籠石系山城を見ると、雷山を除くとほぼ同じパターンで城壁が巡らされていることが判ります。ということは、自然発生

的に出現したとか、朝鮮半島の見様見真似で築城されたのではなくて、築城者の意図をきちんと反映して造られているということになります。そうすると、日本の古代山城は何の目的かということになります。

これはもう私は三〇年前から提唱をしており、ここの数年ご理解が頂けるようになりましたが、嶮山城と緩山城の機能的大別観を提唱しています。基本的には嶮山城は、中世の山城と同じように山岳の嶮しさを利用して用兵の倶としての効率を高める城で、一般的には難攻不落型になります。緩山城は、神籠石系山城の多くが造られていている里山の、集落背後の緩やかな山という意味合に由来させています。要するに嶮しい山城は専守防衛、つまり逃げ込み用、それに対して天然の嶮を欠く緩山城は生活空間との連携、つまり前進基地用となります。一般的な用語では、ディフェンスとオフェンスとの使い分けがされているのではないかと思っています。そういう観点で瀬戸内海沿岸地方の山城を見ると、朝鮮半島から博多へやって来て、博多から瀬戸内海を通るという当時のシーレーンを防衛するというのか、シーレーンを確保するためにきちんと配置されているといえます。その多くは、一部には嶮山城に見込めるものもありますが、むしろ緩山城の進出用前進基地型、つまり中央政府、大和朝廷が大陸と交流するためのシーレーン沿いに設置していることになります。

それに対して、天智紀の山城は逆を向いているのが、その城構えの在り方に見えて来ます。それと、九州の方々からなかなか的確な回答を頂いていないことがあります。たとえば吉備の国ですと、備前、備中、備後と分国されています。豊の国も豊前、豊後に分国されています。それから肥の国も肥前、肥後に分割されています。同じように筑紫国も筑前と筑後に分割されていますが、筑後の国がなぜ肥の国を分断しているかということについて、

私は疑問を持っています。有明湾沿岸であれば、本来は肥前と肥中と肥後になるはずですけれど、肥中となるべき地域がなぜか筑後となっています。ということは、どうも肥の国の分断が意図的に行われており、そこに軍事的なやはり制圧というのか、進出型の城をきちんと整備して地域社会の従来的な権益、伝統、為政を分断する軍事的な施策があったのではないかという観点を持っています。

五、律令体制の整備と山城施策

本日の私の命題であります、鞠智城の築城目的と運用の経緯ですが、鞠智城がいつ築城されたのかが、やっぱり判然としていないのが辛いところです。筑紫大宰府は、遠の朝廷（みかど）とありますが、この遠の朝廷が『日本書紀』の中に一度だけ中国式呼称の「筑紫都督府」と記されています。筑紫大宰府ではなくて、筑紫都督府となっています。百済が滅ぼされた後に、百済に置かれるのは熊津（ゆうしん）都督府ですので、ひょっとすると、北九州は唐に占領されたかそれに近い状態に置かれていたのではないかと、かつて関西の田辺昭三先生が言われた観点です。少なくとも博多一帯は、唐の将軍によって占領された実績があるということから、「筑紫都督府」という言葉が『日本書紀』からあえて消せなかったのではないかと思います。つまり、『日本書紀』を唐も見る状況、遣唐使が持参したのか、唐からやって来た使節達が見たかのかどうか判りわかりませんが、今で言う情報開示がされている文書ですから、唐が見聞きできる状況にあったことになります。あえて「筑紫都督府」を「筑紫大宰府」と日本語に直すことができなかったのだと思います。

ということは、やはり大宰府の性格を示していて、言うなれば、唐の占領の前衛基地になりうる重要な場所であるという要件を持っていることになります。そうすると、有明湾の北部を抑え、その次に抑えるところはどこかというと、当然に鞠智城になります。肥後平野への出口、そういう戦略的要衝を筑紫大宰府の後方支援基地として抑えたという観点を導き出せます。

要は、何が言いたいかと言うと、鞠智城の一番高いところ、これは長者原ですが、当時の管理施設があったのではないかという場所です。それに対して平野側の南側の城壁（土塁）位置が如何に低いかということは、この管理施設が城外から丸見えになっているということになります。というよりは城外へ見せて、視覚効果をもたらしていると評価できます。つまり、これは行政庁の役目を持たせて、非常に目立たせているということになります。これは中世の築城記などによると、城の中は見通せないようにするのが城郭の施設整備における戦術的な鉄則ですので、鞠智城がわざわざ管理施設を城外から見えるようにしているのは、純用兵面からいえば適正を欠くことになります。ということから、やはり戦争本意の城ではなくて、行政庁に重きを置いた城ではないかという仮説を持っています。このパターンは実は鞠智城がひとつの習作になって、次に発展継承されて行くのが、多賀城となります。そういう前衛基地、軍政を敷く前衛基地としての機能、要は大和政権が周辺を軍事制圧という、軍政を敷くのに使われたとみられます。言葉を変えれば、中国の城造りをどうもデフォルメして導入したのではないかという見方をしています。

最後になりましたが、怡土城について話をします。

怡土城の前面は城壁が平地に下りてきています。これは神籠石系の山城を含めて他の山城の縄張り（占地形態）と異なっています。つまり城地が、平地を取り込んで背後の山との一体構成になっています。松藩古城とほぼ同じ造りになっていると見なせます。それともうひとつは、城壁の各拠点に、馬面ではありませんが中国では敵楼と呼んでいる、近世城郭の感覚で言えば隅櫓になる建物をきちんと整備しています。つまり城壁（土塁）だけで城地を囲んでいるのではなくて、城壁の上に防御する施設をちゃんと設けているのです。ですから怡土城は中国の唐式の城の造り方をしているということになります。特に今よく判っているのは、このポイント、ポイントにきちんと礎石建物が建てられているということで、まさに敵楼の設置を物語っており、この城壁（土塁）の上面にも設けていたと考えられます。こういうようにまさに中国式、唐式の築城を導入していると評価できます。

これは余談ですが、神籠石系山城と朝鮮式山城の並存するのが讃岐国です。六六三年の後に屋嶋城が築かれますので、それと同時に連携して従来の神籠石山城（城山）の、今でいう近代改装が行われたとの個人的な見解でいます。この山城だけは古代山城の中でも本格的な複郭、内郭外郭を城壁でちゃんと区画する例外的な縄張りの山城ですが、複郭が改装の結果を反映していると見立てています。

今日の結論から言うとやはり、鞠智城は結果として、大宰府つまり筑紫都督府をセンターとして、両脇に配されている一方（南側）の軍事施設という見方が良いのではないかと思っています。造った時には確かに日本防衛であっても、その後の律令政府の体制になって行くと、むしろ唐の施策を導入しながら、当時の時点において日本の近代化が図られる中で進められた軍政の場所であるという観点を持っています。

それともうひとつ、日本の都城になぜ城壁がないかということの裏返りではないかと、私は思います。ご存知のように大宰府も城壁がありません。それから藤原京、奈良の都（平城京）も城壁がありません。平安京もありません。つまり、本来であれば負けて、唐が攻めてくるという緊急事態に王都防衛の軍事施設を造らなかったということに、西日本の山城の本来の意味があるように、私は個人的に考えています。つまり唐に対して正面切って歯向うことをしない意思表示の裏返り（反対現象）で、ああいう城が残っているのではないかとの、これはあくまで主観的な観点ですが持っています。

おわりに

以上、高句麗の山城と鞠智城の古代山城のフォーメイションからの価値・評価は、筑紫都督府との関連性で歴史的には平安時代中頃までちゃんと軍政的な存在意義があって、修築あるいは整備を施されて、運用されたのではないかとの問題提起をして、私の報告を終わらせて頂きます。

ご清聴どうもありがとうございました。

講演三　韓国古代城郭からみた鞠智城

講演者紹介

向井　一雄（むかい　かずお）

関西大学経済学部卒業後。

一九九一年から、古代山城研究会を組織、同会代表。

専門は、日本考古学。

・講演三「韓国古代城郭からみた鞠智城」

向井一雄（古代山城研究会代表）

はじめに

古代山城研究会の向井です。よろしくお願いします。

私は鴨緑江（オウリョッコウ）から南の、韓国の古代のお城についてお話しします。最近この二〇年間で非常に発掘調査が進んでおり、もしかすると日本の古代山城よりも韓国の古代山城のほうがよくわかってきているかもしれません。そういう新しい最新の成果を皆さんにご紹介しながら鞠智城との関係を考えてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

一、韓国における城郭調査の進展

韓国と日本の山城の比較

まず、どういう地形にお城を造るかということで、形式が色々分類されているのですが、これは韓国で一番用いられている分類です。まずはじめは、テメ式と言いまして、韓国語で鉢巻などという意味です。山頂式や鉢巻式というように日本語では訳しています。山頂のところにくるりと取り巻いているのがわかるかと思います。次

が、包谷式と言いまして、比較的広い谷を囲い込んで造っています。それから最後に、連峰式と言いまして、日本で言うと大野城などがそれにあたりますが、いくつもの峰をつなげて造っています。包谷式の大きなものと考えてください。

実際の参考例ですが、これはテメ式の典型的な例で、百済の最後の都の扶余にあります甑山城というところですが、山頂のところに石垣がぐるりと、崩れた石垣ですが取り巻いているのがわかると思います。それからこれは北朝鮮にあります黄龍山城と言いまして、包谷式山城の典型例です。この城壁は高さが五メートル以上ありますが、こういうのが谷と山を取り巻いています。

写真13　向井一雄氏

そして日本と韓国の山城との比較ですが、一番大きな違いは大きさが全然違うということです。韓国の特に百済地域の山城ですが、比較的大きいものでも、周囲一キロぐらいしかありません。それにひきかえ、日本の大野城は周囲六・三キロ、それから日本の鹿毛馬城ですが、こちらはだいたい二キロぐらいあります。ですから日本の古代山城のほうが全般的に大きいということをまず認識してください。

新羅の山城

韓国のお城ですが、発掘調査が進んで参りますと、ほとんどが六世紀代に新羅が造った城が多いということがわかってきました。伝承では、四世紀や五世紀からこの城があ

ったと言われているところが多いのですが、発掘調査をしてみると、実は六世紀代に新羅が朝鮮半島を統一していくその過程で造られていました。

韓国の慶州ですが、ここが新羅の元々の国、斯蘆(シロ)国です。ここが新羅の原領域になります。そこから釜山の西に金海(キメ)、『魏志倭人伝』だと「狗邪韓国」という名前で出てくる金官伽耶国を五三二年に併合し、その北にありますのが大伽耶ですが、今、高霊(コリョン)という町になっています。五六二年に新羅はここを滅ぼして伽耶諸国を完全に併合します。七世紀頃の新羅の領域になりますが、高句麗と百済が争っている間を割って、今のソウル、漢江(ハンガン)の流域を完全に新羅が抑えてしまいます。これが、新羅が三国を統一する原動力となります。

次に、新羅の三年山城です。五世紀の終わり頃（四七〇年）に造られたと言われています。一キロぐらいの小さな山城なのですが、このような高さ一〇メートルを超えるような、素晴らしい城壁があります。そしてこれは近くの忠州山城の石積みの断面ですが、よく見ていただくとわかりますように、一層、一層、石を井桁に組んでいます。こういう積み方すると崩れません。城壁が崩れると結局内部に侵入されてしまいます。古代の中国軍はローマ軍と同じように、破城槌や攻城塔など、城壁を打ち破る兵器をいっぱい持っていますので、城壁を堅固に造らなければならないということで、こういう城壁を造っているわけです。

それから次は、百済と新羅の城、どの城が百済でどの城が新羅なのかということで、ながらく韓国では論争がありました。今でも完全に決着はついていませんが、例えばこの鶏足山城、ここなどは新羅と百済が互いに取ったり取られたりするものですから、両方の土器が出てきます。どちらの山城なのかよくわからなかったのですが、

どうも最初は新羅が造った山城のようです。それから、姑母（コモ）山城は、三年山城と平面プランがよく似ており、やはり出てきた土器などから新羅の城だと考えられています。

新羅の山城の特徴として、基壇補築というのがながらく言われてきました。基壇補築というのは、城壁本体の裾の部分に斜めに補助の石垣をつけたものです。これは版築の城壁でも石垣の城壁でもそうですが、こういう城壁の一番もろい部分というのが城壁の裾の部分になります。雨が当たったり霜の影響を受けたりして、徐々に徐々に崩れていきます。そういうことを防ぐために補助的な城壁を造っているようです。基壇補築は百済の地域にはほとんど見られないので、新羅の特徴と言えそうです。

もうひとつ、新羅の山城の特徴として懸門がありますが、門の入り口が高いところにあって、普通使っている時は、はしごだとかそういうものをつけて使うという形式の門です。これは韓国の古代のお城には非常に多く、例えば温達（オンダル）山城、新羅の山城ですけれども、今でもはしごをつけないと上に上がれなくなっています。それから日本の屋嶋城ですが、日本で初めて懸門が確認されました。一・五メートルぐらいしか残っていませんが、二メートルぐらいはあったと思われます。同じような城門が大野城でも見つかりましたし、鬼ノ城もそうだったと考えられています。

高句麗の南進拠点の遺跡

それから、最近の成果としては、高句麗が百済の地域に占領、南進して、拠点をいくつか造っているというこ

とがわかってきました。風納土城というのは、ソウルのオリンピック公園のすぐ近くにありますが、北側の峨嵯（アチャ）山という山に高句麗の小さなお城がたくさん造られています。小さいものだと直径が五〇メートルぐらいしかありませんし、大きいものでも周囲が二〇〇メートルぐらいしかありません。ですから堡塁と呼んでいますが、こういう峨嵯山堡塁群の発見というのが最近の成果のひとつです。

例えば、峨嵯山の第四堡塁、ここが一番大きい城ですが、馬面（ばめん）があります。中国では馬面と言いますが、韓国では雉城（ちじょう）と呼びます馬面が三つぐらいついているところもあります。韓国では、峨嵯山堡塁群のほかに、北朝鮮との国境、臨津江（イムジンガン）沿いにも高句麗の堡塁群がたくさんあることがわかってきています。峨嵯山の北側に高句麗堡塁群があり、それから臨津江の漣川（レンセン）というところに無等里堡塁群、それから堡塁よりは少し大きいのですが、瓠蘆古壘（ホロゴル）があります。少し大きいだけでこれも周囲が一キロも二キロもある城ではありません。臨津江の川に沿って川を利用するような形で、三角形状の城が造られています。ちょうど二つの川の合流地点を利用して造っています。日本の中世の城でも、こういう場所に造っているところがたくさんあります。無等里の第二堡塁ですが、一番北のほうに雉城があります。こういった雉城ですが、尾根筋から攻めてくる敵だとか、城壁に取りつこうという敵兵に対して、横矢をかける機能を持っています。ここで興味深いのは、石垣作りになる前に木柵の城であったことです。最初、木柵の城であったのが石造りに変えられているというようなことがわかってきています。それから、ここでは馬具のほか鎧が出土したりしています。韓国では「札甲（チャルガプ）」といいますが、日本では桂甲といいます。小札（こざね）を連ねて作った鎧で、城の外から出てきました。それから蛇行状鉄器という、最近日本でも埴輪

だとか現物が古墳から出土したりしていますが、高句麗の壁画に書かれた馬冑をつけた馬のように、後ろに、棹飾りみたいなものがついたものが出土しています。

高句麗の南進拠点の中でも最大の遺跡が南城谷（ナムソンゴル）遺跡といい、五世紀の後半頃、忠清北道の清州の近くに造っています。ここでも、木柵が検出されており、それから尾根筋はに四本の空堀が掘られ遮断されています。こういった点は日本の城に少し似ていますが、山城のプランは包谷式です。最大と言っても規模は周囲二キロぐらいです。柵列が二重になっており、外側に雉城がたくさんついています。木柵に土塀のようなものをつけて、トンネル状の構造になっていたのではないかというように復元されています。

もうひとつの南進拠点ですが、今の南城谷よりも、もう少し南に行ったところに、月坪洞（ウォルピョンドン）という遺跡があります。月坪洞の遺跡自体は最初に木柵の城ができて、その後、石築と柵を組み合わせた城になって、最後に新羅によって、一番北に月坪洞山城という石築の城が造られています。

百済の城郭

韓国の山城、城郭のルーツとしては、高句麗もありますが、百済地域に関していうと、楽浪郡治があります。北朝鮮の首都・平壌、平壌に楽浪郡がありました。卑弥呼の使者も行ったところですが、六〇〇メートル四方の土城が楽浪郡地の跡です。二世紀から三世紀頃の楽浪郡時代は平地の城になります。中国の城が、半島のこうした地域に分布しています。ですから、そこから南側は韓族など、中国の植民地化されていない地域ということに

なりますが、中国式の城の影響を受けていました。

風納土城というのは、峨嵯山堡塁群の南にあった百済の都の城ですが、そこの土塁は、中心部に芯になる版築の土塁を造って、その両サイドに版築層を少しずつ増やしていくというような造り方をしています。これは独特な土塁の造り方なので、最近同じような造り方の土塁が、韓国で何箇所も見つかりはじめました。四世紀から五世紀代ぐらいの百済の領域では、こういった平地か、低い山に、土の城が作られていたことが徐々にわかってきています。

では、新羅のほうはどうかと言うと、まだ五世紀代は立派な山城は造られていません。慶州の月城、半月城とも言いますが、ちょっとした丘陵上に城壁を巡らせており、瞻星台が少し北のほうにあります。この時代は、この月城が王宮で、南山に二つの小さな山城というか丘城があって、攻撃を受けた時の避難用に使っていたようです。それから、日本の都と同様、新羅は統一新羅になってからも都の周囲に城壁を造っていません。

さて、先程、百済の城か新羅の城か、なかなかわからないというお話をしましたが、ようやく百済の土器しか出てこない、百済の瓦しか出てこないという山城が一つ見つかりました。栢嶺(ハクレイ)山城と言いますが、これは百済と新羅の国境沿いにたくさんある小さな城のひとつです。発掘してみると、百済時代の七世紀前半の遺物しか出てこないので、その後再利用されてないようです。周囲二〇〇メートルぐらいの規模で非常に小さい城ですが、門が二箇所、雉城が一箇所、それから木槨庫(もっかくこ)というおそらく貯水池だと思われますが、それが城の中心部に造られています。南門跡では、門の角のところが少し丸みを帯びています。また、先ほど木槨庫と言った貯水施設の上

には屋根をつけていたようです。木槨庫は、最近、韓国でたくさん見つかるようになっていますが、これは比較的小さいものになります。この城が見つかったことによって、今まで百済時代なのかそれとも統一新羅時代なのか、よくわからなかった城の年代を知る手がかりとなりました。

扶余の南にある聖興山城では、栢嶺山城と同様、門の城外側に出るところ、袖石垣のところが丸くなっています。それから両側の袖石垣の間は少し抜け落ちて壊れていますが、懸門に近い構造と考えられます。懸門に関しては、新羅に多いと言われてきましたが、百済地域でも聖興山城や、先程の栢嶺山城でも見つかっています。

そしてもう一つ、やはり扶余のすぐ近くですが、論山（ノンサン）というところに魯城山城城があります。それほど大きな城ではありませんが、長方形の比較的整った石を使っています。ここも城門の角のところが丸くなっています。聖興山城、栢嶺山城もそうですが、七世紀の前半頃の百済の城の石垣というのが、こういうものだということが少しわかってきました。

聖興山城に関しては、新城と古城というのがあり、新城の石垣と比べて、古城のほうは、少し雑な石垣です。この城は、加林（カリン）城という城名がわかっており、百済が扶余に遷都してくる前に、この加林城を造ったという記事があります。これは五〇一年のことで、六世紀の初め頃に古城のほうを造って、それから七世紀に入る頃、新城のほうを造っているということがわかってきました。同じように、蛇山（ササン）城では古城のほうが百済時代に造ったもので、新城のほうが新羅になってから造られたようです。それから扶余の南のほうに辺山半島（ピョンサン）と言って竹幕洞（チクバクドン）という、日本の沖ノ島とよく似た祭祀遺跡があるので有名な半島があります。その辺山半島の南側に苧浦（チョルポ）という港

がありますが、そこに古阜の旧邑城（キュウユウジョウ）という城があります。高麗から朝鮮王朝時代のものと思われていたのですが、発掘してみると、その下から百済時代の城が出てきました。その北門でここでも角が丸くなった石垣が見つかっています。まだ積極的に言っている方はいないですが、私はここが白村江の戦いの時の周留城の有力な候補地ではないかと思っています。標高は一〇〇メートルぐらいの山ですが、港に面するようなところに立地しており、百済時代の、古沙夫里（コサフリ）という地方行政機関、百済には五方制というのがあったのですが、地方統治の拠点だったところです。こういう城があるということで、今後注目されてくると思います。

伽耶の山城

さて、鞠智城との関連では、伽耶の咸安（ハマン）、『日本書紀』では「安羅国」といって、任那の復興会議で登場するところですが、そこに新羅が造った城山城があります。その城から、多量の木簡が出土しています。木簡だけで一冊の報告書ができるくらいの量になります。韓国では、最近木簡の発掘が進んでいて、仁川の桂陽山城からは論語の木簡なども出土しています。今後、日本も古代山城の城内で貯水池跡のような湿地帯みたいなところを発掘すると、貴重な文字資料等が出てくるのではないかと期待しています。

伽耶地域も城郭の実態がよくわかっていなかったのですが、最近、発掘が始まっています。これは釜山近くの金海、金官伽耶国のあったところですが、首露王（スロワン）という王様の王陵の南側に、鳳凰台という小高い丘があります。そこに市街地がどんどん広がってきたのですが、道路工事の時に発掘が行われ、A地点のところから、幅が二〇

メートルぐらいある城壁が見つかりました。両サイドを石垣で作って、中は版築しているという構造で、鳳凰台の周りを部分的に発掘していくと、ぐるりと囲んでいるということがわかってきました。伽耶の王宮は、日本で言うと平山城みたいなイメージのものが多羅国のあった陜川（ハプチョン）でも出てきていますので、ようやく一端がわかってきたかなという感じです。

これも金海ですが、良洞（ヤンドン）山城というところで、ここも伽耶の山城ではないか、ということで話題になったのですが、おもしろいことに、城門の角のところが丸くなっていて、基壇補築もあります。新羅の特徴と百済の特徴と両方持っているという、伽耶の山城ならではのもので、両方の勢力から築城技術を学んでいるのかもしれません。

次に、大伽耶の都、高霊の主山（チュ）城です。昨年の発掘調査によって大規模な石垣が出てきて、基壇補築があります。伽耶地域の研究者は、大伽耶が造ったのだと言われていますが、築城時期は六世紀頃だと思いますが、本当に大伽耶が造ったのかなと思っています。城壁の内部から小さない石積みが出ていることから、最初に小さな城を造ったのが大伽耶で、その後、新羅が入ってきて大規模に改築しているのではないかと想像しています。

列石について

それからもうひとつ、日本の神籠石と呼ばれる山城に列石がありますが、列石について、韓国では基壇石という言い方をします。基壇石の出現時期に関して、いろいろと議論があったのですが、最近ではかなり新しいだろ

うという結論が出つつあります。神衿城（シングム）、木川土城（モクチョン）、釜山の近くの華山里土城（ファサンリ）、會津土城（ヘシン）で列石がみられますが、時期的には九世紀ぐらいに造り始められるということがわかってきています。神衿城では、柱を立てたえぐれが見つかっていますが、この柱の間隔がたいへん重要で、扶蘇山城などでは、一・二～一・八メートルぐらいですが、統一新羅時代になると三メートルぐらいになり、それが高麗時代になると三・五メートルから四メートルと、だんだん柱の間隔が広がっていきます。日本の城の場合、一・六メートルから一・八メートルぐらいの幅の狭いものがあります。鞠智城、大野城などがそうですが、三メートルぐらいになっているタイプというのは、神籠石系の城に多くあります。もうひとつの特徴は、木川土城のように、列石が同じ向きではなく、階段式に上がっており、こちらのほうが新しいということがわかっています。木川土城のような階段式に上がっていくようなタイプは、日本にはありません。

また、城壁の内部に立っている柱の横に穴が空いているのは横木と言いまして、木と木の間を木でつないだような痕があります。また、外側に石垣を造って上に柱を間に立てているところもあります。列石の下が飛び出しているのが特徴ですが、大宰府の近くで見つかった阿志岐山城に類例があります。また、敷石があり、柱の下に礎石みたいなのがあるのも、日本とは違います。

もうひとつ、蛇山城ですが、列石の前に盛土があります。鞠智城の深迫門のところで、土塁の前に敷石があり、上にやはり盛土があります。鬼ノ城の場合、敷石を露出させて復元していますが、本当はこのような盛土があったのではないかなと私は考えています。中国の例ですが、「護城坡」と言って、本体の土塁の外側にそれを守る

土、盛土をするようになっています。

二、韓国古代城郭と鞠智城

韓国の古代城郭における最近の成果をもとに、三国時代から統一新羅時代、高麗時代と、韓国の城郭がどういうふうに変わっていくかということですが、最初は山頂式山城の小規模なものしかないのですが、それが統一新羅になる頃に大規模化していきます。そしてそれが一方では軍事的な、非常に嶮しい山岳に位置するようなものになります。もう一方は韓国では古邑城と言っていますが、行政の拠点的な城で、丘城みたいなものになります。山岳城のひとつ、春川（チュンチョン）の三岳山城ですが、冬のソナタのロケ地で有名な南怡島（ナミソム）の近くにあり、非常に高い山に大規模な城を二つ造っています。もうひとつは、華城（ファソン）です。一九世紀に築城された城郭都市で世界遺産になっていますが、邑城と山城のいいところを両方併せ持っています。

百済と新羅の山城の配置ですが、百済のほうは小さい城をたくさん造りますが、新羅のほうは比較的大きい城を点々と造っていきます。日本が西日本に築城した時、参考にしたのはおそらく高句麗だと思います。どこまで真似できたかわかりませんが、隋、唐の侵攻を何度も防ぎ止めていましたので、高句麗の防衛網を意識していたと思います。有明海からの侵攻ということを考えた場合、中国は、何度も山東半島から直接渡ってきて、平壌を落とそうとしましたので、十分有り得たのではないかなと私は思っています。

最後に、最近の事例について報告させていただきます。南漢山城では、統一新羅時代の離宮の跡を発掘したと

ころ、大きな建物が出てきました。桁行五三メートル、梁行一七・五メートルもあるのですが、一七・五メートルというのは、鞠智城の大きな建物の長い方のスパンですから、とても大きな建物であることがわかります。屋根に乗っている瓦もかなり大きく、周りの壁も、とても分厚いものです。それから貯水池ですが、姑母山城で、鞠智城にも似た水路に入っていく導水路みたいなものもあり、先程の木櫛庫の巨大なものが出ています。また、寧越の正陽山城という新羅の山城で、平たい板に穴が開いていて、その石がちょうど水門の石にはまるようになっています。機械式の上下に開閉する水門があったということがわかった珍しい例になります。それからこれは日本に関連がある遺物ですが、韓国の中部の望夷山城で、この城も新羅と百済が取り合っているところですが、日本式の短甲が出ています。

以上になります。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

【大阪会場】

写真14　パネルディスカッション大阪会場

コーディネーター
佐藤　信（さとう　まこと）
東京大学大学院人文社会系研究科教授。

パネラー
酒寄　雅志（さかより　まさし）
國學院大學栃木短期大学日本文化学科教授。

出宮　徳尚（でみや　とくひさ）
就実大学人文科学部非常勤講師。

向井　一雄（むかい　かずお）
古代山城研究会代表。

佐藤：本日、コーディネーターを務めさせていただきます東京大学の佐藤信です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、三人の先生方から大変広範な興味深いお話、鞠智城を素材にしていろいろ研究ができるということを改めて感じることのできる豊富なお話をうかがいました。これから先生方にもう少し鞠智城に切り込んだ話をしていただきたいと思っています。

今日は、最初の矢野さんの最新の発掘調査成果の話の後、酒寄さんからは、東アジアの歴史の動向を踏まえた形での、鞠智城の歴史的背景についてのお話がありました。出宮さんからは、今まで鞠智城を考える時には大野城・基肄城が百済から亡命してきた将軍の指導のもとで建てられたという『日本書紀』の記事をもとに、百済の山城との関係はずいぶん考えられてきたのですが、むしろ高句麗の城、あるいは唐の城との関係があるのではないか、というお話がございました。また、これは鞠智城とも関係する大宰府の評価について、都督府というのは、むしろ唐の側の出先機関が北九州に置かれていたのではという、驚くべきお話もあったわけです。それから向井さんからは、韓国における今日の山城の調査成果という広範なお話を、手短に話していただきましたが、あれだけ多くの城を全部ご覧になっていると思うと、すごいご研究をなさっているなと思いました。

写真15　佐藤信氏

私たちが鞠智城と比較しようとしてきた百済の城の実像が、韓国における古代山城の調査研究の中で、元々の百済の城の姿が、今ひとつまだはっきりしないというか、よう

やく明らかになってきた段階だということだと思います。ですから、鞠智城を東アジアの城と比較するという時の、いろいろな新しい視点が、本日出てきたと思います。そういったお話をどうまとめるか大変だと思いますが、今日は、三つの柱に沿って、三人の先生方にお話をしていただきたいと思っています。

一番目の柱は、東アジアと鞠智城というテーマで、高句麗・百済・新羅それから唐の古代城郭との比較の中でどう見るかです。あるいはその高句麗・百済・新羅の城もそれぞれどういう特徴があるかという点について、今日お話があったわけです。最終的に新羅が半島を統一した後、高句麗・百済の城には様々な手が加わっているというお話もありまして、それらをどう見るかということがあると思います。また、酒寄さんのお話のような広範な東アジアの歴史動向の中でどう捉えるかということもあります。まず、東アジアと鞠智城というテーマで最初にお話をしていただきたい。

それから二番目には、山城の技術です。今日の副題は「古代山城の成立と鞠智城、築城技術の源流」ということでして、鞠智城の築城技術を、今日のお話にあったような韓国・中国における考古学的な知見の中で、版築の仕方あるいは城壁の石の積み方だとか、その城壁の外側にそれをプロテクトするためのいろいろな施設などから見る、馬面や出城のようなものがあるのか。あるいはその馬面を造る時に、弓矢の及ぶ範囲は短いが、弩（ど）という最新兵器を使うともう少し遠くまで矢が飛ぶので、馬面と馬面の距離が広いというお話が出宮さんのお話の中にありました。そういった鞠智城の築城技術と朝鮮半島、中国の技術との関係は如何か。あるいは鞠智城にも今日のお話にあった貯木場、あるいは八角形の建物がありますので、そういったものの源流はどうなのかなというお話を二番目にしていただきます。築城技術の問題です。

三番目には、鞠智城の成立の背景ということです。これまでのシンポジウムでも話題になってきたのですが、今日の新しいお話を踏まえた上で、改めて鞠智城の性格について、対東アジアの関係なのか、対隼人の関係なのか、律令国家との関係なのか。あるいは今日のお話では、唐との関係、フォーメイションがあるのではないか、というお話もありましたので、そういったことを少し話し合っていただきたいと思います。

最初に東アジアと鞠智城ということです。続きの出宮さん、向井さんのご報告も聞かれた上で、酒寄さんもう一度お話をしていただけませんでしょうか。

酒寄：今、出宮さんの中国の影響、それから最後に向井さんの韓国の例を聞きましたが、私はロシアの渤海とか金の城をかなり見ていますけれども、渤海は雉城、いわゆる馬面を持たないのです。ですから、やはり東アジア全体、あるいは東北アジアまで含めて見ていくと、いろいろな造り方が、それぞれの民族によって変わってくるのだろうなと思っています。金になると城内にたくさんの住居址を持っていて、そして中にオンドル、いわゆる管と言っていますけれども、オンドル住居などもあったりして、かなり大型な山城が出来あがっていきます。そういう、今それぞれの例が挙がりましたが、アジアと言っても非常にいろいろなパターンがある中で城が造られています。

日本の場合には、一般的に朝鮮式山城というふうに言われてきましたけれども、今日のお話を伺っていると、それももう少しきちんと分類していかなければいけないということと、もうひとつ、私が先月にこの鞠智城を伺った時に最初に思ったことは、案外低いな。低い　ところに城があるなというイメージを

持ちました。そしてその次に感想として思ったのは東北の城柵によく似ているなという、それも秋田城や、先ほど出宮さんも多賀城の話をされましたけれども、そういう感じをすごく強く持ちました。そうすると、何か国際関係じゃないみたいに思うかもしれませんが、秋田城の場合はおそらく渤海などの東北地方における外交の窓口です。多賀城もまた少し違う性格があると思いますけれど、秋田城は特に日本海を渡ってくる渤海使が来ますので、そういう外交の場としてあったものと思います。そして実は東門の外側にトイレ遺構があります。木樋があって水洗トイレなのです。覆屋がついていて、個室になっているのですが、中から日本にはない、豚食をする回虫、寄生虫卵が出ています。豚食をする民族というのはあまり日本列島の中にはほとんどないだろうと思いますが、オホーツクかあるいは大陸かということになるだろうと考えられ、そうすると、そういう特別なトイレを作るというのは、外交的な役割を担った施設の賓客のようなものを接待する場所かなと考えられるわけです。

そうなると鞠智城をどういうふうに考えてみるか、もうひとつ大事なことはやはり、隼人、特に七世紀の末から八世紀の初頭というのは、隼人との関係が非常に深くなってきますから、そういう隼人たちの、服属した隼人たちが儀礼する空間みたいな場として大きな役割を担わせてくるのかなと思います。そういう時に八角形のああいう建物なども非常に驚くものですが、あれが先程出宮さんも言っておられましたが、下から見た時に、多分見えるのだろうと思います。大変驚かせるようなそういう空間、飛鳥などでも蝦夷がやってきた時の、蝦夷の饗宴する場所などもそうですが、そういう驚かせるような施設が、噴水施設なんかありますから、そういうことをちょっと深く考えたりしています。多面的な要素を持っている、もち

ろん最初は国際性豊かな、特に白村江以降の緊張関係の中でできた。そしてさらにそれが隼人とかというものと関係を深めていくとか、いろいろな要素を持ったお城が鞠智城かなということを、お二人の報告を聞きながら少し感じました。

佐藤：どうもありがとうございました。最後にお話された鞠智城の性格については、また後でも議論したいと思いますが、時代とともに国際的な面、あるいは国内的な面、軍事的な面、あるいは食料を蓄積する面など、いろいろな性格が表に出たり隠れたりすることがありうるかと思います。今、外交の場としての東北城柵との比較をされました。秋田城や鞠智城は外交の場でもあるのではないかというお話もあり、単に軍事的な施設だけではないというご指摘だったと思います。

さて、出宮さん、先程のご報告では、高句麗や唐の城との比較をしていただいたわけですが、その後の向井さんのお話も含めた上で、鞠智城を理解する時に、例えばどういう東アジアの城と比較していけばいいのかということ、それからお話にあった九州における唐の勢力が及んだ時点での築城の可能性ということ、そうした点についてもう少しお話していただけませんでしょうか。

出宮：はい。一点目は、その鞠智城ですが、近世の城郭、戦国の城郭から言うと、これは平山城（ひらやまじろ）ですよね。それに対して一番新しい怡土城というのは、これは平山城（ひらさんじょう）という立地の仕方がそうなっています。特に長者原の建物群というのは、まさにその役所的な建物であります。ですからこれは前にも少し言いましたが、ひょっとするとあの一帯に内郭があるのではないかと思います。つまり複郭式になっていて、外郭と内郭という二重になっているのではないかと思います。つまり都城のパターンですね。都城の場合は基本的に

は四角ですが、そこは山の形に規制されていますから、形はその正確でないにしても、構成上はそういう二段構成になっているのではないかというふうにみています。それから八角塔と言っていいかわかりませんが、高句麗では、古くは「点将台」という言い方をしています。城の中心部あるいは見晴らしのいいところに多くは方形の何段積みかの台が設けてあります。その「点将台」、最近は中国の先生方はこれを「瞭望台」と言っています。つまり、見晴らし台という城の内外、特に城下を見下ろす施設のような意味合いを含めています。ですから、あの八角の塔がいわゆる宗教的な意味合いの塔なのか、あるいは、そういう近世の望楼のような、少し意味が違うと思いますが、そういう領域を展望する施設、軍事、プラス民政的な要素を持った施設であるという可能性があります。他の八角形や九角形の建物すべてがそうだというわけではありませんが、鞠智城の場合はどうもそういう施設ではなかったかと思っています。

これはむしろ私のほうからの疑問ですが、なぜ瓦が少ないか。通例の場合、古代の寺院は平瓦、軒瓦と軒丸瓦がセットで出てきますが、あそこは軒平瓦が出ていません。それからもうひとつは、差し替え瓦が出てないという問題があるので、考古学的に言うと、「造ってはみたけれど」というようなところがあったのではないか。つまり造って以降廃城になるまで、メンテナンスを常にしながら、ずっと継続したのではなくて、土器の出土量にも示されるように、消長があったのではないかという見方をしています。先程言いましたように、筑紫大宰、実は吉備にも数年あるいは十数年で廃止になりますが大宰がいたところですが、その大宰がいたところというのはこれは朝廷の一部ですから、朝廷の中心施設である大宰府を中心にして、大宰府から言えば左翼、先程の怡土城は右翼というフォーメイションを持っています。

それともうひとつ、先程言い忘れましたが、日本の城は、これは「実戦配備でない」というのを言っていいと思います。向井さんのご紹介にあった百済の城は実戦配備になっていますが、それに対して日本の城は「造ってはみたけれど」というところがかなりあります。その結果として実戦に供されなかったということは、良いことだったと思いますが、その実戦配備の匂いというのか要素がない。と言いますのは、今日も矢野さんにお尋ねしたのですが、あれだけ発掘をして鞠智城から武器として出てきているのは矢尻一本だけというのを聞きまして、いよいよその感はしています。

余談ですが、戦国あるいは桃山の山城、先程言いました所堅固クラスの山城を掘りますと、必ず武器が出てきますし、鉛球が出てくるなど、実戦に供すものの遺物が出てきますが、やはり今のところ日本の古代山城からは実戦に供したものがほとんど出てきていません。やはりこの古代山城の意味合いを示しているものだろうと私は考えています。

佐藤：幸い実戦にはならなかったということではあると思いま

写真15　パネルディスカッション大阪会場

す。東北の城柵の場合だと、結構、伊治呰麻呂（これはりのあざまろ）の乱で多賀城が燃やされてしまうとか、元慶の乱で秋田城が燃やされるとか、実戦の歴史があります。西日本の古代山城の場合は、そうした実戦経験はないかなという気はいたします。そういう意味からの城の構造について、半島との比較みたいなことも必要かと思います。

朝鮮半島の場合は、切実な三国の争いの中で機能していたと思うのですが、今の出宮さんの話も踏まえて、向井さん。

今日出宮さんが言われた唐の城と比較も含めて、鞠智城を理解するために、どういう城と比較したらいいのかという点をお願いします。これまでだと、例えば八角形の建物を韓国のソウルの近くにある二聖山城の八角形の建物と比較したり、貯木場も二聖山城にあったりします。そういう比較が私の頭の中にあったのですが、どうも今日の話を伺っていると、それだけでは駄目で、もっと幅広く比較しなくてはいけないのかなと思ったのです。そういったところをお話していただけませんでしょうか。

向井：そうですね。鞠智城をどう考えるかと、これはたぶん古代山城を研究している人はみんな頭抱えていると思いますので。ただ前にもお話したことがありますが、鞠智城跡の城域を見ていただくと、外郭ラインというのがひとつ重要だと思います。北側にずっと山が取り囲んでいまして、ここに特に人工物は造られていないです。それから南側のほうに段丘があり、ぐっと傾斜のあるところが何段も続いていまして、こういったところを、越えていかないと鞠智城の城内に入り込めません。ですから低いとか高いとかって比高の問題がひとつありますが、そういう意味では鞠智城の場合、その他の北部九州の、先程、出宮先生

がお話になっていた神籠石系の城、これはもう平地に面していますので、こういうのとはだいぶ選地のあり方が違う感じはしています。

それともうひとつ。貯水池がはっきりとわかっているというのが鞠智城の特徴ですが、城には貯水池もしくは貯水関係の施設というのは必須です。遼東半島の隋、唐を破った高句麗の城砦群というのは、中にものすごく広い貯水池があります。実際そこからは瓦とか土器もたくさん出てきますので生活の場になっています。

もうひとつ、鞠智城であんまり武器が出ないというお話がありますが、実は先週私も古代山城研究会で、兵制とか軍制ですね。防人制や軍団制とか、そういうことを話しました。その中で東北の方との比較で、東北の城柵は近畿大学の鈴木さんによると、武装された官衙であると。実際、千人単位の兵士が駐屯しています。それに比べると大野城もそうですし、鞠智城もそうですけれど、大量の兵士がここで住んでいたような痕跡はまったくないですし、記録もありません。だからほとんど人がいない状態です。もちろん武器も出ないと思います。だからそういう意味では、その軍事的な西日本の山城で、役所的な東北の城柵というイメージで私たち捉えていますけれど、実際中身は結構真逆なのかもしれません。そんなところでいかがでしょうか。

佐藤：鞠智城の選んだ地形が、低くはあるけれども、大変防御性の高い土地であるというのはその通りと思います。逃げの城というお話がありました。大野城も基肄城も中に大量の壮大な倉庫群があって、その倉庫には稲の系列の収穫物が大量に貯積されているわけです。ですから攻めてきた時にはその山城の中に籠

って、高句麗の場合だと冬までもてば雪の季節がきて、唐の大軍は退いていくであろうということがあったと思います。そのために、大量の米倉を城中に築いていた。鞠智城ではそれが文献史料にも九世紀代までみえ、米倉が九世紀代に燃えたというお話があったりするわけです。また、その場合に私は米倉に米を運ぶ時は、大野城の山中の場合もあるわけですけれども、山の頂上に米を運ぶというのは相当大変なことだと思います。ただ、鞠智城の場合、九世紀にまで菊池郡の倉院という形で機能していると思われ、低い代わりに九世紀代までかなり機能しているのではないかという気がしています。

そうしたことを含めて、大野城と違う面があるのかなということが、話を伺っていて気になりました。あと武器の場合は、九世紀にやっぱり兵庫（ひょうこ）があるので、兵庫（つわものぐら）があったと思います。その中に鼓も納まっていて、それが倉庫の中に納まっているのに、自然に鳴ったというので大騒ぎしたということだと思います。そういう意味では武器庫はあったのですが、納められた武器というのは大事な国有財産で、その後施設の機能が終わる段階になっても、次に転用されていくと思います。だから残らない面があるのかなと思います。

鞠智城の機能を考える上では、米倉や兵庫の機能が、どう続いていくのかということが重要です。それから鞠智城の場合も、向井さんがおっしゃったように、どういった勢力でこれを守るのかということです。逃げの城でいざという時に、籠る場合があるかもしれませんし、東北の城柵の場合は鎮兵と言いまして、関東地方の兵士がやってきて常駐しているわけですが、西の場合は防人がどの範囲まで駐屯したかという問題があります。それから各国には軍団があるわけですけれども、軍団の兵士がどういう場所にいるか。

軍団というのは交代で軍事調練をするという場所ですので、大量の兵士がずっと軍団にいるということもないのかと思いますが、いまひとつ古代史でもわかっておりません。考古学でも多分軍団の遺跡というのは、全然わかってないと思うのです。そのあたりは、逆に鞠智城の様子がわかれば、いろいろな実態が見えてくるのかなという気がいたします。

そういう意味で言うと、例えば生活の遺跡ですね。東北の岩手県の盛岡市に志波城という、坂上田村麻呂が鎮守府を奥州市に置いた後で、最北の地に築いた城柵があります。そこでは城柵の中に兵士たちの竪穴住居がたくさん見つかっており、生活の痕跡もあります。鞠智城では兵舎として復元されている建物がありますが、もう少し、例えば食事を供給した厨（くりや）という台所施設の跡などを発掘すれば、様々な食材のゴミや食材に付いていた木簡が捨ててあったりすると思います。残念ながら、今のところ鞠智城で発掘調査されているところは、そういう場所でないところでありまして、貯木場の水分のあるところで木製品が残っていて、そこで木簡が一点見つかっているだけです。米の荷札が出土したということですが、米の荷札があったということは、私は必ず鞠智城内につめた大勢の役人たちに、給食が行われていたと思っています。そういう姿がもう少し見えてくるとありがたいと思いました。

次に、第二のテーマにいきましょう。古代山城の築城技術の源流ということで、山城の技術的な問題です。今日も石垣の城壁だとか、版築の城壁だとかのお話がありましたし、石垣の城壁の裾を頑丈にするための施設だとか、石垣の城壁を築く時に柱をどう築くかというお話もありました。また、懸門というような、少し高いところに門があって、はしごをかけないと上れないところにわざわざ門を造って、入りに

くくしているというお話もありました。私は鞠智城の城門でも、一番南の堀切門などは、壁があって、城門が直接表から見えないところにわざと築かれている門だと思っています。一方で鬼ノ城の山の頂上にある城門などは、低いところからでも見てくれというような、私は見せるための門ではないかと思っています。そのあたりの門の構造ですとか、城壁の構造とかでもう少し比較をしたいのですが。鞠智城と他の山城の比較、あるいは中国・朝鮮の城の馬面や、雉城のお話もありましたが、そういった構造の面から鞠智城を浮き彫りにできないかという点で、まず出宮さん、そういう方向でお話をしていただけませんでしょうか。

出宮：そうですね。もうひとつは、その城を造るいわゆる工人達、その地域の農民と言うのか、居住者を動員しただけでできるかどうかという問題があります。これは今日私のほうで話す時間がなかったのですが、やはりその基本的な土木工事の場合、これは中国で言う版図、日本では版築と訳していますけれど。古い方ならご存知のいわゆる千本搗（せんぼんづ）きですね。そんな技術をどういう形で賄えたか、ということになります。

これはやはり寺造りとの関係を見とかないといけません。寺造りというのは、生前にできたかどうかに問題があります。古代のその大土木というのは、中央では宮殿造りですが、地方の本格的な恒久的な建造物というのは、氏寺になるわけです。その氏寺の基壇基礎というのは、これはご存知のように版築造成ですから、しかもその上に瓦を乗せるという、従来の日本にない技術体系で行われているわけです。ですからその鞠智城を含めて古代山城の周辺環境として、やはりそういう土木技術の供給に準備できる、修練をしている地域であるかどうかということもひとつの問題点として、いわゆる歴史的環境として見る必要が

あるのではないかと思います。申し訳ありませんが、肥後の鞠智城の周辺での飛鳥寺院、もしくは白鳳の一期と呼ばれている寺院の有り様というのをつぶさに知りませんので、何とも申し上げようがありませんが、やはりそういう問題が一点あります。造る側の問題です。

それからもうひとつ、先程のちょっと補足ですが、「軍防令」という法律では、兵隊を養う備蓄で、これは一人の兵士の一ヶ月の食料が干し飯六〇穀というような規定になるわけです。ですから干し飯一ヶ月が六〇斗ですから、そういうものを備蓄するとした場合に、今見つかっている倉庫群がそういう兵士の食料庫であるのか、平たく言えば、税金を収納する施設であるのかというのは、おのずと見えてくるのではないかと思っています。全部計算したことがありませんが、少なくとも今遺跡として見つかって、遺構として見つかっている大野城であるとか基肄城の倉庫群というのが、兵士が賄える食糧以上のものを備えているというのが言えると思います。

佐藤：その城造りの技術としては、版築のような土木技術が必要で、そのためには地域にそういう人材がいたかどうかということですね。その際には七世紀代の半ばに遡るような古代寺院がこの近くに築造されていれば、そういう人たちもいたのではないかというお話ですが、矢野さん、この鞠智城周辺の飛鳥・白鳳時代の寺院のあり方というのはいかがでしょうか。すぐそばの十蓮寺はもう少し後の時代のような気がするのですが。ちょっと離れてあったような記憶があるのですが、よろしければ説明してください。

矢野：鞠智城周辺で、古代寺院として存在しているのが、佐藤先生のお話にありましたように十蓮寺がございます。ただ十蓮寺の瓦から考えますと、七世紀にさかのぼるというよりも、八世紀の終わり頃から九世

紀にかけての寺院ということになります。あと周辺で古い寺院になりますと、玉名に立願寺という古代寺院がありますが、それがもしかしたら七世紀の末近くに建立された可能性があります。鞠智城が築城された年代で、それよりも以前のお寺というのは今のところ確認されておりません。

佐藤：玉名の七世紀後半にさかのぼる寺院は、菊池川を使えば、すぐのところと私は思っております。先程言った十蓮寺というのは、鞠智城が置かれた、古代の肥後国菊池郡の郡役所のすぐそばにある、郡司が営んだお寺と言われているお寺の跡です。鞠智城の山城の技術的な問題について、向井さん、続けてお願いできませんでしょうか。

向井：そうですね。縄張り的なお話をすると、先ほどのその低い、高いという話ですが、熊本の方でしたらご存知だと思いますが、熊本にちょうど秀吉が入ってきて、肥後国衆一揆が起こりますけれど、あの時何ヶ月も立てこもるのが田中城という城なのですが、結構低い城です。周りが今は住宅地になっていますが、沼だったみたいで、備中高松城みたいな感じのところだと思います。ですから得てして高いほうがいいかと言うとそういうわけでもないということになります。

同じような例かどうかわかりませんが、対隋唐戦の高句麗の戦いの中で安市城というのがありますが、安市城は実際行ってみるとたいした山ではありません。山と言えば山ですけれど、鞠智城より少し高いぐらいの山で、どうしてこの城がこんなに持ちこたえたのだろうと思える程です。これに対して、ハクガン城という、今エンシュウ城と呼んでいますが、川に面した絶壁の上に城があって、緩やかな傾斜面のほうは高い城壁があって、先程の馬面、雉城が五つも六つも並んでいます。これは大丈夫だろうと思えますが、

ここはあっさり落ちてしまいます。すぐ落城してしまう、ですから高いが故に強いというわけでもないというのは縄張り的には言えます。

次に城門の造りの話ですが、たとえば堀切門のところ、先程佐藤先生おっしゃりましたけれども、行きますと、堀切門のところの手前のところに尾根がこう飛び出していまして、そこをぐるりと城壁が取り巻いています。これが自然の地形を利用した雉城、馬面になっているわけです。同じように深迫門のところは、今度は谷の中ですけれども、両側が出っ張っていて、横矢をかけられるようになっていますので、そういう意味では鞠智城の城門というのは、城門の造り方のセオリーには一通りのっているかなというふうには思います。すごく強力というわけではないですけれども。

鬼ノ城の城門についても、上っていきますと、城門に直通しないのです。尾根の出っ張ったところにいきまして、そこから曲げて入らせるようになっています。鬼ノ城もなかなか攻略するのは、大変だったのではないかなというふうに私は思っています。

技術的な話ですが、出宮先生のおっしゃる版築のことを知っている技術屋さんがいないと難しいのではないかなということについては、まったくその通りだと思います。高安城や長門城など、見つかってない天智朝に築城した山城がたくさんありますが、もしかすると木柵ではなかったかなというふうに最近想像しています。高句麗の城も5世紀代ですけれど、木柵で、それから百済の城にも木柵の城があったようですし、それから最近飛鳥京の周辺で、二・四メートル間隔ぐらいで、すごい木柵列が何箇所も出てきています。これで飛鳥の羅城だというような方もいらっしゃいますけれども、だからもしかすると七世紀代と

いうのは比較的版築の城壁よりも、そういう木柵みたいな日本式と言ったらいいのでしょうか。そういったものが結構あったかもしれないなというふうに思っています。

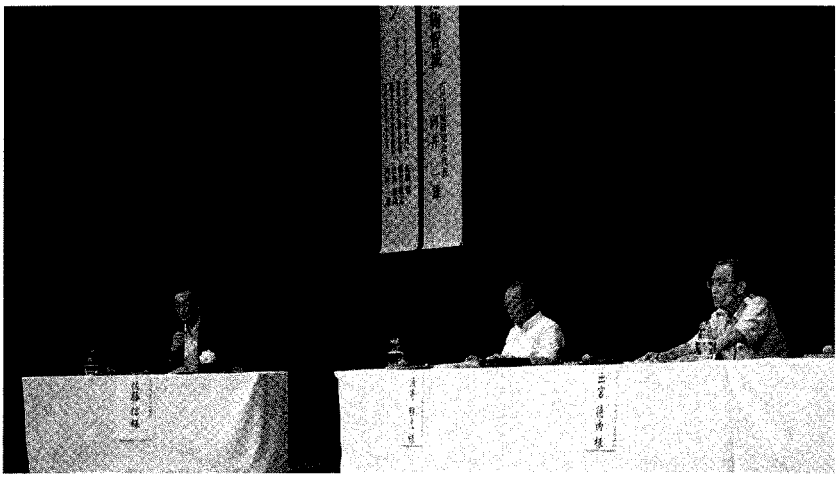
佐藤：あと、今日のお話の中では、先程、出宮さんが八角形の建物について、これまでのところ鼓楼として整備されているのですが、「点将台」という軍事指揮所みたいな高い建物、中国におけるそういう城郭の施設があるけれども、そういった指揮展望所と言うのでしょうか、そういう性格の可能性を指摘されました。このほか、八角形の建物については、宗教・祭祀的な性格もあるのではないかという意見もあるのですが、向井さんはその辺はどうお考えでしょうか。

向井：山城と宗教という点では、三月の鬼ノ城の報告会の時にもやはり、日本最古ではないかといわれる瓦塔が出ていまして、それも朝鮮半島の方に系譜をもっているような、瓦の一枚一枚を作って、柱も綺麗に作っている様な、かなり細かい瓦塔が出ています。そういう意味では、鬼ノ城の中にはこのような塔の跡のような、もしくは宗教的なものを匂わせるような建物は今のところまだ出ていませんけれど、中で宗教的な行事が行われていた可能性は高そうです。

それから、鞠智城の八角形の建物ですが、那須官衙遺跡や、関東地方の官衙遺跡、郡衙の跡です。そこに、倉庫群に混じって六角形の建物など、多角形建物が時々混じっています。静岡の方にもたしか例があったと思うのですが、そういったものとどう関係してくるのかなと以前から少し気にはなっています。

佐藤：群馬県の伊勢崎市の三軒屋遺跡という古代の上野国佐位郡の郡役所の正倉院の中で、八角形の立派な倉庫の建物が見つかっています。ただし、その八角形の倉庫と鞠智城八角形の建物とではの柱の配置が全く違います。これまでですと、二聖山城だとか、あるいは、今日出宮さんの話であった、高句麗の丸都山城にも中心部に八角形の建物が二棟あるということで、今まで比較してきたわけです。出宮さん、点将台の場合は、中国の城郭の歴史では一つの城に一つだけですか。

出宮：先程も言いましたように、瞭望台といって、軍事目的を超えた、民政的というのか、いわゆる治所、おさめる場所です。行政的な意味合いを含めて城下の領民の様子をも見届ける和戦両様というような意味合い、つまり政治的な意味合いがより色濃くあるということで、軍事施設オンリーではないものと私は想像しています。なぜ点将台が瞭望台に変わったのかということについては、むしろ軍事目的以上に治政的な意味合いを込めて、そういう名称に変わっているのだと私はそう考えています。



佐藤：わかりました。軍事的というだけではなく、行政的なものが入るということですね。

それでは、最後に、第三のテーマでそれぞれお一人ずつ、鞠智城の築城の歴史的背景について、鞠智城の性格にも関連して、東アジアとの関係、隼人との関係、律令国家との関係、あるいは今日のお話に出てきた唐との関係をどうみるか。そして、鞠智城の性格としては軍事的な施設、外交的な施設、それから行政的な施設、あるいは財政的な施設、いろいろな面が浮き彫りになってきたと思うのですが、その辺りについての話を酒寄先生からそれぞれ順番にお話いただきたいと思います。

酒寄：先程の製作技法の中で、例えば、先程の向井さんの説明になかったところで、南山新城（なんざんしんじょう）のお話をします。慶州に南山新城という大きな山城がありますが、そこから石碑が何枚か出ていて、それは南山新城碑というのですが、城壁を造るにあたって分担をした人達の名前だとか距離だとかが記載されています。ですから、石塁をつくるのに一人の指揮官がいて全部造ってしまったというのではなくて、在地の首長達を集めて、それを分担しているのです。それは実は、私が青山学院大学と一緒に調査をしている北朝鮮と中国、ロシアの国境のクラスキノ土城という平地城があるのですが、そこもよく見てみると工法が変わるのがよく分かります。何メートルかおきに、石積みの状態が変わっていきます。それをさっき見ていると、木の棒が出てくる、ああいう範囲であるいはもう少し長いのかもしれませんが、よく見ていくと違いがあるので、鞠智城は特に土塁ですから、土塁の違いがどれほど分かるかということは問題ですが、アジアの場合は、在地首長（ざいちしゅちょう）をどうやって使っているかということがそれからも分かったりします。

それから、性格的なことは先程から何回も申し上げていますように、七世紀の後半代、七世紀末～八世

紀初頭から八世紀、九世紀とそれぞれ違う展開をしています。軍事的な性格が極めて高いのが、七世紀の第三から第四で、七世紀の末から八世紀の頭くらいになると、かなり儀礼的な空間をも兼ねてくるようになります。そして九世紀になると倉庫としての機能に変わっていくという、変遷をしているというイメージを持ってみたほうが分かり良いのかなと思います。

アジアの場合、軍事的な面でいえば、城が拠点になって、次の城を造って、領域を拡大していくということをしていきます。それも渤海などを見てみると、川沿いにどんどん広がっていきます。城が拠点になって政治的な領域支配をしていく。ところが、日本の場合、割と近いところでそれぞれ平地城と山城をセットでもっていたりしています。

それから、烽火でお互い連絡ができるような所に城があります。特に、南漢山城と先程の二聖山城というのは、二聖山城のほうでは木簡が出ていますが、烽火の木簡だろうと思うのですが、非常に近いところで烽火をやりとりしているわけです。そういう意味でいくと、鞠智城というのは朝鮮半島の城ほどの緊張状態の高まっているような感じはあまりしないというように思えます。

佐藤：ありがとうございました。続いて出宮さんお願いします。

出宮：鞠智城の築城時期が確定できないというのは、非常に辛いことです。これは考古学の限界ですから、木簡で築城した記録でも出ない限りは。私の個人的なフォーメイションでいうと、やはり筑後平野といいますか、先程申し上げました、有明海北部にある支城網のバックグラウンドとして、その南の端に鞠智城は築城された。つまり肥後平野を掌握するというか、純軍事的というよりも後方支援的なものだったので

はないか。最初は軍事もありますが、逆に言うと、そういう純粋な軍事施設ではないので、民政的にも転用できます。その一方では、先程言いましたように、大宰府をフォーメイションとして両端の軍政施設へも転換していく。つまり多様性をもった施設だったものと思います。

平安時代の中頃まで、そういう幅広い使われ方をした。逆に言うと、神籠石の大半は、百済の城の評価をどうするかということですが、要は「百済の城は負けた方の城」です。軍事施設とすれば、必ずしも機能的に充分な城ではありません。ということは百済の役で証明されているわけですから、きつい言葉で言うと、金食い虫の施設をいつまでも税金の対象として温存するということはあり得ないと思いますから、その転用できない軍事施設は速やかに退役するということになります。それに対して、鞠智城はそういう多様性をもっていた、実践装備以外の民政的というか治政的な治所としての機能を当初から付与されていたので、平安時代の中頃まで、むしろそういう地域拠点、国府とは違う「国の出先」として機能し続けたという見方をしています。

佐藤：ありがとうございます。確かに私も菊池川流域を押えるような機能は最初からあるだろうと最初から思っていましたが、わかりやすく説明していただいたと思います。私のように古代史を学んでいる者からすると「百済の城は負けた城」と言われると、『日本書紀』の大野城・基肄城は百済からの亡命将軍の指導で建てたという記載はどうなるのかなと思いますが、文献がごく一部のことしか語っていない、という場合は確かにあり、それをどう評価するかというのはこれからの課題かなと思いました。

では、向井さんお願いします。

向井：そうですね、今の「百済の城ではない」という話と「百済の城は負けた城」だという話ですが、私もそうだと思います。近江朝の政府もそうですし、負けた百済の人達も同じ物を造ろうとはしなかったと思います。そうなると、やはり隋、唐に対して高句麗が造っていたようなものを造ろうとしますが、では造れるのかというと、これまた話が違いますよね。技術的にはやはり先程出宮先生がおっしゃっていたように、地元でそういうバックボーンがないと駄目ですし、ですから理想ばかり語っていても駄目なのでしょうね。結局、私としてはプラン的には高句麗を意識しているが、最終的にはちゃんとしたものは出来ていないと言った方がいいでしょう。

鞠智城に関してですが、大きく分けて三つの顔を持っていると思います。そういう意味では、佐藤先生をはじめ皆さん、いろいろな時期によって、先程酒寄先生も「違う側面がある」とおっしゃっていました。私が一九九一年に書いた論文に書いていますが、鞠智城は、大宰府もしくは那津官家（なつのみやけ）の次の大野城、基肄城などの防衛ラインが破られた後の九州の第二拠点という部分で用意されていたようなイメージを持っています。なぜかというと、結局、阿蘇山を抜けて大分の方にもつながりますし、有明海だとか菊池川流域を使って展開もできますし、それからもう一つ、筑肥山地といいまして、ちょうど福岡県から熊本県に入るところというのは峠になっており、西南戦争の時にも戦っていますが、そういった部分を期待されたかなと思っています。

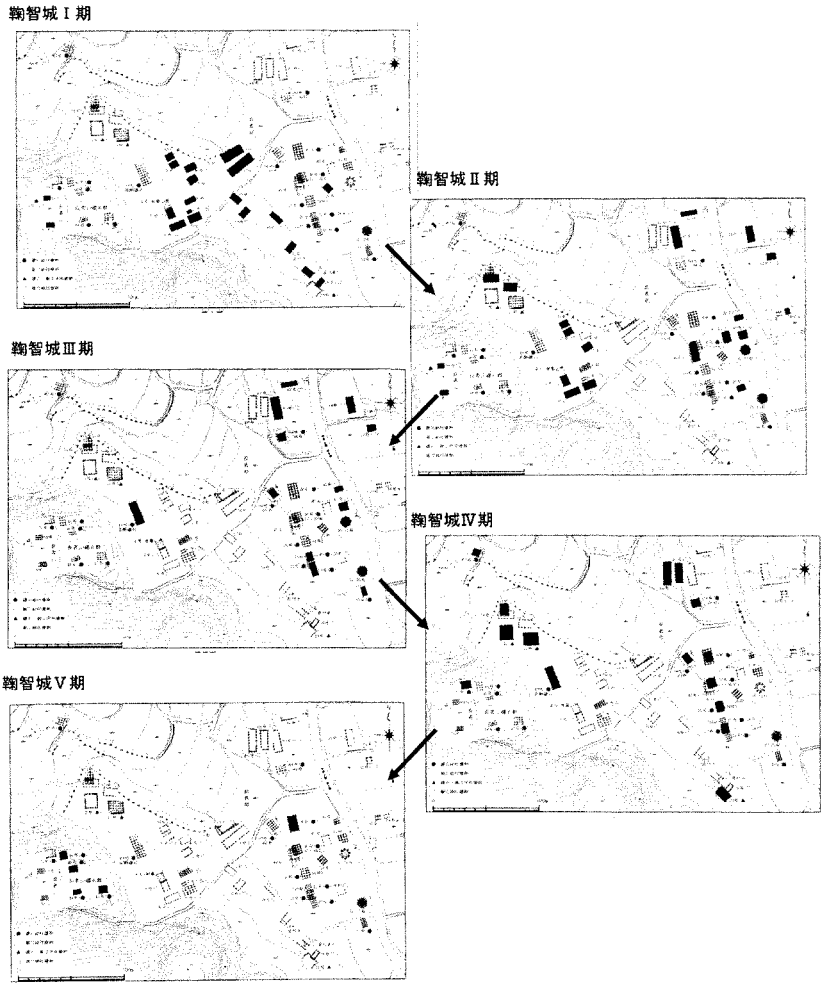
また、7世紀末については金田城との対比がひとつあると思います。対馬の金田城は最前線ですが、実をいうと奈良時代になると使っていません。ですから、対馬にいた防人は、金田城にはどうもいなかった

ようです。ではなぜこの一番奥まったところにある鞠智城がということですが、七〇〇年代に入りますと、今度は隼人の反乱がたびたび起こりますので、蝦夷の反乱ほどではないですが、隼人の反乱で、何回か征隼人軍が遠征されていますので、そういう部分での鞠智城のありかたというのがあるのかなと思います。それが終わった後というのは、やはり一旦廃城になっているようなイメージを最近持っています。というのが、鞠智城の報告書を読ませていただいて、この大規模な貯水池が維持されていません。それで、復活した鞠智城にはもう貯水池はなかった。といいますか、埋まってしまっている状態で。貯水池のない城というのはあり得ませんので、もう意味が変わってきているのかなというふうに思います。

九世紀の話が酒寄先生からありましたが、新羅の海賊の話なんかもありました。もう一つは、九世紀から一〇世紀にかけて九州は大飢饉になってしまいます。もう班田農民がいなくなってしまうような状態になって、大宰府は大開墾計画を立てるぐらいです。そういう暗い時代だったというのも、鞠智城を考えるうえで意味があるかなというふうに思っています。

佐藤：今回もやはり新しい見方で、高句麗など韓国や中国の城との比較をしていただきました。鞠智城を理解するという方向のシンポジウムを重ねるごとに、どんどん像がまとまっていくかと思ったら、どんどん話が広がっていって、まだまだいろいろなことを検討しないといけないなと感じているところです。これは学問的にはやむを得ないことかもしれません。と同時に、ある意味では楽しみが増えるといいましょうか、鞠智城を軸にして、七世紀から九世紀代にかけての日本の古代史、あるいは東アジアの中の日本古代史という大きなテーマが、さらに研究が進めば浮き彫りになっていくだろうと思っております。

本日は、どうもありがとうございました。



第５図　建物遺構の変遷（鞠智城Ⅰ～Ⅴ期）

《引用・参考文献》

西住欣一郎ほか 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第８～32 次調査報告－』熊本県文化財調査報

鞠智城Ⅲ期（８世紀第１四半期後半～８世紀第３四半期）

鞠智城の転換期。鞠智城Ⅱ期の管理棟的建物群や八角形建物は存続するものの、掘立柱の倉庫が礎石建ちの倉庫に建て替えられるなど、城内の施設に変化が生じるとともに、土器などの日常什器は皆無に等しく、城を維持するための必要最低限の人員のみ配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じた時期と考えられる。

鞠智城Ⅳ期（８世紀第４四半期～９世紀第３四半期）

鞠智城の変革期。城内に「管理棟的建物群」の消失や貯水池中心部の貯木場が埋没し、池の機能が低下するなど、城の機能が大きく変容した時期。また、鞠智城Ⅲ期の礎石建物の上に、新たに大型の礎石建物を建築するなど、礎石建物が大型化するのも特徴として挙げられ、食糧の備蓄施設としての機能が主体となる。『文徳実録』天安２（858）年条にある「不動倉 11 宇焼く」の不動倉がこれらの建物と推定される。

大型礎石建物跡（20 号建物跡）

鞠智城Ⅴ期（９世紀第４四半期～10 世紀第３四半期）

鞠智城の終末期。城内の建物数が減少するものの、不動倉を再建するなど、食糧の備蓄施設としての機能は存続する。そして、10 世紀第３四半期までには、城の機能が完全に停止することが考えられる。

３　今後の課題

このように、鞠智城の変遷をみていくと、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期までは、その築城目的であった対外的な軍事施設としての機能が主体であったのに対して、鞠智城Ⅳ～Ⅴ期までは食糧の備蓄施設としての機能が主体となることが大きな変化として挙げられる。特に、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期までの変化は、大宰府の変化と連動しており、大宰府防衛の一翼を担う軍事的な役割とともに、城の維持・管理の面でも大宰府が大きく関与していたことが伺える。

いずれにしろ、鞠智城が７世紀後半から 10 世紀中葉までと３世紀に亘り長らく存続し得たのは、このような城の機能変化があったからであると推察できる。

今後、大野城、基肄城をはじめとする古代山城や大宰府、肥後国府、菊池郡家などの官衙遺跡との比較検討を行うとともに、出土遺物の特徴や製作技術の詳細な分析により産地や流通経路を究明することが重要で、そうした分析のもと、鞠智城の機能・性格について検討を加えていくことが課題といえる。

2　時期区分と変遷

昭和42年度からの発掘調査成果によって、鞠智城は、7世紀後半から10世紀中頃までの約300年間存続し、時代に合わせて城の機能が変化していくことが判明した。そして、鞠智城の存続期間を5時期に大別することが可能となった。以下に、各時期の特徴を述べる。

鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～7世紀第4四半期）

鞠智城の創建期。天智4（663）年の白村江の敗戦を契機に、唐・新羅の侵攻に備えて、大宰府防衛の軍事拠点とともに、物資等を供給する兵站基地としての役割のもと築城。城門や土塁線、貯水池など、城としての最低限の機能を緊急的に整備し、城内には掘立柱の倉庫や兵舎を配置した。百済系の銅造菩薩立像の存在から、『日本書紀』天智6（665）年に築城された大野城、基肄城と同様、築城にあたっては百済の亡命高官の関与が指摘される。

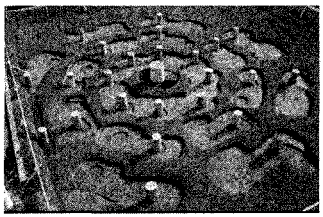
西側土塁線・土塁

池ノ尾門跡・水門

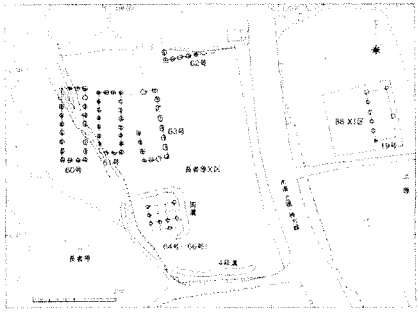
貯水池跡・貯木場

鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

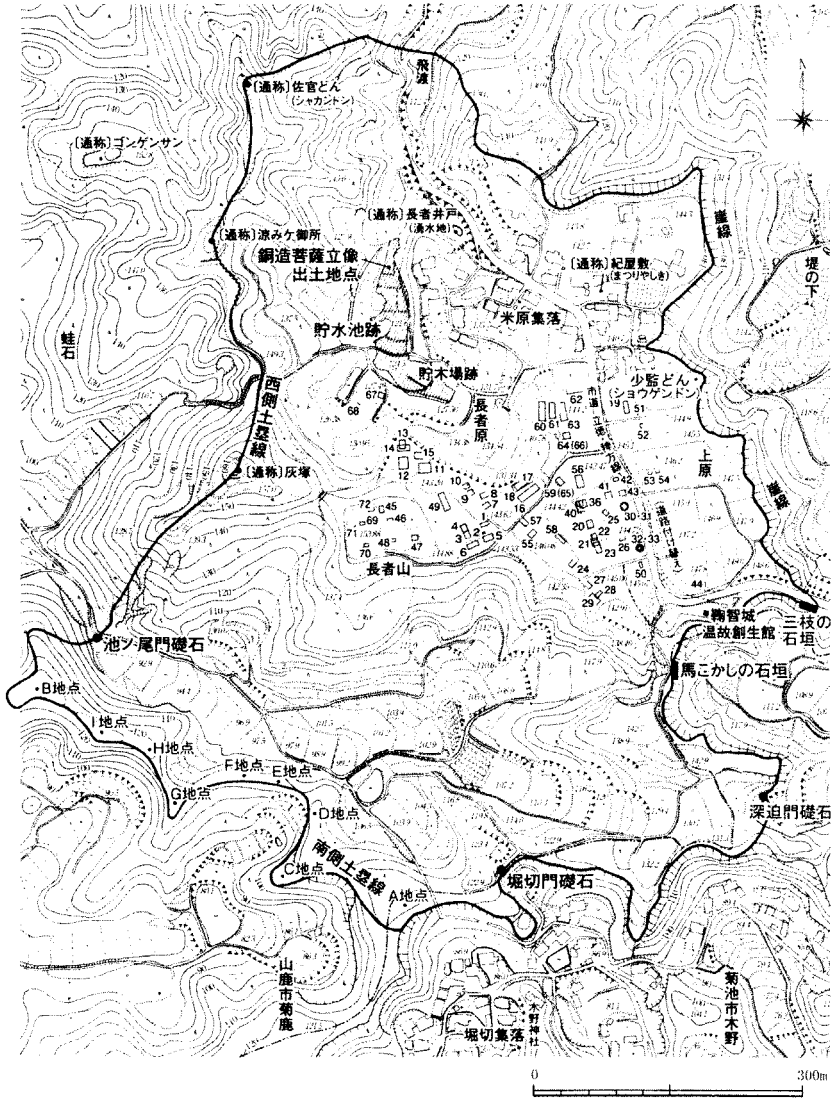
鞠智城の隆盛期。城を管理する「管理棟的建物群」や八角形建物が建設されるなど、城内施設の充実が図られる時期。『続日本紀』文武2（698）年の繕治の時期に該当。土器などの日常什器の出土が最も多く出土する時期で、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる。



八角形建物跡（32・33号建物跡）



第4図　管理棟的建物群

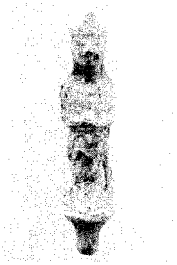

【通称】佐官どん
(シャカドン)
【通称】ゴンゲンサン
【通称】涼みケ御所
銅造菩薩立像
出土地点
【通称】長者井戸
(清水地)
【通称】紀屋敷
(まつりやしき)
蛙石
貯水池跡
米原集落
貯木場跡
少監どん
(ショウゲンドン)
西側土塁線
【通称】灰塚
長者原
上原
長者山
池ノ尾門礎石
鞠智城
温故創生館
三枝の
石垣
馬こかしの石垣
深迫門礎石
堀切門礎石
堀切集落
南側土塁線
B地点
I地点
H地点
F地点
E地点
G地点
D地点
C地点
A地点
山鹿市菊鹿
菊池市木野
木野神社
堤線
堤の下
0
300m

第３図　鞠智城跡全体図

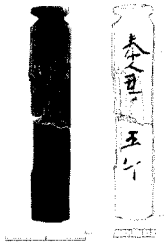
第１図　鞠智城跡城域図

城域については、古くから広域説、狭域説などが論じられてきたが、現在、周長 3.5ｋｍ、面積 55ｈａ、標高 90～171ｍの範囲を真の城域とし、約 64.8ha の範囲を国の史跡として指定されている。

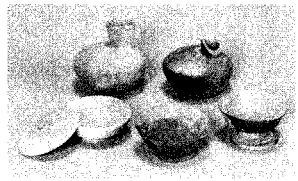
鞠智城跡の発掘調査は、昭和 42（1967）年度の第１次調査に始まり、平成 22（2010）年度で第 32 次を数える。古代山城では唯一の八角形建物跡をはじめとする 72 棟の建物跡や、約 5,300 ㎡の規模を有する貯水池跡、城門の門礎石、版築工法による土塁跡が検出されるなど、城の構造解明が進み、須恵器、土師器などの土器や単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え、百済系の銅造菩薩立像、「秦人忍口五斗」銘の付札木簡などが出土した。



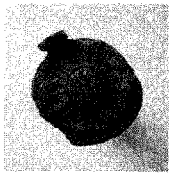
銅造菩薩立像



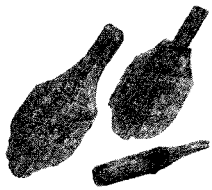
「秦人忍口五斗」銘木簡



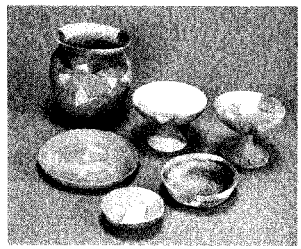
須恵器



単弁八葉蓮華文軒丸瓦



木製品（平鍬・横槌）



土師器

第２図　出土遺物

鞠智城跡の調査と成果

歴史公園鞠智城・温故創生館

1　概要

鞠智城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山に源を発し有明海へと西流する菊池川の中流域（河口まで約 40 ㎞）、山鹿市、菊池市の市境に所在する古代山城である。『続日本紀』文武２（698）年に繕治された「鞠智」の城跡で、『文徳実録』天安２（858）年条の「菊池城院」、『三代実録』元慶３（879）年条の「菊池郡城院」も同城の記述とされる。

筑肥山地の主峰、「八方ヶ岳」（標高 1,052m）の南西麓は、小河川により複雑な丘陵地帯を形成している。鞠智城跡は、その丘陵地帯の南端近く、標高 140m前後の通称「米原台地」を中心に立地しており、比較的低い丘陵上に築かれていることを特徴とする。北には福岡県との県境を限る筑肥山地の山脈が連なり、南には菊池川及び支流域に発達した肥沃な菊鹿盆地が拡がり、県下でも有数の穀倉地帯を形成している。

また、城跡の南には、「車路」地名により復原された古代官道が推定されており、現在でも、福岡、大分、阿蘇、熊本方面へと幹線道路が延びる交通の要衝地となっている。古代律令制下では肥後国菊池郡に属し、周辺は『和名抄』にみる城野郷に比定されるが、城跡内及びその周辺に残る「木野」地名がその名残りをとどめる。

六国史にみる鞠智城　＊『国史体系』吉川弘文館

甲申。令三大宰府一繕中治大野。基肄。鞠智三城上。
（書き下し文）
「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」
『続日本紀』文武天皇二（６９８）年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。
（書き下し文）
「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「丁巳、又鳴る」
『日本文徳天皇実録』天安二（８５８）年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。
（書き下し文）
「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「同城不動倉十一宇火く」
『日本文徳天皇実録』天安二（８５８）年六月二十日条

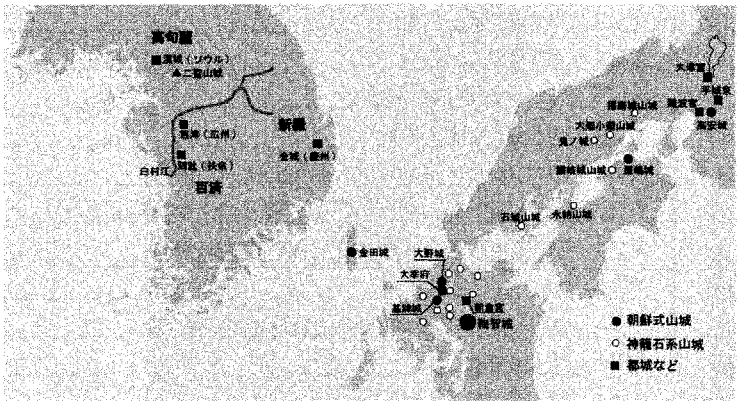
肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。
（書き下し文）
「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」
『日本三代実録』元慶三（８７９）年三月十六日条

鞠智城関連年表

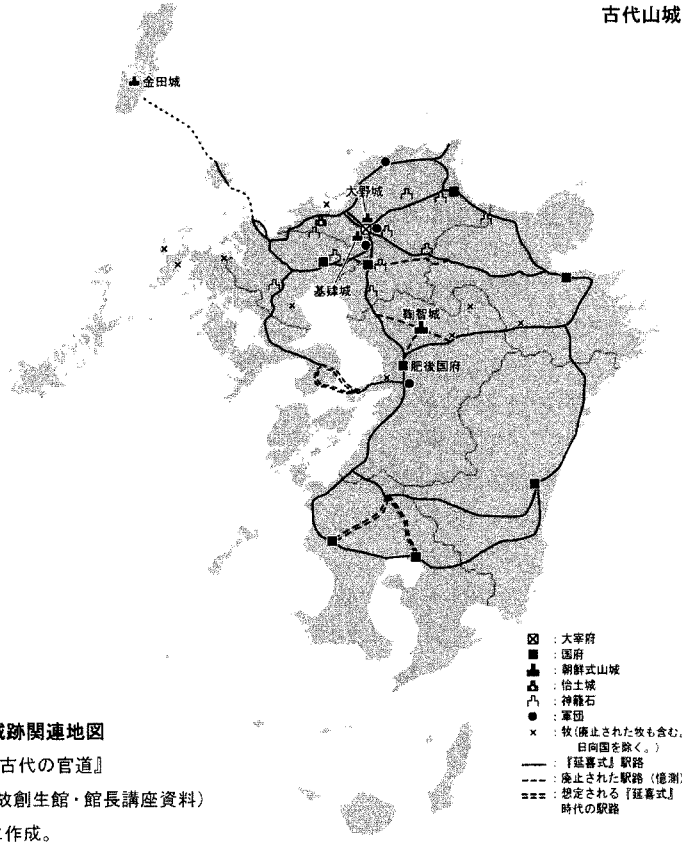
西　暦	年　号	内容
645	大化元	大化の改新。
646	大化2	改新の詔を発布。
660	斉明6	唐と新羅によって百済滅亡。
661	斉明7	朝倉橘広庭宮に遷宮。
663	天智2	白村江の戦い　※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664	天智3	対馬・壱岐・筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665	天智4	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667	天智6	近江大津宮に遷宮。
〃	〃	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
668	天智7	高句麗滅亡。
669	天智8	高安城修理。
670	天智9	高安城修理。
672	天武元	壬申の乱。
676	天武5	新羅が朝鮮半島を統一。
678	天武7	筑紫国大地震。
694	持統8	藤原京遷都。
696	持統10	※「肥後国」の文献上の初見。
698	文武2	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治させる。
〃	〃	高安城を修理。
699	文武3	高安城を修理。
〃	〃	大宰府に稲積・三野の二城を修理させる。
701	大宝元	大宝律令制定。
710	和銅3	平城京に遷都。
719	養老3	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756	天平勝宝8	怡土城を築く。
794	延暦13	平安京に遷都
799	延暦18	大宰府管内を除いて烽を廃止。
858	天安2	(閏2月)肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
〃	〃	(5月)菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875	貞観17	カラスの群れが菊池郡倉舎の葦草を噛み抜く。
879	元慶3	肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

参 考 資 料

鞠智城・古代山城分布図



古代山城分布図



鞠智城跡関連地図

※日野尚志『古代の官道』

（鞠智城・温故創生館・館長講座資料）

2007 を基に作成。

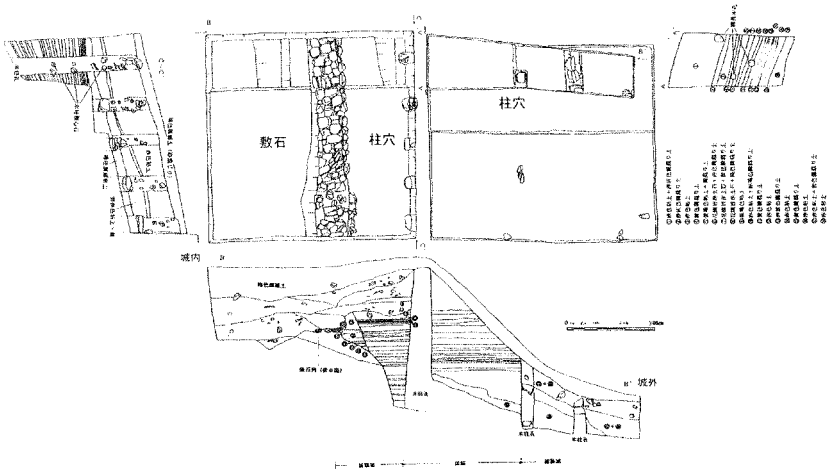


Fig11　扶蘇山城　東門址北側土塁断面・平・立面図（文献５）

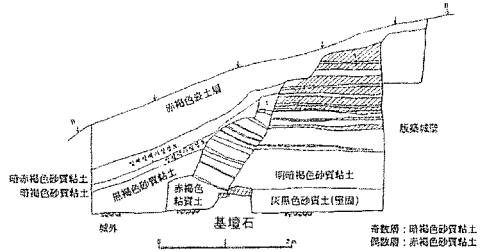


Fig12　蛇山城　城壁断面図（文献３）

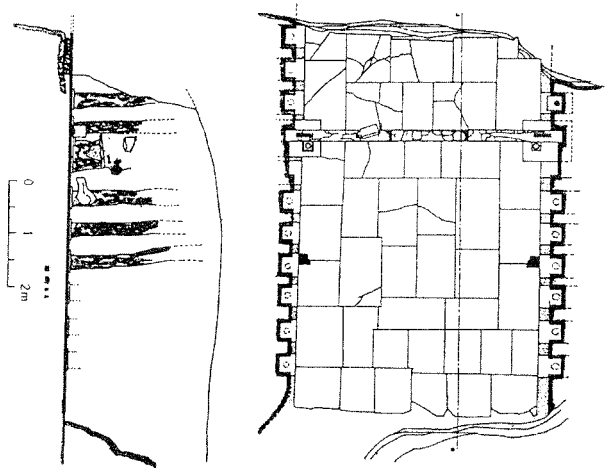


Fig13　平壌城　平壌神社前門址（文献２）

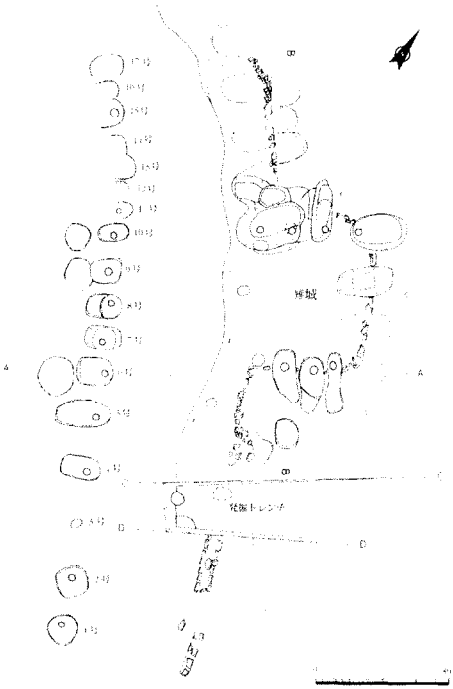


Fig8　南城谷遺跡　雉城平面図（文献12）

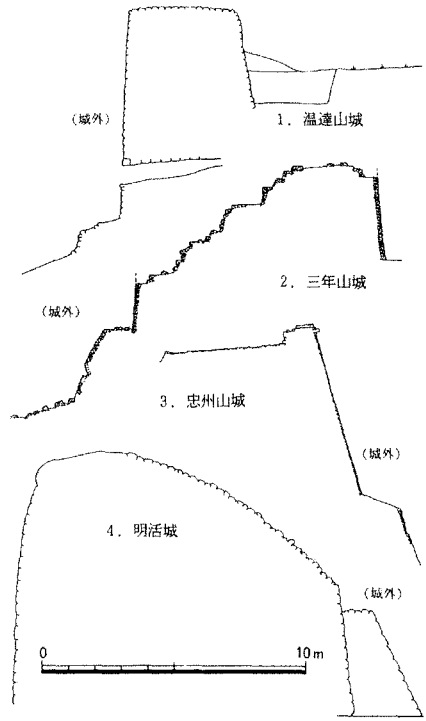


Fig9　韓国の城壁・基壇補築の断面図（文献５）

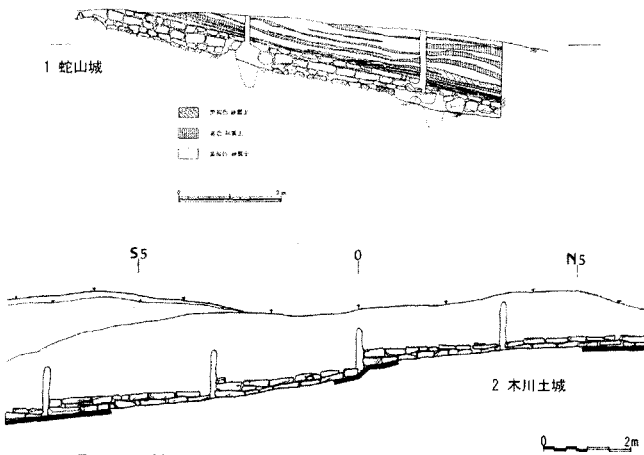


Fig10　韓国の列石（基壇石）立面図（文献４）

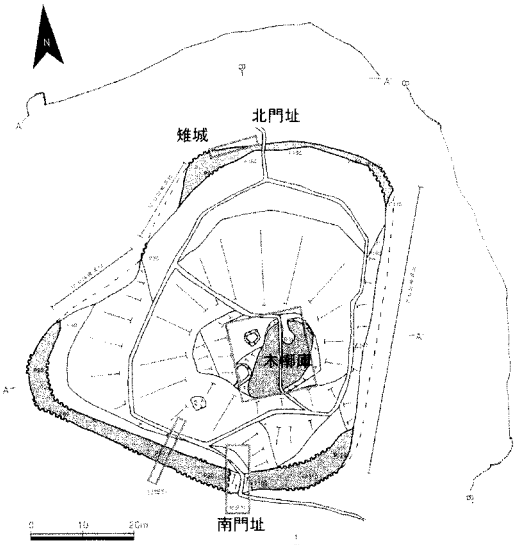


Fig5　栢嶺山城平面図（文献７）

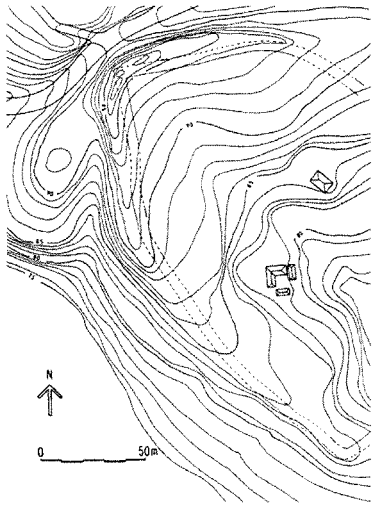


Fig6　木川土城平面図（文献19）

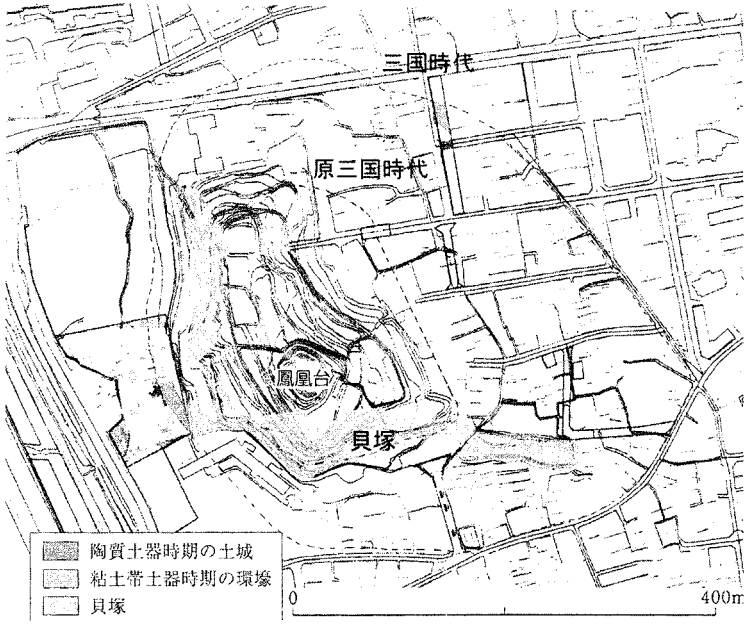


Fig7　鳳凰土城平面図（文献11）

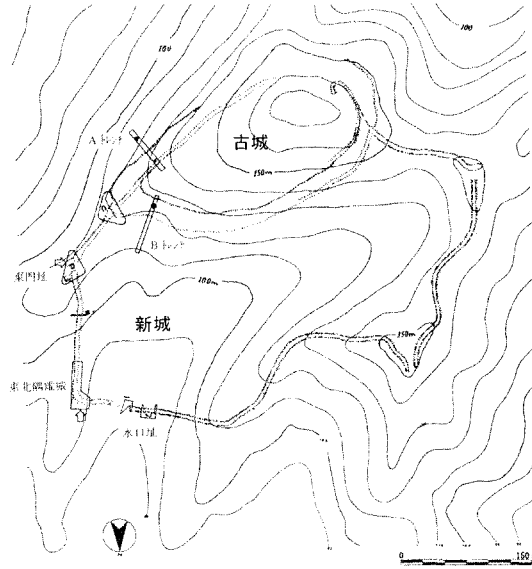


Fig３　蛇山城平面図（文献３）

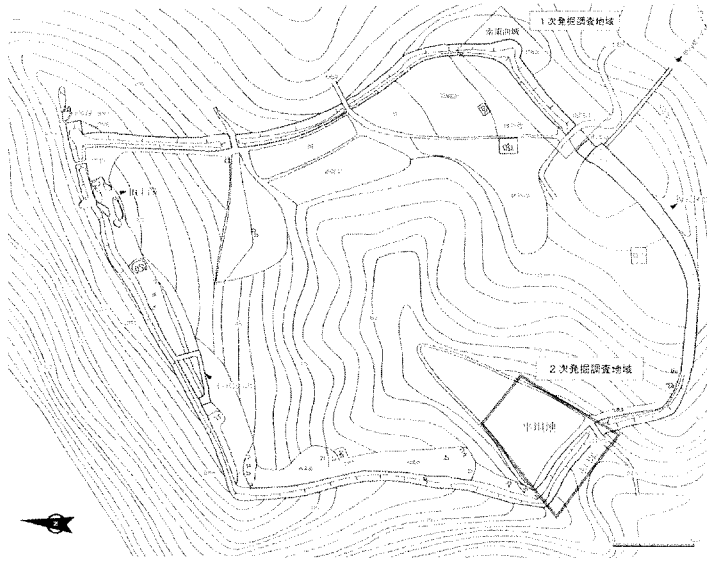
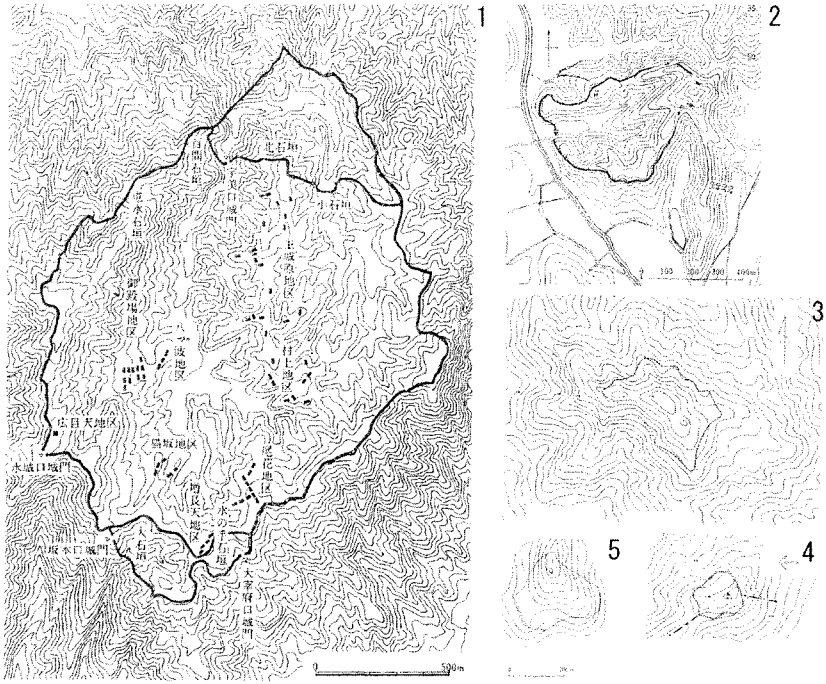


Fig４　姑母山城平面図（文献13）



1:大野城　2:鹿毛馬城　3:聖興山城　4:鶏鳳山城　5:魯城山城

Fig１　韓国と日本の山城　平面プランの比較（文献22）

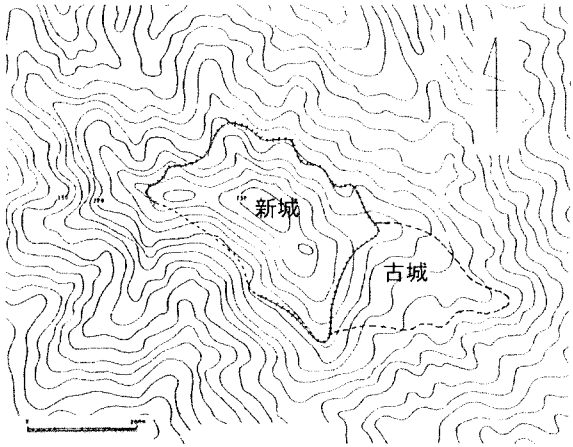


Fig２　聖興山城　新城と古城の位置関係（文献22）

9)朴淳發「泗比羅城研究の現段階」『溝婁（特集 羅城シンポジウム）』13号、古代山城研究会、2007年
10)沈正輔『百済山城の理解』周留城出版社（韓国）、2009年（増補版）
11)田中俊明『古代の日本と加耶（日本史ブックレット70）』山川出版社、2009年
12)韓善京（松波宏隆訳）「清原南城谷遺蹟の性格」『溝婁（特集 日韓古代山城研究セミナー）』14号、古代山城研究会、2009年
13)白永鐘（寺岡洋訳）「姑母山城の築造時期の考察」『溝婁（特集 日韓古代山城研究セミナー）』14号、古代山城研究会、2009年
14)田中俊明「日本・朝鮮の軍事遺跡」『律令国家と東アジア（日本の対外関係2）』吉川弘文館、2011年
15)松波宏隆「韓国古代の武装と攻城兵器」『古代山城と戦争を考える Part1;武器・武装篇（第46回古代山城研究会予稿集）』古代山城研究会、2012年
16)李日甲「韓国古代城郭に対する小考－最近の考古学的調査成果を中心に－」『神籠石系山城を考える 九州VS瀬戸内（第47回古代山城研究会資料集）』古代山城研究会、2013年
17)向井一雄「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論」『古代学研究』125、1991年
18)向井一雄「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡II遺物・遺跡編』奈良文化財研究所、2004年
19)向井一雄「古代山城と創建期多賀城との比較」『第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集（多賀城発掘50年の成果と課題）』古代城柵官衙遺跡検討会、2010年
20)向井一雄「駅路からみた古代山城－見せる山城論序説」『地図中心』453、日本地図センター、2010年
21)向井一雄「古代山城論－学史と展望」『古代文化』62-2：特輯 日本古代山城の調査成果と研究展望(下)、2010年
22)向井一雄「古代山城研究の最前線－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊 邪馬台国』105号、梓書院、2010年
23)向井一雄「研究史・古代山城－神籠石論争から研究課題までー」『季刊 邪馬台国』108号、2011年

鞠智城は築城年こそ不明ながら698年に大野城などと共に修築されており、版築土塁や門礎石（唐居敷）の型式から白村江敗戦後の天智朝に大野城や基肄城、金田城などと共に築城されたと考えられている。大野城などと比べると、険しい山地ではなく丘陵上に占地しているが、米原を内城として西から北側の丘陵や南側の河岸段丘を外城とする二重の防衛ラインが読み取れ、周辺地形を巧みに利用した縄張りを持っている。このような複郭型の縄張りプランは、鞠智城だけでなく日本の古代山城全般（九州の神籠石系を除く）にみられるもので、一つ一つの山城が単独でも地域の防衛拠点としてある程度持ち堪えられることを期待されていたことが読み取れる。鞠智城の築城された菊池川上流域が北と西は筑肥国境及び玉名方面、南は熊本方面、東は豊後方面と一中部九州の各方面への連絡の至便な交通の要衝に位置することも、これまでよく指摘されてきたが、このような地域内での無駄のない絶妙な選地は他の古代山城と共通する。

縄張り的には、小型山城による線的配置によって防衛網を構える熊津・扶余期の百済や中規模山城の拠点的配置をとる新羅の防衛システムとは違い、高句麗の遼東半島方面の防衛体制に近い。隋・唐の数度にわたる侵攻を退けた高句麗の山城群が評価され、模範とされたことは想像に難くない。その点はクライアントたる近江朝廷や百済からの亡命貴族らの思いをそこに窺うことができる。しかし高句麗山城の防衛ラインが強力だったのは、一つの山城の規模や縄張りプランもさることながら、石築・土築の城壁の高さや堅牢さ、城門を守る工夫や雉城・曲城・女墻・羊馬墻といった付帯施設、城内部における戦略物資の備蓄と広大な貯水池、そして何よりも防衛ラインを有機的に結びつける強力な軍団の存在があったからに他ならない。日本の古代山城が“百済式”でないことは先に指摘した通りだが、かといって高句麗山城のデッドコピー（複製品）でもない。日本の古代山城は当時の日本が動員できる技術・労働力によって造られており、城の構造的な面だけとっても百済・新羅にもレベル的には及んでいない。日本の古代山城の源流はどこかと問われれば、築城された古代日本の各々の地域一地元であると答えるべきかもしれない。

国土を戦場とする山城による防衛体制は日本に根付かず8世紀初めに崩れてしまうが、律令国家は全国的な戸籍に基づく徴兵による巨大な軍団制と駅路・烽燧網による交通・通信インフラによって城郭を持たない新たな防衛体制を模索していった。それから500年余り後の元寇の時（文永の役 1274年）、博多湾岸で破れた鎌倉武士団は水城跡まで退いて総崩れとなることを免れた一古代の防衛線の有効性が証明される結果となったことは興味深い。

参考文献

1）亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、考古学研究会、1995年

2）東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社、1995年

3）成周鐸・車勇杰（寺岡洋訳）「稷山　蛇山城」『溝婁』7号、古代山城研究会、1998年

4）「古代山城の土塁構造一太宰府例会（1998.11.23）の記録」『溝婁』8号、古代山城研究会、1999年

5）「城郭における版築技法の比較検討一日韓シンポジウム（1999.11.27～28）の記録」『溝婁』9・10 合併号、古代山城研究会、2001年

6）徐程錫『百済の城郭一熊津・泗比時代を中心に』学研文化社（韓国）、2002年

7）『錦山栢嶺山城 地表・試掘調査報告書』忠清南道歴史文化院、2004年

8）深津行徳「朝鮮半島古代山城と出土文字史料」『歴史評論』No.657、校倉書房、2005年

(7)列石が出現するのは統一新羅以降

日本では神籠石系山城の列石のルーツとして、1983 年、独立記念館の建設時に調査された木川(モクチョン)土城(忠南天安)で基底部に列石を持つ版築土塁が見つかったことが、いまだによく紹介される。そして木川土城の所在地が百済地域に含まれることから、列石（韓国では基壇石という）は百済山城の特徴であり、それが日本へ伝わり神籠石系山城が造られたという。しかし、これは調査時点からわかっていたことなのだが、木川土城からは百済の遺物は全く出ず、出土したのは統一新羅から高麗時代の土器や瓦片ばかりだった。その後、各地で木川土城と類似した列石を持つ城郭の調査事例が増加し、現在では韓国における列石の出現は早くても三国時代末期、一般化するのは統一新羅時代以降とみられている。

神衿(シングム)城（忠南洪城郡)、蛇山(ササン)城（忠南天安)、扶蘇(プソ)山城（忠南扶余)、華山里(ファサンニ)城（慶南蔚山)、堂甘洞(ダンガムドン)城（釜山）などで列石が検出されているが、中でも木川土城によく似ているのは、1990 年に調査された神衿城で 9 世紀代の築城とされている。列石の配列の方法からも新旧が想定されていて、蛇山城のように傾斜地でも一定の勾配で直線状に配置されるものが古く、木川土城のように階段式に傾斜地を登っていくタイプは新しいと考えられている。また韓国では列石前面の柱列も検出されているが、石列間に立柱し土塁に半ばめり込んだ状態で設けられている。柱間間隔については、三国時代には 1.2～1.8m と短かったものが、統一新羅時代以降に 3m以上となり、高麗時代には 3.5～4m と次第に長くなっていくこともわかってきた。

日本への山城導入期に、列石を使用する工法も入ってきていることは間違いなさそうだが、朝鮮半島でもまだ普及していない状況で、自然石・割石使用の段階であり、切石の列石が古い段階に日本で先に登場するとは考え難い。神籠石系山城の中でも北部九州の切石列石を持つグループを古く考える説は韓国における城郭調査の成果とも矛盾している。

3．韓国古代城郭と鞠智城

百済・新羅地域の山城では三国統一後、より高い山岳へ立地するものと城壁が山の斜面から平地へ降りてくる二つの類型が成立する。高い山岳に立地する山城は純軍事的城郭で三国時代よりさらに大型化していく。日本では、朝鮮半島の山城を“逃げ込み城”のイメージで捉えているが、海外からの大規模な侵略時に住民を保護する「保民用」の山城は高麗時代に起源を持っている。平地へ降りてくる平山城（土城）は高麗時代の古邑城につながる城郭で、行政的機能を担当したとみられている。軍事→行政への機能の違いは城門の位置や形式にも反映しており、防御に有利→出入の便利さ、懸門式→平門式へと推移する。市街地を囲い込む邑城は倭寇の略奪から守るために造られた城壁で、現在、観光地や時代劇のロケ地となっている楽安邑城や海美邑城などの姿は朝鮮王朝（李氏朝鮮）時代のものであり、古代の韓国城郭本来のものではない。そういう意味では、世界遺産となっている水原の華城は山城と邑城が合体した形式を持っており、18 世紀末に築城された韓国城郭文化の集大成ともいえる城である。

日本の城が古代から中世・戦国、そして近世から幕末の台場や近代要塞まで様々な変遷過程をたどってきたように、韓国の城も遼西の高地性環濠集落に淵源を持つ高句麗の山城をルーツにして、その影響を受けた南部の百済、新羅、伽耶諸国で山城が築かれ、その後の歴史の中で多様な展開を遂げる。古代朝鮮諸国で発展した山城による防御システムは、渤海、遼（契丹）・金（女真）といった北東アジアの城郭文化にも影響を色濃く残していることが最近のロシア沿海州方面の調査で明らかになりつつある。

新しい城が築かれているところが他にもあるが、聖興山城のようにその築城年代を具体的に追うことができる事例はほとんどない。

501年というと6世紀初頭－熊津に屏居していた百済が扶余に遷都して新たな展開を始める頃に当たる。扶余周辺にもいくつも山城が残っているが、やはりいつ頃の遺構なのか表面調査では不明な点が多い。古城の遺構は扶余遷都期の百済山城がどのような城だったのか示しており、百済山城の実態や編成過程、新羅の城との比較など様々な課題に答えることができる可能性を持っている。しかし残念ながら古城の発掘調査は行われておらず、先に紹介した踏査による情報以上の詳しいことはわかっていない。

(6)伽耶の城郭－鳳凰土城、城山里土城

朝鮮半島南部－洛東江の流域に、百済と新羅とは別に伽耶諸国と呼ばれる地域があった。この諸国の王墓と推定される古墳群の背後にも古代山城があり、これまでは伽耶諸国の山城と考えられてきた。しかし韓国での城郭調査が進展してくると、これら伽耶地域の山城も実は新羅が伽耶地域に進出、併呑していく過程で、占領地域を支配する拠点として築城されたものだったことが明らかになってきた。

例えば、慶南咸安の城山(ソンサン)山城などは、当初は安羅国の王宮とそれを守る城だと思われていたが、1991年からの発掘調査の結果、大量の木簡が出土し、6世紀代に新羅がこの地域に進出した時、支配拠点として築いた城とわかった好例である。城山山城では新羅の城壁工法である基壇補築も見つかっている。また2008年に調査された巨済島の廃王(ペワン)城は7世紀に築城された新羅の山城で、巨済島では最古の城郭であることがわかった。巨済島は『魏志韓伝』に「倭と界を接す」と記された弁辰の瀆盧(とくろ)国の有力な比定地だが、瀆盧国が新羅に併合された後、巨済郡という名前に変更されたとされ、廃王城もその頃築かれたと考えられている。

『魏志倭人伝』にも登場する狗耶韓国（弁辰狗耶国）－三国期には金官伽羅国と呼ばれる有力な国だが、この金官国の王宮があったとみられる遺跡が2003年、金海の市街地で発掘調査された。その遺跡が鳳凰（ポンファン）土城で、鳳凰台と呼ばれる低丘陵（標高45m）の周囲2kmに幅約20mの土塁がめぐらされていることがわかった。またこれも伽耶の有力国である多羅国の王墓のある陜川でも、玉田古墳群の南に接する城山里(ソンサンニ)土城が2009年に発掘され、黄江に面した標高53mの丘陵上に築かれた伽耶時代の土築の城がその後、新羅によって石築に改築されたと推定されている。

このような低丘陵上の土築の城が、伽耶時代の城の姿であることがようやくわかってきている状況で、山城については、200～400mの非常に小規模な山頂式山城が伽耶時代にも築かれていたらしいが、百済や新羅の山城とはプランや城壁構造が異なっている。2008年金海の良洞(ヤンドン)山城が発掘調査され、三角形の水口（石塁の排水口）の独特な形態から伽耶の山城ではないかと報道された。しかし発掘された城門は袖部が円弧状となる百済型である点、城壁基底部には新羅山城の特徴である基壇補築があるなど一伽耶の山城とは断定できない。2012年には大伽耶国の王都である高霊の主（チュ）山城の発掘調査が開始され、城壁基底部に基壇補築のあることがわかった。この城壁が大伽耶時代の遺構なのか新羅時代に修築されたものか意見がわかれているが、発掘調査では城壁の内部からもう一つ小規模な城壁が発見されており、こちらが大伽耶が築いた城壁であった可能性が高い。伽耶地域は百済と新羅の係争地域でもあり、城郭も様々な影響を受けていることが予想される。

ぼ築造された時の状態を留めていると考えてよく－化石的な遺跡といってよいかもしれない。

しかし、最近韓国の忠南錦山郡で百済扶余後期の遺物しか出土しない山城跡が見つかり注目されている。何故注目されるかというと、一時期の遺物しか出土しないということは、現在残っている遺構－石塁や城門などーがその一時期の遺構の状態を示していると考えられるからだ。その遺構の特徴を、他の時期のわからない山城と比較することで百済の扶余時代後期（7 世紀前半頃）の城郭を見分けることが可能となってくる。

その山城の名前は栢嶺(ペクニョン)山城といい、当時の百済と新羅の国境線地帯に築かれた山城の一つである。百済滅亡時のエピソードに出てくる東方の要衝として「炭峴」の候補地もこの山城の近くである。栢嶺山城は周囲 207ｍの小規模な山頂式山城だが、北側の稜線沿いからの侵入に対しては雉城が設けられ、2 ヶ所ある城門は懸門式で、城門が途中でクランクする－日本の中世山城でいう内枡形となっており、非常に堅固な造りとなっている。城内中央には木槨庫と呼ばれる倉庫ないし貯水用とみられる遺構も見つかっている。

注目すべきは、城門のプランで、城門左右の石垣が門の袖部分で角張らず円弧状にカーブしていることである。実はこの様式の城門は、百済の最後の都となった扶余の南方－林川の聖興(ソンフン)山城と論山の魯城(ノソン)山城の城門にあった。両城は城門の型式だけでなく、石塁が切石積みである点、懸門である点なども共通しており、部分的に見ると見分けがつかないほど似ている。両城が何らかの関係にあることは窺えたが、城の年代はわかっていなかった。

聖興山城では史跡整備のため、数年前に東門が発掘調査されていた。この時城門の石塁直下から百済扶余時代の土器が出土したため、現在見る遺構が百済扶余後期の築造ではないかと報告されていたのだが、扶余後期のプレーンな遺構を残す栢嶺山城の発見によってそれが裏付けられることとなった。聖興山城－魯城山城－栢嶺山城は、百済が扶余に都を置いた扶余時代の後半－七世紀前半に築かれた兄弟城ともいえ、今後扶余周辺の城郭調査の一つの指標とすることができるだろう。

(5)聖興山城の新城と古城－6 世紀初め・扶余遷都期の百済山城

聖興山城は、城名がわからないことが多い韓国の城の中では珍しく、百済滅亡後の復興軍の抵抗や羅唐戦争時にも登場する「加林城」に比定されている。加林城は、百済が 538 年、熊津（公州）から泗比（扶余）へ遷都する少し前、501 年に築かれたと記録が残る。現在城址を訪れると栢嶺山城との関係で紹介した大型の石築山城（周囲 1.2㎞）が見られるが、この石築城の東南側に接してもう一つの城があることはあまり知られていない。ちょうど石築城の南門から東門の城壁を共有するかのように東側の緩やかな谷を利用して小規模な包谷式山城が造られているのだ。南門から東門の稜線部分では東側の城の城壁の上に西側の石築城の城壁が乗っており、東側の城が最初に築かれ、その後西側の石築城が場所を少し移動させて造られたと考えられている。

東側の城は一見土築の城のように見えるが、部分的に石積みが見える箇所があり、その部分の観察によると、城壁の幅は 6.5～7m、高さは 1.8～2mで、城壁の下半部に高さ 80㎝ほどの自然石を使った野面積みの石垣がある。上半部が石築なのか土築なのかは現状では判断できない。東側の城の規模は西側の城より少し小さく周囲 850ｍぐらいで、南辺には城門らしき城壁の開口部もある。

西側の石築の城が「新城」、東側の城が「古城」ということになり、新城が扶余後期頃の城だとすると、501 年に築かれた加林城は古城に当たることになる。韓国ではこのように同じ場所に少し場所を変えて

(2)韓国古代城郭の調査－多くの城が6世紀以降の新羅の城だった

韓国ではこの20年ほど、城郭の調査が目覚ましく進展してきたが、地表調査や発掘調査を行ってみると、大半の城が新羅の山城であることがわかってきた。新羅は6世紀代に伽耶諸国を併呑し、北は尚州から小白山脈を越えて忠州と清州地域に進出して、556年には念願の漢江流域（現在のソウル地域）を押さえる。新羅は新たに進出した地域に拠点となる山城を築き、支配拠点とすると共に、次なる進出拠点としても活用した。

新羅山城の研究によれば、外郭線は石築城壁が多く、城壁基底部に「基壇補築(きだんほちく)」と呼ばれる三角形状の外壁補強を設けるのを特徴とする。また城門入口には階段などなく地面から1.5～3m近い高さの垂直の壁となっている場合が多い－これは「懸門(けんもん)」と呼ばれ、新羅山城の特徴とされてきたが、懸門構造は高句麗地域に淵源を持ち、百済地域にも事例があることが最近わかってきた。いずれにしても防御するのに有効な戦闘的な城門構造で平時には木製の階段や梯子を使って出入りしていたと思われる。懸門は日本の山城にはないと思われていたが、屋嶋城の城門で初めて確認され、鬼ノ城や大野城でも懸門構造だったと推定される遺構が見つかっている。

(3)峨嵯山堡塁群・南城谷遺蹟の発見－5世紀後半の高句麗南進拠点

最近の注目すべき調査成果として、5世紀後半頃、漢城期の百済（475年滅亡）を滅ぼした高句麗の南進拠点が見つかり始めたことである。ソウルの漢城期百済の風納(プンナプ)土城を見下ろす漢江北岸の峨嵯(アチャ)山の稜線上に並ぶ峨嵯山堡塁群（約20箇所）、滅ぼされた百済が第二の都とした熊津（公州(コンジュ)）の東方30kmに迫った忠北清原郡の南城谷(ナムソンゴル)遺跡などが続々と見つかっている。現在最も南下した拠点は忠南大田の月坪洞(ウォルピョンドン)遺跡といわれている。

高句麗の南進拠点というと大規模な石築の山城を想像してしまうが、これらの遺跡はそのような常識を覆すものだった。峨嵯山堡塁群は一つの堡塁が径50m（九宣洞堡塁）ぐらいのものもあり、最大のものでも周囲210m（峨嵯山第4堡塁）。しかし規模こそ小さいが横矢掛かりとなる雉城(ちじょう)を何箇所も設けるなど戦闘的な施設である。また南城谷遺跡や月坪洞遺跡は、プランは包谷式をとっているが、城壁は土塁でも石塁でもなく木柵の城。ただし、ただの木の柵や板塀ではなく「木柵塗泥城」と呼ばれる二重の木柵に塗り壁的なものを付加した特殊な城壁構造だったと推定されている。

実は5世紀代の城については、新羅、百済共によくわかっていない。漢城期の百済の城は風納土城や夢村(ムソン)土城といった前代の楽浪郡治の系譜を引く平地に土築城壁をめぐらせる城だったし、新羅も王宮は平地にあり、南山の北麓に都堂山土城など小型の丘城を設けていたらしい（有名な慶州の観光地・月城も5世紀後半の築造）。まだはっきりとしたことはわからないが、朝鮮半島の南部で本格的な山城が登場するのは意外と新しい時代のことらしい。

(4)7世紀の百済山城の実態－栢嶺山城の発掘

先に「百済山城の実態はまだよくわかっていない」と書いたが、それは朝鮮半島の山城が三国時代から朝鮮王朝（李氏朝鮮）時代まで長い間－継続的あるいは断続的に－同じ城が利用されてきたからで、現在見ることのできる城郭の遺構がいつの時代に造られたものなのか、はっきりとわからないことによる。その点－日本の古代山城は、少ない遺物の出土量からみても、また修築工事の痕跡など見られない遺構の状況からみても、比較的短期間に築造され廃城となっている。その後使用されなかったので、ほ

韓国古代城郭からみた鞠智城

向井一雄（古代山城研究会・代表）

1．はじめに

日本の古代山城のルーツは中国・朝鮮半島に求められるため、大陸の城郭と比較することは重要であると、指摘されてきたが、必ずしも比較研究は進んでいるとはいえない。しかし最近の日韓の古代山城研究の進展は目覚ましく、韓国や中国東北部の城郭についても地表調査や発掘調査が実施され、格段にその実態が知られるようになってきた。鞠智城の本格的な調査・整備が始まった20年前には将来の課題であった比較研究が行える時代が近づいてきたといえるだろう。今回は調査の進む中国・朝鮮半島ー特に韓国の古代山城の調査成果をご紹介し、日本の古代山城との比較検討を試みたいと思う。またその過程で朝鮮半島城郭史における日本古代山城の位置付け、そして鞠智城の“源流”についても考えてみたい。

2．韓国における城郭調査の進展

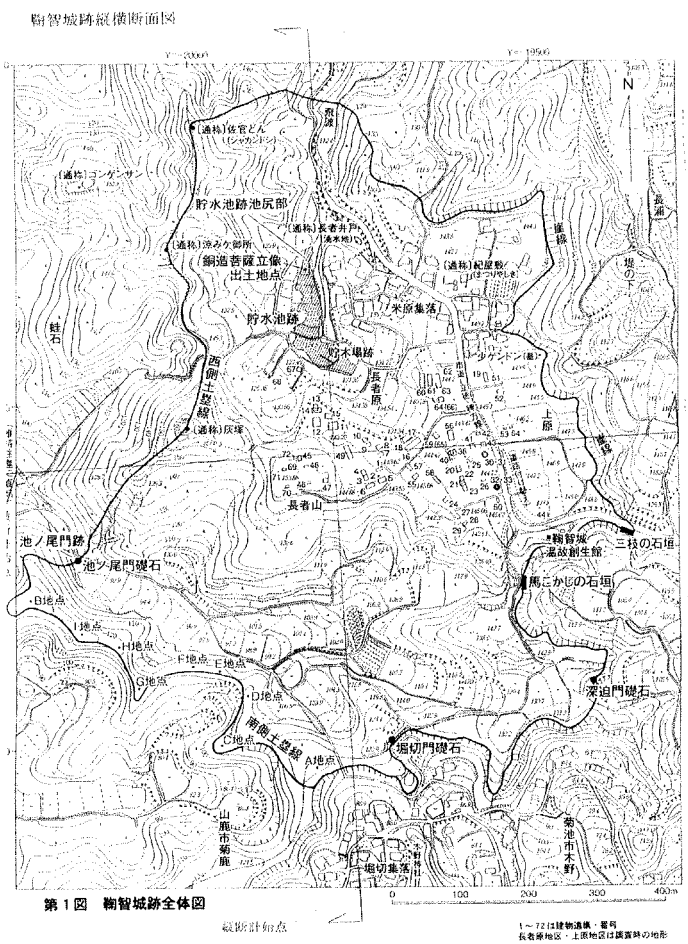
(1)百済式山城という幻影ー日本の古代山城は百済山城のコピーなのか？

朝鮮半島の山城では、占地・縄張り形態からみた「包谷式」と「テメ式（韓国語で山頂式・鉢巻式の意味）」の分類が広く使われているが、両者の中間的な山城も多く実際に分類するとなると単純には分けられない。また包谷式でも大規模なものを「連峰式」と呼ぶこともある。

日本の古代山城は、百済からの亡命貴族らが築城を指導したことから「百済式山城」だとよくいわれる。しかし百済地域の山城も含めて朝鮮半島南部の山城は周囲1㎞未満のテメ式山城が大半を占め、各地の拠点となる山城でも1㎞内外のものが多い。それに対して日本の山城の規模や形態は、最小の播磨城山城でも1.6㎞で、だいたい2～3㎞までのものが多い。型式的は大型の包谷式ばかりでテメ式はない。鬼ノ城や石城山城のような城を鉢巻式と呼ぶのは朝鮮半島の分類を誤解しており、大野城を包谷式でなく鉢巻式と書いている文章を読むと理解に苦しむ。大野城は包谷式の中でも大規模な連峰式であり、高句麗地域の山城にはこのような城もあるが同時代の百済、新羅地域ではこのような巨大山城はほとんどない。

韓国の山城は三国が統一された統一新羅時代になってそれまでよりも比較的大きな山城が造られるようになり、その後高麗時代に軍事用の山岳城郭と古邑城と呼ばれる郡治など行政拠点の城に分かれていく。日本の山城は時期的にも形態的にも統一新羅時代の城に近いが、それでも日本の城の方が大きく、かつ全周規模が揃っているーこれは何らかの「基準」があってーそれに合わせて平面プランを設計しているからだと考えられる。また北部九州の山城の一部（いわゆる神籠石と呼ばれる山城）には外郭線最低点（谷間の水門部分）が平地まで下って非常に低い位置にあるのが特徴で、このような特殊なプランは朝鮮半島の同時代の山城には見られない。

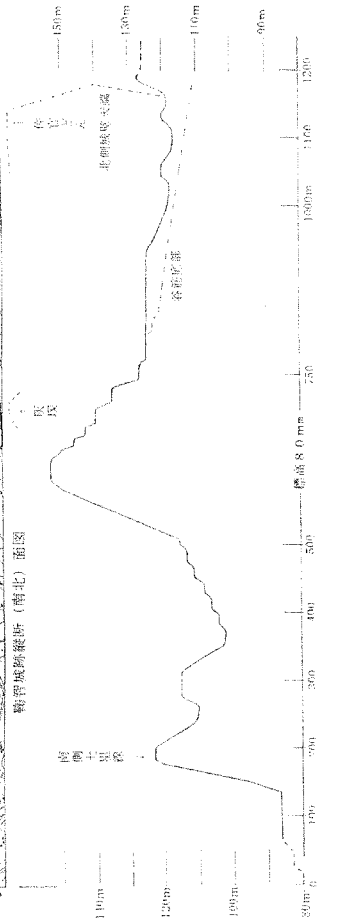
百済人が指導したから百済式だというのは、あまりにも文献に引っ張られた解釈であり、そもそもどのような特徴もって百済式というのかーそれほど「百済山城」の実態はまだよくわかっていない。朝鮮半島の城郭史の流れの中で日本の古代山城を位置づけていく見方こそ今必要とされている。

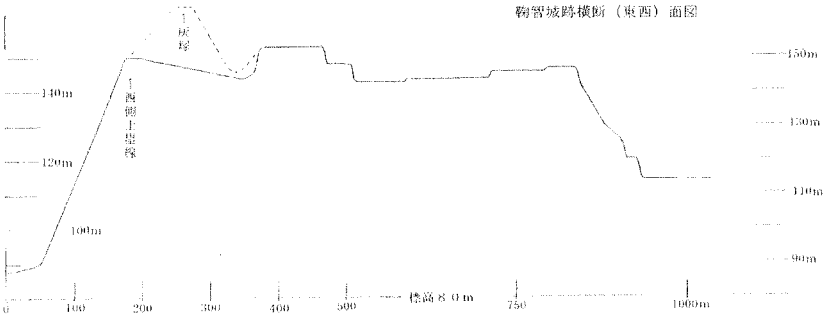


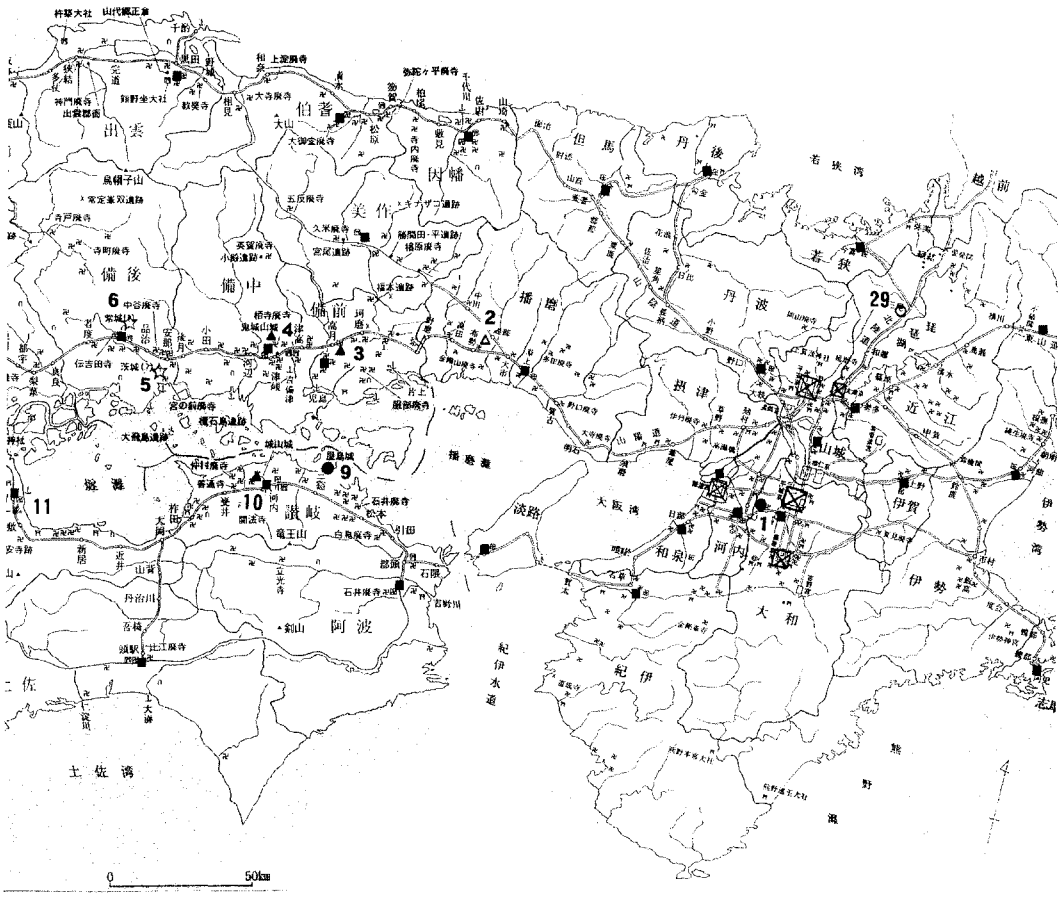
第１図　鞠智城跡全体図

縦断計始点

1～72は建物遺構・番号
長者原地区・上原地区は調査時の地形







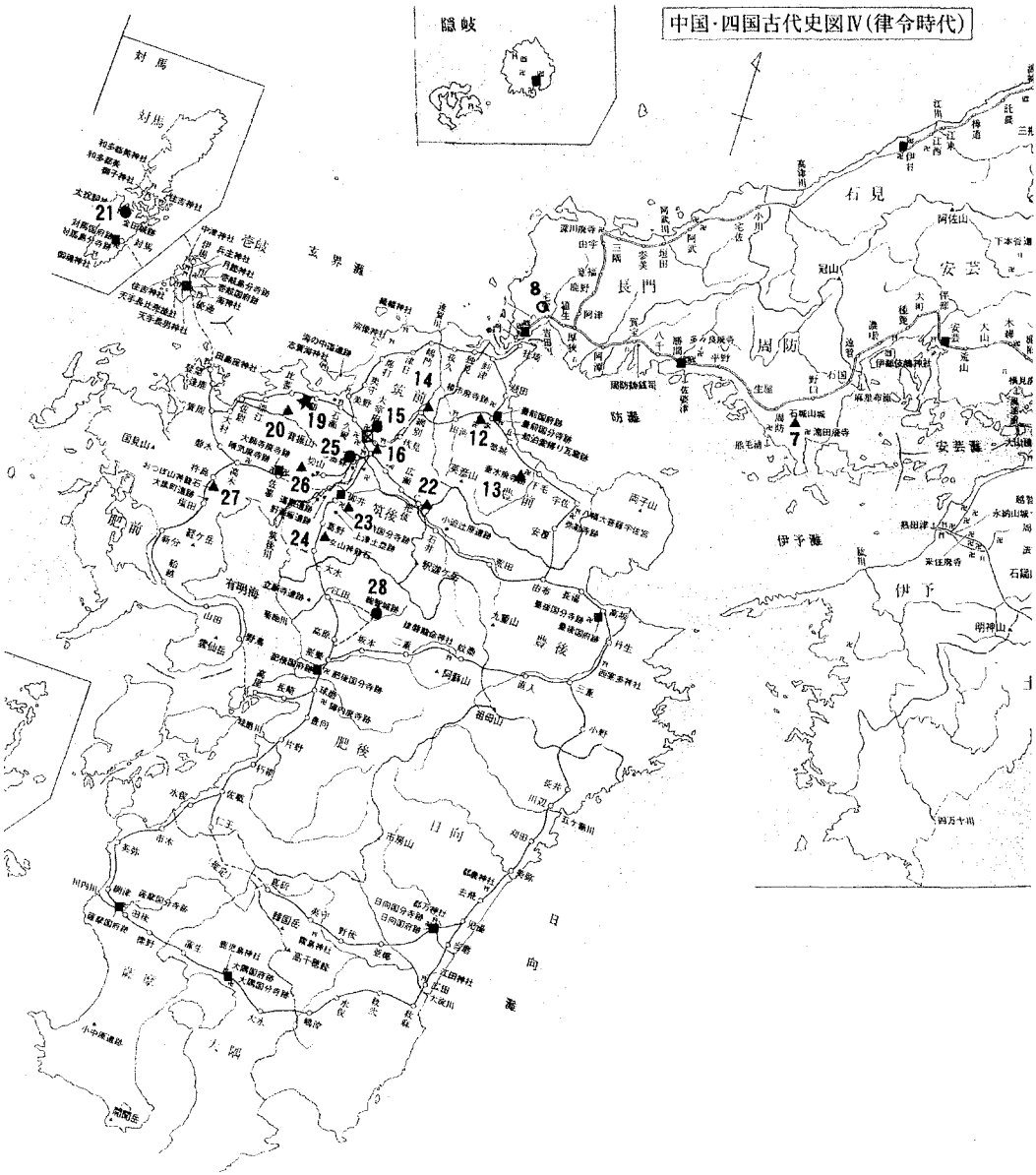
古代山城分布図

▲ 神籠石系山城　● 朝鮮式山城　★ 奈良時代山城　図 都府　■ 国府

※山城記号の白抜きは所在不明の想定地

※背面の図は新版「古代の日本」３・４・６の古代史図Ⅳ（律令時代）を集成

中国·四国古代史図Ⅳ(律令時代)



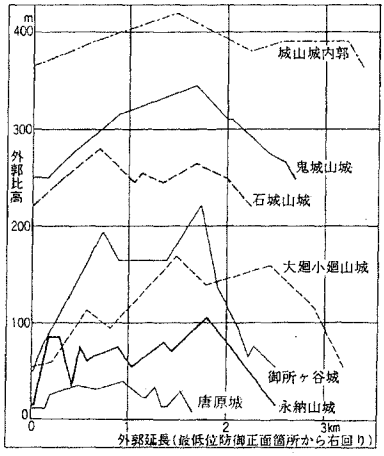


図5　瀬戸内海沿岸域神籠石系山城外郭立地状態図

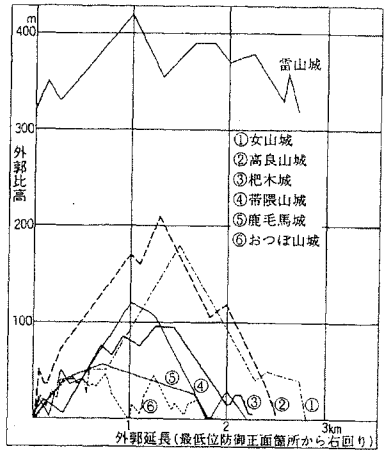


図6　北九州神籠石系山城外郭立地状態図

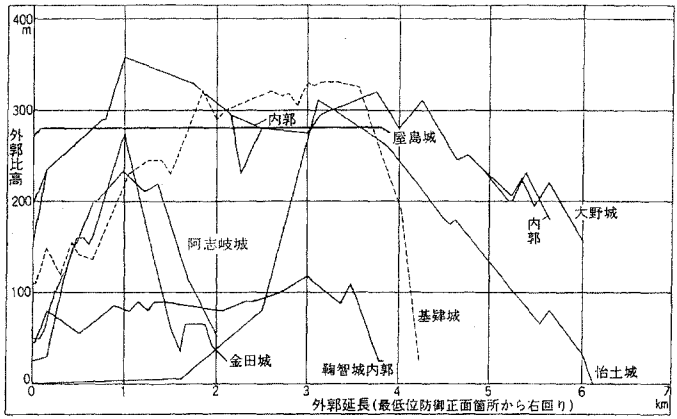
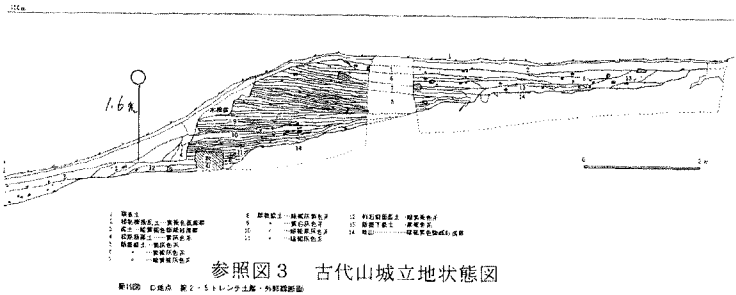
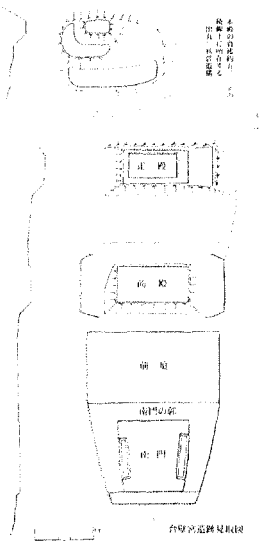
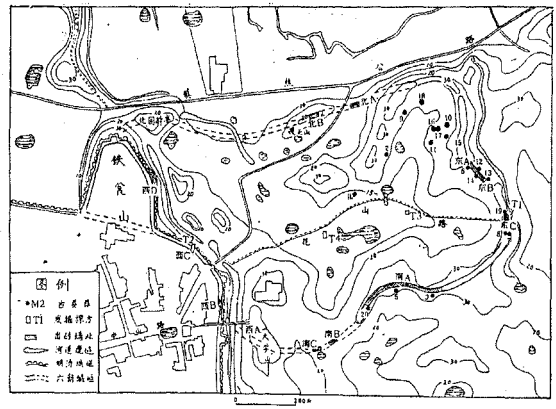


図4　朝鮮式山城等外郭立地状態図



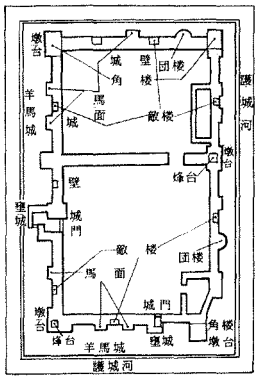
参照図3　古代山城立地状態図





京口（現鎮江）城　晋陵羅城地形図(据1950年測绘的地图补充绘制)

石包城跡空撮



中国城郭（郡城級）模式図

【参考資料】　『通典』記載の攻城守城兵器及び艦艇

※攻城兵器

・「轒轀車」・「飛雲梯」・「拋車」・「車弩（絞車弩）」・「巣車」

・「木幔」・「小頭木幔」・「填壕車」・「衝車」・「攻城槍（短槍）」

・「砲（投石機）」・「火箭」・「火杏」

※守攻城兵器

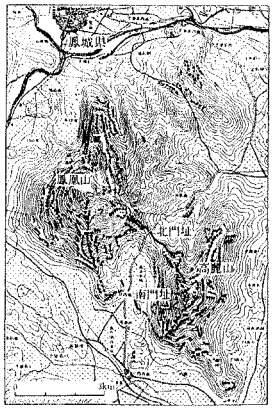
・「檑」・「狼牙拍」・「鉄火床」・「布幔」・「床弩」・「砲（投石機）」

・「鹿角木」・「塞門刀車」・「守城槍（長槍）」

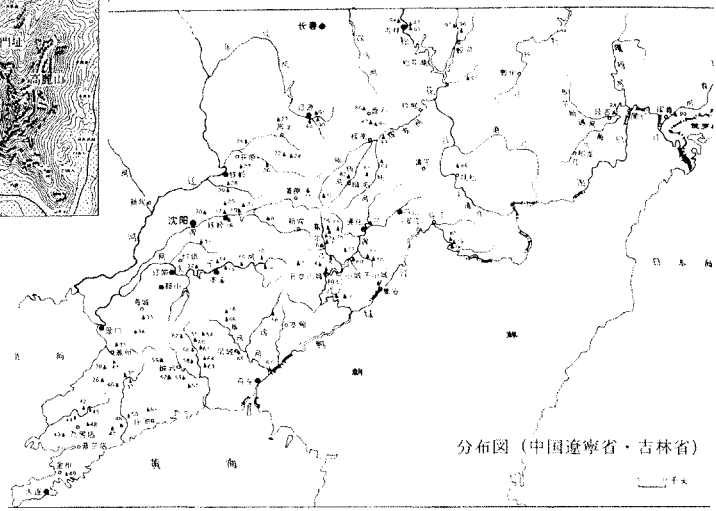
※水戦用具（艦艇）

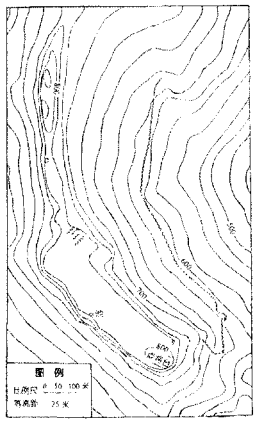
・「樓船」・「蒙衝」・「闘艦」・「走舸」・「遊艇」・「海鶻」

参照図２　中国城郭



鳳凰山山城位置図





图四　辽宁桓仁五女山城平面图

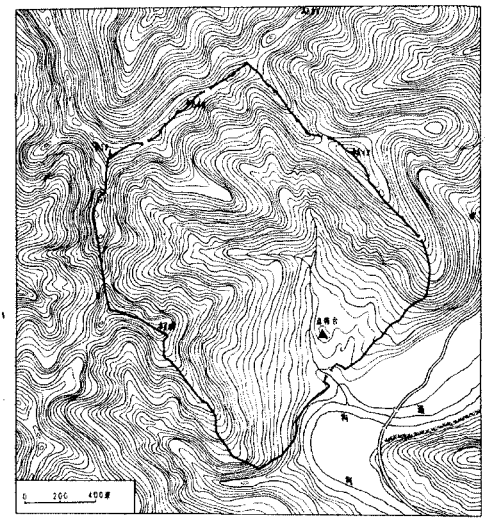


图 52　九都山城平面图

参照図１　高句麗山城

日本書紀（６世紀以降）の記載する対外用兵事例及び続日本紀の用兵記事

継体　９年	継体・物部（百済使者の送使）船師５００ＶＳ任那
２１年	継体・近江毛野臣（征新羅将軍）６０，０００人
	継体・物部大連麁鹿火？ＶＳ筑紫君磐井？
宣化　２年	宣化(欽明並立6)・大伴百済支援
３年538	(欽明並立7)・百済から仏教伝来
欽明　９年	欽明・某（百済支援）３７０人ＶＳ高句麗
１５年	欽明・某（百済支援）１，０００人馬１００匹船４０隻ＶＳ新羅
１７年	欽明・火君（百済王子支援）１，０００人 ＶＳ新羅
２３年	欽明・新羅が任那併合、・紀 ＶＳ新羅・大伴ＶＳ高句麗
崇峻　４年	崇峻・紀男麻呂等（任那再建軍）２０，０００人ＶＳ新羅
推古　８年600	聖徳・境部臣（征新羅将軍）１０，０００人ＶＳ新羅・遣隋使
１０年602	聖徳・来目皇子（征新羅将軍）２５，０００人
１５年607	聖徳・遣隋使→翌年の帰国に隋使来日
１７年609	聖徳・筑紫大宰の初見
３１年623	推古・境部臣勇摩侶等（征新羅将軍）数万人（計画）
３２年624	※唐が高句麗、百済、新羅を冊封する。
舒明　２年630	舒明・遣唐使（初回）→翌々年の帰国に唐使来日
孝徳大化１年645	※唐の第1次高句麗遠征→冊封制の消滅
３年647	渟足柵と柵戸の設置
４年648	磐舟柵と柵戸の設置
白雉１年650	※新羅が百済を撃破
３年652	※唐が新羅の新王を冊封する。
斉明　１年655	※高句麗と百済に攻撃された新羅が唐に援軍要請する。
４年658	斉明・阿部臣某船師１８０艘ＶＳ蝦夷
５年659	斉明・阿倍臣某船師１８０艘ＶＳ蝦夷
６年660	斉明・百済滅亡・阿倍臣某船師２００艘ＶＳ粛慎
７年661	天智・阿曇比邏夫連等百済派遣・狭井連檳榔（百済復興王子加勢）５，０００人
天智　１年662	天智・阿曇比邏夫連等（百済復興王子援軍）船師１７０艘
２年663	天智・上毛野君稚子等（百済復興王子援軍）２７，０００人
	天智・廬原君臣等（百済援軍）１０，０００人
	８月　白村江の戦いの損害＊１，０００艘（新羅紀）＊４００艘（旧唐書）
３年664	５月　唐使郭務悰来日→１２月帰国　この年対馬・壱岐・筑紫に防・烽、水城構築
４年665	８月　長門国城・大野城と椽城を構築　９月 唐使劉徳高等２５４人来日→12月帰国＝送使（遣唐使）
６年667	３月　近江遷都　１１月唐使司馬法聰等来日（４年の遣唐使を伴う）→４日後に帰国＝送使
	この月に高安城・屋島城・金田城を構築
７年668	天智即位
８年669	８月　高安城修築（冬に施工）　この年遣唐使、唐使郭務悰等２，０００人来日（重出記事）
９年670	２月　高安城修築、長門に１城・筑紫に２城の構築（重出記事）
１０年671	１月　唐使李守真来日→８月帰国　１１月唐将軍郭務悰６００人＋捕虜難民１，４００人＝船４７隻で来る→帰国翌年５月　１２月天智没
天武即位前672	５月　30日唐将軍郭務悰帰国　６月21日天武立つ→天武＝伊賀国郡司層数百人+伊勢国郡司層５００人+美濃国３，０００人+尾張国２０，０００人→(多臣品治３，０００人、置始連菟１，０００人、竜田守り３００人逢坂の屯所数百人、石手守り数百人、近江方別動隊２００人)
持統　４年690	５月　藤原宮造営着手→竣工遷都は７年１２月
文武　２年698	５月　大野・基肄・鞠智の各城を補修（大宰府）・８月高安城の修理（直営）
３年699	９月　高安城の修理（直営）・12月　三野・稲積の各城を補修（大宰府）
大宝　１年701	８月　高安城の廃止
和銅　１年708	１月　平城京遷都詔→竣工遷都は３年３月
和銅　２年709	３月　蝦夷地（日本海沿岸）への進攻
養老　３年719	12月　備後国茨城・常城を廃止、（７月に按察使の設置）
４年720	隼人征圧、蝦夷征圧＝征夷将軍
神亀　１年724	多賀城設置
天平　15年743	鎮西府の設置（前年に大宰府を廃止）→天平１７年に大宰府に復活
天平勝宝 8年756	怡土城着工→768年完成
天平宝字 1年757	防人の本格廃止（※天平2年730に一時停止）
3年759	博多大津の初見
8年764	博多大津城

古代山城要目一覧

		城名 律令制の所在地	城壁位置 比高m	規模	形態	立地 占地形態	機能	指向地 (防御正面)	国府 経路km	歴史的環境 屯倉km	歴史的環境 国造氏	備考
瀬戸内海沿岸域	1	高安城 畿内・大和国平群郡	?～420	未詳 (大型)	山上 (山)	脊梁山脈山頂部 嶮山城	守城 単成	大阪平野 大和川隘路	河内9			朝鮮式
	2	城山城 山陽・播磨国揖西郡	城壁未詳		山上 (山)	山塊別峰山頂 嶮山城	守城 単成	揖保川下流	18		針間	神籠石
	3	大廻小廻山城 山陽・備前国上道郡	55～160	中型	抱谷 (山)	独立山塊頂部側面 緩山城	前衛 単成	赤坂郡盆地	6	児島16	上道臣	神籠石
	4	鬼城山城 山陽・備中国賀夜郡	250～345	中型	山上 (山)	山塊別峰山頂 嶮山城	守城 単成	賀夜郡平野 吉備の津	5	児島24	加夜臣	神籠石
	5	茨城 山陽・備後国安那郡	所在不明									奈良
	6	常城 山陽・備後国葦田郡	所在不明									奈良
	7	石城山城 山陽・周防国熊毛郡	230～290	中型	山上 (山)	独立山塊頂部 嶮山城	守城 単成	柳井平野	48		周防直	神籠石
	8	長門城 山陽・長門国豊浦郡	所在不明				守城 単成					朝鮮式
	9	屋島城 南海・讃岐国山田郡	260～280	中型 (南嶺)	山上 (山)	独立山塊(島)頂部 嶮山城	守城 単成	讃岐平野 備讃瀬戸	20			朝鮮式
	10	城山城　南海・ 讃岐国阿野・鵜足郡	250～410	大型	抱谷 (山)	独立山塊頂部 嶮山城	守城 単成	坂出平野 備讃瀬戸	1		讃岐君	神籠石
	11	永納山城 南海・伊予国桑村郡	15～90	中型	抱谷 (山)	半独立山塊側面 緩山城	前衛 単成	今治平野	7		小市直	神籠石
	12	御所ヶ谷城 西海・豊前国京都郡	50～215	中型	抱谷 (山)	脊梁山脈山頂山腹 嶮山城	守城 単成	行橋平野	6	平鹿10 桑原15	豊	神籠石
	13	唐原城 西海・豊前国京都郡	10～50	小型	抱谷 (山)	丘陵先端部山腹 緩山城・里山	前衛 単成	中津平野	20	(上膳県)	宇佐君	神籠石
玄界灘沿岸域	14	鹿毛馬城 西海・筑前国嘉麻郡	0～55	小型	抱谷 (山)	丘陵先端部山腹 緩山城・里山	前衛 単成	穎田盆地	37 豊前26	鎌8 穂波10		神籠石
	15	大野城　西海・ 筑前国御笠・糟屋郡	115～360	大型	山上 (山)	独立山塊頂部 嶮山城	守城 連繋	福岡平野 大宰府盆地	大宰府 1	那津11		朝鮮式
	16	阿志岐城　西海・ 筑前国御笠・嶺屋郡	45～280	小型	抱谷 (山)	独立山塊山頂山腹 嶮山城	守城 連繋	大宰府盆地	6			神籠石
	17	三野城 西海・筑前国那珂郡	所在不明									朝鮮式？
	18	稲積城 西海・筑前国那珂郡	所在不明									朝鮮式？
	19	怡土城 西海・筑前国怡土郡	0～370	大型	抱谷 (平やま)	独立山塊山頂斜面 緩山城・里山	前衛 単成	糸島平野 唐津湾	27			奈良
	20	雷山城 西海・筑前国怡土郡	320～425	中型	山上 (山)	脊梁山地中腹山頂 嶮山城	守城 単成	糸島平野 唐津湾	24	嶋郡15		神籠石
	21	金田城 西海・対馬国下県郡	25～276	小型	抱谷 (山)	山地稜線側面 嶮山城	守城 単成	浅茅湾	14		下県	朝鮮式
有明海沿岸域	22	杷木城 西海・筑前国上座郡	5～95	小型	抱谷 (山)	丘陵先端側面 緩山城・里山	前衛 連繋	朝倉盆地	朝倉宮 9		筑紫君	神籠石
	23	高良山城 西海・筑後国御井郡	25～210	中型	抱谷 (山)	山地先端側面 緩山城	前衛 連繋	筑後平野	2		筑紫君	神籠石
	24	女山城 西海・筑後国上妻郡	5～180	中型	抱谷 (山)	丘陵先端側面 緩山城・里山	前衛 連繋	筑後平野	18	(八女県) (上妻県)	筑紫君	神籠石
	25	基肄城 西海・肥前国基肄郡	110～330	大型	抱谷 (山)	山地先端頂部側面 嶮山城	守城 連繋	筑後平野	大宰府 10			朝鮮式
	26	帯隈山城　西海・ 肥前国佐嘉・神崎郡	5～120	中型	抱谷 (山)	丘陵先端側面 緩山城・里山	前衛 連繋	佐賀平野	5			神籠石
	27	おつぼ山城 西海・肥前国松島郡	0～40	小型	抱谷 (山)	丘陵頂部・側面 緩山城・里山	前衛 連繋	武雄盆地	32		松津	神籠石
	28	鞠智城 西海・肥後国菊池郡	40～118	中型	山上 (平さん)	台地状丘陵端部 緩山城・里山	前衛 単成	熊本平野	28		火君	朝鮮式？
	29	三尾城 東山・近江国高島郡	所在不明					琵琶湖西岸 若狭湾経路	55			朝鮮式？

註記

＊比高：城山山麓平地からの比高
＊規模（全周）：小型＝650丈(≒2000m)前後、中型＝1000丈(≒3000m)前後、大型＝1300丈(4000m)以上
＊形態：山上＝頂部鉢巻き型、抱谷＝傾斜面囲繞型・(山)＝山城、(平やま)＝ひらやま城、(平さん)＝ひらさん城→日本城郭の分類観
＊機能：守城＝有事籠城、前衛＝進攻拠点・単成＝単独所在姓。連繋＝支城網的相関性あり。
＊備考：朝鮮式＝天智紀の記載、？付きはその準用

②新設

・怡土城：天平勝宝８年(756)の着工、神護景雲２年(768)の完成

(2) 筑紫大宰府（つくしのおおみこともちのつかさ・遠の朝廷）

①筑紫都督府

・日本書紀の認知する倭国内の唐国制度直接記載の唯一例

・唐国安東都護府筑紫都督府（唐国の直轄地）→九州を所管か？

②筑前国の国府を兼帯

・有明海沿岸域（火国）への筑紫国分国（筑後国）の分断的挿入

＊有明海沿岸域山城フォーメーションの中心域を掌握

③管内の山城管理

・文武２年(698)：大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕治はしむ。

・文武３年(699)：大宰府をして三野、稲積の二城を修らしむ。

④鎮西府

・天平 14 年(742)に大宰府を廃止して翌年末に設置するも、同 17 年には廃止されて大宰府が復活する。

・将軍、副将軍、判官、主典

⑤怡土城の新設と博多大津城

・天平勝宝８年(756)の着工、神護景雲２年(768)の完成

・大弐吉備朝臣真備

・博多大津城：営城監の初現が天平宝字８年(764)

(3) 怡土城と鞠智城

①怡土城

・唐式山城（仮称）：平山（ひらやま）城→平地箇所の兵営機能

・フォーメーション：大宰府の対海上用陸上軍事拠点

②鞠智城

・唐式山城（仮称）：平山（ひらさん）城→山頂平坦箇所の治所機能

・フォーメーション：大宰府の後背地方への軍政拠点（日本型鎮城？）

＊東北地方の城柵を都城型城郭の日本化した軍政拠点に見立てれば、鞠智城はその初現形態と評価できるのではないか。

・倭国内の戦時体制化

②唐国安東都護府熊津都督府（前百済国領）領内での倭国軍の軍事行動

・領内に侵入した倭国軍とゲリラ化した残存百済国軍の排除掃討

・侵攻倭国軍の主要兵力と兵站及び後方支援の問題？

③白村江の決戦（海戦）：唐国軍が倭国軍を殲滅

・倭国水軍（船師）の壊滅

・唐国水軍（艦隊）と倭国水軍（船団）との戦力での組織及び装備の優劣（較差）

・唐国による敵対外藩国の本拠地への懲罰的侵攻→百済国王都制圧の電撃作戦が前例

④倭国（天智政権）の緊急の防衛体制と迎撃軍事施設の構築

・倭国兵力は迎撃用水軍が壊滅状態→陸上兵力での対応＝山城の新設と第一期山城の改葬

・熊津都督府治所から倭国王都（大和）への海上侵攻経路への哨戒通信施設（「烽」）と要地（中継地）防御用山城の設置及び陸上兵力の増強（「防」）

・那津官家（屯倉）への水際防御施設の整備が不可能な状況（占領容認）

・唐国軍侵攻に結果的に防御機能不全の百済式山城導入の問題点

＊戦時体制解消後の早期退役及び用途変更

⑤筑紫都督府（天智紀６年１１月の条）

・唐国及び唐国百済鎮将の使者の倭国係留地（橋頭堡・占領地）は那津官家（屯倉）

・大陸への倭国前進施設の博多湾沿岸域から後背山間部への後退→筑紫大宰府

・有明海沿岸域（火国）への筑紫国分国（筑後国）の分断的挿入

(2) 倭国の敗戦後処理

①天智政権の遷都（王都の逃避）

・唐国戦勝将軍の王都来訪と軍事施設型都城の非整備

・朝鮮半島での倭国権益の放棄と敗戦の責任回避→倭国内での敗戦責任追及の非成立

・畿外への遷都→東国への依存→西国への依存低下

②天武政権の誕生と戦後処理

・唐国の倭国派遣将軍の帰国と大海人皇子の武力決起（クーデター）

・戦勝国への傾倒と統治体制の倣効及び外交関係の修復

・朝鮮半島の権益放棄

5　律令体制の整備と山城施策

(1) 山城の修理と退役及び新設

①既存山城の視察と修築及び廃止

・高安城：持統３年(689)、文武３年(699))、大宝元年(701)に廃止

・大野城と基肄城：持統３年(689)?、文武２年(698)（後掲）

・鞠智城：文武２年(698)（後掲）

・三野城と稲積城：文武３年(699)

・茨城と常城：養老３年(719)に廃止

・嶮山城類：専守防衛（ディフェンス）
・国堅固級及び大型所堅固級
④進攻拠点（橋頭堡）型の機能
・緩山城類：前衛基地（オフェンス）
・城堅固級及び小型所堅固級

(3) 築城の施策と施行

①経緯（別添の年表）
・第一期：新羅征圧画策期（推古８年 600～同３２年 624=唐が高句麗、百済、新羅を冊封）
渡海出兵の戦時体制の整備に基づく水軍徴発地方への経年的な軍事施設（山城設置）
→施策の長期的な個別施工のため紀への記載事項には至らない？。
・第二期：百済支援の参戦準備期（大化５年 649 の百済皇子入質状況下での百済の新羅に敗北と唐の高句麗、百済の征討施策への対応。斉明６年 660 の唐と新羅による百済征服に伴う百済再建への参戦）
・第三期：天智２年 663 の白村江での惨敗への対応の緊急迎撃軍事施設（山城）の設置
→天智紀の築城記載
・第四期：既存山城の改修期（藤原宮遷都・持統７年 693～高安城退役・大宝１年 701）
※必要現役山城の「近代改装」か？
・第五期：怡土城の新設と博多大津城の整備→天平勝宝８年(756)の着工、神護景雲２年(768)の完成及び天平宝字８年(764)初見の博多大津城の整備

②築城と退役
・築城記載：第三期のみ。
・就役（運用）：三尾城（戦歴）、鞠智城と三野城と稲積城（修築）
・退役：高安城、茨城、常城

③施工の周辺環境
・夯土（版築）工法のでの施工→氏寺の造営の土木技術の応用
＊飛鳥、白鳳前期の寺院（畿内外以西）：播磨、備前、備中、備後、安芸、讃岐、筑前
・施工の土木作業要員数（被使役者たる在地民と中間管理者たる国造層及び郡司層）

④城兵（戦時必要兵力）
・守城兵員と守城要員
・糧秣

⑤山城と都城（王都・京城）
・城壁無き都府の整備

4　天智紀の山城（第三期）

(1) 百済国再建への倭国（天智政権）の軍事介入

①百済国滅亡
・唐（中華帝）国の外藩国制圧→直轄版図化
・倭国内での亡命百済政権の擁立と再建への現地軍事介入（派兵）→唐国への敵対

3　西日本の古代山城

(1) 城郭形態

①山城

・頂部占地型（山上型或いは頂部鉢巻き型）

・山腹占地型（簸箕型又は抱谷式或いは傾斜面囲繞型）

・居住適地の谷間（水原共伴地）を主体域とする。→山頂、山腹共に抱谷式の立地

②構成（縄張り）

・単郭構成囲繞型

＊付属郭を伴う場合を含む

＊唯一の例外　讃岐城山城（屋島城設置に連繋した山上型＝内郭への改造か？）

③規模（全周・確証２１箇所）

・2000m（約 650 丈）前後＝小型

唐原城、鹿毛馬城、阿志岐城、金田城、把木城、おつぼ山城

・3000m（約 1000 丈）前後＝中型

大廻小廻山城、鬼城山城、石城山城、屋島城、城山城（内郭）、永納山城、御所ヶ谷城、雷山城、高良山城、女山城、帯隈山城、鞠智城

・4000m（約 1300 丈）以上＝大型

大野城、怡土城、基肄城、城山城（外郭）

④城壁

・局部石塁付き土城（土塁）

・城壁設備（女墻・馬面・敵楼等）の未検証

(2) 設置と主務

①分布

・三関（鈴鹿、不破、愛発）以西

・瀬戸内海沿岸域

・玄界灘沿岸域

・有明海沿岸域

＊例外：内陸部＝三尾城

②分布の示すフォーメイションの形成とその構成

・瀬戸内海沿岸＝個別単成型（自己完結的な単独所在）山城の配置

＊神籠石系山城の配置：難波津から那津への海上動線に対応

＊朝鮮式山城の配置：那津から難波津への海上動線に対応

・玄界灘沿岸域＝個別単成型（自己完結的な単独所在）山城の配置

＊三野城と稲積城は連繋併存型（那津周辺の局地対応）？

・有明海沿岸域＝連繋併存型（支城網的な相関所在）山城の配置　※鞠智城は個別単成型

＊神籠石系山城の配置と朝鮮式山城との補完性

・大宰府周辺＝連繋併存型（局地対応）山城の配置

③有事籠城（守固城）型の機能

(2) 高句麗山城の相関平地城府

①都城

・下古城子古城（王都）＝五女山山城、通溝（国内）城（王都）＝山城子（丸都）山城

②平地城・平原城＝前中華王朝の郡城・県城奪取後の治所

・前玄菟郡治所（玄菟城＝平原城）＝高爾山城（新城）

・前遼東郡建安城（県治所）＝青石嶺山城（高句麗城子山城）、鬚河尖古（安平）城（県治所）＝虎山山城、河龍古城（県治所級：延吉市）＝城子山山城

※魏　存成『高句麗遺跡』では高句麗山城の集積を、中国国内９９箇所・朝鮮半島２６箇所とする。

2　律令体制下の古代山城の倣傚たる唐代前期の山城

(1) 中国南朝時代

①都城（中国一般：参考）

・形態：天子、皇帝、王諸侯等の統治者の居所（宮城・内城）を中心に、隣接する役所（統治機構）を設け(皇城)、その周囲に居住（街）区を区画配置して、これらの周囲に防御施設の城壁と護城河を構築する。→都城型城郭＝平城

・類型：都（京城）から県城及び鎮府城に至るまで各統治段階の治所に建造される。

・城郭：護城河と城壁（版築、磚築、石築）の四囲、及び城壁上の各種防御設備の設置

・関連：長城、烽燧（＝監視哨）

②東晋の山城

・所在：京口（現鎮江）城、晋陵羅城

・城郭：土塁（版築城壁）の囲繞→城壁内外面の裾部に数段積みの条磚を施す。

・形態：抱谷式

・機能：晋陵郡治所と北府（北朝討伐軍衛）の鎮守城

・規模：周囲約５km

(2) 唐時代前期

①山上式都城型城郭（日本城郭形態の「平山城＝ひらさんじょう」型）

・石包城：唐前期の沙州（現甘粛省）の雍帰鎮城

・立地：台地状低小山地頂部

・機能：西域（河西回廊）の地域的戦術拠点

②山腹式都城型城郭（日本城郭形態の「平山城＝ひらやまじろ」型）

・松潘城：唐前期の松州（現四川省）の県城で、現城跡は明代の築城

・立地：河岸小盆地の山麓から山地斜面

・機能：吐蕃への要路の県城、広地域的戦略拠点

③山上式烽燧型哨堡

・合壁宮：唐洛陽城の離宮（則天武后期）で、宮殿又は官署的配置構成

・立地：比高 70～80ｍの緩やかな尾根筋頂部先端

・機能：私見＝洛陽城の直近郊外の烽燧台兼哨堡→洛陽城南面西端の厚載門から 17 km（唐代の路程では 30 里＝唐軍防令の烽燧台設置規定に即応）

古代山城のフォーメイションと鞠智城

出宮徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）

1　日本古代山城の祖型たる高句麗山城

(1) 形態分類（魏　在成氏に依る）

①簸箕型＝抱谷式、包谷式、仰盆式、栲栳峰式、傾斜面囲繞型

・占地：嶮しい山地で、一方（前面）が低く三方（側方と背後）が高い尾根筋に囲まれて、
　　深い谷筋と広く緩やかな斜面（扇状）地を備えた地形。
　　→方向性は多様であるが、平面的には簸箕（篩い用の箕）の形態。

・城郭：懸崖の地形は自然利用、緩やかで平低な所に城壁を築く。

・機能：兵士や住民が留まっての防御及び器材物資の備蓄

・類型：過半数を占める。

・規模：大半が大型と中型

②山頂型＝鉢巻式、頂部鉢巻型

・立地：高峰山頂部

・占地：全周か一方向だけの傾斜面の周囲の嶮しい懸崖の山地で、頂部が平坦な高地。

・城郭：懸崖の地形は自然利用するが、その一部や傾斜箇所に城壁を築く。

・機能：大型山城や中型山城の「出城・支城」、及び哨堡

・規模：小型が大半

・環境：麓に河川流路のある地。

③“築断為城”型（峡谷両端遮断型）

・立地：双峰状独立山塊

・占地：双峰の鞍部両脇の峡口を城壁で遮断すると共に、双峰をも断続的な城壁で囲周。
　　※山頂型の変形か？→兵士や住民が留まっての防御及び器材物資の備蓄

・機能：要路の戦術拠点や哨堡

・亜種：関馬墻関隘（主要地に至る谷筋隘路を城壁で遮断し、両側尾根筋に繋ぐ）
　　要路の哨堡

④左右或いは内外型（複郭型）

・形態：簸箕型や山頂型の山城が稜線の左右に連なったり（連郭）、内郭と外郭の複合（輪郭び梯郭）。

・機能：拠点的山城

・規模：大型を主にして、中型、小型の各種がある。

⑤規模類型

・大型：全周 3000m以上、広域（地方）的戦略拠点。

・中型：全周 1000m～3000m未満、地域的戦略拠点。

・小型：全周 1000m未満、大型及び中型の山城の前衛的戦術拠点。要路の哨堡

⑥類型配置

・類型の相関性による高句麗国土防御体制の構築。→支城網の形成

表2 兵庫の鳴動

西暦	和暦年月日	事　項	出　典
780年	宝亀11年10月3日	左右兵庫の鼓、鳴れり。	『続日本紀』
781年	天応元年3月12日	美作国苫田郡の兵庫が鳴り動く。	『続日本紀』
	同月16日	鈴鹿関の西中城の門の大鼓、自鳴ること三声。	『続日本紀』
	天応元年4月1日	左兵庫の兵器、自ら鳴る。　光仁天皇の不予	『続日本紀』
	天応元年12月26日	兵庫の南院の東庫鳴る。	『続日本紀』
806年	大同元年3月22日	兵庫夜鳴る。是夜、月蝕なり。	『日本後紀』
808年	大同3年8月27日	夜、左右兵庫の鉦鼓自ら鳴る。	『日本後紀』
837年	承和4年2月25日	美濃国の兵庫自ら鳴る。3月15日もまた鳴る。	『続日本後紀』
840年	承和7年5月2日	但馬国養父郡の兵庫の鼓、故なく夜に鳴る。また気多郡の兵庫の鼓夜自ら鳴る。	『続日本後紀』
855年	斉衡2年8月10日	兵庫の中の鼓自ら鳴る。	『文徳実録』
858年	天安2年8月4日	若狭国、兵庫が、鈴の音のように鳴ることを報告	『文徳実録』
859年	貞観元年正月22日	大宰府、筑前国の志摩郡の兵庫の鼓が自ら鳴を報告	『三代実録』
866年	貞観8年4月18日	若狭国が、印・公文を納める庫幷びに兵庫が鳴ったと報告があった。陰陽寮によれば、遠国の人が来投があり、兵乱・天災の予兆とする。	『三代実録』
866年	貞観8年9月7日	美作国、兵庫が鳴り、その音は鉦鼓を撃つようであったと報告	『三代実録』
870年	貞観12年6月13日	大宰府、肥前国杵島郡の兵庫震動するを報告し、隣兵を警戒する。	『三代実録』
871年	貞観13年正月15日	大宰府、壱岐島の兵庫の鼓が鳴るを報告する。	『三代実録』
	貞観13年4月6日	因幡国の兵庫が火ける。	『三代実録』
	貞観13年5月10日	佐渡国司が、兵庫の震動を報告する。	『三代実録』
872年	貞観14年7月17日	遠江国の兵庫自ら鳴る。	『三代実録』
879年	元慶3年3月16日	又肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る。	『三代実録』
	元慶3年11月4日	隠岐国、兵庫の震動を伝える。	『三代実録』
880年	元慶4年2月28日	隠岐国が、兵庫の振動を伝えた三日後、庫中の鼓が自ら鳴った。陰陽寮は、遠方の兵賊が北方より起こると占った。そこで因幡・伯耆・出雲・隠伎等国に、非常に備えて防衛を厳しくするように太政官符が下された。	『三代実録』
	元慶4年6月23日	右兵庫寮の中央の兵庫が自ら鳴った。	『三代実録』
881年	元慶5年6月23日	兵庫自ら鳴る。	『三代実録』
	元慶5年8月14日	加賀国が、去る6月29日の太政官符が庫が鳴ったので、兵火に備えるように通達したが、加賀国は立国してから58年、非常に備えてこなかったが、甲冑は国司が作るようにとの勅があった。	『三代実録』

				別に天皇・皇后・太子に金・銀・霞錦・幡・皮を献ず。文武王の喪を告ぐ。
天武 11	682	6.1	**高麗王、下部助有卦婁毛切、大古昂加を遣わして方物を貢ず。** 新羅、大那末金釈起をして高麗使人を筑紫に送る。	
天武 12	683	11.13	大那末金釈起、大那末金長志進調	
天武 13	684	12.6	沙飡金主山・大那末金長志 新羅、大奈末金物儒を派遣	大唐留学生土師宿禰甥と白猪史宝然、百済の役で唐の捕虜となった猪使連子首と筑紫三宅連得許を筑紫に送る。
天武 14	685	1.26. 11.27	高向朝臣麻呂、都努朝臣牛飼ら、新羅より至る。学問僧の観常、雲観が従い到った。 新羅王、献物 新羅、波珍飡金智祥、大阿飡金健勲を遣わして請政し、進調	 馬２疋、犬３頭、鵬鵡２隻、鵲２隻と種々の宝物であった。 金・銀・霞錦・綾羅・金器・屏風・鞍皮・絹布・薬物等 60 余種 別に皇后・皇太子・諸親王に献物
持統 1	687	9.23	新羅王子金霜林・級飡金薩慕・級飡金仁述・大舎薩陽信ら国政を奏請し、調賦を献ず。	金・銀・絹・布・皮・鋼・鉄等 10 余種を献ず。 別に仏像・彩絹・鳥・馬など 10 余種を献ず。霜林の献物（金・銀・彩色・種々の珍物 80 余種）
持統 2	688	8.25	耽羅王、佐平加羅を遣わして方物を献ず。	
持統 3	689	4.20	新羅、級飡金道那らを遣わして天武の喪を弔す。	学問僧明聡・観智を送り、別に金銅阿弥陀像・金銅観世音菩薩像・大勢至菩薩各 1 体、綵帛・錦・綾を献上
持統 4	690	9.23	新羅、大奈末金高訓ら筑紫に到る。	大唐学問僧智宗・浄願、捕虜大伴部博麻を送る使
持統 6	692	11.8	新羅、級飡朴億徳・金深薩を遣わして進調	
持統 7	693	2.3	新羅、沙飡金江南、韓奈麻金陽元ら神文王の喪を告げる。	
持統 9	695	3.2	王子金良琳・薩飡朴強国・韓奈麻金周漢・金忠仙ら国政を奉請し、調進物を献ず。	大使金所毛大宝元年正月 14 日卒す。
文武 1	697	10.28	新羅の一吉飡金弼徳（大使）・奈麻金任想（副使）ら来朝	朝貢使
文武 4	700	11.8	薩飡金所毛（大使）・薩飡金順慶（小使）ら孝昭王の母の喪を告げる。	孝昭王の喪を告げる使
大宝 1	701	1.23	遣唐使の任命	

		11.10	唐国使人郭務悰ら 600 人。送使の沙宅孫登ら 1400 人が、比智島に泊まると筑紫大宰府が伝える。	甲冑・弓矢を賜う。
天武 1	672	5.28	**高麗、前部富加抒ら進調**	
		11.24	新羅の金押実らを筑紫で饗す。	
天武 2	673	5.8	耽羅、王子久麻芸・都羅宰麻らを遣わして朝貢	
		閏 6.15	新羅、韓阿飡金承元・阿飡金祇・大舎霜雪らを遣わす。	天武天皇の臨極を賀す。
			新羅、一吉飡金薩儒・韓奈末金池山らも遣わす。	天智天皇の弔喪使。貢千宝・薩儒、承元・薩儒を筑紫に送る。
		8.20	**高麗、上部位頭大兄邯子と前部大兄頑千らを遣わして朝貢**	新羅、韓奈末金利益を遣わして高麗使人を筑紫に送る。
天武 2	673	2	新羅、韓奈末金利益を遣わして高麗使を送る。	
天武 4	675		新羅王子忠元・大監級飡金比蘇・大監奈末金天沖・第監大麻朴武摩・第監大舎金浴水ら進調	高麗使の送使
		3	奈末金風那・奈末金孝福	王子忠元を筑紫に送る。
		3	**高麗、大兄富干、大兄多武らを遣わして朝貢**	
			新羅、級飡朴勤修・大奈末金美質を遣わして進調	
		7.7	小錦上大伴連国麻呂を大使、小錦下三宅吉士入石を副使として新羅に派遣	
		8.1	耽羅の調使、王子久麻伎筑紫に到着	
		10.16	筑紫より唐人 30 人が貢じられ、遠江国に安置す。	
天武 5	676	10.10	物部連麻呂を大使とし、山背直百足を小使として新羅に派遣。	
			新羅、沙飡金清平を派遣して請政	
		11.3	級飡金好儒・弟監大舎金欽吉らを遣わして進調	
			奈末被珍奈・奈末好福、金清平を送る。	
			高麗、大使後部主簿阿干、副使前部大兄徳富を遣わして朝貢	
			新羅、大奈末金揚原を遣わして高麗使の送る。	
天武 6	677	5.7	新羅人阿飡朴刺破と従者三人、僧三人が血鹿島に漂着	
		8.28	耽羅、王子都羅を遣わして朝貢	
天武 7		この歳	新羅王、沙飡金消勿・大奈末金世世ら進調	但し途中で避難
			奈末加良井山・奈末金紅世	金消勿らの送使。筑紫に来着
天武 8	679	2.1	**高麗、上部大相桓父、下部大相師需婁らを遣わして朝貢**	
			新羅、奈末甘勿那、桓父らを筑紫に送る。	
		9.16	新羅へ遣わした使者帰国	
		9.23	高麗、耽羅に遣わした使人ら帰国	
		10.17	新羅、阿飡金項那・薩婁生を遣わして朝貢	調物（金・銀・鉄・鼎・錦・絹・布・皮・馬・狗・騾・駱駝など 10 余種）
				別貢物。天皇・皇后・太子（金・銀・刀・旗）を貢ず。
天武 9	680	513	**高麗、南部大使卯問、西部大兄俊徳ら朝貢**	
			新羅、大奈末考那を遣わして高麗使人卯問らを筑紫に送る。	
		11.23	新羅、沙飡金若弼・大奈末金原升を遣わして進調	習言者 3 人を貢す。
天武 10	681	7.4	小錦下采女臣竹羅を大使とし、当麻公楯を小使として新羅に派遣	
		同日	小錦下佐伯連広足を大使、小墾田臣麻呂を小使として、高麗国に派遣	
		9.20	新羅、一吉飡金忠平、大奈末金壱世らを遣わして貢調	金・銀・銅・鉄・錦・絹・鹿皮・細布など

表1　7世紀後半の外交史年表（『日本書紀』）

年	月	日	事　項	備　考
天智2	663	8.27	白村江の戦い	
		9.7	百済の州柔城、唐に降伏	
		9.27	佐平余自信・達率木素貴子・谷那晋首・憶礼福留ら倭へ向かう。	
天智3	664	3	百済王善光王らを難波に居らす。	
		5.17	百済鎮将劉仁願、朝散大夫郭務悰ら表函と献物を進める。	
		10	高句麗の盖金（泉蓋蘇文）死す。	
この歳			対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、水城を築く。	
天智4	665	8	達沐春初に長門国に城を築かせる。憶礼福留と四比福夫に筑紫国に大野と椽の二城を築かせる。	
			耽羅が遣使来朝す。	
		9.23	唐が朝散大夫沂州司馬馬上柱国の劉徳高らを倭に派遣	
この歳			守君大石らを唐に派遣。唐使を送る	
天智5	666	1.11	高麗、前部能婁らを遣わして進調	
		同日	耽羅、王子姑如らを遣わして貢献	
		10.26	高麗、乙相奄蘇・相遵・玄武若光ら進調	
天智6	667	7.11	耽羅、佐平椋麻呂らを遣わして貢献	
		10	高麗の太兄男生城を出て唐に亡命。	
		11.9	百済鎮将劉仁願、熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聡ら	
			境部連石積らを筑紫都督府に送る。	
天智7	668	4.6	百済、末都師父らを遣わして進調	
		7	高句麗、越の路より進調	
		10	高句麗滅亡	
		11.5	道守臣麻呂・吉士小鯨を新羅に遣わす。	
天智8	669	3	耽羅、王子久麻伎らを遣わして貢献	
		9.12	新羅使級飡金東厳ら進調	
		9.11	新羅使沙飡督儒ら進調	
天智9	670	9.1	阿曇連頬垂を新羅に遣わす。	
天智10	671	1.9	**高麗、上部大相可婁らを等進調。**	
		1.13	百済鎮将劉仁願、李守真らを遣わして上表	
		この月	佐平余自信、沙宅紹明ら百済人に叙位	
		2.23	百済、台久用善らを遣わして進調	
		6.15	百済、祢真子らを遣わして進調	
		6	新羅、進調	姓名不詳。別に水牛1頭・山鶏1羽を献上
		10.7	新羅金万物を遣わして進調	

d．神国意識の発揚

869年（貞観11）12月29日

石清水八幡宮・香椎宮・宗像大神・甘南備神に弊と告文を奉る。

「伝え聞く、彼の新羅人は我が日本国と久しき世時より相敵い来たり、調物を奪い取りて懼沮（おそれ阻む）の気なし。其の意況を量るに、兵寇の萌これよりして生まるか。我朝久しく軍旅なく、専ら警備を忘れたり。兵乱のこと尤も慎み恐るべし。然れども**我が日本朝は所謂神明の国なり**。神明の護り賜へば、何の兵寇近づき来るべし」（『三代実録』貞観11年12月29日条）

④新羅海賊襲撃事件以後

a．894年（寛平6）9月、遣唐使（大使菅原道真）の派遣中止

派遣中止の要因

1．唐の疲弊　2．日本国内の災異　3．財政負担　4．新羅の海賊の侵入

b．新羅の海賊の侵入

893年（寛平5）5月11日、新羅の海賊、肥前国飽田郡・松浦郡を襲撃

894年（寛平6）2月22日、大宰府、飛駅使を遣わして「新羅賊」を報告

同年9月5日、対馬島司、再び「新羅賊徒」の船45艘が襲来を伝え島民を殺害

同年9月30日、20人を殺害

襲来の背景：この年、新羅は不作、人々は飢えに苦しむ＝穀・絹を奪うために来襲

⑤鞠智城造営の第Ⅳ・Ⅴ期：8世紀第4四半期後半から終末期の10世紀第3四半期

a．第Ⅳ期　礎石建物の大型化 → 食料の備蓄

官衙施設がなくなる。

在地系の土器と池ノ尾門の廃絶

b．大型礎石建物の建て直し

→ 肥後国あるいは菊池郡の郡家関連倉院として機能

c．兵庫の鳴動（表2参照）

8世紀後半以降、兵庫の鳴動増加

→ 新羅の寇賊などの対外的な脅威に対する予兆

→ 対外的軍事拠点であった鞠智城も鳴動

おわりに

a．どういう事情で築造されたか？

契機は百済救援失敗以降の国内防衛体制の充実

b．なぜ菊池という地に築造されたか？

水城－大野城－基肄城の後詰め的役割

有明海からの侵入ルートの遮断

c．だれが築造したか？

国家の監督のもと、直接に築城を指揮したのは、朝鮮系渡来人の可能性が大きい。

d．どういう変遷があったか？

直接的な史料が乏しい状況の中で、考古学の発掘成果による5期の変遷と対応した東北アジアの動向と、国内的事情を総合的に考えることが重要であると考える。

→ 最勝王経の転読

c．新羅と日本人の共謀

866年（貞観８） 7月15日

対馬島「撃取」発覚：**肥前国基肆郡擬大領**山春永等、新羅人珍賓長と新羅に渡り、「造兵弩器械之術」を学び、対馬島「撃取」を計画

「大宰府、駅を馳せて奏言すらく。「肥前国基肆郡の人、川辺豊穂告ぐ。同郡の擬大領山春永豊穂に語りて云く。新羅人の珍賓長と共に新羅国に渡り入り、煮造兵弩の器械を造る術を教い、還り来りて将に対馬島を撃ち取らん。藤津郡領葛津貞津、高来郡の擬大領大刀主、彼杵郡人永岡藤津ら是同じく謀る者なり。仍りて射手四十五人の名簿を副えて進る」（『三代実録』貞観８年７月15日条）

869年（貞観11） 10月26日

隠岐国の浪人安曇福雄、前守の越智宿禰貞厚が新羅人と反逆を謀ったと誣告

「太政官論奏して曰く。『刑部省の断罪の文に云く。貞観八年、隠岐国の浪人安曇福雄密に告げて、前守正六位上越智宿祢貞厚、**新羅の人と同に反逆を謀ると**。使を遣わして推るに、福雄の告げるところの事、是れ誣なり。是に至りて法官覆奏す。福雄、反りて坐して斬すべし。但し貞厚は、部内に人を殺せる者有るを知りて挙訊せず。仍りて官当すべし』とてへり。詔して斬罪とするも、宜しく一等を減じて遠流に処すべし。自余は、論ずること法の如くせよ」（『三代実録』貞観11年10月26日条）

870年（貞観12） 11月13日

大宰少弐藤原元利萬侶等５人、新羅国王と通謀して「国家を害せんと欲す」として、新羅国牒を証拠として告発される → 新羅への警戒

「筑後権史生正七位上佐伯宿祢真継、新羅の国牒を奉進き。即ち**大宰少弐**従五位下藤原朝臣元利万侶は**新羅の国王と通謀して国家を害せん**と欲すと告ぐ。真継の身を禁じて検非違使に付す」（『三代実録』貞観12年11月13日条）

870年（貞観12） 12月12日

対馬島「撃取」通報：新羅に漂着し捕らえられた対馬下県郡人卜部乙屎麻呂、新羅が対馬島を撃取しようとすることを知り、脱出して通報

「是れより先、大宰府言す。『対馬島下県郡の人卜部乙屎麻呂、**鸕鷀**鳥を捕えんがため、新羅の境に向かう。乙屎麿、新羅国の執らうる所となり、縛められて土獄に囚禁せらる。乙屎麿、彼国を見るに、材木を挽き運びて大船を構作り、鼓を撃ち角を吹き、士を簡びて兵を習う。乙屎麿、竊に防援の人に問う。答えて曰く。**『対馬島を伐ち取らんがためなり』**。乙屎麿、禁を脱して獄を出て、纔に逃れ帰ることを得たり。

是日、勅して、『彼の府、去年の**夏言さく、大鳥、兵庫の樓上に集まれり。卜筮に決するに、**当夏、隣の兵あらん。因って、幣を頒ち、経を転じ、予め攘う。如聞、新羅の商船、時々彼に到り、縦に事を賈販（うりかい）に託し、来りて侵暴を為すと。若しそれなくば、恐らくは慢蔵に同じ。況んや、新羅の凶賊、心に覬覦（きゆ）（密かに願う）を懐きて、尾を収めず。将に毒螫を行う。須く縁海の諸郡をして特に警固を慎しめよ。また因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐に下知して、守禦の具を納めよと」（『三代実録』貞観12年２月12日条）

「人臣に境外の交わりなし」という理由で追却

841年（承和8）11月、宝高の貢物を返却し、その随物は民間で交易して、人民が損害を被むらぬように指導させる（『続日本後紀』）。

842年（承和9）8月、大宰大弐藤原衛、新羅人の入国を一切禁止することを請う（帰化の禁止）。

「（新羅は）常に奸心を懐き、苞茅（茅を束ねたもの）を貢ぜず。事を商賈に寄せ、国の消息を窺う。方今、民窮し食乏す。若し不虞有れば、何を用いて夭いを防がん」（『続日本後紀』承和9年8月15日条）

→新羅に対して排外的な態度を示す。

→新羅に対する脅威の裏返し

③日本の新羅に対する敵視・賊視

a．869年（貞観11）5月22日夜

「大宰府言うす。去月二十二日夜、新羅海賊、艦二艘に乗り、博多津に来る。豊前国の年貢絹綿を掠奪す」（『三代実録』）

→ 新羅海賊、博多津に来襲。豊前国の年貢の絹綿を掠奪

政府の認識

「唯、官物を忘失するにあらず。兼ねて亦**国威を損辱**すること、之を往古に求むるに、未だ前聞有らず。後来に貽すに、当に面目無かるべし」（『三代実録』貞観 11 年7月2日条）→禍根を残す

b．新羅への警戒

応天門の変の発覚

866年（貞観8）閏3月10日、平安宮の応天門が放火炎上

大納言伴善男と左大臣源信と対立？

同年4月17日　唐人任仲元過所を持たず入京

あいつぐ新羅への警戒

「大宰府に下知して曰く、廼ち、京師頻に怪異を視る。陰陽寮言うす、**隣国の兵、来りて窺う**こと有る可し。安じて危を忘れず。宜しく警固に勤とむべし」（『三代実録』貞観8（866）年4月17日条）

「若狭国言うす。印・公文を納める庫并びに**兵庫鳴る**。国司に下知して曰く、今月十六日、彼の国に宣告して、兵戎を戒慎す。今言う。**兵庫自ら鳴る**。陰陽寮言うす。遠国の人当に来投有るべし。兵乱天行、災を成すこと相い仍る。宜しく警衛を益して兼ねて災疫を防ぐべし」（『三代実録』同年4月18日条）

→ 兵庫自ら鳴る。

「廼ち、怪異頻に見わる。蓍亀（占い）を求むるに、**新羅の賊兵、常に間隙を窺う災変**の発すること唯斯事に縁るか」（『三代実録』）同年11月18日条）

→ 新羅の賊兵に対する脅威

伯耆・出雲・石見・隠岐・長門諸国に下知

「彼の国地、西極に在りて、堺、新羅に近し。警備の謀、他国に異なるべし」

「賊心を調伏し、災変を消却す」（『三代実録』貞観9（867）年5月26日条）

c．鞠智城も文献には見えないが、礎石建物へ建て替えられていることは、怡土城や大宰府の後背にあって、新羅征討の食料などの物資の備蓄が主任務となったか？

d．城内地名「佐官どん」「少監どん」などの地名は、この時期大宰府管下にあったことを示唆するか？

e．肥後国の内部事情：炭化材の出土と ^{14}C の測定年代
50 号建物跡のツブラジイ　AD720、735、760 年 → 国司による**公廨稲**（くがいとう）の得分の隠蔽事件か？

4．9 世紀の東アジアの動向と鞠智城

①菊池城院の鳴動

a．858 年閏 2 月 24 日

「肥後国言す。菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」

『文徳実録』天安 2 年（858）閏 2 月丙辰（24 日）条

「丁巳（25 日）、又鳴る」

b．858 年 6 月 20 日

「大宰府言す。『去る五月一日、大風暴雨。官舎悉く破れ、青苗朽ち失う。九国二島尽く損傷せらる。又**肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る**。同城の**不動倉十一宇を火く**』」

『文徳実録』天安 2 年（858）6 月己酉（20 日）条

c．875 年 6 月 20 日

「大宰府言す。『大鳥二肥後国玉名郡の倉の上に集まる。西に向かい鳴く。**群烏数百、菊池郡の倉舎の葺草を噆み抜く**』」

『三代実録』貞観 17 年（875）6 月 20 日辛未条

d．879 年 3 月 16 日

「豊前国八幡大菩薩宮の前殿の東の一、神功皇后の御前の**瓶**、故なく破裂して、九十片となり。破裂の時、其も鳴ること犢の細き声のごとし。**又肥後国菊池郡の城院の兵庫の戸自ら鳴る**」

『三代実録』元慶 3 年（879）3 月 16 日丙午条

→ 兵庫の鳴動は、不穏な事件の予兆

②9 世紀の東アジアの動向

a．新羅の張保皐（張宝高・張弓福）の乱

826 年、渡唐後、徐州の武寧軍小将（軍中小将）となる。

828 年（興徳王 3）4 月、青海（全羅南道莞島）に鎮して、海賊が新羅人奴婢とするのを取り締まることを申し出る → 青海鎮大使

839 年　神武王（金祐徴）の急死と文聖王の即位。弓福、鎮海大使に任ぜられる。

840 年　文聖王と弓福の娘の納妃問題＝貴族層の反対

841 年　青海鎮で反乱＝閻長によって暗殺

b．張保皐の権力の背景

唐の登州赤山法華院を中心とした東シナ海沿岸の新羅人ネットワークの形成

日本との外交と交易

840 年（承和 7）2 月 27 日、「新羅の臣」張宝高、使を遣わして方物を献ずるが、大宰府、

②新羅征討計画の進行

759年（天平宝字３）６月、藤原仲麻呂政権、新羅征討を発議

「大宰府をして行軍式を造らしむ。以て将に新羅を伐たんとする也」（『続日本紀』天平宝字３年〈759〉６月16日条）

同年９月、762年を実行の年と設定

「船五百艘を造らしむ。北陸道の諸国には八十九艘、山陰道の諸国には百四十五艘、山陽道の諸国には百六十一艘、南海道の諸国には百五艘。並びに閑月を逐て営造し、三年の内に功を成さしむ。新羅を征せんがためなり」（『続日本紀』天平宝字３年９月19日条）

760年（天平宝字４）11月、吉備真備、大宰府において諸葛亮八陳・孫子九地・結営向背を教授

761年（天平宝字５）正月、新羅征討のため、美濃・武蔵二国の少年に新羅語を教習

同年11月、兵船の検定

③怡土城と新羅征討

756年（天平勝宝８）６月、怡土城（福岡県前原市高祖山）の築城

「始めて怡土城を築く。大宰大弐吉備朝臣真備をして事を専当せしむ」（『続日本紀』天平勝宝８歳６月甲辰〈22日〉条）

→安史の乱への防衛拠点から新羅征討の兵站基地へ

酒寄雅志「怡土城に関する一考察」（『続日本紀研究』194、1977年12月）

同『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）

元岡遺跡群（福岡市西区大字元岡、大字桑原）

1999年の第12次調査、８世紀前半の大規模な製鉄遺跡発見

大宰府直轄の官営工房＝新羅征討に備えた武器生産

福岡市教育委員会「元岡遺跡群現地説明会（第12次・第15次発掘調査）」1999年

福岡市博物館「常設展示室（部門別）解説一九三　元岡の歴史展１」2001年

④新羅征討計画の消滅

762年（天平宝字６）６月、仲麻呂派の淳仁天皇と孝謙上皇の対立、道鏡との対立

同年11月、新羅を征す軍旅を調習するために香椎廟に奉幣

764年８月、藤原仲麻呂の乱。仲麻呂、近江勝野鬼江にて敗死

⑤水城の修復　築造100年後の修理

765年（天平神護元）３月、采女浄庭を水城修理専知官

「大宰大弐従四位下佐伯宿祢今毛人を怡土城を築く専知官となす。少弐従五位下采女朝臣浄庭を水城を修理する専知官となす」（『続日本紀』天平神護元年３月辛丑〈10日〉条）

1979年４月の発掘調査：堤の裾に並行して丸瓦と平瓦を組み合わせた暗渠排水路の発見 →

亀井明徳氏ら、采女浄庭の水城修復の時の仕事の可能性を指摘

⑥鞠智城造営の第Ⅲ期：８世紀第１四半期～８世紀第３四半期後半

a．鞠智城に関する史料は、存在しない時期ではあるが、８世紀初頭は新羅との関係が次第に悪化し、北九州の防衛体制は重要

b．新羅との対立が続き、藤原仲麻呂政権による新羅征討計画が発議されると、大宰府管内の北九州の怡土城・水城などの北九州地域の城の評価が高まる。

土器の出土量の増加：多数の城兵の駐屯

b．７世紀末の高句麗の再興と契丹の李尽忠の乱による東北アジアの混乱に対する危機感から、北九州の山城の重要性再認識し修繕するか？

新羅との関係「文武朝の外交　一応の安定期」ともみられるが、東北アジアの混乱は継続しており再考の余地あり。

合わせて、対隼人対策上、律令国家の重要な兵站拠点となる。

３．８世紀の東アジアの動向と鞠智城

①新羅、日本を警戒

722 年（養老６）、新羅が毛伐郡城を築城

「毛伐郡城を築く。以て日本の賊路を遮る」（『三国史記』聖徳王 21 年〈722〉）

毛伐郡城：慶州と蔚山の分水嶺（関門城）→ 日羅関係の悪化を示唆

731 年（天平３）、日本国兵船、新羅東辺を襲う。

「日本国の兵船三百艘、海を越えて我、東辺を襲う。王、将に命じて兵を出してこれを大いに破る」（『三国史記』聖徳王 30 年〈731〉４月）

732～734 年（天平４～６）、日本、東海・東山・山陰・西海諸道に節度使体制を敷く。

→ 山陰・西海の軍事体制＝新羅対策（『天平六年度出雲国計会帳』）

735 年（天平７）、新羅使、国号を「王城国」と改めたことを伝える。

→ 新羅、日本の不興を買い、朝貢を拒否される。

737 年（天平９）、新羅征討を論議する。

「新羅国、常礼を失して使の旨を受けず」（『続日本紀』）　→　帰国した遣新羅使が、新羅無礼の状を伝える。

738 年（天平 10）・742 年（天平 14）・743 年（天平 15）、新羅使を大宰府から放還

752 年（天平勝宝４）、新羅王子金泰廉ら新羅使 700 人の来日

→ 日羅関係の改善（盛んな貿易、『鳥毛立女屏風下貼文書』）

753 年（唐の天宝 12 載、天平勝宝５）正月、唐の朝廷における新羅使と日本の遣唐使の席次争い

日本の席次：西畔第二吐蕃の下

新羅の席次：東畔第一大食国の上

大伴古麻呂の抗議：「古より今に至る。新羅の日本国に朝貢すること久し」

→ 唐将呉懐実による席次の変更

同年８月、新羅へ派遣された小野田守の不調

「日本国使至る。慢して無礼。王これに見えず。すなわち廻る」（『三国史記』景徳王 12 年〈753〉８月条）

「小野田守を遣す時、彼の国礼を欠く。故に田守使の事を行わず還帰す」（『続日本紀』天平宝字４年〈760〉９月癸卯〈９日〉条）

758 年（天平宝字２）、渤海へ派遣された小野田守により、唐における安禄山・史思明の乱が伝えられる。

を殺害＝武則天と契丹との激しい抗争

→ 東北アジアの混乱＝渤海（振国）の誕生の契機

→ 朝鮮半島を含む東北アジアの混乱を新羅使（請政）から知る。

酒寄雅志「大祚栄の『渤海郡王』冊封をめぐって」（『日本古代の王権と東アジア』吉川弘文館、2012年3月）

g．東北アジアの情報源

ⅰ．「請政」（倭に新羅の政治を報告）の新羅使

ⅱ．唐から帰国した遣唐使や捕虜たち

684年（天武13）12月6日、遣唐留学生土師宿禰甥と白猪史宝然と、百済の役の捕虜猪使連子首と筑紫三宅連得許ら新羅を経て帰国

690年（持統4）10月　唐に捕虜になっていた筑紫国上陽咩の郡人大伴部博麻、百済救援（661）以来、30年ぶりに帰国

696年（持統10）4月、唐に捕虜になっていた伊予国風速郡の物部薬と肥後国皮石郡の壬生諸石に叙位

h．隼人の抵抗

7世紀後半（天武朝以降）：隼人、上京して朝貢（『日本書紀』天武11年〈682〉7月条）

699年（文武3）12月、三野（日向国児湯郡三納郷？）・稲積（大隅国桑原郡稲積郷？）の修造

→ 日向・大隅地方の人々の来襲に備える ＝ 国郡制の施行・造籍に対する抵抗を予測

唱「更国司＝薩摩国司（日向・薩摩両国の国司）、柵を建て兵を置いて守る。

698年（文武2）4月、文忌寸博士ら8人を南島に派遣し国を覓む。戎器を給う。

700年（文武4）6月、南島へ覓「国」使を派遣

覓国使の刑部眞木、薩摩地方の住民の反対に遭って剽「劫」

702年（大宝2）8月　「薩摩・多禰、化を隔てて朝命に逆ら」

「是に於いて兵を発して征討」

「戸を校べ吏を置」（『続日本紀』大宝2年8月丙申〈4日〉条）

709年（和銅2）10月、隼人の定期な朝貢開始

713年（和銅6）4月、日向国から肝坏・贈於・大隅・姶禰の4郡を割いて大隅国設置

→ 隼人の抵抗

720年（養老4）2月、大宰府、隼人が大隅国守陽侯麻呂を殺害したことを奏上

→ 大伴旅人を征隼人持節大将軍に任命＝大規模な軍事行動

同年8月、旅人、召還 → 翌年7月、入京する。斬首・獲虜合わせて1,400余人

722年（養老6）　造籍

以後、隼人の抵抗・律令政府による直接的な軍事行動はなくなる。

『和名類聚抄』薩摩国高木郡「**合志・飽多**・鬱木・**宇土**・新多・**詫万**」郷の内、4郷が肥後国の郡名 → 肥後国の住民の移住か？

④鞠智城造営の第Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

a．充実する施設

長者原・上原地区のコ字形掘立柱建物群・総柱建物群の出現：鞠智城の城司（存在は史料上に見えない）の駐在する施設、食料などの兵站の備蓄

八角系建物の出現：祭祀施設か？

32・33号建物跡　8世紀を下らない。

→ 朝鮮系の渡来人によって、国家的事業として建設か？

2．7世紀末の東アジアの動向と鞠智城

①698年（文武2）5月、大野・基肄・鞠智の三城を修築

「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」（『続日本紀』文武2年5月25日条）

②高句麗の滅亡と再興

a．668年（唐の総章元）9月、宝蔵王、唐に投降し高句麗滅亡

669（天智8）、河内鯨を唐に派遣。高句麗の平定を賀す（『新唐書』東夷伝日本）

倭の外交、以後、新羅との外交に限定

b．新羅の朝鮮半島統一

高句麗の滅亡後、唐、平壌に安東都護府を置く＝朝鮮半島の直接的支配

新羅の唐を朝鮮半島から駆逐する戦い

676年（上元元）、安東都護府、遼東城に移転

③新羅使と高句麗使の来日（「表1　7世紀後半の外交史年表」参照）

668年に滅亡したはずの高句麗の使者が度々来日

④高句麗の再興

a．剣牟岑の蜂起

670年（咸亨元）4月、高句麗の酋長剣牟岑、元高句麗王の高蔵の外孫安舜を王として蜂起 →
左衛大将軍の高侃に安舜を討たせる。

安舜、剣牟岑を殺して新羅に逃走

高句麗の旧国土、尽く靺鞨に入り、「高氏の君長遂に絶え」る。

『通典』巻第186・辺防2・高句麗伝

b．狄仁傑の提案

武則天の宰相狄仁傑（630～700）、安東都護府を廃止して、朝鮮半島と中国東北地方の支配は「高氏を復して君長と為す」ことによる辺境防衛の負担軽減を提案

c．唐の第1次高句麗再興

677年（唐の儀鳳2）2月、唐に下った高蔵を遼東州都督・朝鮮王に封ず。

→　高句麗の再興

高蔵、靺鞨と通じて唐に反し、露見して邛州に流される。

d．唐の第2次高句麗再興

686年（唐の垂拱2）、高蔵の孫の宝元を朝鮮郡王に任ず。

698年（唐の聖暦元）、左鷹揚衛大将軍に任じて忠誠国王に封じ、安東の旧戸を統治させる。→
実効なく終わる。

e．唐の第3次高句麗再興

699年（唐の聖暦2）、高蔵の子の徳武を安東都督に任じ、本蕃を統轄させる。

多くの高句麗人が突厥や靺鞨に投じて、高句麗は完全に消滅

f．契丹李尽忠の乱

696年（万歳通天元）5月12日、松漠都督で契丹族の李尽忠、営州（遼寧省朝陽）都督の趙文翽

乗りて、高麗に逃げ去りぬ」（『日本書紀』）

「仁軌、倭兵と白江の口に遇し、四たび戦い捷つ。其の舟四百艘を焚く。煙焔天に漲り、海水みな赤し。賊衆大潰す」（『旧唐書』劉仁軌伝）

④筑紫大宰府の成立

筑紫大宰府

「詔して曰はく、直広肆筑紫史益、筑紫大宰府典を拝してより以来、今に**廿九年**。清白き忠誠を以て、敢へて怠惰まず」（『日本書紀』持統５年〈691〉１月 14 日条）

→ 663 年頃には成立か？

→ 筑紫大宰：海辺防備が重大任務、軍事指揮権を有す。

筑紫大宰府：九州の行政、外交、防衛の拠点として、白村江の戦以後に誕生

⑤白村江の戦いの敗北の後、対外的侵略に備えて軍事力の強化、国制の改革を推進

ａ．防衛体制の整備

対馬・壱岐・筑紫国に防人と烽を置き、水城を築く。

ｂ．朝鮮式山城の整備

665 年（天智４）８月

「達率答炑春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留と達率沙比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽の二城を築かしむ」（『日本書紀』）

666 年（天智６）11 月　倭国の高安城、讃岐国山田郡の屋島城、対馬国に金田城を築く。

ｃ．山城と神籠石の発見

ⅰ．屋島城（香川県高松市）の城門遺構発掘（2002.3）

北側側壁と南側側壁の間 5m、壁の高さ１.5m、排水溝あり。

（高松市教育委員会「平成 13 年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業の成果」）

ⅱ．阿志岐山城跡（福岡県筑紫野市）の発見

1999 年３月に発見、大野城・基肄城を補完する城か？

（中島聡・向井一雄「阿支岐城跡の発見について」『溝婁』速報１号、1999.4）

ⅲ．唐原山城跡（福岡県築上郡上毛町下唐原）の発見

Ｆ地区：３間×５間（8m×12m）の総柱礎石建物跡を確認

（大平村教育委員会「唐原神籠石調査概要」2001.3）

ｄ．667 年（天智７）３月　近江大津に遷都

⑥鞠智城造営の第Ⅰ期（７世紀末～８世紀第１四半期前半）

以下『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第８～32 次調査報告―』（2012 年３月、熊本県教育委員会）による

ａ．白村江の戦い以後の防衛体制の整備

防人・水城・大野城・基肄城、長門城、屋島城・高安城などの築城

鞠智城もその一環として築城。水城、大野城などの後背に立地

有明海からの侵入に備えたか？

ｂ．築城した主体

百済系菩薩立像

八角形建物 → 新羅の二聖山城や高句麗の丸都山城との共通性

古代の東アジアの動向と鞠智城

酒寄雅志（國學院大學栃木短期大学教授）

はじめに

鞠智城は、

①どういう事情で築造されたか？

②なぜ菊池に築造されたか？

③だれが築造したか？

④どういう変遷の事情があったか？

の解明が課題

1．7世紀後半の東アジアの動向と鞠智城―白村江の敗戦と鞠智城―

①鞠智城の文献に登場

『続日本紀』文武２年（698）５月甲申（25日）条

「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」

②百済人による大野城と椽（基肄）城の築城

『日本書紀』天智４年（665）秋８月条

「達率答体春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽、二城を築かしむ」

③唐の朝鮮半島侵攻と倭の百済救援

a．645年、唐の高句麗征討。新羅、唐を援助。百済と新羅の抗争が継続

同年（大化元）７月、３国の外交使節の来倭　→ 倭、全方位外交を展開

659年（斉明５）７月、遣唐使、唐に抑留 → 唐、遣唐使に百済征討を予告

「（唐の高宗）勅旨すらく、国家、来たらむ年に、必ず海東の政有らむ。汝ら倭の客、東に帰ること得ざれ」（伊吉博徳書）

660年（唐の顕慶５）３月、唐・新羅の百済攻撃

同年７月、百済の滅亡 → 百済義慈王・太子扶余隆ら50人が唐に降伏

b．百済救援（白村江の戦い）

鬼室福信（任存城）・余自信（熊津（ゆうしん）城）、唐・新羅に抵抗

660年10月、鬼室福信、倭に王子余豊璋（よほうしょう）の返還要求

百済救援軍の派兵：斉明天皇、西下 → 娜大津（なのおおつ） → 朝倉橘広庭宮（福岡県朝倉郡朝倉町須川字長安寺）

c．白村江で大敗　663年（天智２）８月28日

「日本の諸将と百済の王と、気象を観ずして、相謂りて曰はく、『我等先を争はば、彼自づから退くべし』という」

「須臾之際に、官軍敗続れぬ。水に赴きて溺れ死ぬる者衆し。艫舳廻旋すことを得ず。朴市田来津、天に仰ぎて誓ひ、歯を切りて噴り、数十人を殺しつ。是の時に、百済の王豊璋、数人と船に

鞠智城大阪シンポジウム

「古代山城鞠智城築城の謎を探る
古代山城の成立と鞠智城　－築城技術の源流－」

日時：平成２５年９月７日（土）　13:00～17:00
場所：ドーンセンター（大阪市中央区大手前１－３－４９）
主催：熊本県・熊本県教育委員会
共催：熊本県文化財保護協会

シンポジウム日程

12:00　開場

13:00　開会

あいさつ　　村田 信一（熊本県副知事）

13:10　報告

「鞠智城跡の調査と成果」　13:10～13:30
矢野 裕介（熊本県教育委員会　歴史公園鞠智城温故創生館　参事）

13:30　講演

「古代の東アジアの動向と鞠智城」　13:30～14:10
酒寄 雅志（國學院大学栃木短期大學教授）

「古代山城のフォーメイションと鞠智城」　14:10～14:50
出宮 徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）

14:50　休憩

15:15　講演

「韓国古代城郭からみた鞠智城」　15:15～15:55
向井 一雄（古代山城研究会・代表）

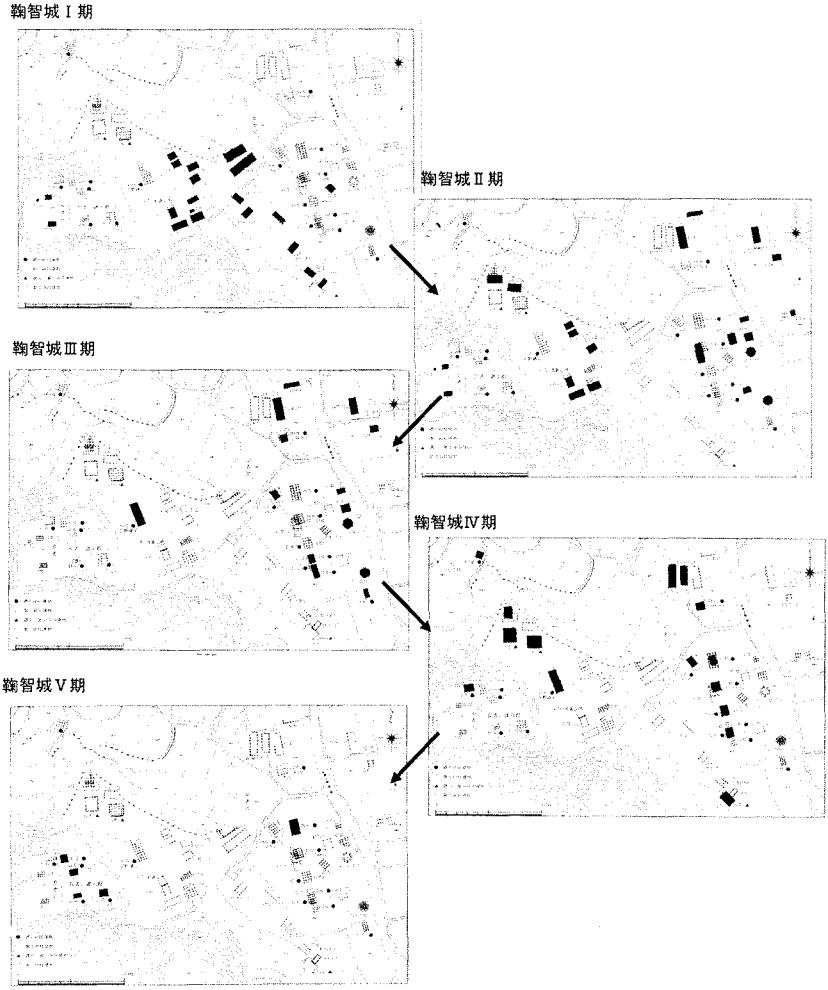
16:00　パネルディスカッション　16:00～17:00

コーディネーター　佐藤 信（東京大学大学院教授）
パネラー　酒寄 雅志（國學院大学栃木短期大學教授）
出宮 徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）
向井 一雄（古代山城研究会・代表）

17:00　閉会

大阪会場

資料



第５図　建物遺構の変遷（鞠智城Ⅰ～Ⅴ期）

《引用・参考文献》

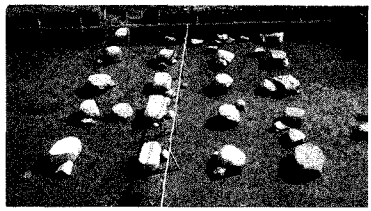
西住欣一郎ほか 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第８～32 次調査報告－』熊本県文化財調査報告第 276 集

鞠智城Ⅲ期（８世紀第１四半期後半～８世紀第３四半期）

鞠智城の転換期。鞠智城Ⅱ期の管理棟的建物群や八角形建物は存続するものの、掘立柱の倉庫が礎石建ちの倉庫に建て替えられるなど、城内の施設に変化が生じるとともに、土器などの日常什器は皆無に等しく、城を維持するための必要最低限の人員のみ配置されるなど、城の管理・運営に変化が生じた時期と考えられる。

鞠智城Ⅳ期（８世紀第４四半期～９世紀第３四半期）

鞠智城の変革期。城内に「管理棟的建物群」の消失や貯水池中心部の貯木場が埋没し、池の機能が低下するなど、城の機能が大きく変容した時期。また、鞠智城Ⅲ期の礎石建物の上に、新たに大型の礎石建物を建築するなど、礎石建物が大型化するのも特徴として挙げられ、食糧の備蓄施設としての機能が主体となる。『文徳実録』天安２（858）年条にある「不動倉 11 宇焼く」の不動倉がこれらの建物と推定される。



大型礎石建物跡（20 号建物跡）

鞠智城Ⅴ期（９世紀第４四半期～10 世紀第３四半期）

鞠智城の終末期。城内の建物数が減少するものの、不動倉を再建するなど、食糧の備蓄施設としての機能は存続する。そして、10 世紀第３四半期までには、城の機能が完全に停止することが考えられる。

３　今後の課題

このように、鞠智城の変遷をみていくと、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期までは、その築城目的であった対外的な軍事施設としての機能が主体であったのに対して、鞠智城Ⅳ～Ⅴ期までは食糧の備蓄施設としての機能が主体となることが大きな変化として挙げられる。特に、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期までの変化は、大宰府の変化と連動しており、大宰府防衛の一翼を担う軍事的な役割とともに、城の維持・管理の面でも大宰府が大きく関与していたことが伺える。

いずれにしろ、鞠智城が７世紀後半から 10 世紀中葉までと３世紀に亘り長らく存続し得たのは、このような城の機能変化があったからであると推察できる。

今後、大野城、基肄城をはじめとする古代山城や大宰府、肥後国府、菊池郡家などの官衙遺跡との比較検討を行うとともに、出土遺物の特徴や製作技術の詳細な分析により産地や流通経路を究明することが重要で、そうした分析のもと、鞠智城の機能・性格について検討を加えていくことが課題といえる。

2　時期区分と変遷

昭和42年度からの発掘調査成果によって、鞠智城は、7世紀後半から10世紀中頃までの約300年間存続し、時代に合わせて城の機能が変化していくことが判明した。そして、鞠智城の存続期間を5時期に大別することが可能となった。以下に、各時期の特徴を述べる。

鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～7世紀第4四半期）

鞠智城の創建期。天智4（663）年の白村江の敗戦を契機に、唐・新羅の侵攻に備えて、大宰府防衛の軍事拠点とともに、物資等を供給する兵站基地としての役割のもと築城。城門や土塁線、貯水池など、城としての最低限の機能を緊急的に整備し、城内には掘立柱の倉庫や兵舎を配置した。百済系の銅造菩薩立像の存在から、『日本書紀』天智6（665）年に築城された大野城、基肄城と同様、築城にあたっては百済の亡命高官の関与が指摘される。

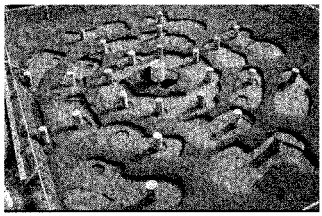
西側土塁線・土塁

池ノ尾門跡・水門

貯水池跡・貯木場

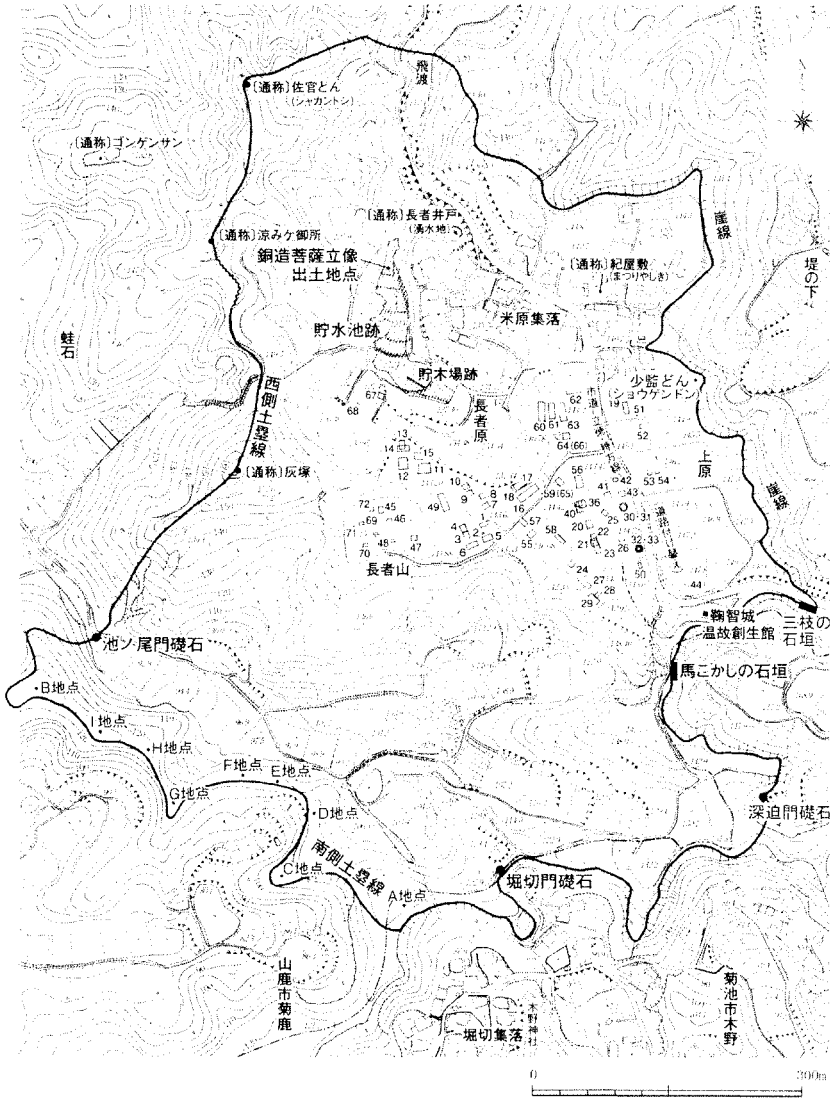
鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

鞠智城の隆盛期。城を管理する「管理棟的建物群」や八角形建物が建設されるなど、城内施設の充実が図られる時期。『続日本紀』文武2（698）年の繕治の時期に該当。土器などの日常什器の出土が最も多く出土する時期で、城の管理・運営に多くの人員が配置されたものと考えられる。

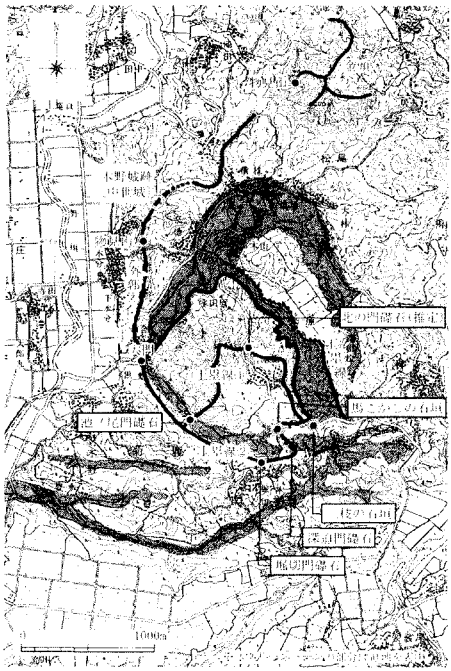


八角形建物跡（32・33号建物跡）

第4図　管理棟的建物群


飛渡
〔通称〕佐官とん
（シャカントン）
〔通称〕ゴンゲンサン
〔通称〕長者井戸
（湧水地）
〔通称〕涼み台御所
銅造菩薩立像
出土地点
〔通称〕紀屋敷
（まつりやしき）
堤の下
蛙石
貯水池跡
米原集落
貯木場跡
少監どん
（ショウゲンドン）
西側土塁線
長者原
〔通称〕灰塚
上原
長者山
鞠智城
温故創生館
三枝の石垣
馬こかしの石垣
池ノ尾門礎石
B地点
I地点
H地点
F地点
E地点
G地点
D地点
C地点
南側土塁線
A地点
堀切門礎石
深迫門礎石
山鹿市菊鹿
堀切集落
菊池市木野
木野神社
0
300m

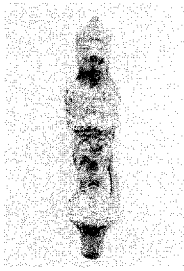
第３図　鞠智城跡全体図



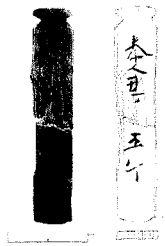
第１図　鞠智城跡城域図

城域については、古くから広域説、狭域説などが論じられてきたが、現在、周長 3.5ｋｍ、面積 55ｈａ、標高 90～171ｍの範囲を真の城域とし、約 64.8ha の範囲を国の史跡として指定されている。

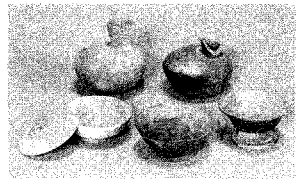
鞠智城跡の発掘調査は、昭和 42（1967）年度の第１次調査に始まり、平成 22（2010）年度で第 32 次を数える。古代山城では唯一の八角形建物跡をはじめとする 72 棟の建物跡や、約 5,300 ㎡の規模を有する貯水池跡、城門の門礎石、版築工法による土塁跡が検出されるなど、城の構造解明が進み、須恵器、土師器などの土器や単弁八葉蓮華文軒丸瓦をはじめとする瓦類、建築用材、木製品に加え、百済系の銅造菩薩立像、「秦人忍口五斗」銘の付札木簡などが出土した。



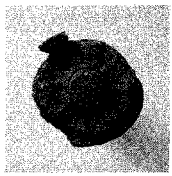
銅造菩薩立像



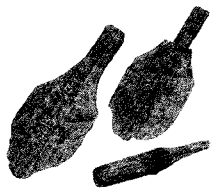
「秦人忍口五斗」銘木簡



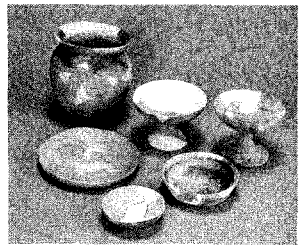
須恵器



単弁八葉蓮華文軒丸瓦



木製品（平鍬・横槌）



土師器

第２図　出土遺物

鞠智城跡の調査と成果

歴史公園鞠智城・温故創生館

1　概要

鞠智城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山に源を発し有明海へと西流する菊池川の中流域（河口まで約 40 km）、山鹿市、菊池市の市境に所在する古代山城である。『続日本紀』文武２（698）年に繕治された「鞠智」の城跡で、『文徳実録』天安２（858）年条の「菊池城院」、『三代実録』元慶３（879）年条の「菊池郡城院」も同城の記述とされる。

筑肥山地の主峰、「八方ヶ岳」（標高 1,052m）の南西麓は、小河川により複雑な丘陵地帯を形成している。鞠智城跡は、その丘陵地帯の南端近く、標高 140m前後の通称「米原台地」を中心に立地しており、比較的低い丘陵上に築かれていることを特徴とする。北には福岡県との県境を限る筑肥山地の山脈が連なり、南には菊池川及び支流域に発達した肥沃な菊鹿盆地が拡がり、県下でも有数の穀倉地帯を形成している。

また、城跡の南には、「車路」地名により復原された古代官道が推定されており、現在でも、福岡、大分、阿蘇、熊本方面へと幹線道路が延びる交通の要衝地となっている。古代律令制下では肥後国菊池郡に属し、周辺は『和名抄』にみる城野郷に比定されるが、城跡内及びその周辺に残る「木野」地名がその名残りをとどめる。

六国史にみる鞠智城　＊『国史体系』吉川弘文館

甲申。令二大宰府一繕中治大野・基肄・鞠智三城上。
（書き下し文）
「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」
『続日本紀』文武天皇二（698）年五月二十五日条

丙辰。肥後国言。菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳。又鳴。
（書き下し文）
「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「丁巳、又鳴る」
『日本文徳天皇実録』天安二（858）年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。
（書き下し文）
「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「同城不動倉十一宇火く」
『日本文徳天皇実録』天安二（858）年六月二十日条

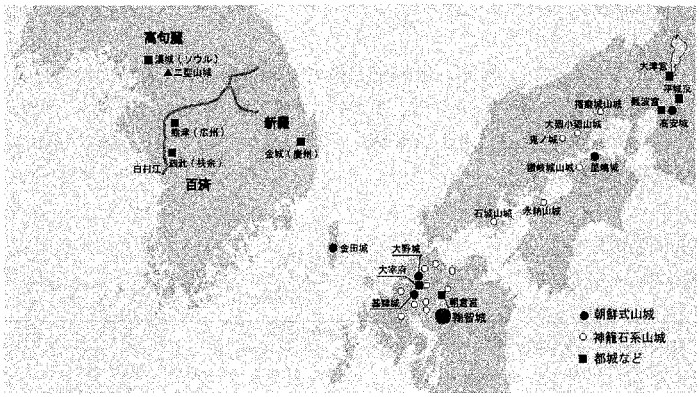
肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。
（書き下し文）
「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」
『日本三代実録』元慶三（879）年三月十六日条

鞠智城関連年表

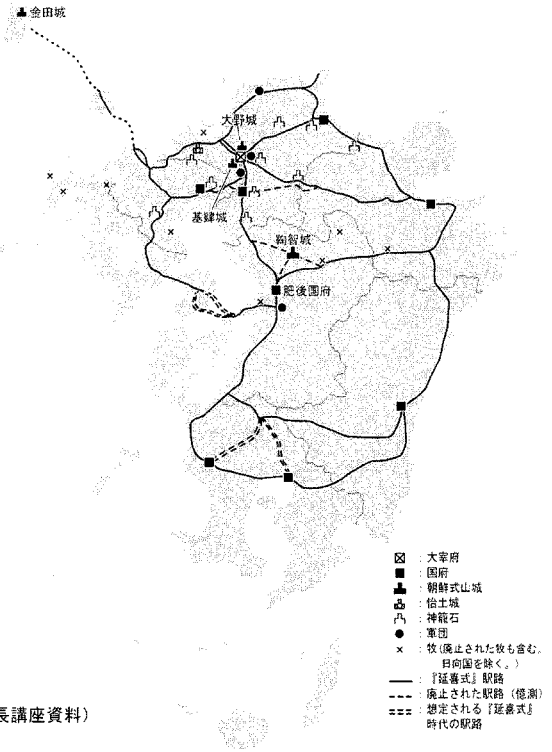
西　暦	年　号	内容
645	大化元	大化の改新。
646	大化2	改新の詔を発布。
660	斉明6	唐と新羅によって百済滅亡。
661	斉明7	朝倉橘広庭宮に遷宮。
663	天智2	白村江の戦い　※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664	天智3	対馬・壱岐・筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665	天智4	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667	天智6	近江大津宮に遷宮。
〃	〃	大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
668	天智7	高句麗滅亡。
669	天智8	高安城修理。
670	天智9	高安城修理。
672	天武元	壬申の乱。
676	天武5	新羅が朝鮮半島を統一。
678	天武7	筑紫国大地震。
694	持統8	藤原京遷都。
696	持統10	※「肥後国」の文献上の初見。
698	文武2	大宰府に大野・基肄・鞠智の三城を繕治させる。
〃	〃	高安城を修理。
699	文武3	高安城を修理。
〃	〃	大宰府に稲積・三野の二城を修理させる。
701	大宝元	大宝律令制定。
710	和銅3	平城京に遷都。
719	養老3	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756	天平勝宝8	怡土城を築く。
794	延暦13	平安京に遷都
799	延暦18	大宰府管内を除いて烽を廃止。
858	天安2	(閏2月)肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。
〃	〃	(5月)菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875	貞観17	カラスの群れが菊池郡倉舎の葦草を噛み抜く。
879	元慶3	肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

参 考 資 料

鞠智城・古代山城分布図



古代山城分布図



鞠智城跡関連地図

※日野尚志『古代の官道』（鞠智城・温故創生館・館長講座資料）2007 を基に作成。

長者山に長者山西側の 69・70 号掘立総柱建物に替り、46・47・48・72 号礎石総柱建物群が建てられる。

また、長者原から標高差 15m程下った貯水池の側に礎石総柱の 67 号建物が建てられた。

長者原東側の繕治期礎石倉庫群の後に礎石倉庫群が再建され、高床倉庫群を囲むように側柱倉庫群が配置された。また西側長者山にも礎石倉庫群が再建された。また 11 号の跡隣に礎石掘立併用建物である 12 号建物も再建された。

5　終末期の建物群

「文徳実録」に記載された天安二（858）年の「不動倉十一宇火」以降は、東側丘陵地の礎石総柱高床倉庫の建て替えはわずかに 56 号の一棟で、火事跡地に側柱の小規模な建物が建てられたにすぎない。小規模な倉庫群の南側に見張場的な庇を持つ 24・27 号建物が建てられている。

これは、鞠智城の南側土塁や西側土塁を防衛線とする古代山城としての機能が 9C 第 2 四半期には消失し、小規模な郡倉とその管理舎的な施設へ変化していることを示唆している。20・21・46・47・48・64 号建物には火災の痕跡があり、「文徳実録」天安二（858）年の「不動倉十一宇火」の記載との関連も考えられる。

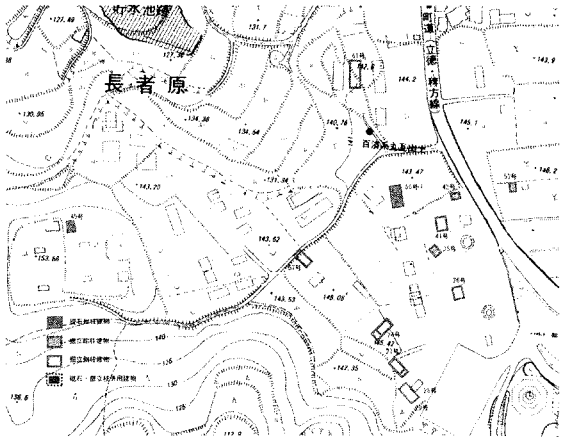


図 27　終末期の建物群

まとめ

本稿は、昭和 42 年から平成 23 年に実施された調査の報告書から得られた知見を大野城発掘建物資料や同時期の文献資料との比較を通して、鞠智城の建物の構造や用途を考察し、各期における鞠智城の建物配置を明らかにした。もとより鞠智城における建物の調査は、倉庫群を中心とした長者原・長者山の周辺部に限られており、北部の営舎群の存在が考えられる米原集落地区については今後の検討課題である。また水門を持つ池の尾門や堀切門、深迫門等に関する考察はその緒についたところである。考古学的、歴史学的には不十分な内容であるが、現時点での建築史学的な成果と課題を記し、多くの批判を受け、今後の研究に期待するものである。

長者原の動用倉庫群の北端には、創建期の15号と主軸を同じくする掘立側柱の14号建物が建て替えられ、内側が3間×4間の礎石総柱で、外周に掘立柱で支えられた庇を持つ11号建物が建てられた。11号建物の外周庇は大野城SB41, 42, 43, 09, 10, 95, 96建物にも付随しているが、大野城では掘立側柱が引抜かれ、本屋根の雨落溝となっているのに対し、鞠智城11号では、掘立側柱が存続し、さらに同様な庇を持つ12号建物に建て替えられている。外周庇空間が、倉庫への搬入の作業空間であったとすれば、大野城では搬入作業が早めに不用となり、これらの倉庫が不動倉化したのに対し、鞠智城では再開期に至るまで、搬入作業の必要な動用倉があったと考えられる。このことから、鞠智城では繕治期から再開期までの長い期間、補給等の機能が維持されていたとも考えられる。

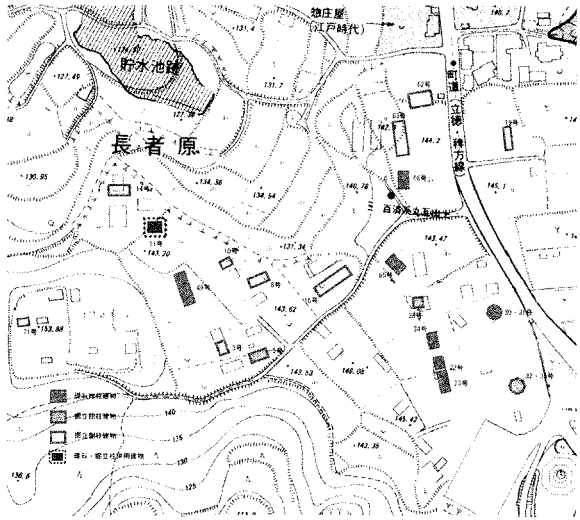


図25　繕治期の建物群

4　再開期の建物群

8C第2, 3四半期の空白期には鞠智城における建築は停滞し、小規模な管理のみが行われていたと考えられる。その間に掘立建物の大部分の柱根が朽ちて、鞠智城に見られるのは礎石建物（22, 23, 30, 34, 49, 65, 66号）、及び礎石掘立併用の11号建物であったと考えられる。

8C第4四半世紀から、東アジア情勢の緊迫化に伴い鞠智城における建設活動が再開し、22・23・34号礎石総柱建物の跡に20・21・36号が再建され、66号の後に64号の礎石総柱建物が再建された。

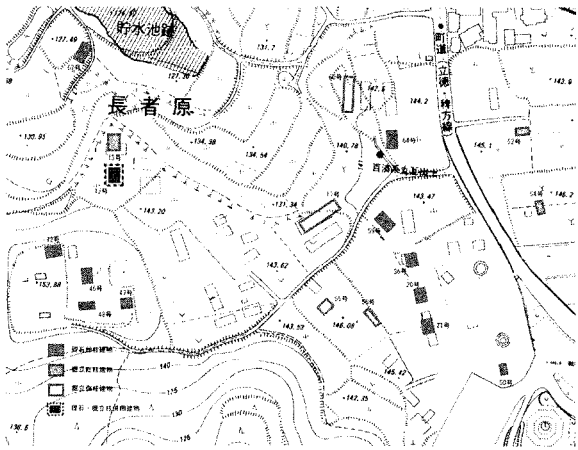


図26　再開期の建物群

2　創建期の建物群

創建期は7世紀の後期、鞠智城が造られた時期である。長者原の台地の中央部に動用倉庫と思われる掘立柱の側柱建物が数棟（1・6・7・9号建物）、長者山の頂部に高床倉である掘立柱総柱建物2棟（69・70号建物）が見られる。長者原の動用倉庫群の東端と北端の突出部に比較的規模の大きい掘立側柱建物である18号と15号建物があるが、倉庫群との位置関係から管舎的な機能が考えられる。また、長者原東側の小高い丘陵部にも掘立総柱構造の40号建物が存在する。創建期建物は緊急の建設を要したため、すべて掘立柱で建てられたと思われる。

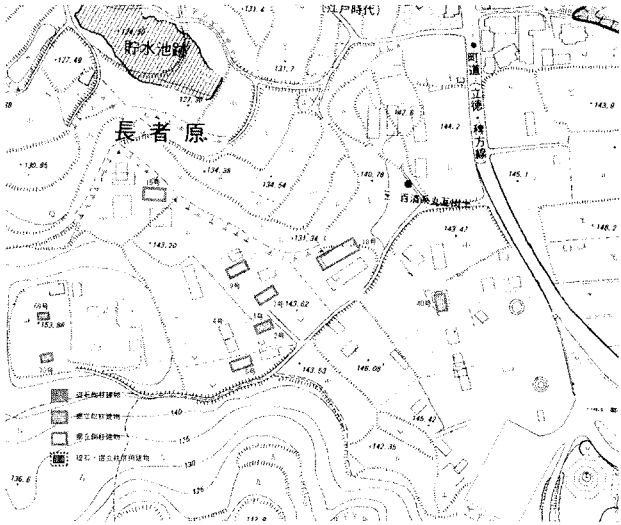


図24　創建期の建物群

3　繕治期の建物群

繕治期は「続日本紀」に「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」と記述された文武二(698)年から8C第1四半期にあたる。創建期に建てられた建物のうち、高燥な長者山に建てられた高床倉庫（60・70号建物）をのぞけば、掘立建物が耐用年数を超え建て替えが必要な時期であった。一方、東アジア情勢の緊張は解け、国内では、中央集権的な律令制が布かれ、鞠智城は大野城や基肄城とともに長期的な防衛・備蓄を目的とした大規模な城としての機能を求められた。また、九州中央部に位置する鞠智城は、当時律令制による統治が及んでいなかった薩摩・大隈への軍団出兵の兵站基地としての機能を負っていたことも考えられる。

長者原の動用倉庫である屋（3・5・8・10号建物）が建て替えられ、大規模な動用穀倉である礎石総柱構造の長倉49号建物も建てられた。

東側丘陵には南から北に向かって23・22・34・66号の礎石総柱建物が一列に並び、丘陵の北端に総柱建物群と主軸を同じくする掘立側柱の63号建物と直行する主軸を持つ62号建物が建てられた。また総柱建物群と並行して2棟の掘立八角形建物31・32号建物が建てられたが焼失し、8C初期には31号の掘方の上に礎石を据えた30号八角形建物と32号建物の後に中心を動かさずに反時計廻りに23.5°回転させた33号掘立八角形建物が建っていたと考えられる。

創建期	繕治期	空白期	再開期	終末期
			●36号 ⟶ …	
	○38号 ⟶ …			
○40号 ⟶ …				
				□41号 ⟶ …
				○42号 ⟶ …
				●45号 ⟶ …
			●46号 ⟶	火災跡
			●47号 ⟶	火災跡
			●48号 ⟶	火災跡
	●49号 ⟶		火災跡	
			●50号 ⟶	火災跡
			○52号 ⟶ …	
				○53号 ⟶ …
			○54号 ⟶ …	
			□55号 ⟶ …	
				●56号 ⟶ …
				□57号 ⟶ …
			□58号 ⟶ …	
			●59号 ⟶ …	
			□60号 ⟶ …	
				□61号 ⟶ …
	□62号 ⟶ …			
	□63号 ⟶ …			
			●64号 ⟶	火災跡
	●65号 ⟶ …			
	●66号 ⟶ …			
			●67号 ⟶ …	
○69号 ⟶ …				
○70号 ⟶ …				
	□71号 ⟶ …			
			●72号 ⟶	火災跡

凡例　□：掘立側柱　○：掘立総柱
▲：掘立側柱・礎石総柱併用
●：礎石総柱

表 7　鞠智城の建物の建設時期と存続期間

創建期	繕治期	空白期	再開期	終末期
○1号→				
□2号→				
	□3号→			
?4号→	○5号→			
□6号→				
□7号→				
	□8号→			
□9号→				
	□10号→			
	▲11号→			
			▲12号→	
	○13号→			
□14号→				
□15号→				
	□16号→			
	□17号→			
□18号→				
	□19号→			
			●20号→	火災跡
			●21号→	火災跡
	●22号→	火災跡		
	●23号→	火災跡		
				□24号→
				○25号→
				□26号→
				□27号→
				□28号→
				□29号→
	○31号→●30号→			
	○32号→○33号→			
	●34号→			

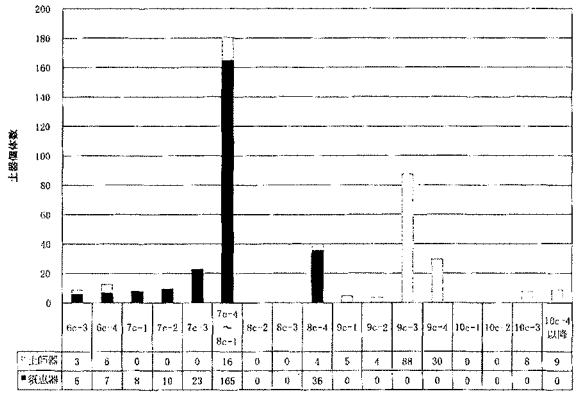


図 23　鞠智城出土土器の時期別数量比較図

鞠智城は、7C 第 3 四半世紀に水城・大野城・基肄城等の大宰府都城の築城と前後して築城されたが、新羅使・唐使の相次ぐ来朝による東アジアの政情の安定化に伴い、本格的対外防衛網の整備を目的として文武 3（698）年から大野城・基肄城とともに繕治された。天平宝字 2（758）年、唐で安禄山の乱が報じられ、新羅が日本の使節に無礼をはたらいたとして対外的な緊張が高まり、藤原仲麻呂は大宰府をはじめ防備を厳にすること命じ、鞠智城に於いても礎石倉庫等の建設が再開された。9C からは新羅との緊張は緩み、鞠智城は朝鮮式山城としての機能から、天安二(858)年文徳実録による「城院」、貞観十七（875）年三代実録による「郡倉」の呼称に見られるように、郡倉として機能に変化した。日本と東アジアの関係と鞠智城の土器出土量の画期、鞠智城建物の構造別の建造時期と存続時期は、深い関係が見られる。

鞠智城建物の建造時期と存続時期を、発見された建築跡を切り合い関係や出土遺物から、8 世紀第 2、3 四半世紀の空白期を挟んで下記の 5 期に分類した。

- ・創建期　　7C 第 3 四半世紀　　鞠智城が築城された時期
- ・繕治期　　7C 第 4～8C 第 1 四半世紀　大野、基肄、鞠智の三城繕治の時期
- ・空白期　　8C 第 2, 3 四半世紀　鞠智城の建設活動が停滞した時期
- ・再開期　　8C 第 4 四半世紀　　礎石倉庫等の建設が再開された時期
- ・終末期　　9C 第 1 四半世紀以降 鞠智城が菊地郡倉舎に変化し、倉庫の屋根も草葺となり天安二(858)年の不動倉十一宇火（文徳実録）の記述以降、歴史の舞台から姿を消していく時期

表 7 に鞠智城の各建物の建設時期と各建物の耐用年数や火災等による存続期間を示した。

8　鞠智城のセットの建築群

鞠智城の建物は、主軸や構造を同じくするセットの建築群が見られる。その典型的な建築群が下記の建築群である。セット建物には建築年代の前後関係が見られる

(1) 11・12 号　　礎石・掘立柱併用建物　11 号→12 号
(2) 20・21・22・23 号　　礎石総柱建物、22・23 号→20・21 号（3 間×4 間）
(3) 30・31・32・33 号　　八角形建物、31 号→30 号、32 号→33 号
(4) 62・63 号　　堂庁的な直交軸を持つ建物
(5) 20・21・36・59・72 号　3 間×4 間礎石総柱倉庫（8C 末頃以降）
(6) 45・46・47・48 号　　礎石総柱倉庫群（45 号は終末期）
(7) 24・27 号　　掘立側柱で端部に区画を持つ（終末期）

また 49 号は、大野城の礎石長倉 SB60 と類似している。大野城の建物の変遷を、掘立側柱→掘立長倉→礎石長倉→礎石掘立併用倉（礎石部分 3 間×5 間）→礎石 3 間×5 間倉とすると、49 号は礎石長倉にあたり、建造時期は礎石建物の開始時期である 8C 初期が想定できる。

第 4 章　鞠智城の建物の建造時期と存続期間

1　鞠智城建物の建造時期

鞠智城建物の建造時期と存続時期を検討する前に、鞠智城跡の出土土器の画期毎の量を比較し検討した資料がある。（鞠智城跡Ⅱ　第Ⅵ章　総括　P472）

資料によれば、出土土器の第 1 の画期は 7C 第 3 四半世紀で、第 2 四半期以前に比べて出土土器数が倍増する

第 2 の画期は 7C 第 4～8C 第 1 四半期で、須恵器の出土がピークを迎える。

第 3 の画期は 8C 第 2、3 四半期で、土器が存在しない空白期である。

第 4 の画期は 8C 第 4 四半期で、再び須恵器が使用される。

第 5 の画期は 9C 第 1、2 四半期で、須恵器は存在せず、少量の土師器のみ出土。

第 6 の画期は 9C 第 3、4 四半期である。この時期に「鞠智城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城不動倉 11 宇火」（文徳実録　857 年）の記事があるが、第 1 の画期に次ぐ土器使用量第 2 のピークを迎える。すべて土師器である。

第 7 の画期は 10C 第 1、2 四半期である。再度空白期を迎える。

第 8 の画期は 10C 第 3 四半期である。このころには鞠智城は廃絶し、別の目的で土器が使用された。

＊「鞠智城跡Ⅱ」（2012 年 3 月　熊本県教育委員会）
では 7C 第 4～8C 第 1 四半期を土器編年の第 1 の画期とし、
第 2：8C 第 2、3 四半期、第 3：8C 第 4 四半期・・・と記述されている。
本論では、鞠智城創建期（7C 第 3 四半世紀）を第 1 の画期とし、以下
第 2 の画期は 7C 第 4～8C 第 1 四半期・・
として記述している。

5　鞠智城 62・63 号建物

60 号・61 号・62 号・63 号は、いずれも大型掘立側柱建物である。

62 号建物と 63 号建物の主軸が直交し、梁行の柱間が 6.5 尺で共通しており、セットの建築群と考える事が出来る。この 2 棟からは、遺物の検出がなかったことから、頴倉とも考えられるが、館舎が立ち並んでいたと考えられている米原地区に近接する地域に位置することから管理用建物の可能性も否定できない。

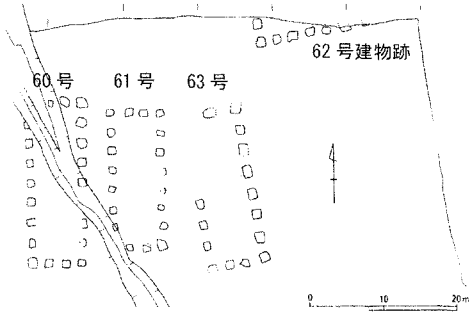


図 19　60～63 号建物平面

6　鞠智城 45・46・47・48 号建物

45 号～48 号は長者原西側の丘陵地（長者山）に建つ礎石総柱建物で共通する主軸を持つ建物群である。

建物の規模等から長者山西側の 69 号・70 号・72 号を含めて板倉の不動倉群と考えられる。また 45 号は 72 号の上層に建てられていることから 46・47・48 号より建造年代が下がり、終末期の小規模な板倉と推定できる。

図 20　45・46・47・48 号建物平面

7　鞠智城 24・27 号建物

24・27 号は桁行に間仕切があり、端部一間に庇様の区画を持っている。

大野城跡で類似する建物は主城原地区 SB80 である。SB80 は 2 間×7 間以上の側柱建物で南から 2 間目に間仕切があり、南側 2 間部分に炉跡があることから、営舎的な性格が推定される。

同様に鞠智城 24・27 号も同様な営舎的な建物で、終末期の鞠智城が小規模な郡倉とその南側の傾斜地に見張場的な営舎を持っていたと推定できる。

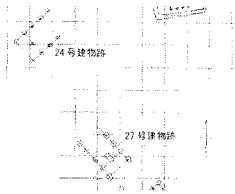


図 21　24・27 号建物平面

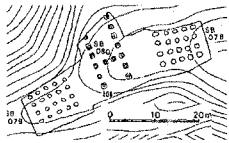


図 22　大野城 SB80

「韓国の二聖城について・・二聖城視察報告　鞠智城跡代13次調査報告 1992」に、東側の二重に柱礎石の周る九角形建物が天壇、西側の三重に柱礎石が周る八角形建物が地壇・社稷と考えられていたと記載されている。また二聖山城には十二角形の建物遺構もあり、祭祀遺構と推定されている。一方丸都山城では長大な礎石建物群とともに八角形建物が東西に並んでいる。

鞠智城八角形建物の柱が中心から放射線状に配置されるのに対し、丸都山城跡八角形建物は直行軸に柱が配置される。

日本における八角形建物跡の事例としては前期難波宮跡の内裏南門の東西の一対の八角建物（7C中期）が挙げられる。東西の建物とも掘立三重であるが三重の柱のうち二重目と三重目の柱列の掘方が一列目の柱列に比べて小さく、

また二列目と三列目の間隔が狭いため、八角形建物は一重で二重目、三重目は縁庇的なものと推定される。

現存する八角形建物は法隆寺東院夢殿（739年）を嚆矢とし、奈良時代に創建されたものは栄山寺八角堂、法隆寺西円堂（再建）、興福寺北円堂（再建）があげられる。

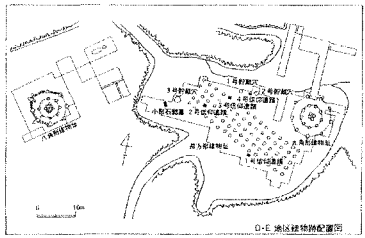


図13　漢陽大学校博物館叢書第5輯『二聖山城』1987

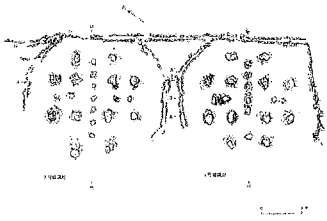


図14　丸都山城八角形建物跡柱配置

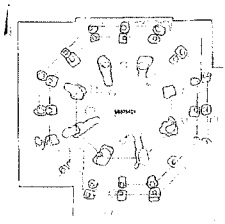


図15　前期難波宮跡東八角殿

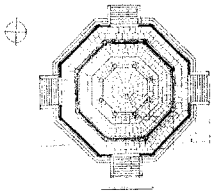


図16　法隆寺東院夢殿平面図

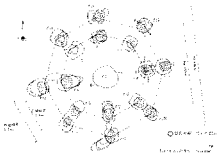


図17　鞠智城30・31号建物

図18　鞠智城32・33号建物

このことから SB95 は当初四面庇の高床建物が想定され、鞠智城 11・12 号と類似する構造を持つ。両者の違いは、鞠智城 11 号の雨落溝が側柱より外 1.8m の距離にあるのに対して、大野城 SB95 の雨落溝は掘立側柱が撤去された後に側柱の位置に検出された点である。これは鞠智城 11 号が四面庇高床建物として建築された後、長期間当初の形式を保ちながら使用されていたのに対し、大野城 SB95 は、当初四面庇高床建物として建築された後、掘立柱が立ち腐れる前に引き抜き、5 間×3 間の建物として使用されていたことを示している。すなわち 5 間×3 間総柱＋側柱建物→5 間×3 間総柱建物という時間軸による変遷が見られるのに対し、鞠智城 12 号では、側柱の腐った柱根を切り取って礎石に置き換えた跡も見られ、四方庇建物が長期間使用され続けたことがわかる。

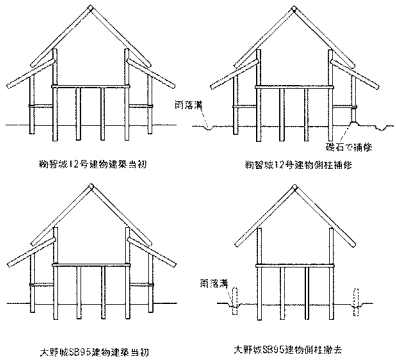


図 12 大野城 SB95 と鞠智城 12 号の構造の変遷

3　鞠智城 20・21・22・23 号建物

22・23 号は 20・21 号の前身建物である。このうち 22 号は 4 間×4 間、23 号は 4 間×6 間、20 号は 4 間×3 間、21 号は 4 間×3 間で、桁行きも 20 尺を超える礎石総柱建物であることから、『和泉監正税帳』に記述された板倉と考えられる。上層建物の 20・22 号の柱間は 8 尺で統一されているのに対し、前身建物の 22・23 号の梁行の柱間は 4.8 尺と狭くなっている。規模や規格が一定しない 22 号（4 間×4 間）23 号（4 間×6 間）から 4 間×3 間の規格を持つ 20 号・21 号への時系列的変遷をみることができる。

鞠智城の礎石総柱建物で梁間・桁行が確定できる 18 棟の内 4 間×3 間の建物は 20・21・36・59・72 号の 5 棟である。このうち 36 号の地業穴からは 9C 代の高台付き土師器が出土しており、72 号の出土遺物から 9C 後半を下限とする年代が推定されている。また 20・21 号には火災の痕跡が残り、「文徳実録」天安二（858）年の「不動倉十一宇火」の記載との関連も考えられる。すなわち、鞠智城の 4 間×3 間建物は 8C 末以降に建てられたと推定できる。

4　鞠智城 30・31・32・33 号建物-八角形建物群

31 号（掘立二重）は 30 号（礎石二重）に先行し、32 号（掘立三重）は 33 号（掘立三重）に先行する。このように 2 棟の八角形建物をセットで有するものは朝鮮半島では三国時代に存在したと考えられる二聖山城および高句麗中期の首都近郊の丸都山城においてみることが出来る。

しかしながら海外の緊張関係が緩んで、築城期掘立建物の耐用年数が過ぎた7世紀末において、大宰府が繕治した建物の用途は、営舎でなく、SB65 のような大規模な長倉（法倉）であったと考えられる。大野城主城原地区では SB64（掘立側柱営舎・大野城築城期）→SB65（掘立総柱長倉・大野城繕治期）の変遷が指摘されており、礎石総柱長倉である SB60 は SB65 の後に建築されたと推定される。
鞠智城で SB60 建物と同様の平面形式で同じような版築基壇を持つ礎石総柱建物である鞠智城 49 号建物も同様な意図のもとに動用倉庫（法倉）として建設されたと考えられ、その建造時期は 8C 前期と推定される。

2　鞠智城 11・12 号建物

鞠智城 11 号は 6 間×5 間の総柱建物であるが、中の 4 間×3 間の柱が礎石建で、四周の側柱は掘立柱で礎石と掘立柱を併せ持った建物である。11 号の西側 10.2m（34 尺）の所に礎石・掘立柱併用総柱である 12 号がある。また 12 号の北には 12 号と桁行方位を同じくする 4 間×3 間の掘立総柱の 13 号がある。この 3 つの建物跡は軸方向が同一で、セットの建物群と推測される。
11 号・12 号とも礎石は丁寧な版築地業の上に据えられて、縁部の掘立柱の堀形は長軸 130～170 cm、短軸 120cm～170cm の方形で柱穴の深さは 55cm 前後で、柱径は 35cm 前後、柱の埋土は最大 8 層の丁寧な版築である。11 号の南側 180 cmの位置に長さ 5.5m 深さ 37～57cm の雨落溝が検出されたため、1 間幅の四周部分は長期間、屋根が掛かっている、いわゆる庇屋根が想定される。11 号掘方からは 7 世紀後半坏蓋、12 号建物掘方からは 8 世紀後半高台付碗が検出され、これらの 2 棟は他の倉庫とは性格を異にする。

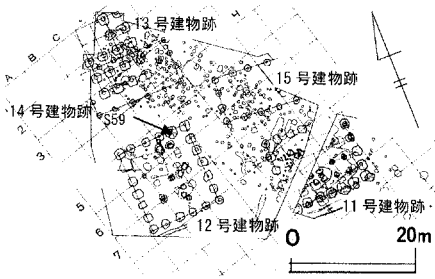


図 10　11～15 号建物群平面図

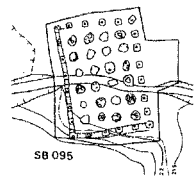


図 11 大野城 SB95

大野城跡には鞠智城と同じく周囲に掘立側柱を持つ礎石建物が 7 棟ある。
村上地区 SB095 建物は村上地区の広い平坦地にあって、3 間×5 間の礎石総柱建物の四周を 1.8m（6 尺）幅で掘立柱が囲む鞠智城 11 号・12 号と類似する構造の建物で柱間は桁行、梁間とも約 7 尺であった。調査の当初は、四周の雨落ち溝と思われた遺構の下から掘立柱穴が検出された。礎石軸と掘立穴軸は一致しており、同時に建築されたと考えられる。
掘形は一辺が約 1m の隅丸方形で深さ 60～80 cm、柱根はなく抜き取り穴がある。

第3章　鞠智城の建物と大野城の建物

1　鞠智城49号建物

鞠智城の49号(図3)は3間×9間の礎石総柱建物である。桁行21.4m、梁行7.1mを測る。昭和44(1969)年の第4次調査記録によれば、建物部分の地山を掘り下げて30～40cm厚さの版築基壇を設けその上に根固め石を添えずに直接花崗岩の礎石を据え、礎石の下部を版築で固める。柱間は桁行、梁行ともに8尺である。

49号からは布目瓦が出土し、また礎石に火を受けた跡があり、火災で焼失したと考えられる。49号は瓦葺高床長倉と考えられている。

この鞠智城49号と類似する建物が『和泉監正税帳』に記されている。和泉郡南院北第壱法倉は桁行21.6m、梁行6.3mの動用穀倉である。尺で測ると梁間21尺、桁行36尺で、梁間の柱間を7尺、桁行の柱間を8尺と仮定すると3間×9間の建物が想定され、鞠智城49号の規模と一致する。

大野城跡においても鞠智城49号に類似する建物跡がある。主城原地区SB60は3間×8間又は9間の礎石総柱建物である。約70cmの版築基壇の上に礎石を設ける。柱間は桁行256cm(8尺5寸)、梁行240cm(8尺)である。SB60の上層にSB61,SB62跡があるため、桁行は8間までは確認できるが鞠智城49号建物と同様に3間×9間の長倉である可能性が高い。

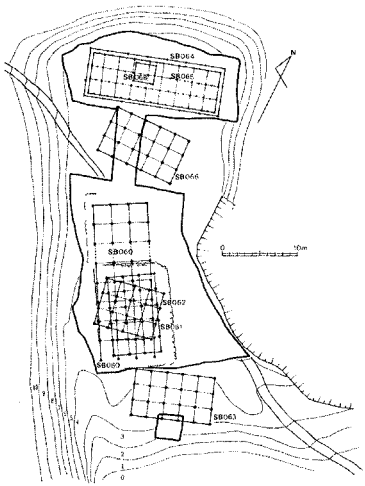


図9　大野城跡主城原地区建物配置図

(特別史跡大野城跡Ⅲ　1979福岡県教委委員会より抜粋)

SB60の北側に建つSB65は下層の掘立側柱建物SB64と同位置に建てられた9間×3間の掘立総柱建物である。注目されるのは、SB65の下層建物であるSB64は3間×7間の掘立側柱建物であるが、柱穴から検出した単弁瓦当の製作年代が天智四(665)年から天智九(670)の間に想定され、少なくとも7世紀後半代と考えられる点である。

掘立柱建物の耐久年数を20～30年とすれば、SB64の後に建てられたSB65の建築時期は、続日本書記の記録にある「大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ」文武二(698)年頃と大きな隔たりはないと考えられる。

またSB65の下層にあるSB64は掘立側柱であるが掘立柱の堀方は大きく深く、丁寧に建設されている。また単弁の完形瓦当が検出されており、軒丸瓦を葺いた大規模な建物で、白江村の敗戦以降の緊張した海外事情から築城された大野城に防衛指揮をとる営舎として建造されたと推測される。

2 大宝律令等に見られる古代の建物群の配置

大宝律令（たいほうりつりょう）は、大宝元(701)年に制定された日本の律令である。唐の永徽律令（えいきりつれい、651 年制定）を参考にしたと考えられている。

大宝律令『倉庫令』の原文は現存しておらず、一部が逸文として残存している。

『倉庫令』復原逸文全 16 条の第 1 条に下記記述がある。

○01　（倉於高燥処置条）

倉は、みな高く乾燥した処に於くこと。周囲に池渠〔いけみぞ〕を開くこと。

倉の周囲半径 50 丈（約 150m）以内に館舎を置いてはならない。

（日本思想大系「律令」復元逸文訳（岩波書店）より抜粋）

即ち、倉から半径 150m 以内に営舎・宿泊施設を置いてはならないという令である。

図 8 に 7 世紀前半期から 9 世紀初めまで御原郡の郡衙であった下高橋遺跡（福岡県三井郡太刀洗町国史跡）の遺構配置図を示す。

郡衙は総柱建物や側柱建物が整然と並ぶ東西 150m、南北 170m の大溝と築地塀で区画された正倉院と、東西 170m、南北 175m の大小二本の溝で区画された細長い側柱建物が並ぶ郡庁院が計画的に区画されている。正倉院には東西 2 列に各 5 棟の高床倉が並ぶ。1 棟の倉は 4 間×3 間で、平均桁行約 8m、梁行約 6m で高床の板倉と考えられる。

正倉院と郡庁院の中心部の距離を測ると約 150m で大宝律令倉庫令の倉と館舎の距離がとられているが、個々の倉と館舎は 150m の距離はとられていない。しかしながら下高橋遺跡のような平坦地の郡衙では正倉院と館舎群である郡庁院が渠と塀によって明確に分離されていたことがわかる。山地の郡衙においても、郡庁院と正倉院の遺構が離れた丘陵上に分散する事例が見られる。

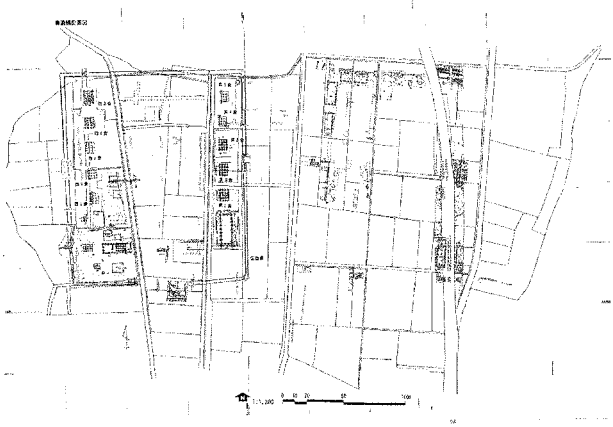


図 8　下高橋遺跡遺構配置図

越中国官倉納穀交替帳(『石山寺資料叢書』)

no	国名年代	郡	用途	倉名称	倉長	倉広	塞長	塞広	倉高	委高	収納量	収納量	底敷	床面積
1					(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(斛)	(束)	頴稲	(㎡)
2	越中	某村		借西外一倉								2000		
3	910以降			借北外一倉								3000		
4				東後二屋								3000		
5				借東後三屋								3000		
6				東後四屋								3000		
7				借西外二屋								3201		
8				借南外西一屋								7500		
9		川上村		東中一板倉							456			
10			不動	西第一板倉	8.5	7.8	1.7	1.4	4.2	4.1	3280		有	66.0
11			不動	西第二板倉	8.7	5.5	2.2	1.5	4.6	4.1	3684		有	48.2
12			不動	西第三板倉	8.4	7.7	2.0	1.2	4.4					64.5
13		某村			8.5	7.8	2.0	1.2	4.4	4.5	3900			65.7
14			不動	北第二板倉	9.1	8.8	2.0	1.4	4.6	4.6	4750		有	80.4
15		某村	不動	西第五板倉	15.0	7.1	1.9	1.4	3.0	3.0	6260		有	105.8
16				東後外三板倉							482			
17				東後中二板倉							746			
18				東一校屋							538			
19				東中一校屋							831			
20				東後一校屋							787			
21				東後二校屋							1118			
22				東後三校屋							444			
23				東後四校屋							450			
24				東後外一倉							863			
25				東第五屋	21.3	6.7			5.1		610			143.1
26				借東後三校倉								4000		
27				南二屋								3000		
28				借東外五少倉								1460		
29				借東四屋								4000		
30				借東後外二屋								3000		
31				借東五屋								3000		
32				西外一屋								4000		
33				西外二税屋								3000		
34				東三屋								5000		
35				南三税屋								1520		
36		意斐村		東後第一板倉	7.9	5.6			3.5		602			44.4
37			不動	東後外第三板倉	14.5	8.3	2.5	1.7	4.9	4.5	6599		有	121.1
38			不動	東第一板倉	5.8	4.9	1.9	1.0	5.4	3.3	1114		有	28.3
39			不動	東第二板倉	5.9	5.4	1.8	1.1	2.9	2.9	1154			32.1
40			不動	東第三板倉	12.2	8.7	2.0	0.9	5.0	3.5	6940		有	105.9
41			不動	東第四板倉	12.0	8.3	2.4	1.4	4.5	4.7	6010		有	100.0
42			不動	南第一板倉	8.4	7.8	2.3	1.5	3.9	4.0	3293			66.0
43			不動	南第二板倉	9.6	8.3	2.2	0.8	6.0	5.9	6023		有	79.2
44			不動	西第二板倉	9.0	7.8	2.3	1.1	5.0	5.1			有	70.7
45			不動	西第五板倉	11.9	7.8	2.5	1.5	5.5		4462			93.1
46			不動	北第二板倉	8.4	7.9	2.0	1.1	4.2	4.2	3666			66.3
47			不動	北第二板倉前第二板倉	7.3	7.3	2.0	1.5	4.8	4.4	2950		有	53.1
48			不動	北外第二板倉	5.0	4.1	1.3	0.7	3.2	3.5	879			20.5
49			不動	西第三板倉	8.3	7.7	2.2	1.4	4.3	4.0	3578			64.3
50			不動	西第六板倉	8.8	7.9	2.2	1.0	4.7	4.5	4080		有	69.9
51			不動	北外後第一板倉	9.4	5.6	2.6	1.4	3.0	3.2	2114		有	51.9
52			不動	北外第一板倉	5.3	5.2			3.4	3.4	1442			27.6
53				東後六屋							192			
54				東後四屋							2000			
55				借東後三倉							3000			
56				借東後外一屋							3000			
57				北外後第二板倉	6.6	5.4			3.5		7000			35.3
58				東第五板倉	4.4	3.6			3.0					16.0
59				東第六板倉	4.6	4.2			2.7					19.0
60				北外第三板倉	7.8	5.7			3.1					44.6
61				東第七屋	12.0	6.9			3.0		11000			82.8

表 6　越中国官倉納穀交替帳に記述された建物

・「甲倉」は総柱の高床の上に多角形断面のあぜ木を組み合わせて壁を作る構造で、東大寺正倉院に代表される校倉構造の倉である。校倉では、使用するあぜ木の長さによって桁行・梁行が制限されるために、桁行・桁行ともに2丈（約6m）を越えるものは少なく、『和泉監正税帳』に記載された2棟の甲倉の平均桁行は5.15m、平均梁行4.2mで平均床面積は21.6㎡、平均収納量は765斛である。
・「丸木倉」は、高床の上に丸太を組み合わせて壁を作る構造の倉である。甲倉より初源的な構造で、丸太で作るため内部が凸凹で、隙間も多いため穀倉として使用はできず。全て籾倉である。『和泉監正税帳』に記載された丸太倉10棟のうち6棟が空で、8世紀初めには、甲倉や板倉の普及とともに使用されなくなったとも考えられる。甲倉と同様に桁行・桁行ともに2丈（約6m）を越えるものは少なく、『和泉監正税帳』に記載された丸木倉の平均床面積は16.8㎡で平均収納量は152.3斛（1523束）である。
・「板倉」は、大型の穀倉用に開発された構法で、高床の上に縦溝の入った柱を立て、横長の厚板を柱の縦溝に落としこんで壁を作る横羽目板方式の高床倉である。「板倉」は「丸木倉」や「甲倉」のような桁行の制限はなく、桁行き材を継ぎ足すことが可能で、収納量の大きい倉が可能である。『和泉監正税帳』では、全31棟中11棟が板倉であったが、延喜十(910)年『越中国官倉納穀交替帳』に記載された高床倉は殆どが板倉で丸木倉や甲倉（校倉）は記載されていない。すなわち、当初「丸木倉」や「甲倉」で建てられた倉は、容量の制限がなく、大容量の収納を可能にした「板倉」にとって替わられたと考えられる。『和泉監正税帳』に記載された板倉の平均床面積は30.9㎡で平均収納量は1207斛である。
・「法倉」は板倉で桁行が長く収納量の多きい長倉を指す。『和泉監正税帳』では平均床面積が122㎡、平均収納量3642斛である。法倉は動用倉で、飢饉や非常時に使われる穀を収納したと考えられる。非常に大きく、律令時代の倉の中でも象徴的な穀倉と思われる。
・「屋」は平屋の動用倉で、籾稲を収納した。『和泉監正税帳』では梁行は5m前後であるが桁行は高床の制限がないため約6m～14mのさまざまな長さの「屋」がある。動用倉で、必ずしも満杯状態の収納量の記述でないため、収納量のばらつきは多いが平均約500斛（5013束）である。桁行長が梁行長の2倍を超えるものが多い。床は土間か低床の建物を想定できる。

表6に10世紀初期の『**越中国官倉納穀交替帳**』に記載された建物を示した。高床倉は全て板倉で、板倉の規模も『和泉監正税帳』の平均床面積は30.9㎡に対し『**越中国官倉納穀交替帳**』では60.5㎡とほぼ倍の大きさになった。時代が下がるにつれて、板倉の規模が拡大したことがわかる。

正税帳には正税を保管する建物の不動倉・動用の別、建物の名称・構造、建物の幅と奥行、穀倉における塞の幅・奥行、建物の軒高・収納高、実質容量、収納量（穀倉は斛、頴倉は束で表示）が記録されている。

① 建物の用途・・不動倉と動用倉

稲穀を収納した正倉が満載となった後に、国司・郡司による検封作業を経て封印された倉庫を不動倉と呼ぶ。対して通常あるいは非常時の正税の稲穀の出納が行われる倉を動用倉（動倉）と呼ぶ。鞠智城においても天安二（858）年の条に「同城不動倉十一宇火」の記述が見られ、不動倉があった。『和泉監正税帳』の建物の不動倉（板倉）と動倉（板倉）の床面積を比較すると、不動倉の平均床面積が 34 ㎡に対し動倉の床面積は 22.7 ㎡と 2/3 程度となる。

用途	面積(㎡)
不動倉(板倉	34.2022
不動倉(甲倉	20.5
動倉	22.7985

用途	収納量(斛)
不動倉(板倉	1349.2
動倉(板倉)	851

表 5 不動倉と動倉の比較

収納量でも不動倉が平均 1349 斛に対し動倉は 851 斛と 62%程度である。両者を比較すると不動倉は規模が大きく、動倉は小ぶりな建物と考えられる。

② 塞の有無・・穀倉と頴倉

図 7 に『和泉監正税帳』（表 4）の 2 番目に記載された「東第二板倉」の高床部分を示した。板倉の長（桁行）は 174 寸、広（梁行）は 145 寸で左正面中央の四角い凹みが賽である。

古代の米の収納は、穂刈した稲頴をそのまま束で収納する頴倉が中心であったが、対外関係の緊迫化等に伴う大量の備蓄の必要から、頴より容量が小さく貯蔵性もよい穀による貯蔵法として、倉の入口部分に柱の縦溝に横板を落としこむ塞と呼ばれる積込み空間を設け、穀を倉全体でバラ積みできる穀倉が開発され、普及した。

しかしながら、日常的な食糧庫や、春に農民に官稲を貸し付け、秋に三割から五割の利稲とともに回収する出挙を行う倉庫には、稲種が容易に判別可能で、倉からの出し入れが容易な頴倉も利用された。『和泉監正税帳』においても記載された建物のうち 20 棟が頴倉で、11 棟が穀倉である。

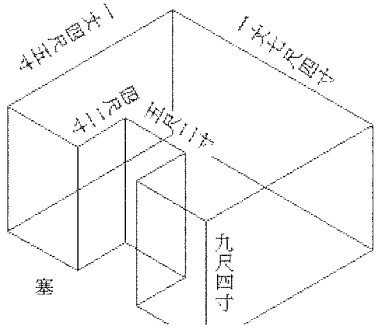


図 7 塞の概念図

② 建物の名称・・「板倉」、「法倉」、「丸木倉」、「甲倉」、「屋」

『和泉監正税帳』に記述された建物の名称は、「東第一」等に見られる倉の位置を示す名称と倉の種類を表す「板倉」、「法倉」、「丸木倉」、「甲倉」、「屋」から成っている。

第2章 古代の倉

鞠智城は7世紀後半から9世紀にかけて存在したと伝えられるが、鞠智城が文献に最初に顕れる『続日本紀』文武天皇二(698)年五月の条では「城」として記載されている。その後160年の空白期間を経ると、『文徳実録』天安二(858)年の条に「菊池城院」としての記載があり、『三代実録』貞観十七(875)年の条には「郡倉舎」と記載され、『三代実録』元慶3年(879年)の条では「郡城境の兵庫」と記載されている。鞠智城の古代社会における役割は、7世紀末は城であったものが、時代が下がるにつれて郡衙・郡倉の役割に変化したと考えられる。また、鞠智城の長者原で発掘された建物は、そのほとんどが倉庫であったと考えられる。古代の倉庫の用途や構造について、『和泉監正税帳』に8世紀前期の倉庫の用途・形状が記述されている。

1 『和泉監正税帳』 に見られる古代の建物の形状・構造・用途

8世紀の倉の用途や形、構造を示した文献として『和泉監正税帳』がある。
今の大阪府の泉南と呼ばれる和泉監（後の和泉国）の天平九（737）年の会計報告である『和泉監正税帳』の中に建物の用途・形式が記述されている。

表4　和泉監正税帳に記載された建物

no	国名年代	郡	用途	倉名称	倉長	倉広	塞長	塞広	倉高	委高	収納量	収納量	底敷	面積
					(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(斛)	(束)	頴稲	(㎡)
1	和泉 737	大鳥	不動	東第壱板倉	5.1	4.8	1.5	1.2	3.2	3.1	810		有	22.3
2			動用	東第弐板倉	5.2	4.4	1.6	1.3	3.2	2.9	728		無	20.7
3			動用	東第参板倉	5.7	4.5	1.7	1.0	3.6	3.1	974		無	24.0
4				東第肆板倉	5.1	3.6			2.8			空		18.5
5		和泉	動用	南院北第壱法倉	21.6	6.3	2.1	1.6	4.4	2.7	4422		無	132.8
6			不動	西第壱板倉	7.9	5.8	2.0	1.4	3.9	3.2	1670		有	43.4
7				西第弐板倉	5.7	5.1			2.7			2700		29.1
8			不動	南第壱板倉	8.1	5.9	2.0	1.7	4.1	3.5	2000		有	44.0
9			不動	南第参板倉	6.8	5.3	1.9	1.2	3.7	3.2	1450		有	34.0
10				東第壱丸木倉	4.0	4.3			1.8			空		17.2
11				東第弐丸木倉	4.4	3.4			1.8			空		14.9
12				東第参丸木倉	4.2	3.6			1.9			空		15.1
13				東第肆丸木倉	3.4	3.8			1.8			空		12.8
14				西壱屋	14.1	5.0			3.2			6482		70.6
15				西第弐屋	13.8	5.1			3.0			1259		70.4
16				南院北屋	12.6	4.9			3.3			6873		61.2
17		日根	不動	南第壱甲倉	4.9	3.7	1.2	1.0	3.0	2.9	550		有	16.8
18				南第弐丸木倉	4.1	3.6			2.1			764		14.6
19				南第参丸木倉	5.7	4.8			2.7			2304		27.4
20				南第肆板倉	3.9	3.8			2.3			空		14.6
21				西第壱丸木倉	3.9	3.8			2.3			空		14.6
22				西第弐甲倉	5.4	4.8			3.3			1738		25.9
23				北第壱丸木倉	4.2	3.6			2.1			空		15.2
24				北第弐丸木倉	5.4	4.7			2.8			2201		25.6
25				北第参板倉	5.6	4.8			3.0			1706		26.8
26			不動	北第肆板倉	5.5	4.8	2.0	1.2	2.8	2.7	816		有	24.0
27			不動	北第伍甲倉	5.4	4.6	1.2	1.2	3.6	3.3	980		無	23.3
28			動用	北第陸法倉	18.0	6.0	2.2	0.7	4.1	2.1	2861		無	106.4
29				東院北第壱丸木倉	3.3	3.0				2.4		空		9.9
30				東院北第弐丸木倉	3.8	3.1				2.4		822		11.7
31				東第壱屋	8.4	5.1				3.3		5439		42.8
32				東第弐屋								空		

建物番号	桁行	梁間	礎石掘立	総柱側柱	桁行	梁間	主軸N±	桁行/梁間(長/広)	床面積(㎡)
2	3	1	掘立	側柱	4.2	2.4	70	1.8	10.1
3	3	2	掘立	側柱	9.0	6.0	−20	1.5	54
6	6	3	掘立	側柱	16.4	6.0	72	2.7	98.4
7	(4)	3	掘立	側柱	(8.4)	6.3	55	(1.3)	(52.9)
8	6	3	掘立	側柱	10.2	6.0	67	1.7	61.2
9	(3)	2	掘立	側柱	(7.5)	6.0	67	(1.3)	(45)
10	3	2	掘立	側柱	7.5	6.0	67	1.3	45
14	5	3	掘立	側柱	14.5	7.2	90	2.0	104.4
15	(4)	3	掘立	側柱	(11.6)	7.2	−84	(1.6)	(83.5)
16	10	3	掘立	側柱	26.6	7.8	53	3.4	207.5
17	(6)	3	掘立	側柱	(13.25)	7.2	53	(1.8)	(95.4)
18	(7)	3	掘立	側柱	(20.8)	8.1	60	(2.6)	(168.5)
19	5	1	掘立	側柱	15.0	6.3	0	2.4	94.5
24	(4)	1	掘立	側柱	(10.2)	5.7	49	(1.8)	(58.1)
26	(2)	3	掘立	側柱	(6.0)	7.2	−12	(0.8)	(43.2)
27	(4)	1	掘立	側柱	(10.0)	5.7	−48	(1.8)	(57)
28	5	2	掘立	側柱	9.0	4.2	47	2.1	37.8
41	(3)	2	掘立	側柱	(9.0)	7.0	−8	(1.3)	(63)
55	4	2	掘立	側柱	9.6	6.0	45	1.6	57.6
57	6	2	掘立	側柱	10.2	5.7	−50	1.8	58.1
58	5	(1)	掘立	側柱	13.5	(4.2)	−46	(3.2)	(56.7)
60	8	3	掘立	側柱	21.6	7.2	0	3.0	155.5
61	7	3	掘立	側柱	16.8	6.3	0	2.7	105.8
62	(6)	(1)	掘立	側柱	(14.4)	(2.4)	79	6.0	34.6
63	7	3	掘立	側柱	21.0	7.2	−11	2.9	151.2

表 2　鞠智城跡の側柱建物

建物号数	柱列	礎石掘立	総柱側柱	外径(m)	外径(寸)
30	2 重	礎石	総柱	9.6	316.8
31	2 重	掘立	総柱	9.6	316.8
32	3 重	掘立	総柱	9.2	303.6
33	3 重	掘立	総柱	9.8	323.4

表 3　鞠智城跡の八角建物

表１・２・３に鞠智城跡で発掘された72棟の建物跡の総柱建物と側柱建物のうち、構造形式、規模、主軸方向等が確認できる建物を総覧した。総柱建物が21棟、側柱建物13棟、八角形建物４棟、合計38棟である。このうち総柱建物は米を貯蔵する高床倉庫と考えられる。また「倉庫令」 倉於高燥処置条によると倉庫は乾燥した処に設置し。周囲に池渠を開き、倉の周囲半径５０丈以内に館舎を置いてはならないと規定されており、長者原に建つ側柱建物の多くも倉庫として利用されていたことも考えられる。

建物号数	桁行	梁間	礎石・掘立	総柱側柱	桁行(m)	梁間(m)	主軸N±	桁行/梁間(長/広)	床面積(㎡)
1	5	3	掘立	総柱	10.0	4.5	64	2.2	45
5	4	3	掘立	総柱	12.0	6.9	74	1.7	82.8
11	6	5	礎石・掘立	総柱	12.6	11.0	90	1.1	138.6
12	6	5	礎石・掘立	総柱	13.2	11.5	0	1.1	151.8
13	4	3	掘立	総柱	10.8	7.5	0	1.4	81
20	4	3	礎石	総柱	9.6	7.2	−6	1.3	69.1
21	4	3	礎石	総柱	8.8	7.2	−6	1.2	63.4
22	4	4	礎石	総柱	8.0	5.8	−11	1.4	46.4
23	6	4	礎石	総柱	12.6	5.8	−11	2.2	73.1
25	3	3	掘立	総柱	7.2	5.7	−45	1.3	41.0
29	(3)	6	礎石・掘立	総柱	(6.9)	12.9	50	(0.5)	(89.0)
36	4	3	礎石	総柱	9.2	7.5	−9	1.2	69
38	(3)	3	掘立	総柱	(5.7)	6.0	−6	(1.0)	(34.2)
40	5	(2)	掘立	総柱	15.0	(6.0)	−12	(2.5)	(90.0)
42	(3)	(2)	掘立	総柱	(6.0)	(4.4)	−8	(1.4)	(26.4)
43	(3)	(3)	掘立	総柱	(7.5)	(7.5)	−8	(1.0)	(56.3)
45	3	2	礎石	総柱	7.5	5.0	−12	1.5	37.5
46	—	3	礎石	総柱	—	6.6	−10		
47	3	3	礎石	総柱	7.5	6.9	−82	1.1	51.8
49	9	3	礎石	総柱	21.6	7.2	−30	3.0	155.5
50	5	2	礎石	総柱	8.25	3.9	−15	2.1	32.2
52	(1)	(2)	掘立	総柱	(4.5)	(6.0)	−80	(0.8)	(27.0)
53	(1)	2	掘立	総柱	(3.3)	4.6	3	(0.7)	(15.2)
54	(1)	2	掘立	総柱	(3.0)	4.4	−10	(0.7)	(13.2)
56	6	3	礎石	総柱	14.2	8.0	−12	1.8	113.6
59	4	3	礎石	総柱	9.0	5.85	−33	1.5	52.7
64	3	3	礎石	総柱	8.0	8.0	−80	1.0	64
65	(3)	(3)	礎石	総柱	6.8	4.5	−31	1.5	30.6
66	(4)	(3)	礎石	総柱	—	—	3		
67	4	3	礎石	総柱	9.0	6.75	20	1.3	60.8
69	(4)	(2)	掘立	総柱	(7.8)	(3.6)	−89	2.2	(28.1)
70	(3)	(2)	掘立	総柱	(5.85)	(3.9)	−88	1.5	(3.3)
72	4	3	礎石	総柱	8.4	6.3	−88	1.3	52.92

表１　鞠智城跡の総柱建物

32・33 号建物はいずれも掘立柱・八角形建物で外径は 9.8m を測る。
前身建物の 32 号の跡に、中心を動かさずに反時計回りに 23.5 度回転させた位置に新たに掘立柱・八角形建物の 33 号が建てられている。柱穴の埋土の差異が 32 号と 33 号に殆ど見られないことから、30・31 号八角形建物と同様に、32 号と 33 号建物の建造時期は近いと考えられる。

図 6　長者山の 45 号～48 号建物

図 6 は長者山に建つ 45 号～48 号の総柱・礎石建物群跡である。いずれも桁行方位が一致することから高床倉庫群が想定される。

図5に長者原の東側の微高地形で発掘された20号～23号、25号、30号～35号を示した。
20号～23号建物は総柱・礎石建物である。20号と21号、22号と23号は桁行の方位が一致しておりそれぞれがセットの建物群と考えられる。また、22号と23号は21号の下層にあり、22・23号の後に20・21号が建てられたことが明らかになった。また21号の西側から布目瓦の堆積が見られた。更に20号・21号・23号の礎石から火災の痕跡が見られた。したがって23号の火災の後に建てられた21号が再び火災にあったことがわかる。

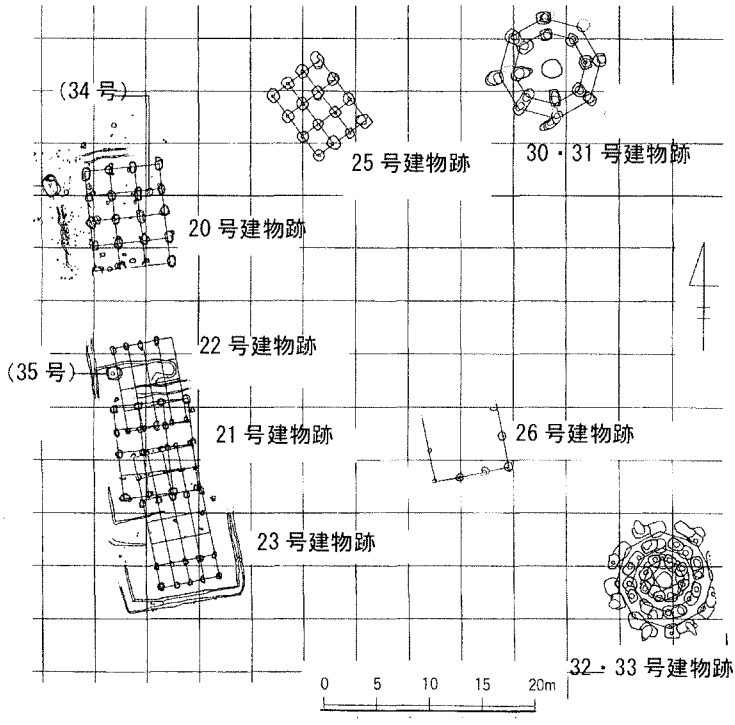


図5　20号～23号、25号、30号～35号発掘建物

30・31号建物は外径が直径9.6mの八角形建物である。最初に立てられた掘立・八角形の31号建物の堀形を利用して礎石・八角形の30号が建てられた。中心部の心柱の堀形は浅く、建物の荷重が掛からないような構造が想定できる。また31号建物の柱の引き抜き跡が無いことから、31号建物の柱根を埋めたまま上部の柱を除去して礎石地業を行っていることから、31号建物が建ってから期間をおかずに31号建物の上部が焼失し、建て直しが行われたことが想定される。近くにあった20・21・23が火災によって焼失した痕跡を持つことからも、火災等による30号建物の焼失が31号→30号建替えの原因であったとも考えられる。

図4に11号から15号の建物跡を示した。11号は、6間×5間の側柱部分は掘立で、内部の4間×3間は礎石があり、掘立と礎石の2つの構法が同一建物に使われている礎石・掘立併用建物である。柱穴の堀形　大きく1.7m×1.7mを測る。

建物の周囲が土間か低床（縁状のもの）で、内部の4間×3間が高床である建物が想定される。

12号は11号と並列しており、11号と同様に側柱は掘立柱で内部の柱は礎石建ちである。掘立柱の堀形が方形で大きく方形で、細かな版築で固められており、礎石の地業穴も細かな版築で固められていた。

13号は12号と南北に並列している総柱の掘立柱建物で、堀形は大きく方形で、10層の版築で固められていた。柱の抜き取り跡は無い。

14号・15号は側柱の掘立柱建物である。柱の堀形は丸く大きさも1m程度で11号～13号と比較すると小さい。14号・15号とも柱の抜き取り跡がある。

11号、12号、13号の建物はいずれも総柱で、大きな方形の堀形や、版築による丁寧な地業が共通して行われており、鞠智城で重要な意味を持つ建物群と考えられる。

11号と12号、14号と15号は東西方向の主軸がずれており、建て替えに伴う建築時期の前後関係が考えられる。また14号と13号は遺構の切合い関係があり、14号が13号に先行する。

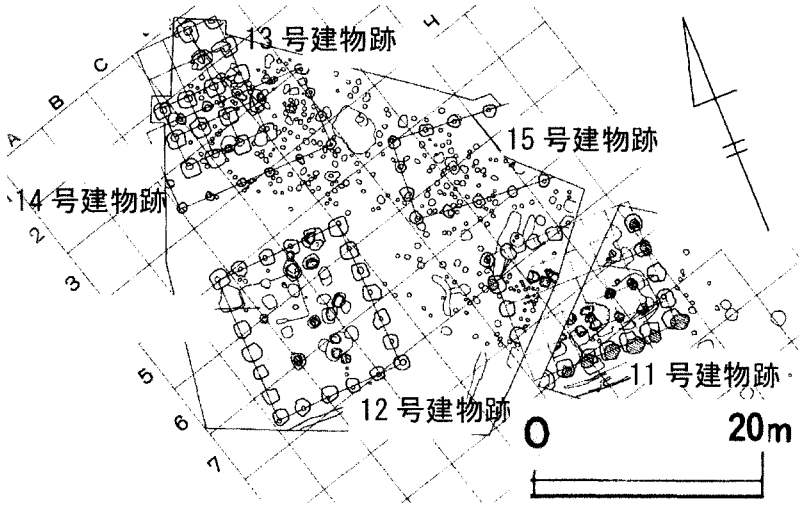


図4　11号～15号建物

また１号と５号、６号と３号、７号と８号、９号と１０号の掘立建物は近接しており、類似する形状をしている。掘立建物は柱の根腐のため耐用年数は15～25年と考えられる。
したがって鞘智城のなかで同様の機能を継続させるには建物の建て替えが必要であり、上記のセットの建物にはいずれかの建物が耐用を過ぎた後に取り壊し、改めて建て替えた関係があると考えられる。

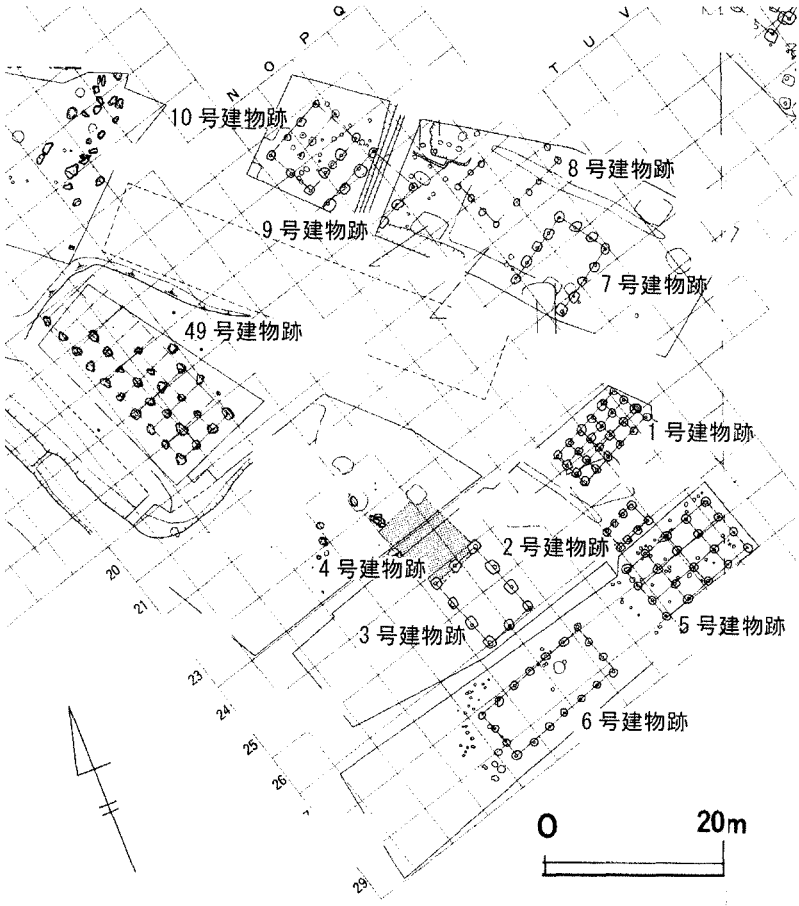


図３　１号～10号、49号建物

2 発掘された鞠智城の建物

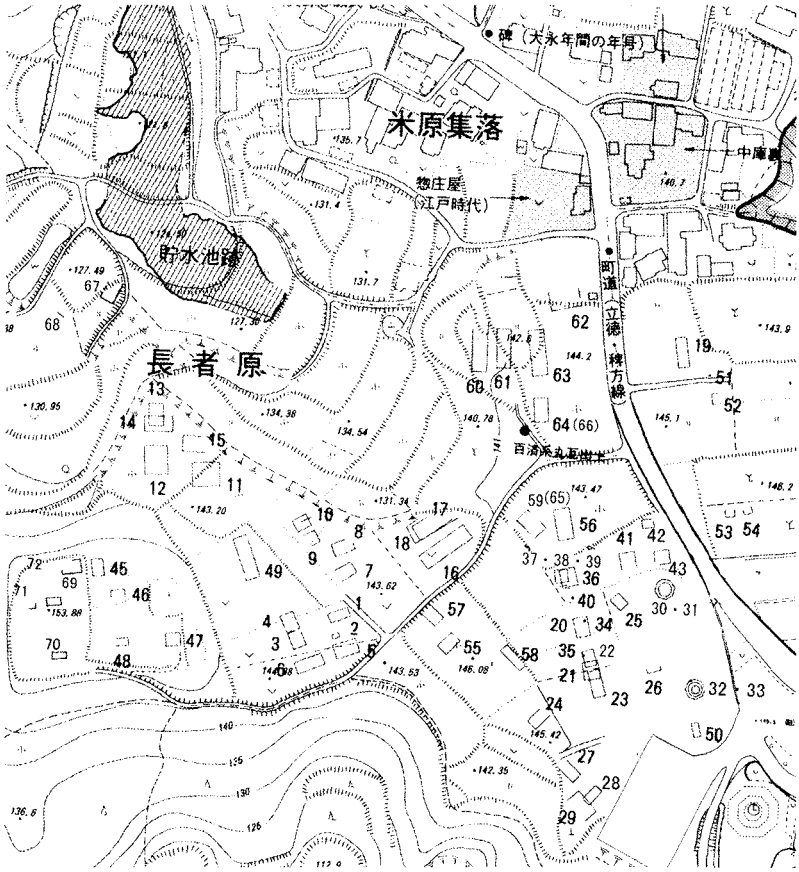


図 2　鞠智城跡発掘建物配置図

図 2 に昭和 42 年の第 1 次調査から現在まで発掘された 72 棟の建物跡の配置を示した。

図 3 では全体配置図のほぼ中央、1 号建物から 10 号建物及び 49 号建物の平面を示した。

1 号から 10 号は地面に穴を掘って柱を立てる掘立建物で、柱の部分を見ると柱のあった位置を示す柱穴と柱を埋める際に掘った堀形の二重の線が見える。

49 号は基壇の上に礎石を据え、その上に柱を立てる総柱礎石建物である。

また、1 号、5 号、49 号は建物の内部にも柱が列をなしている総柱建物なのに対し、その他の建物は建物の周辺のみに柱を立て、内部には柱を立てない側柱建物である。

古代では一般的に、側柱建物の床は土間か低床の建物で、総柱は高床式建物と考えられる。

はじめに

鞠智城跡は大宰府から約 70 ㎞南に位置し、有明海に注ぐ菊池川の支流である狭間川と木野川に挟まれた標高 100m～168mの台地に築城された古代山城である。

昭和 42 年の第 1 次調査から現在まで長者原を中心に 72 棟の建物跡が発掘されており、周辺の土塁線に沿って、3 箇所に石造の門礎跡が発見されている。今回は主に 72 棟の建物群について鞠智城と同じ古代において建てられた建物の文献資料や発掘資料との比較を行い、

その構造、用途、及び建物間の関係について考察を行う。同じ時代に存続した大野城の建物跡と比較し、建物の編年を試みることで、築城から文武二（698）年の繕治の時期、天安二（858）年の不動倉十一宇の火災をへて 9 世紀末を最後に文献に記録されなくなるまでの鞠智城の建物跡について考察を行った。

第1章 鞠智城跡の建物跡

1 文献に見える鞠智城の建物

鞠智城は『続日本紀』文武天皇二(698)年五月の条に大野城・基肄城とともに大宰府によって繕治されたことが記載され、その後 160 年の空白期間があって、『文徳実録』天安二(858)年の条に菊池城院の「兵庫」や「不動倉」としての記載があり、『三代実録』貞観十七(875)年の条には「郡倉舎の茸草」の記載があるが、『三代実録』元慶 3 年(879 年)の条の「兵庫」の記載をもって鞠智城は歴史の舞台から姿を消している。

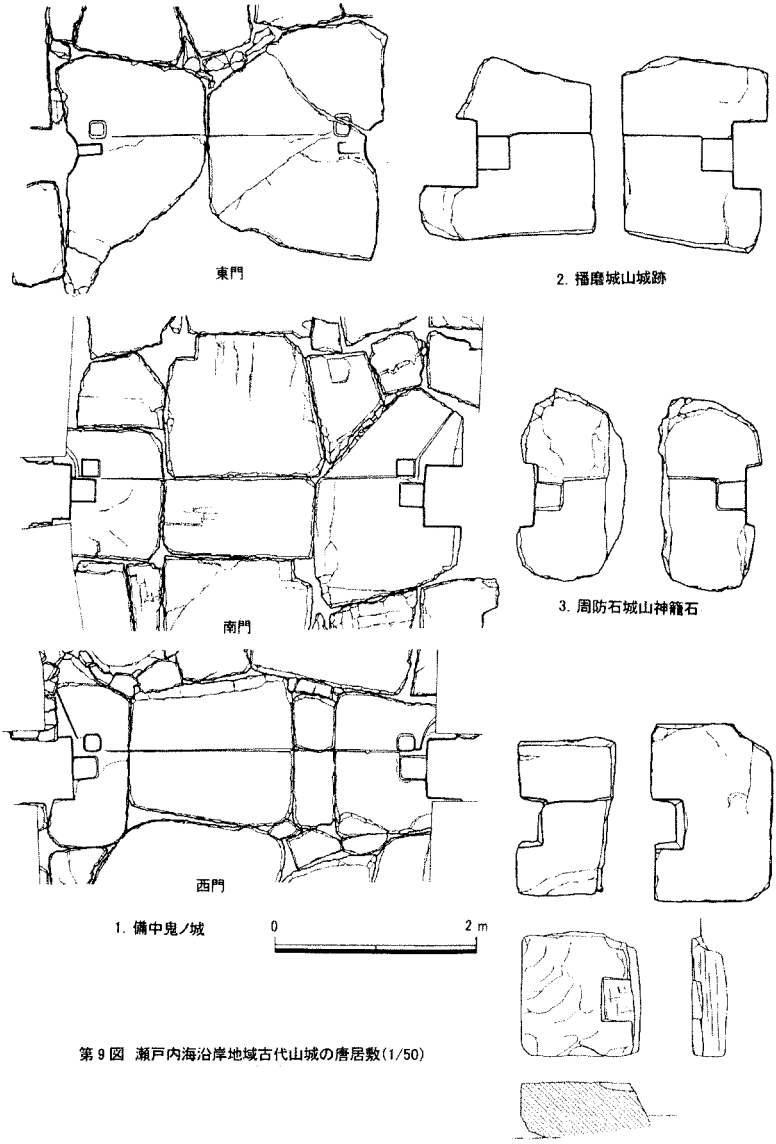
これらの文献に記載された鞠智城の建物の名称としては「兵庫」、「不動倉」、「倉舎」が挙げられる。

698	文武二年	大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ	続日本紀
858	天安二年	菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。（二月二十四日）又鳴る。（二十五日） 菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る。同城不動倉十一宇火。（六月廿日）	文徳実録
875	貞観十七年	群鳥数百、菊池郡倉舎の茸草をかみ抜く。（六月廿日）	三代実録
879	元慶三年	肥後国菊池郡城境兵庫の戸自ら鳴る。(三月十六日)	三代実録

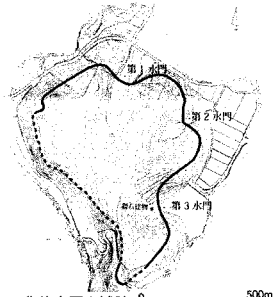
鞠智城の建物跡について

小西龍三郎（元九州造形短期大学教授）

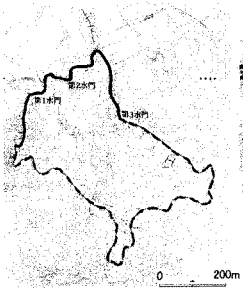
図１　鞠智城跡全体配置図



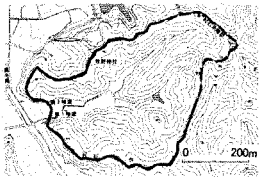
第 9 図　瀬戸内海沿岸地域古代山城の唐居敷(1/50)



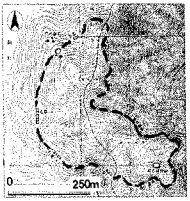
1. 豊前唐原山城跡



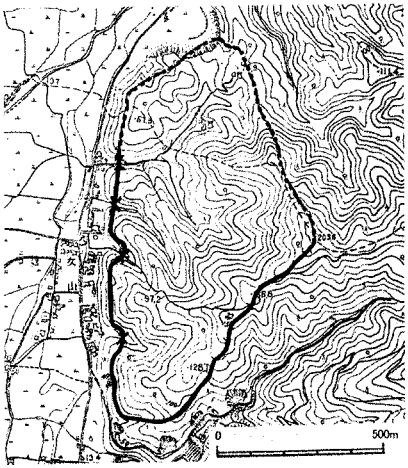
2. 筑前阿志岐城跡



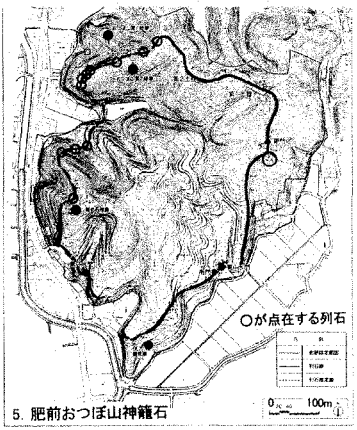
3. 鹿毛馬神籠石



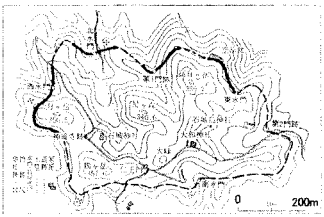
6. 播磨城山城跡



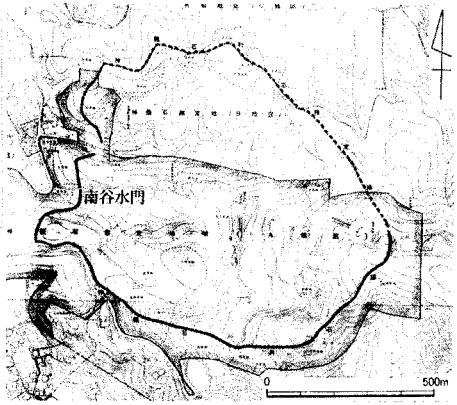
4. 筑後女山神籠石



5. 肥前おつぼ山神籠石

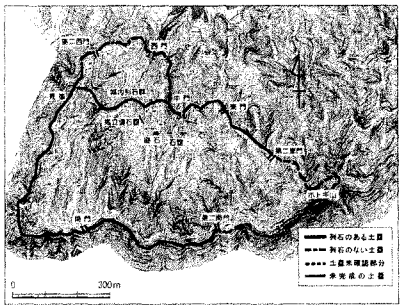


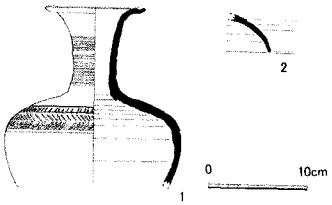
7. 周防石城山神籠石



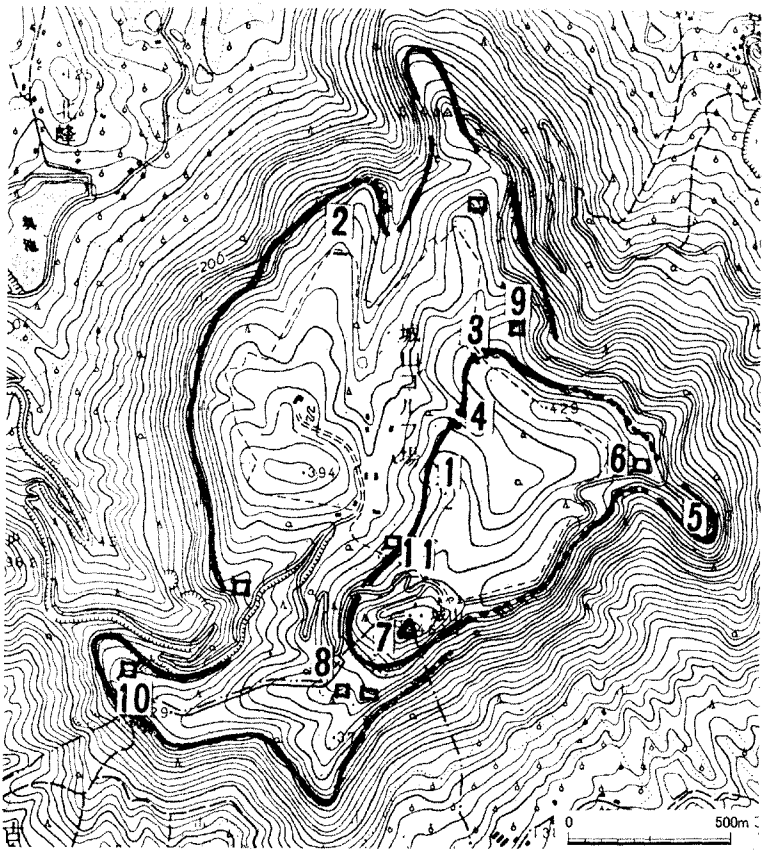
8. 筑後高良山神籠石

第8図　未完成の古代山城
(1/15000、おつぼ山神籠石のみ 1/10000)

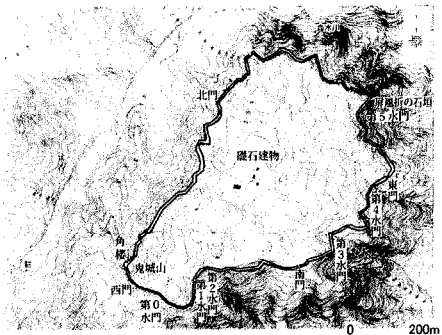




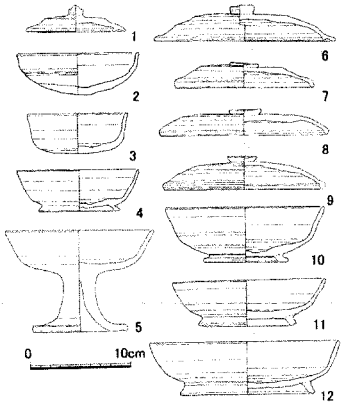
第 6 図　豊前御所ヶ谷神籠石の全体図(1/15000)と出土遺物(1/5)



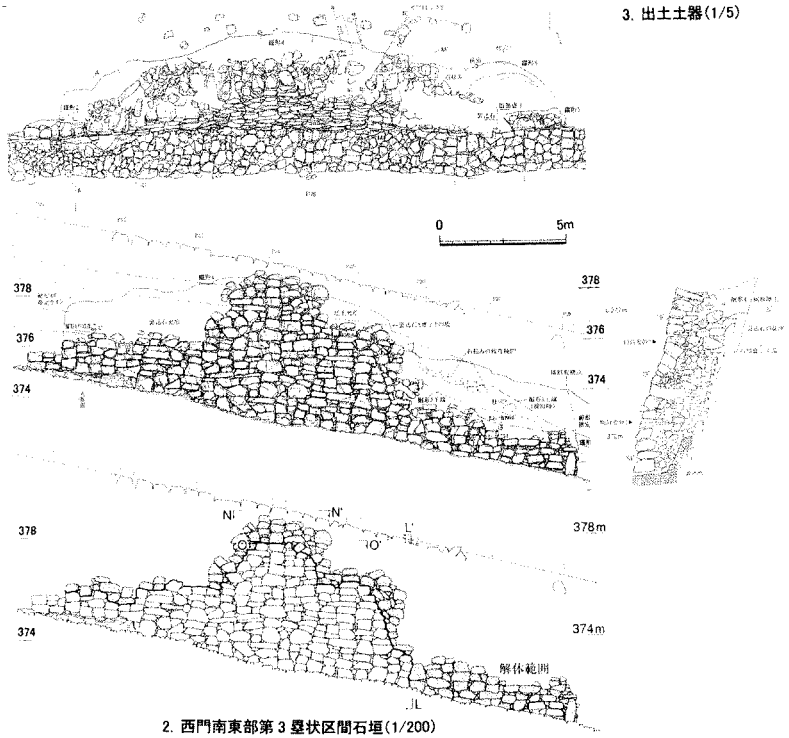
第 7 図　讃岐城山城跡(1/15000)



1. 鬼ノ城跡全体図(1/15000)

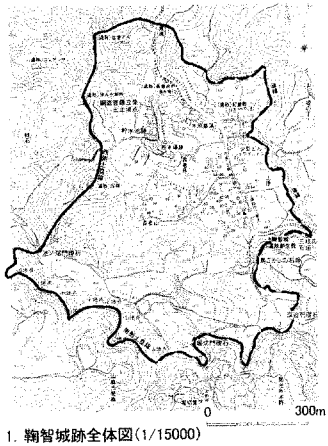


3. 出土土器(1/5)

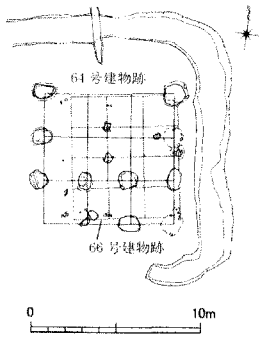


2. 西門南東部第3塁状区間石垣(1/200)

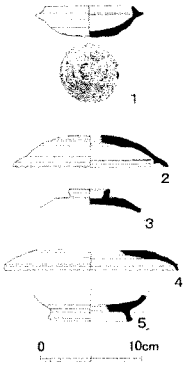
第5図 備中鬼ノ城跡の遺構と遺物



1. 鞠智城跡全体図(1/15000)

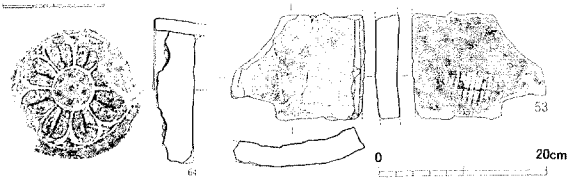


2. 64･66 号礎石建物(1/300)

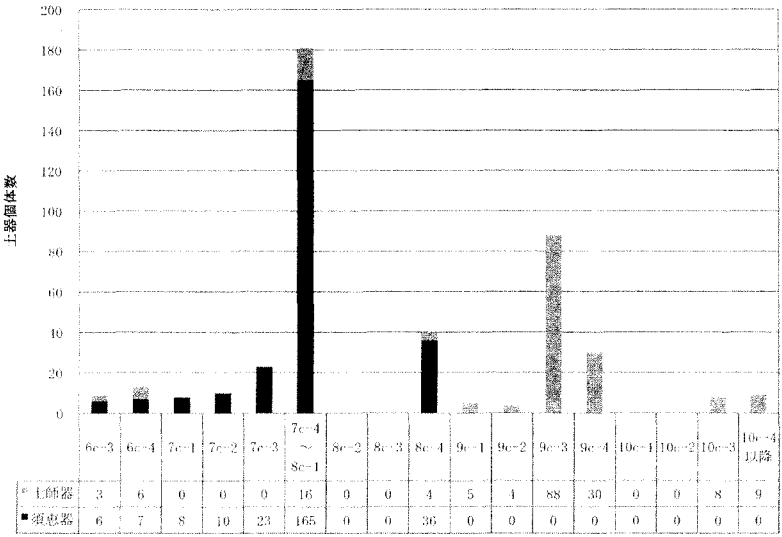


3. 出土土器(1/5)

(1:16 号建物 、2～5:64 号建物)

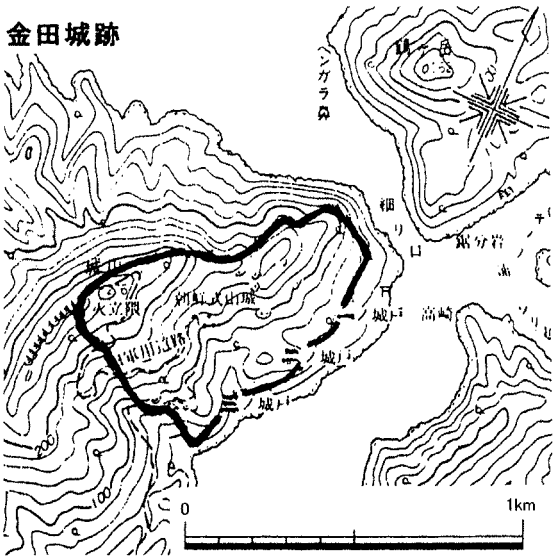


4. 64 号礎石建物出土瓦(1/6)

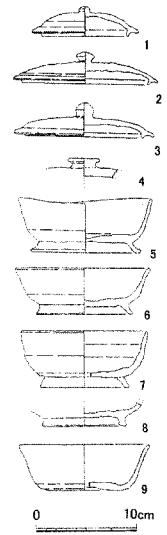


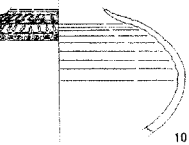
5. 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

第 4 図　肥後鞠智城跡の遺構と遺物

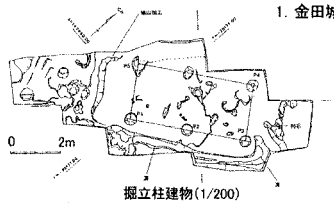


1. 金田城跡全体図(1/15000)

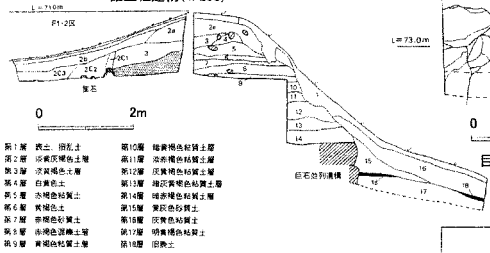




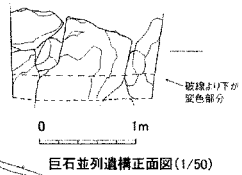
3. 出土土器(1/5)



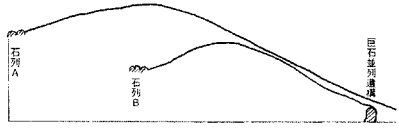
掘立柱建物(1/200)



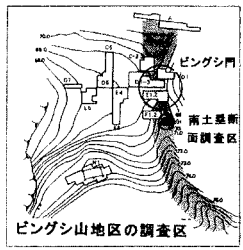
南土塁断面図(1/100)



巨石並列遺構正面図(1/50)

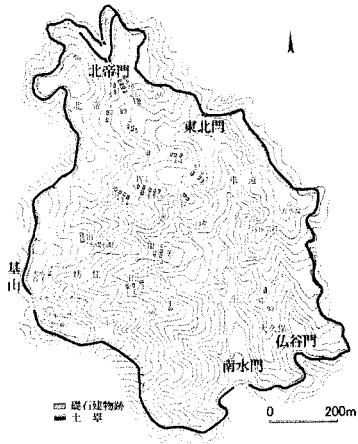


土塁概念図

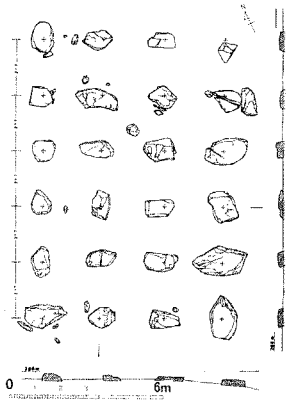


2. ピングシ山地区の遺構

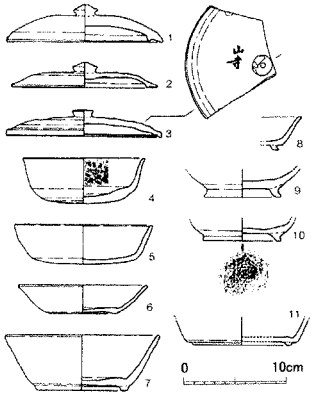
第3図 対馬金田城跡の遺構と遺物



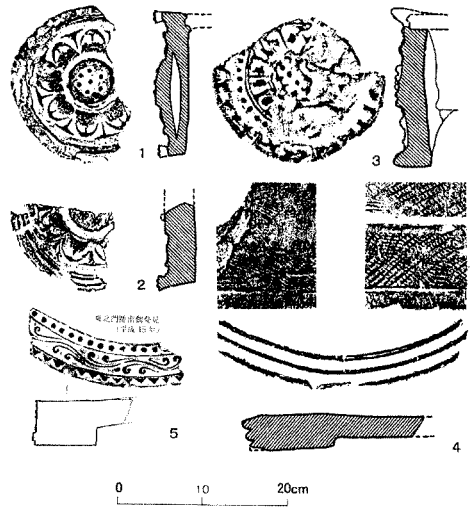
1. 基肄城跡全体図(1/15000)



2. 9 地点礎石建物(1/200)

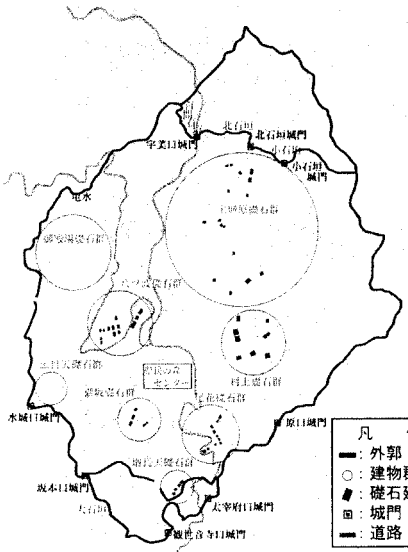


3. 出土土器(1/5)

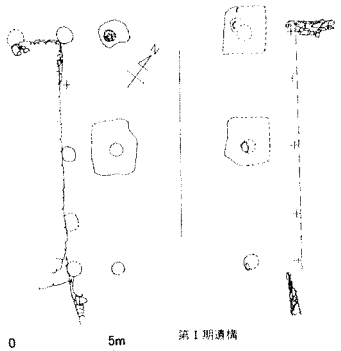


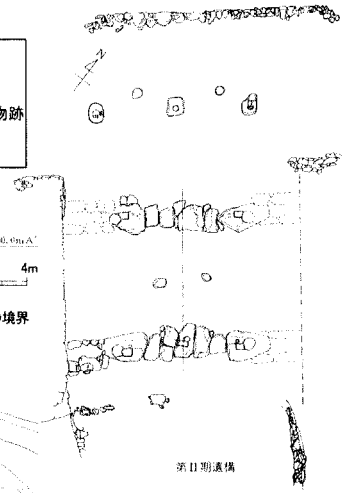
4. 出土瓦(1/6)

第 2 図　肥前基肄城跡の遺構と遺物



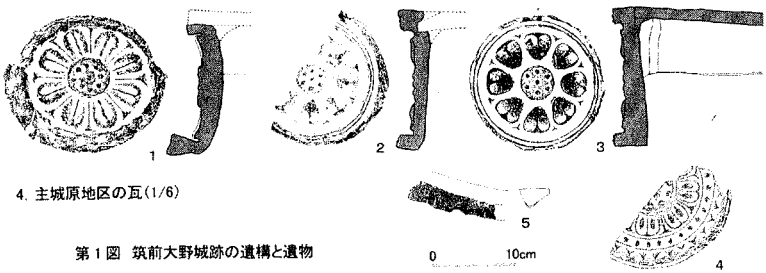
1. 大野城跡全体図(1/20000)





2. 太宰府口城門(1/250)

3. 小石垣地区大谷東方土塁Ｂ地区土塁積み直し状況(1/100)



4. 主城原地区の瓦(1/6)

第１図　筑前大野城跡の遺構と遺物

末永浩一 2005『唐原山城跡Ⅱ』大平村教育委員会
鈴木拓也 2010「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4、古代学協会
鈴木拓也 2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26、条里制・古代都市研究会
須原緑 1998『国指定史跡塵毛馬神籠石』鏡田町教育委員会
武雄市教育委員会 2011『史跡おつぼ山神籠石保存管理計画書』
田中淳也・古門雅高編 2000『金田城跡』美津島町教育委員会
田中淳也・古門雅高編 2003『古代朝鮮式山城金田城跡Ⅱ』美津島町教育委員会
田中淳也編 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ』対馬市教育委員会
田中淳也編 2011『古代山城特別史跡金田城跡Ⅳ』対馬市教育委員会
田平徳栄 1983「基肄城考」九州歴史資料館編『九州歴史資料館開館十周年記念大宰府古文化論叢』上、吉川弘文館
出宮徳尚・乗岡実 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第 8～32 次調査報告－』熊本県教育委員会
原田大六 1959「神籠石の諸問題」『考古学研究』6―3、考古学研究会
光市教育委員会 2011『史跡石城山神籠石保存管理計画策定報告書』
正木茂樹編 2010『鬼ノ城～謎の古代山城～』岡山県立博物館
松尾洋平・谷山雅彦 2006『古代山城鬼ノ城 2』総社市教育委員会
松村一良 1990「『日本書紀』天武七年条にみえる地震と上津土塁跡について」『九州史学』98、九州史学会
松村一良 1994「高良山神籠石」『久留米市史　第 12 巻資料編（考古）』久留米市史編さん委員会
松本豊胤 1976「城山」『考古学ジャーナル』117、ニュー・サイエンス社
宮小路賀宏ほか 1970『杷木神籠石』杷木町教育委員会
宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』27、地域相研究会
向井一雄 2004「Ⅸ－2　山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『講演』14　古代山城研究会
向井一雄 2010a「古代山城研究の最前線－近年の調査成果からみた新古代山城像－」『季刊邪馬台国』105
向井一雄 2010b「駅路からみた山城－見せる山城論序説－」『月刊地図中心』453、（財）日本地図センター
村上幸雄 1998「鬼ノ城　南門跡ほかの調査」総社市教育委員会『総社市埋蔵文化財調査年報』8
村上幸雄・松尾洋平 2005『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会
山口裕平 2003「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』50(上)、九州古文化研究会
山元敏裕編 2003『史跡天然記念物屋島』高松市教育委員会
山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市教育委員会
横田義章・芳沢要 1979『特別史跡大野城跡Ⅲ』福岡県教育委員会
横田義章 1991『特別史跡大野城跡Ⅶ』福岡県教育委員会
渡邊芳貴・半沢直也 2005『永納山城跡』西条市教育委員会
渡邊芳貴編 2009『史永納山城跡Ⅰ』西条市教育委員会
渡邊芳貴 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市教育委員会

〈挿図出典〉(いずれも一部改変引用)

第 1 図 1：古代山城サミット実行委員会 2010 、2：横田 1991　、3：入佐・小澤編 2010、4：横田・芳沢 1979
第 2 図 1：古代山城サミット実行委員会 2010 、2～4：小田 2011
第 3 図 1：小田 1997　、2・3：田中・古門編 2000
第 4 図 1～5：西住・矢野・木村編 2012
第 5 図 1：古代山城サミット実行委員会 2010 、2：村上・松尾 2005　、3：金田・岡本編 2013
第 6 図全体図：小川 2010、出土土器：小川 2006
第 7 図：松本 1976
第 8 図 1、2、8：古代山城サミット実行委員会 2010、3、4：向井 2010b、5：武雄市教育委員会 2011、6：加藤 1995、7：小野 1983
第 9 図讃岐城山城（下）以外：村上 1998、讃岐城山城（下）：古代山城研究会 1996

完成と未完成、未完成の諸段階、遺構の有無・多寡、遺物の多寡、これらのもつ意味をさらに検討していくとなにか新しい古代山城研究の方向性が見えるのではないかと期待している。

そして、「大野城・基肄城・鞠智城」の698年の繕治記事は城が維持管理されている、この時期に繕治しなければならないなどの国家の意識を反映していると推測され、ほかの城との重要性や性格の違いなどを示していると考えられ、「繕治」は意味を持っていると思われる。そのような意味で、鬼ノ城城壁の修理の可能性はこの城の重要性を示しているということができるのではないであろうか。

以上のように考えてくると、諸先学がすでに述べてこられた「未完成」という考えも改めて整理検討することで、新たな視点が見えてきそうである。「完成」「未完成」、そして「繕治」が古代山城研究のキーワードの一つになるのではないかと思われる。

〈注〉

(1)古代山城の文献史料については、鈴木2011などを参照した。

〈引用・参考文献〉

石松好雄 1976「女山神籠石」『考古学ジャーナル』117、ニューサイエンス社

石松好雄 1992「大野城」『太宰府市史考古資料編』太宰府市史編集委員会

磯村幸男 1978『史跡女山神籠石保存管理計画策定報告書』瀬高町教育委員会

井上裕弘・宮小路賀宏 1984『鹿毛馬神籠石』嘉田町教育委員会

入佐友一郎・小澤佳憲編 2010『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県教育委員会

太野城市教育委員会 2010『古代山城サミット』

岡田博・亀山行雄 2006『国指定史跡鬼城山』岡山県教育委員会

小川秀樹 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市教育委員会

小川秀樹 2010「豊前・御所ヶ谷山城」『古代文化』62-Ⅱ、古代学協会

小田富士雄編 1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10、名著出版

小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭史研究叢書13、名著出版

小田富士雄 1997「西日本古代山城に関する最近の調査成果ー特に朝鮮式山城についてー」『古文化談叢』37

小田富士雄 2009「第3編　第2章　第3節　基肄城跡の築城」『基山町史』上巻、基山町史編さん委員会

小田富士雄 2011「基肄城跡」『基山町史』資料編、基山町史編さん委員会

小野忠熙 1983「石城山神籠石」小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』名著出版

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房

鏡山猛ほか 1965『おつぼ山神籠石』佐賀県教育委員会

加藤史郎ほか 1988『城山城』新宮町教育委員会

加藤史郎 1995「播磨・城山」『古代文化』47-11、古代学協会

金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡鬼城山2』岡山県教育委員会

亀田修一 2009「鬼ノ城と朝鮮半島」岡山理科大学『岡山学』研究会『鬼ノ城と吉備津神社ー「桃太郎の舞台」を科学する』吉備人出版

亀田修一 2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』成周鐸教授追慕論叢刊行委員会

川述昭人編 1982『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会

木村龍生 2012「第Ⅵ章　第1節 (1) 鞠智城跡出土の土器について」西住ほか2012『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会

九州歴史資料館 1987『大宰府史跡昭和61年度発掘調査概報』

草場啓一編 2008『阿志岐城跡ー阿志岐城跡確認調査報告書（旧称　宮地岳古代山城跡）』筑紫野市教育委員会

草場啓一編 2011『阿志岐城跡Ⅱー阿志岐城跡確認調査報告書総括編』筑紫野市教育委員会

古代山城研究会 1996「讃岐城山城跡の研究」『讃溪』6

古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会　あつまれ!!古代山城』

佐田茂 1982「神籠石系山城の再検討」森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

猿渡真弓 2013『女山神籠石』みやま市教育委員会

島津義昭編 1983『鞠智城跡』熊本県教育委員会

末永浩一 2003『唐原神籠石Ⅰ』大平村教育委員会

に理解するべきか難しいが、この改修を記録はないが、698年のほかの城における繕治記事と関連させることもできるかもしれない。しかし礎石建物や瓦がないことなどを積極的に評価するならば、やはり記録に記された698年の3城繕治と金田城の考古学的に確認されている土塁の改修は別のものと理解すべきなのかもしれない。たとえば698年以前にこの城だけが改修されたのか、それとも667年の築城以前にすでに一部城壁が築かれていたのかなどである。

いずれにせよ、城の繕治はその城の重要性、少なくとも改修して維持・使用しなければならない、という可能性を示しており、城が完成している、と同じくらいの意味を持っているものと推測される。つまり文献史料・考古学的成果、いずれにおいても繕治・改修の痕跡が確認できる城は重要な城であったことを推測させるのではないであろうか。つまり、繕治・修理・改修などの痕跡も山城研究に役立つものと推測されるのである。

また、『日本書紀』などの記録に記されていないいわゆる神籠石系山城においても、発掘調査がそれなりに進んでいる城であれば、やはりそれなりに遺構や遺物は確認されている。備中鬼ノ城はその代表的な例であり、遺構と遺物の総合的な検討によって城の使用期間や使用状況が明らかにされつつある（金田・岡本2013、p.174）。特に鬼ノ城西門南東側の石垣部分では修繕の可能性が推測され（第5図2）、城内遺物の量的な変化（7世紀第3四半期の遺物は少なく、第4四半期～8世紀第1四半期頃の遺物が多い）は鞠智城跡における土器の量的な変化と対応しているようにも思え、鬼ノ城における築造とその後の修理を含めた維持管理が推測できるのではないであろうか。このようにある程度の遺物・遺構が確認できている城であるならば、それらを総合的に検討することによってより正確な城の変遷が明らかになるのではないかと推測される。

逆に言うとやはり神籠石系山城では遺物はあまり出土しておらず、遺構もよくわかっていない。このように、以前から神籠石系山城の特徴としてあげられていた「遺構がわからない」ということは、「城が未完成であった、工事途中で止まってしまった、また長期間使用されなかった」などのことがらを示しているのかもしれない。

5．おわりに

以上、古代山城は完成していたのか、未完成であったのか、という視点からいくつかの古代山城をみてきた。その結果として完成、またはほぼ完成したと考えられるものは、『日本書紀』などの記録に記されたいわゆる朝鮮式山城では6遺跡中4遺跡の大野城・基肄城・金田城・鞠智城、そして記録の見られないいわゆる神籠石系山城では16遺跡中、鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石の2遺跡のみであり、逆に未完成と推測されるものは朝鮮式山城では現時点ではよくわからず、神籠石系山城では16遺跡中、唐原山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡など6遺跡以上ある。

このような記録に記された山城と記されなかった山城の完成・未完成を合わせ検討してみると、完成した山城群の意味、また未完成の山城群の意味が多少見えそうである。

まず、完成した山城の場所はそれぞれの地域の中で重要な場所であることが改めてわかる。そしてやはり記録にもあるように古い段階ら築城され始めたのではないかと推測される。

未完成の山城は、意図的な未完成なのか、それとも否応なしの未完成なのか。「見せる城」という意識は当然存在したと思われる。ただ、それによって当初から、たとえば一部しか作ることを考えなかったのか、工程の関係で停止し、そのままになったのか。そしてこれらの「未完成」、「途中での停止」は単なる偶然ではなく、当時の政治・社会情勢を反映したものではないかと考えられる。

が当然のことながら重視されていたといえるのではないであろうか。

またこのように見てくると、ただ、文献に記録がないということでひとまずひとまとめにしている神籠石系山城も完成した可能性が高い鬼ノ城や御所ヶ谷神籠石と明らかに未完成と考えられる城とで、そのほかの特徴もあわせ検討すると区分することができるかもしれない。少なくとも鬼ノ城に関しては、以前から述べているように懸門構造・門床面の石敷き・雉城の存在などの特徴は667年の対馬金田城や讃岐屋嶋城と類似しており、その造営時期が近いのではないかと考えられる（亀田2009）。

繕治（修理・修築・改修）　最後に、完成したと考えられている大野城・基肄城・鞠智城には文武天皇2（698）年の繕治（修繕）記事がある。この「繕治」については、ひとまず城が完成し、その後建物や城壁などが時間とともに傷み、建て替え、または修繕しなければならないなどの理由から繕治したと考えられるが、一方で未だ工事途中で土砂崩れや地震などによって城壁などが壊れ、それを修築したのかもしれない。また、それらとともに、これまで多くの諸先学が述べてこられたように、掘立柱建物から礎石建物に建て替えたことを示しているのかもしれない。それは単に立て替えだけではなく、機能の変化を含んでの繕治かもしれない。

いずれにせよ、これらの3つの城はこの記録とともに出土遺物、土器や瓦によっても7世紀末～8世紀初め頃になんらかの行為が行われた（繕治された）と考えられている（第1、2、4図）。土器の場合は使用年代の幅の問題があり、細かく区切ることはできないが、量的な検討を行えば、ある程度の変遷を押さえることができる。大野城跡や基肄城跡では残念ながら、そのような量的な処理は未だされていないようであるが、鞠智城跡では木村龍生によってその検討がなされている（第4図5、木村2012）。

木村の成果によれば、まず築城以前の6世紀後半代からの土器がみられ、このころからのちの城内に人々が住んでいたことがわかり、鞠智城築城期の7世紀第3四半期に土器が少し増加し、文武天皇2(698)年の繕治記事に対応する可能性がある7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の土器が急増していること、そして興味深いことに8世紀代2四半期と第3四半期の土器がなく、次に8世紀第4四半期の土器が比較的出土し、その後再び9世紀第1四半期・第2四半期の土器がほとんどなくなり、9世紀代3四半期に急増し、第4四半期まで続くことが明らかにされている。この土器の量的変遷は7世紀後半～8世紀初め頃と推測される平行文や格子目文瓦の量、そして8世紀末頃と推測される縄目文瓦の存在などとうまく合致しており、『続日本紀』などの記録とも対比できるのではないかと思われる。

そこでこのような繕治記事がある3つの城とそうではない城を比較してみると明らかになるものがありそうである。例えば、対馬金田城跡では大野城跡や鞠智城跡ほどではないが、調査も進められ、城内施設も明らかになっている。そこで興味深い点は土器などの遺物が現時点での成果であるが、基本的に8世紀初まで下がりそうなものがほとんどなさそうであることと、礎石建物が確認されていない点である（第3図）。「未確認である」ということはいずれ発見される可能性が当然あり、そう簡単に「ない」とは当然いえないのであるが、これまでの調査ではないようである。いずれ城内の全域を調査する中で礎石建物や8世紀以降の土器や瓦などが発見される可能性は当然あるのであるが、『日本書紀』の天智天皇在位中に築城された九州の城（確認されているもの）で繕治記事がないのはこの金田城だけである。記録は当然なんらかの理由で記されないこともあるので、「ない」ということを強調することは問題であるが、現時点での遺構と遺物に関する成果を積極的に評価すると、この繕治記事が見られないことに意味を認めて良いのかもしれない。

ただ、一方で、城内のビングシ地区の土塁に関しては、上下2層が確認されており、その上層土塁に伴う門礎石の形が外郭線石塁の門礎石と同じグループのものである（第3図2）。このあり方をどのよう

ある。

このような未完成のあり方は、それぞれの山城のもつ意味、たとえば築かれた場所・立地、つまり、もし同時期にいくつかの城を並行して造っていたのであるならば、その中での優先度が低かった可能性や、単にその地域でのなんらかの理由で築城工事が遅れ、そのまま中止となった可能性などが考えられることになる。完成した山城と未完成の山城のもつ意味、未完成の山城の中での工事進捗状況の違いの意味などいろいろと考える材料になりそうである。

完成した山城と未完成の山城　現時点で城壁が完全にめぐらされている完成した山城、完全に城壁はめぐっていないが、自然地形の利用を含めてほぼ完成していると考えられる山城は、筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡などのいわゆる朝鮮式山城と、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などの神籠石系山城、計6ヵ所である。

一方、確実に未完成、またはおそらく未完成と推測されるものが、豊前唐原山城跡、筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡など9ヵ所ある。

このように、おおよその概要がわかる古代山城22ヵ所のうち、6ヵ所が完成している可能性が推測され、9ヵ所が未完成の可能性が高いことがわかった。

『日本書紀』などに記されたいわゆる朝鮮式山城ではその所在地が確認されている6ヵ所のうち4ヵ所が完成しており、城壁線がわからない高安城は何とも言い難いが、讃岐屋嶋城はひとまず厳しい崖や急傾斜の部分は自然地形を利用していた可能性は考えられる。ただ、屋嶋城跡に関しては、頂上部の城壁線とは別に、西側中腹に浦生の石塁と呼ばれている石塁がある。最近の調査で古代のものである可能性が高まり、その実態把握調査が進められているが、その北側に位置する雉城と推測される部分の北側城壁線がよくわからない。もしこの石塁が屋嶋城跡に伴うものであるならば、この部分は未完成である可能性がある。そうすると、雉城の北側に城壁線が延びないこれ自体を完成品とみるのか、頂上部は完成しているが、この石塁部分は未完成であるのか、さらに、頂上部も工事途中であるのかなど、いろいろと興味深い疑問が生まれてくる。いずれにせよ朝鮮式山城に関しては、実態のよくわからない高安城を除くと基本的に完成していると考えて良いのかもしれない。

一方、神籠石系山城に関しては、ほぼ確実に完成しているのではないかと推測されるものは鬼ノ城と御所ヶ谷神籠石のみである。山城の場合、すべての城壁、城内の施設を把握することは極めて難しい。現時点では神籠石系山城に関しては、完成したものは比較的少なそうで、未完成または途中で工事が止まったものの方が多そうであると言えそうである。

このように神籠石系山城に未完成のものが多いという意識で古代山城全体を見てみると、以前から検討されてきた築城時期の問題に関しては、朝鮮式山城より古い城で未熟であったため工事が止まったという考えも成立するように思われるし、逆に7世紀末頃に築城が始まり、すぐに城が不必要になったため、工事を停止したとも考えられ、やはり答えは簡単には出そうにない。

そして、朝鮮式山城と神籠石系山城を併せて、完成した城の分布を見ると、667年の対馬金田城、665年の大野城・基肄城、そしてほぼその頃に築城されたと推測される肥後鞠智城が大宰府地域を中心に北と南を意識して築かれていることがまずわかり、そして豊前御所ヶ谷神籠石と備中鬼ノ城、さらに667年の屋嶋城、場所は未確認であるが665年の長門城の位置を考えると、これらが一連の唐・新羅からの攻撃を意識して築城したものではないかと推測されるのである。これに備前大廻小廻山城を加えれば、当時の防衛線として対馬から北部九州・中九州、そして瀬戸内海沿岸地域のこれら山城が築かれた場所

山城跡・阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・女山神籠石・おつぼ山神籠石・播磨城山城跡などのように城壁の一部、またはかなりの部分が築かれていない、未完成と考えざるを得ない山城が存在することを再確認した。

ただ、前者に関しても、すべて土塁などの城壁を築造していたのか、それとも急峻な自然地形の利用も含めて完成していると考えるのか、気になる点はあるが、基本的に城としての機能を維持できる城壁線の存在が推測できるものをひとまず完成したものと考えている。この明確な城壁線（土塁・石塁など）が確認できない部分に関しては、まったく何もせず、自然地形を利用しているのか、本来は土塁状のもの、または柵などの施設があるのかなどは今後検討が必要であろう。

また、未完成の山城においても、その城壁が確認できない部分が、まったくなんらの工事もしていないのか、城壁を築く途中であったのか、たとえば、山の斜面を加工し、石を並べる準備をし、土塁を作ろうとしていたのか、さらに、斜面加工の後、石をいくつか並べたが、土塁を作る前に止まってしまったのかなど、いろいろな様相が確認されている。このように、どのような状況で止まっているのかを確認することも、山城築造のあり方を考える上で大事な点であろう。

城内施設　古代山城研究においてよく取り上げられた城内施設の存在もこの完成・未完成と関わる可能性がある。つまり、城壁が完成し、兵士たちがその中で見張りや城の管理などを行っていたと考えるならば、当然それに関連する施設や建物群が必要となる。ただ、未完成の山城でも工事を進めるために作業小屋や石材切り出し場、石材加工のための道具である鑿などの加工場（鍛冶場）などは当然必要であったと推測される。しかしこれまで古代山城において内部施設が確認されている例はやはり少ない。

一方、城壁が全周しない未完成と考えられている山城においては、城壁が築かれている部分には門が築かれたもの（おつぼ山神籠石など）はあるが、城内施設に関してはほとんど確認されていない。いずれ築城工事に関わる掘立柱建物などが検出される可能性はあると思うが、完成後の管理棟や兵舎、そして倉庫などは全域を調査しても検出できないのかもしれない。

ただ、この「完成」も当初から、または築城途中の段階で急遽、これくらいの範囲に城壁さえ築けばよいとして、ひとまずの「完成」として、城内施設の造営に関わっているならば、そのような管理棟、倉庫などが今後発見される可能性は当然ある。

いろいろな未完成　いずれにせよ、「未完成」にもいろいろな段階があることがわかる。

まず、城壁がほとんど築かれていないと考えられる豊前唐原山城跡や播磨城山城跡などはやはり、築城の意志はあったが、なんらかの理由で工事が「初期段階」で止まらざるを得なかったと推測される。

筑前阿志岐城跡、筑前鹿毛馬神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石などは官道などに面する部分だけが作られ、見えない部分については城壁が築かれていない。向井一雄のいう「見せる城」である（向井 2010 b）。確かに見られることを意識して築いていると思われるが、おつぼ山神籠石のように見えない部分にも点的に列石用の石材が置かれているものがあるのも事実のようである。つまりこのような途中で工事が止まった城に関しても当初の目的を達したのでここで止めるという場合と、やはり工事は進めていたが、なんらかの理由で、途中で止めざるを得なかったと考えざるを得ないものもありそうである。

さらに石城山神籠石の唐居敷は未完成であり、門の建物工事段階で中止した、といえるのかもしれない。豊前御所ヶ谷神籠石の第２東門に関しても、もしかすると工事途中であったのかもしれない。

このように、「未完成」についても、「工事初期段階の未完成」「工事のある段階での意図的中止」、そして「工事は続けていたが、なんらかの理由で工事が中止になった未完成」など、いろいろありそうで

城周約3kmと推定されている（石松1976、磯村1978、川述1982、猿渡2013）。この山城に関する記録は確認されていない。

東側の最高所から西側斜面に沿って扇状に広がる尾根部と西側標高40～45mの山腹に列石や土塁が確認され、水門が4ヵ所確認されている。ただ、正確にはこの東側山頂部のすぐ東側から北側と西面土塁線の最も北側に位置する粥餅谷水門の間は、地形によって城壁線が推測されているが、その場所には土塁・列石は未確認で、昭和46年の福岡県教育委員会による発掘調査でも10ヵ所ほどのトレンチを入れ、確認したが、土塁・列石は確認できていない。つまり西面土塁線の最も北側に位置する粥餅谷水門から南側は土塁・列石が確認されているが、その北側は未確認なのである。

(5)肥前おつぼ山神籠石

おつぼ山神籠石は佐賀県武雄市橘町大日のおつぼ山に位置する（鏡山ほか1965、武雄市教育委員会2011）。城内のほぼ中央部に位置する標高66.1m地点を最高所として、土塁・石塁が確認され、城周は1870mある。この山城に関する古代の記録は確認されていない。

おつぼ山神籠石の土塁・列石は想定されるすべての場所では確認されていない。昭和38年に発掘調査がなされているが、第2土塁とよばれる北東部の土塁から東側の東門、南東部の第1水門、南門を経て城壁南端付近までは基本的に土塁・列石は残っている。しかし、推定城壁線の西側に関しては、第2水門、そのやや西北側の一部で土塁・列石が確認できるが、それ以外の場所では点的に列石などを確認できる程度（第8図5の○で囲った点）であり、少なくとも城壁線が全周していることはない。また、東門の外側に加工された石材がまとまって点在している。

(6)播磨城山城跡

播磨城山城跡は兵庫県たつの市新宮町馬立などに所在する標高458mの城山を中心に築かれている（加藤ほか1988、加藤1995）。土塁などの城壁は確認されていないが、約1600mの城周が想定されている。この城に関する古代の記録はない。

遺構・遺物としては方形繰り込みの唐居敷、塊石を使用した谷部の石塁、そして礎石建物（4×7間）などが確認されている（加藤ほか1988）。ただ、唐居敷（第9図2）には軸摺穴が開けられておらず、未完成と考えられる。

(4)その他

以上述べてきたもののほか、筑前杷木神籠石は土塁・列石が明確でない部分があり（宮小路ほか1970）、筑後高良山神籠石も北側の城壁線はよくわかっていない（第8図8）。ただ、これに関しては天武天皇7（678）年の地震によって壊れた可能性が提示されている（松村1990・1994）。

このほかに、周防石城山神籠石は想定される城壁線において土塁・列石などが確認できていない部分があり（第8図7）、少なくとも方形刳込みを持つ唐居敷は軸摺穴が彫られておらず（第9図3）、未完成の可能性が考えられる（小野1983、光市教育委員会2011）。同様に讃岐城山城跡も方形刳込みを持つ唐居敷が確認されているが、方立用の穴と軸摺用の穴がともに彫られていないものがあり、さらに方形の柱を支えるための方形刳込みが途中までしかあけられていないものがある（第9図4）。やはり完成していない門があると考えざるを得ない（古代山城研究会1996）。

4．完成した古代山城と未完成の古代山城

城壁はできあがっていたか　以上、古代山城のいくつかの例を見てきたが、大野城跡・基肄城跡・金田城跡・鞠智城跡・鬼ノ城などのように城壁線が基本的に全周する、完成したと考えられる山城と、唐原

岡本 2013)。南に下がる斜面部に基本的に土塁で築かれ、城周は 2790mである。この山城に関する古代の記録はない。

城壁は基本的に版築の土塁で築かれているが、一部石塁で築かれており、一般的な印象としては石城のイメージが強いようである。城壁は全周しており、城門が 4 ヵ所、通水口をもつ水門が 5 ヵ所、城内に礎石建物が 7 棟、土手を持つ貯水施設が 2 ヵ所確認されている。

(6)豊前御所ヶ谷神籠石

豊前御所ヶ谷神籠石は、福岡県行橋市とみやこ町にまたがり、標高 246.9mの御所ヶ岳（ホトギ山）から西に延びる尾根線と北に延びる斜面を取り囲んで築かれている（小川 2006・2010 など)。城周は約 3030mである。文献に関連記事は確認されていない。基本的に基部に列石を配した土塁で囲まれている。

(7)その他

以上、述べてきたもののほかに完成していたのではないかと考えられているものとして、備前大廻小廻山城がある。少なくとも城壁線（土塁・列石）は全周していると考えられている（出宮・乗岡 1989)。ただ、西側の門が想定される一木戸北側は発掘調査を行ったが、現在の山道で削られているようで、門の痕跡は確認できていない。また伊予永納山城も完成した城と考えられているが、残りの悪い部分では本来どのような状況であったのかは確認できない（渡邊・半沢 2005、渡邊編 2009、渡邊 2012)。

3．未完成の可能性がある古代山城

(1)豊前唐原山城跡

唐原山城跡は福岡県築上郡上毛町下唐原・土佐井に位置し、標高 83.5m を最高所とする低丘陵に築かれている（末永 2003・2005)。城周約 1700mと推測されている。この山城に関する古代の記録はない。

土塁・列石に関しては、基本的に土塁はなく、北東側は土塁・列石を配するための加工がなされるのみで、南西部はそれすら明確でない。南側などで点的に並ぶ列石が城壁想定線の各所で確認されている。このように城壁は明らかに未完成である。

(2)筑前阿志岐城跡

阿志岐城跡は福岡県筑紫野市阿志岐に位置する標高 338.9mの宮地岳北西側山腹に築かれている（草場編 2008・2011)。城周は約 3.68km と推定されている。『日本書紀』などにその記録は確認されていない。

城跡は列石を持つ土塁、石塁、3 ヵ所の水門などが確認され、北東面側は第 3 水門までは土塁は確認できるが、その南側では確認できず、北西側では最も西側に突出した標高約 200m地点近くまでは確認できるが、そこから南側に関しては確認できていない。このように城壁は全周していないと考えられている。

(3)筑前鹿毛馬神籠石

鹿毛馬神籠石は福岡県飯塚市鹿毛馬、標高約 75mの低丘陵部に築かれている（井上・宮小路 1984、須原 1998)。城周約 2km である。この山城に関する古代の記録はない。

城跡は最高所の丘陵東側を起点として西側に三角形状に下がりながら広がる、土塁で囲まれたものである。城壁線は基本的に切石列石を伴う土塁で築かれているが、東側山頂付近では約 300m列石が確認できない。

(4)筑後女山神籠石

女山神籠石は福岡県みやま市瀬高町大草女山の標高 203.6mを最高所とする西向き丘陵部に位置し、

基肄城とともに築かれたことが記されている。そして『続日本紀』文武天皇2(698)年5月甲申条に「大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治（修理）させた」とあり、築城から33年で修理させていることがわかる。

(2)肥前基肄城跡

肥前基肄城跡は佐賀献基山町と福岡県筑紫野市にまたがる古代山城で、標高404mの基山から東に傾斜する地形を利用して土塁がぐるりとめぐらされており、城周は約3.9kmである(鏡山1968、田平1983、小田2009・2011など)。城内最高所は標高414mである。

基肄城に関しても大野城と同じように、『日本書紀』天智天皇4（665）年8月条に百済の達率憶禮福留と達率四比福夫が大野城とともに築いたことが記されている。そしてこれも同じく『続日本紀』文武天皇2(698)年5月甲申条に「大宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を繕治（修理）させた」とあり、築城から33年で修理させていることがわかる。

直接的に築城などに関わるものではないが、『万葉集』にもその名前が見える。巻8－1472は式部大輔石上堅魚朝臣の歌であるが、その左注に、神亀5（728）年石上堅魚が大宰師大伴卿の妻大伴郎女の死に際して大宰府に行き、役目が終わった後に駅使や府の諸卿大夫たちと「記夷城」に登って望遊して詠んだと記されている。

そして、大宰府政庁跡南側の不丁地区官衙遺跡において天平年間（729～748年）ころと推測される木簡が出土している。木簡には「為班給筑前筑後肥等国遣基肄城稲穀随大監正六位上田中朝□□」とあり、基肄城に貯蔵されていた稲穀が筑前・筑後・肥の国に運ばれたことがわかる（九州歴史資料館1987)。また『日本紀略』弘仁4（813）年条に「基肄団」（基肄軍団）の記録が見られる。

(3)対馬金田城跡

対馬金田城跡は長崎県対馬市美津島町黒瀬および箕形に位置する（田中・古門編2000・2003、田中編2008・2011、亀田2012など)。標高276.2mの城山を最高所として東に下がる斜面部に石塁がめぐらされている。城壁は石塁で全周しており、城周約2.8kmである。

『日本書紀』天智天皇6（667）年11月条に、倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城とともに築かれたことが記されている。金田城に関わる記録はこれだけで、築城後の城の様子などはわかっていない。

(4)肥後鞠智城跡

肥後鞠智城跡は熊本県北部の山鹿市と菊池市またがって位置している（西住ほか編2012など)。海岸線からはやや離れており、菊池平野を南に望む標高145mの米原台地を中心に築かれている。城壁は土塁と急な崖を利用したもので、城周約3.5kmの土城である。

築城に関しては記事が見られないので正確な年代はわかっていない。鞠智城が文献に初めてみられるのは、前述の大野城・基肄城とともに繕治させるという『続日本紀』文武天皇2（698）年の記事である。その後奈良時代の記録はなく、『日本文徳天皇実録』天安2（858）年閏2月丙辰（24日）条に、菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、同丁巳（25日）条に、また鳴ったとあり、同6月己酉条に菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴り、その不動倉11宇が火事になったと記されている。そして『日本三代実録』元慶3（879）年3月16日条にも肥後国菊池郡城院の兵庫の戸が自らなったと記されている。これ以後の記録は見られない。

(5)備中鬼ノ城

備中鬼ノ城は岡山県総社市奥坂に所在する鬼城山（標高396.6m）に位置する（高橋1976、鬼ノ城学術調査団1980、総社市教育委員会2005、村上・松尾2005、松尾・谷山2006、岡田・亀山2006、金田・

古代山城は完成していたのか

亀田 修一（岡山理科大学教授）

1．はじめに

日本列島で確認されている古代山城には朝鮮式山城と呼ばれているもの、神籠石系山城と呼ばれているものがある。前者は『日本書紀』や『続日本紀』などの記録にみられるもので、後者はその本来の名前は分からないが、列石を伴う城壁や水門の遺構などから古代の山城と考えられているものである。特に後者に関しては、土塁前面下部の列石が大きな特徴として認識されている。ただ、近年の発掘調査の進展によって、両者が基本的に同じ構造物であることが認識され、古代山城として同じように扱うべきであるという考えが増え、新規に発見される「神籠石」も「・・山城」「・・城」と名付けられるようになっている。

朝鮮式山城に関しては、前述のように『日本書紀』などにその築城・修築記事がある。天智天皇2（663）年の白村江の戦いにおける敗戦、百済からの多くの人々の日本列島への亡命、唐・新羅が日本列島へ攻めてくるのではないかという危機感などから、天智天皇3（664）年福岡県太宰府市などに水城が築かれる。そして翌天智天皇4（665）年、長門国の城、筑紫国の大野城・椽城が百済からの亡命貴族（将軍）達率答・春初、達率憶禮福留・達率四比福夫らによって築かれる。さらに天智天皇6（667）年、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬国の金田城が築かれる。そして文武天皇2（698）年、大宰府に大野・基肄・鞠智の3つの城を繕治させている(1)。

このように記録にみられ、かつその所在地がおおよそ確認されている朝鮮式山城は6ヵ所、記録にみられない神籠石系山城は16ヵ所、合計22ヵ所の古代山城が確認されている。これらの古代山城の調査・研究はそれぞれ進展状況に違いはあるものの、それなりに進んでおり、その内容についても徐々に明らかになりつつある。

そのようななかで、城壁が推測される場所で確認できず、もともと築かれていなかった、未完成であったのではないかと推測される山城の存在が改めて知られるようになってきた。このような指摘はすでに筑後女山神籠石や讃岐城山城跡などに関して指摘されていたが（石松1976・松本1976・佐田1982など）、近年単に未完成なのではなく、「見せる城」という考えで、見える部分だけ築こうとしたという考えも提示されるようになっている（向井2010a・b）。

小稿ではこのような広義の「未完成の城」について検討するとともに、「完成した城」と「未完成の城」の意味について改めて検討してみたい。

2．完成していたと思われる古代山城

これまでの発掘調査などによって城壁がほぼめぐらされていたと思われる山城は筑前大野城跡、肥前基肄城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡、備中鬼ノ城、豊前御所ヶ谷神籠石などである。

(1)筑前大野城跡

筑前大野城跡は福岡県大野城市・太宰府市・宇美町に位置する（鏡山1968、入佐・小澤編2010など）。最高所標高410mの四王寺山の峰々に土塁をめぐらせており、南北で部分的に二重になり、城周は約6.8kmである。

大野城に関しては、『日本書紀』天智天皇4（665）年8月条に百済の達率憶禮福留と達率四比福夫が

鞠智城（菊池城）の兵庫、鳴動

『文徳實録』巻十天安二年（八五八）閏二月丙辰《廿四》◆丙辰。肥後国言。**菊池城院兵庫鼓自鳴**。▲丁巳《廿五》丁巳◆。又鳴。

『文徳實録』巻十天安二年（八五八）六月己酉《廿》◆己酉。從五位下安倍朝臣良行爲參河守。』大宰府言。去五月一日。大風暴雨。官舍悉破。青苗朽失。九国二島盡被損傷。又肥後国**菊池城院兵庫鼓**自鳴。同城不動倉十一宇火。』

参考
『三代実録』巻二七貞観十七年（八七五）六月廿日辛未◆辛未廿日。大宰府言。大鳥二集肥後国玉名郡倉上。向西**鳴**。群鳥數百。噬拔菊池郡倉舍葺草。

笹本正治『鳴動する中世』朝日新聞社、２０００年
西山克「中世王権と鳴動」今谷明編『王権と神祇』思文閣出版、２００２年
黒田智『中世肖像の文化史』ぺりかん社、２００７年

むすびに代えて－鞠智城が象徴するもの－

予兆と王権・国家
「兵庫」の鳴動

予兆：物事のきざし。前知らせ。俗信知識の上で、出来事の原因となったとされる過去の現象。

『日本書紀』天智十年（六七一）是歳、讃岐国山田郡人家、有鶏子四足者。又大炊有八鼎鳴。或一鼎鳴。或二或三俱鳴。或八俱鳴。

『続日本紀』宝亀元年（七七〇）二月丙辰。《廿三》破却西大寺東塔心礎。其石大方一丈余。厚九尺。東大寺以東。飯盛山之石也。初以数千人引之。日去数歩。時復或鳴。於是。益人夫。九日乃至。即加削刻築基已畢。時巫覡之徒。動以石崇為言。於是。積柴焼之。潅以卅余斛酒。片片破却。棄於道路。後月余日。天皇不■。卜之破石為崇。即復拾置浄地。不令人馬践之。今其寺内東南隅数十片破石是也。

『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）六月辛酉。《廿八》授従五位上紀朝臣佐婆麻呂正五位下。无位名継女王従五位下。伊勢国言。今月十六日己酉巳時。鈴鹿関西内城大鼓一鳴。勅陸奥持節副将軍大伴宿祢益立等。将軍等去五月八日奏書云。且備兵糧。且伺賊機。方以今月下旬進入国府。然後候機乗變。恭行天誅者。既経二月。計日准程。佇待献俘。其出軍討賊。国之大事。進退動静。続合奏聞。何経数旬絶無消息。宜申委曲。如書不尽意者。差軍監巳下堪弁者一人。馳駅申上。

『続日本紀』宝亀十一年（七八〇）冬十月癸巳。《辛卯朔三》左右兵庫鼓鳴。後聞箭動声。其響達内兵庫。

『続日本紀』天応元年（七八一）三月乙酉。美作國言。今月十二日未三點。苫田郡兵庫鳴動。又四點鳴動如先。其響如雷霆之漸動。」伊勢國言。今月十六日午時。鈴鹿關西中城門大鼓。自鳴三聲。

『続日本紀』天応元年（七八一）夏四月己丑朔。左右兵庫兵器自鳴。其声如以大石投地也。遣散位従五位下多治比真人三上於伊勢。伯耆守従五位下大伴宿祢継人於美濃。兵部少輔従五位下藤原朝臣菅継於越前。以固関焉。以天皇不予也。

『続日本紀』天応元年（七八一）十二月庚戌。《廿六》兵庫南院東庫鳴。

史料　＜２－「防衛体制」の整備＞

５９２年（崇峻五年十一月）丁未、遣駅使於筑紫将軍所曰、依於内乱、莫怠外事。

６７２年（天武元年６月）丙戌、＜中略＞。（佐伯連）男至筑紫、時栗隈王、承符対曰、筑紫国者、元戍辺賊之難也。其峻城深隍、臨海守者、豈為内賊耶。今畏命而発軍、則国空矣。若不意之外、有倉卒之事、頓社稷傾之。然後、雖百殺臣、何益焉。豈敢背徳耶。轍不動兵者、其是縁也。＜後略＞。

国内の動乱処理と切り離された外交上の対応

‖

筑紫への派遣の兵の性格――「救軍」（スクイノイクサ）

「救軍」

『日本書紀』巻十九欽明天皇八年（五四七）四月

八年夏四月。百濟遣前部徳率眞慕宣文。奈率哥麻等。乞救軍。仍貢下部東城子言代徳率■休麻那。

『日本書紀』巻十九欽明天皇九年（五四八）九年正月乙未三

春正月癸巳朔乙未。百濟使人前部徳率眞慕宣文等請罷。因詔曰。所乞**救軍**必當遣救。宜速報王。

『日本書紀』巻二六斉明天皇六年（六六〇）十二月庚寅廿四

十二月丁卯朔庚寅。天皇幸于難波宮。天皇方随福信所乞之意。思幸筑紫將遣**救軍**。而初幸斯備諸軍器。

『続日本紀』巻廿七天平神護二年（七六六）六月壬子廿八

壬子。刑部卿從三位**百濟王敬福**薨。其先者出自百濟國義慈王。高市岡本宮馭宇天皇御世。義慈王遣其子豊璋王及禪廣王入侍。■于後岡本朝廷。義慈王兵敗降唐。其臣佐平福信勍復社稷。遠迎豊璋。紹興絶統。豊璋纂基之後。以譖横殺福信。唐兵聞之復攻州柔。豊璋与我救兵拒之。**救軍**不利。豊璋駕船遁于高麗。禪廣因不歸國。藤原朝廷賜号曰百濟王。卒贈正廣參。子百濟王昌成。幼年隨父歸朝。先父而卒。飛鳥淨御原御世贈小紫。子郎虞。奈良朝廷從四位下攝津亮。敬福者即其第三子也。放縱不拘。頗好酒色。感神聖武皇帝殊加寵遇。賞賜優厚。時有士庶來告清貧。毎假他物。望外与之。由是。頻歷外任。家无餘財。然性了辨。有政事之量。天平年中。仕至從五位上陸奥守。時聖武皇帝造盧舍那銅像。冶鑄云畢。塗金不足。而陸奥國馳驛。貢小田郡所出黄金九百兩。我國家黄金從此始出焉。聖武皇帝甚以嘉尚。授從三位。遷宮内卿。俄加河内守。勝寶四年拜常陸守。遷左大弁。頻歷出雲。讃岐。伊豫等國守。神護初。任刑部卿。薨時年六十九。

６９０年（持統４）　持統女帝即位

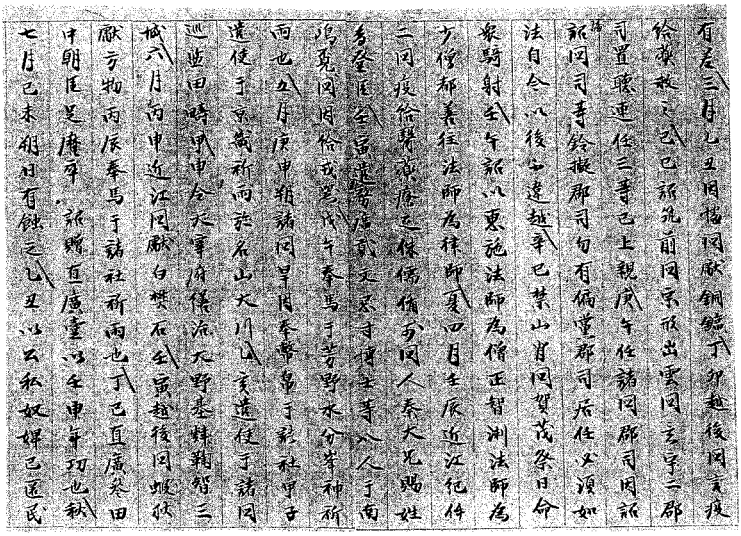
６９４年（持統８）　藤原遷都

６９７年（文武元）　文武即位

６９８年（文武２）　５月　**大野城・基肄城・鞠智城の三城を繕治する**
（＝鞠智城の初見史料）

８月　高安城を修理する。

令大宰府繕治大野・基肄・鞠智三城。



６９９年（文武３）　**高安城・三野城・稲積城を修理する**

九月丙寅。修理高安城。十二月甲申。令大宰府修三野・稲積二城。

７０１年（大宝元）　大宝律令の制定

等。∧等謂右戎衛郎将上柱国百済**祢軍**・朝散大夫柱国郭務悰。凡二百五十四人。七月廿八日、至于対馬。九月廿日、至于筑紫。廿二日、進表函焉。∨

（天智四年）十一月己巳朔辛巳、饗賜劉徳高等。
（天智四年）十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉徳高等。
（天智四年十二月）是月、劉徳高等罷帰。
（天智四年）是歳、遣小錦守君大石等於大唐、云々。∧等謂小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間。蓋送唐使人乎。∨

百済人禰軍（祢軍）、祖先は中国人、戦乱が続いた西晋永嘉年間（307-313）末に百済移住。曾祖祢福、祖父祢誉、父祢善、いずれも一品の位、「佐平」官。百済が660年に唐に滅ぼされ、禰軍が唐に渡ると、皇帝は栄達させ、右武衛滎川府折冲都尉に任じた。

参考史料
田中健夫編『善隣国宝記』所引の「海外国記」

海外國記曰、天智天皇三年四月、大唐客來朝、大使朝散大夫上柱國郭務悰等卅人・百濟佐平**禰軍**等百餘人、到對馬島、遣大山中采女通信侶・僧智辨等來、喚客於別館、於是智辨問曰、有表書幷獻物、以不、使人答曰、有將軍牒書一函幷獻物、乃授牒書一函於智辨等而奉上、但獻物撿看而不將也、
九月、大山中津守連吉祥・大乙中伊岐史博德・僧智辨等、稱筑紫大宰辭、實是勅旨、告客等、今見客等來狀者、非是天子使人、百濟鎭將私使、亦復所賚文牒、送上執事私辭、是以使人不得入國、書亦不上朝廷、故客等自事者、略以言辭奏上耳、
十二月、博德、授客等牒書一函、函上著鎭西將軍、日本鎭西筑紫大將軍、牒在百濟國大唐行軍摠管、使人朝散大夫郭務悰等至、披覽來牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是摠管使、乃爲執事牒、牒是私意、唯須口奏、人非公使、不令入京、云々

６６７年（天智６）１１月　大和に高安城・讃岐に屋嶋城・対馬に金田城を築く
是月、築倭國高安城・讃吉國山田郡屋嶋城・對馬國金田城。
６６８年（天智７）　天智即位（→　この年、９月　高句麗、滅亡。近江遷都。
６６９年（天智８）　是冬、高安城を修理する
６７２年（天武元）　壬申の乱
６７３年（天武２）　天武即位
６７５年（天武４）　高安城へ御幸
６８９年（持統３）　飛鳥浄御原令の制定

『豊後国風土記』

郡は八所△郷は四十、里は一百一十、△驛は九所△竝に小路、△烽は五所△竝に下國、△寺は二所なり△僧の寺と尼の寺となり

大野の郡△郷は四所△里は一十一、△驛は二所、烽は一所なり。

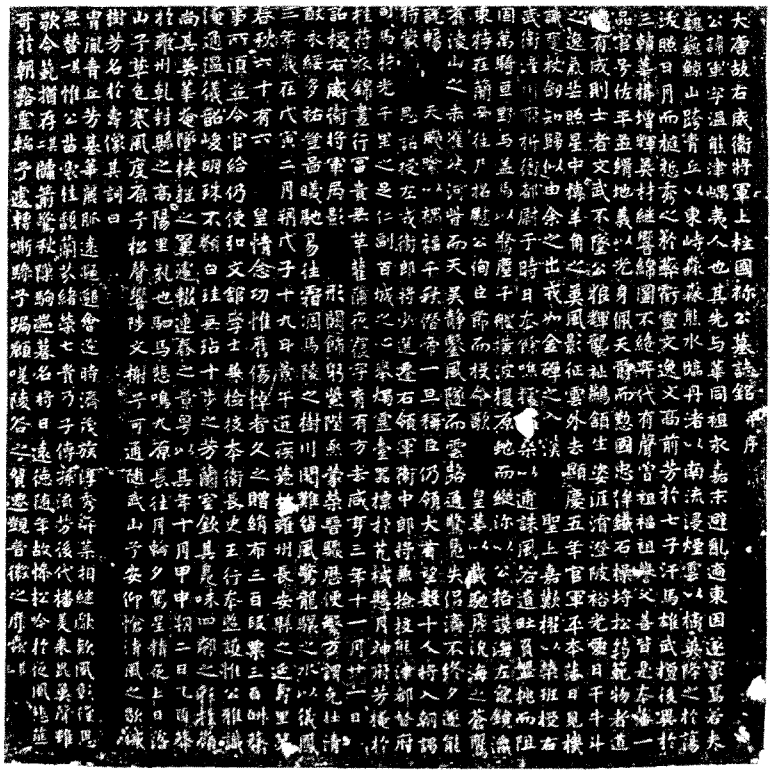
海部の郡△郷は四所△里は一十二、△驛は一所、烽は二所なり。

大分の郡△郷は九所△里は廿五、△驛は一所、烽は一所、寺は二所なり△一つは僧の寺、一つは尼の寺なり。

速見の郡△郷は五所△里は一十三、△驛は二所、烽は一所なり。

６６５年（天智４）１２月　　筑紫に大野城・椽城を築く

秋八月、遣達率答火本春初、築城於長門国。遣達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国、築大野及椽二城。



「祢軍墓誌」

『日本書紀』天智四年（６６５）九月庚午朔壬辰、唐国遣朝散大夫沂州（ぎしゅう）司馬上柱国劉徳高

出遊雨箇鎰匙自天落前婦取而與殿
ゝ得始富是歳於對馬嶋壹岐嶋筑紫
國等置防与烽又於筑紫築大堤貯水
名曰水城
四年春二月癸酉朔丁酉間人大后薨
是月勘校百濟國官位階級仍以佐平
福信之功授鬼室集斯小錦下其本位達率
復以百濟百姓男女四百餘人居于近
江國神前郡三月癸卯朔為間人大后
度三百卅人是月給神前郡百濟人田
秋八月遣達率答㶱春初築城於長門
國遣達率憶礼福留達率四比福夫於
筑紫國築大野及椽二城耽羅遣使來
朝九月庚午朔壬辰唐國遣朝散大夫
沂州司馬上柱國劉德高等等謂右戎衛郎將上
柱國百濟禰軍朝散大夫上柱國郭務
悰凡二百五十四人七月廿八日至于

「水城」

「烽」

『肥前国風土記』　　「烽貳拾所」

養父の郡△郷は四所△里は一十二、△烽は一所なり。

神埼の郡△郷は九所△里は廾六、△驛は一所、烽は一所、寺は一所△僧の寺△なり。

小城の郡△郷は七所△里は廾、△驛は一所、烽は一所なり。

松浦の郡△郷は一十一所△里は廾六、△驛は五所、烽は八所なり。

値嘉の郷△郡の西南のかたの海の中にあり。烽の處三所あり。

藤津の郡△郷は四所△里は九、△驛は一所、烽は一所なり。

高來の郡△郷は九所△里は廾一、△驛は四所、烽は五所なり。

以後、王の代理（分身）を派遣（ヤマトタケル伝承）
ないし、王の軍事指揮権を臣下に一時付託

☆これらの点からみれば、大王斉明は５世紀以来の伝統に則した大王である。
白村江の敗戦以後、古代においては海外派兵がなくなる。

‖

４・５世紀以来の外交手段の喪失－「救軍」＝「スクイノイクサ」
軍事派兵に依存しない外交の模索

２　「白村江敗戦」後の倭国－中大兄「称制」下の非常時の王権－

唐・新羅との交渉
遣唐使の派遣
６６５年（天智４）、６６７年（天智６）、６６９年（天智８）
防衛体制の整備
筑紫大宰　→　大宰府
兵卒の配備－「救軍」体制　→　防人制
朝鮮式山城の築造と整備

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

６６０年（斉明６）　百済滅亡
６６１年（斉明７）　斉明親征（筑紫の朝倉へ）
７月　斉明死去→中大兄（葛城）皇子の「称制」
８月　白村江の戦→大敗
（天智即位前紀）七年七月丁巳崩。皇太子素服称制。＜中略＞。皇太子遷居于長津宮。稍聴水表之軍政。

６６３年（天智２）　８月　白村江の海戦－大敗を喫す
（天智二年秋八月）＜中略＞。戊戌、賊将至於州柔、繞其王城。大唐軍将、率戦船一百七十艘、陣烈於白村江。戊申、日本船師初至者、與大唐船師合戦。日本不利而退。大唐堅陣而守。己酉、日本諸将、與百済王、不観気象、而相謂之曰、我等争先、彼応自退。更率日本乱伍、中軍之卒、進打大唐堅陣之軍。大唐便自左右夾船繞戦。須臾之際、**官軍敗績。赴水溺死者衆。**艫舳不得廻旋。朴市田来津、仰天而誓、切歯而嗔、殺数十人。於焉戦死。是時、百済王豊璋、與数人乗船、逃去高麗。

６６４年（天智３）１２月　対馬・壱岐に防人と烽を置き、大宰府に水城を築く
是歳、於対馬島・壱岐島・筑紫国等、置防與烽。又於筑紫、築大堤貯水。名曰水城。

1　七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造

「白村江の戦役」の性格
　斉明女帝の戦争から中大兄（葛城）皇子の戦争へ
　　斉明女帝の親征－究極の「王事」の実現－
　　中大兄「称制」
（天智即位前紀）七年七月丁巳朔。**皇太子素服称制**。＜中略＞。皇太子遷居于長津宮。稍聴水表之軍政。

斉明女帝　　筑紫への行幸－筑紫での死
　この事実の歴史的意義＝斉明女帝－中大兄の歴史的評価に関わる
　　中大兄王　　事実上の戦闘指揮官－斉明の死後、大王代行
　　　↓
　　「称制」（マツリゴトキコシメス）
　　その後の指揮－中大兄皇子であったことの意味
　　大王の長期不在の中での内外の懸案を処理しうる政治形態が始めてうまれる
　　百済派遣軍の失敗の政治的責任をおうことになる

　　死去後も戦闘を続行することを可能としたもの
　　女帝斉明の名目性？→大王の地位が名目的なものとはならない＝通説
　　中央豪族層の深い利害に関わる？
　　百済復興に関与の段階から唐の帝国主義との対決への段階に移行
　　↓
　　唐と倭国の全面的対決にはいたらなかった＝二重の「幸運」
　　新羅の対唐戦争の影響
唐の内部問題－高宗の統治から則天武后の時代への変化に伴う対外政策の修正の可能性

大王が自ら前線に赴く＝「親征」形態　－積極的評価を与えるべきもの
　多くは王の代理を派遣する＝「代理王」
　　代理が王族の場合－－－－王族将軍
　　代理が臣下の場合－－－－○○将軍

＝軍事王としての側面－古代最後の「親征」王
　　大王として果たさねばならない重要な側面
　　５世紀－－倭王武（雄略）の上表文

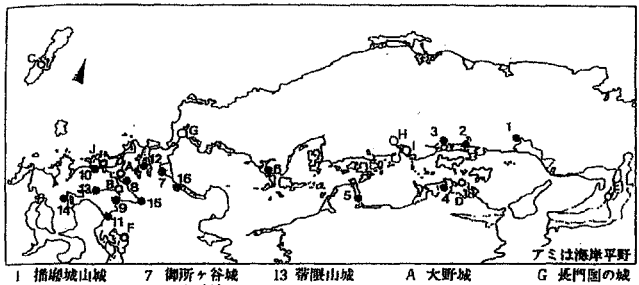
古代山城

朝鮮式山城　　A～J

神籠石（系山城）　　1～16

1	播磨城山城	兵庫県新宮町馬立・龍野市揖中垣内
2	大廻小廻山城	岡山市草ヶ部
3	鬼城山城（鬼ノ城）	岡山県総社市奥坂・黒尾
4	讃岐城山城	香川県坂出市西庄町・府中町・川津町、飯山町
5	永納山城	愛媛県東予市楠
6	石城山神籠石	山口県熊毛郡大和町石城
7	御所ヶ谷神籠石	福岡県行橋市津積・勝山町大久保・犀川町木山
8	阿志岐城	福岡県筑紫野市
9	高良山神籠石	福岡県久留米市御井町高良山
10	雷山神籠石	福岡県前原市雷山
11	女山神籠石	福岡県山門郡瀬高町大草字女山
12	鹿毛馬神籠石	福岡県嘉穂郡嶺田町鹿毛馬
13	帯隈山神籠石	佐賀県佐賀市久保泉町川久保町・神埼町西郷
14	おつぼ山神籠石	佐賀県武雄市橘町小野原
15	杷木神籠石	福岡県朝倉郡杷木町林田・穂坂
16	唐原神籠石	福岡県築上郡大平村下唐原・土佐井

A	大野城	福岡県太宰府市太宰府、大野城市瓦田、宇美町
B	基肄（椽）城	佐賀県基山町小倉・福岡県筑紫野市山口
C	金田城	長崎県下県郡美津島町黒潮
D	屋嶋城	高松市屋島
E	高安城	奈良県生駒郡平群町久安寺
F	鞠智城	熊本県菊鹿町米原字長者原・菊池市木野字深迫
G	長門国の城	
H	常城（所在不明）	備後国葦田郡　（山陽道）
I	茨城（所在不明）	備後国安那郡　（山陽道）
J	怡土城	福岡県糸島郡前原市高来寺・大門・高祖



1 播磨城山城	7 御所ヶ谷城	13 帯隈山城	A 大野城	G 長門国の城
2 大廻小廻山城	8 阿志岐城	14 おつぼ山城	B 基肄城	H 常城
3 鬼城山城	9 高良山城	15 杷木城	C 金田城	I 茨城
4 鞠智城山城	10 雷山城	16 府原城	D 屋嶋城	J 怡土城
5 永納山城	11 女山城		E 高安城	
6 石城山城	12 鹿毛馬城		F 鞠智城	

朝鮮式山城【ちょうせんしきやまじろ】

663(天智 2)の白村江の戦に敗れた後,外敵防備のために築いた城の形式。大野城や基肄城など百済の亡命貴族の技術指導により築城されたという日本書紀の記事と,現存する土塁・石塁・城門・倉庫等の形態や構造が朝鮮の三国時代に発達した山城に類似していることによる呼称。ほかに鞠智城・金田城・屋島城・高安城が知られる(『日本史辞典』岩波書店)。

神籠石【こうごいし】

7 世紀に外敵防備のため北九州から瀬戸内海沿岸に築造された山城の 1 型式。7 世紀の山城には構造上,朝鮮式山城と神籠石の 2 形式がある。神籠石式山城の最大の特徴は,山頂ないし山腹に方形の切り石を並べ巡らした列石と,その上に版築された土塁からなる城壁である。土塁の基礎の列石は密接させ,外面を合せて外観を整えている。御所ヶ谷(福岡県)や岩城山(山口県)のように列石を土塁の中に埋没させる工法もあった。おつぼ山神籠石など,福岡県 6,佐賀県 2,山口県 1,岡山県 2,兵庫県 1,愛媛県 1,香川県 1 の計 14 か所が知られている。神籠石の称は,高良山(こうらさん－福岡県久留米市)の列石が高良大社の霊域区画施設と考えられたことから生じたもの(『日本史辞典』岩波書店)。

律令国家と古代山城

荒木　敏夫（専修大学教授）

はじめに

白村江の戦【はくそんこうのたたかい・はくすきのえのたたかい】
663(天智 2)8 月に,朝鮮半島西南部の錦江河口(白村江)で行われた,倭・百済軍と唐・新羅軍との海戦。660 年に滅亡した百済の復興を願う鬼室福信らの要請により,倭は人質であった王子豊璋(余豊璋)を擁立し軍を派遣して百済を救援した。しかし豊璋と福信の不和が生じて福信が殺されると,唐と新羅の連合軍は百済軍の根拠地で錦江下流にある周留城(州柔城つぬさし)の攻略をめざした。倭軍は唐の劉仁軌の水軍と白村江で 2 日間にわたって戦い大敗を喫した。その結果,周留城は陥落,豊璋は高句麗へ逃げ,百済は完全に滅亡し,倭国へ百済の王族・貴族が多数亡命した。倭国は,北九州・瀬戸内海沿岸に城を築き,都を近江の大津宮へ遷して防衛体制を固め,政治体制の改革に努めた（『日本史辞典』岩波書店）。

1　七世紀（後半）の古代日本と鞠智城の築造

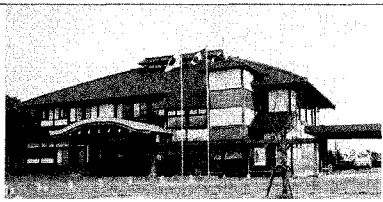
「白村江の戦役」の性格
　斉明女帝の戦争から中大兄（葛城）皇子の戦争へ
　　斉明女帝の親征－究極の「王事」の実現－
　　中大兄「称制」

2　「白村江敗戦」後の倭国－中大兄「称制」下の非常時の王権－

　唐・新羅との交渉
　防衛体制の整備
　　朝鮮式山城の築造と整備

むすびに代えて－鞠智城が象徴するもの－

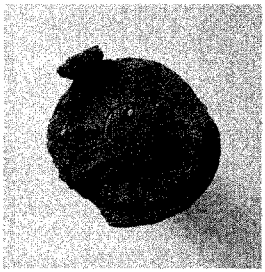
　予兆と王権・国家
「兵庫」の鳴動



ガイダンス施設 温故創生館(おんこそうせいかん)

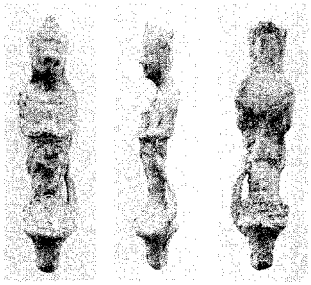
温故創生館内 展示風景

鞠智城跡出土の遺物4



単弁八葉蓮華文軒丸瓦

鞠智城跡出土の遺物5



百済系銅造菩薩立像

鞠智城の変遷

鞠智城Ⅰ期 （7世紀第3四半期～第4四半期）

・鞠智城の創建期。
・掘立柱建物が築造。
・城門、貯水池、土塁を構築。
・古代山城としての最低限の機能が備わった時期。

南側Ⅰ型掘立柱建物・全景（東から）

貯水施設・貯水場跡（南東から）

北ノ尾門跡・木門（北から）

鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）

鞠智城Ⅱ期の建物群

・八角形建物、「コ」の字形配置の建物群の出現。
・698年の繕治の時期

南側八角形建物跡（北から）

北側八角形建物跡（東南から）

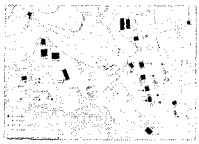
鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半～8世紀第3四半期）

鞠智城Ⅲ期の建物群

・礎石建物の出現
・出土土器の空白期

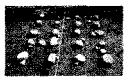
65号建物跡（南西から）

鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）



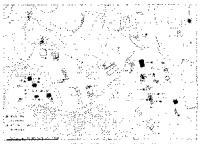
鞠智城Ⅳ期の建物群

・礎石建物の大型化
・食糧備蓄施設としての機能を持つ



20号建物跡（北から）

鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀第3四半期）



鞠智城Ⅴ期の建物群

・建物の数が減少。
・倉庫としての機能が主体的

56号建物跡（東から）

復元建物

八角形鼓楼

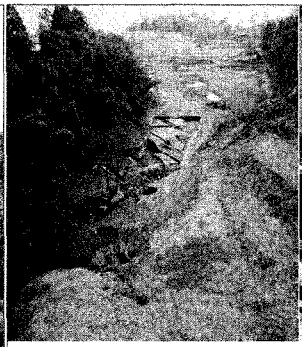
米倉

兵舎

板倉

堀切門跡

深迫門跡



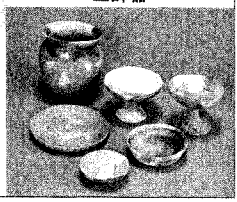
貯水池跡

南側土塁線

西側土塁線

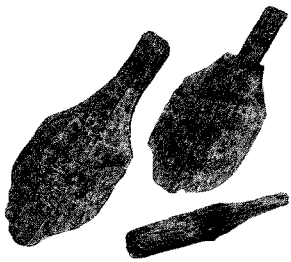
鞠智城跡出土の遺物1

須恵器



土師器

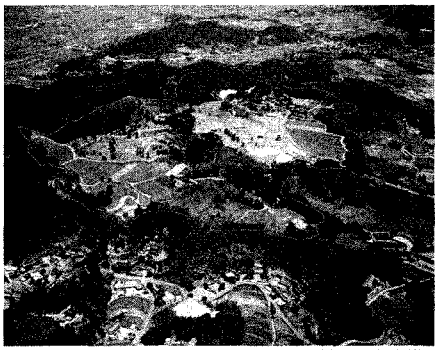
鞠智城跡出土の遺物2



木製品(平鍬・横槌)

鞠智城跡出土の遺物3

「秦人忍口五斗」銘木簡



鞠智城跡全景（平成19年度撮影）

文献に見る鞠智城

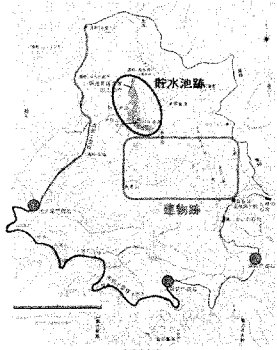
六国史にみる鞠智城　＊「国史体系」吉川弘文館

甲申、令二大宰府一繕二治大野、基肄、鞠智三城一。
（書き下し文）
「甲申、大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕い治めしむ。」
（続日本紀）文武天皇二（698）年五月二十五日条

丙辰、肥後国言、菊池城院兵庫鼓自鳴。丁巳、又鳴。
（書き下し文）
「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「丁巳、又鳴る」
（日本文徳天皇実録）天安二（858）年二月二十四・二十五日条

肥後国菊池城院の兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。
（書き下し文）
「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」
「同城不動倉十一宇火く」
（日本文徳天皇実録）天安二（858）年六月二十日条

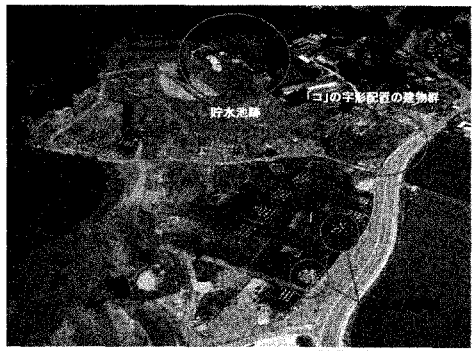
肥後国菊池郡城院兵庫戸自鳴。
（書き下し文）
「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」
（日本三代実録）元慶二（879）年三月十六日条



・城内の面積：約55ha
周囲長：約3.5km

・昭和42（1967）年から32次にわたる発掘調査を実施。

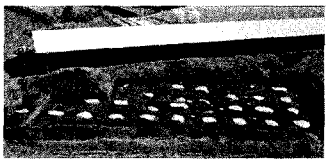
・72棟の建物跡、3ヶ所の城門跡、貯水池跡、土塁跡などの遺構を確認。



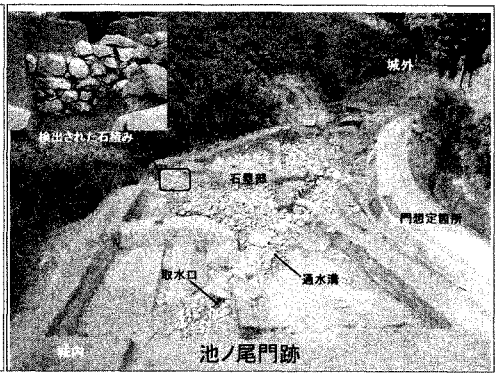
長者原地区完備状況（平成9年度撮影）

南側八角形建物跡

北側八角形建物跡



礎石建物跡（49号建物跡）



鞠智城跡の調査と成果

能登原孝道（歴史公園鞠智城・温故創生館）

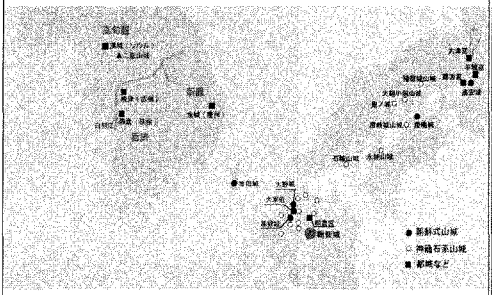
鞠智城とは

・7世紀後半（今から約1300年前）に大和朝廷によって築城された古代山城。

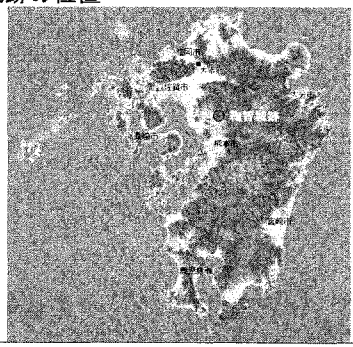
・白村江の戦いにおける敗戦を契機として、西日本各地に作られた古代山城の一つ。（古代日本の防衛体制の一翼を担う。）

・10世紀中頃までの約300年間存続し、その変遷は5期に分けられる。

古代山城の分布



鞠智城跡の位置



鞠智城東京シンポジウム

「古代山城鞠智城築城の謎を探る
古代山城の成立と鞠智城－律令国家への道と東アジアー」

日時：平成２５年７月２８日（月）　１３：００～１７：００
場所：東京国立博物館　平成館　大講堂（東京都台東区上野公園１３－９）
主催：熊本県・熊本県教育委員会
共催：熊本県文化財保護協会

シンポジウム日程

12:00　開場

13:00　開会

あいさつ　　蒲島郁夫（熊本県知事）

13:10　報告

「鞠智城跡の調査と成果」13:10～13:30
　能登原　孝道（熊本県教育委員会　歴史公園鞠智城温故創生館　主任学芸員）

13:30　講演

「律令国家と古代山城」13:30～14:10
　荒木 敏夫（専修大学教授）
「古代山城は完成していたのか」14:10～14:50
　亀田 修一（岡山理科大学教授）

14:50　休憩

15:15　講演

「鞠智城の建物跡について」15:15～15:55
　小西 龍三郎（元九州造形短期大学教授）

16:00　パネルディスカッション　16:00～17:00

コーディネーター　佐藤 信（東京大学大学院教授）
パネラー　荒木 敏夫（専修大学教授）
　亀田 修一（岡山理科大学教授）
　小西 龍三郎（元九州造形短期大学教授）

17:00　閉会

資料篇

鞠智城シンポジウム 2013
成果報告書

鞠智城シンポジウム　二〇一三　成果報告書

古代山城の成立と鞠智城
古代山城鞠智城築城の謎を探る
―律令国家への道と東アジア―（東京会場）
―築城技術の源流―（大阪会場）

発行年月日　平成二六年（二〇一四）年三月二八日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒八六二―八六〇九
熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号
電話　〇九六―三八三―一一一一（代表）
印刷　株式会社淀川工技社

発 行 者 ：熊本県教育委員会
所　　属 ：教育総務局文化課
発行年度 ：平成25年度

この電子書籍は、古代山城の成立と鞠智城 鞠智城シンポジウム成果報告 2013 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城の成立と鞠智城 古代山城鞠智城築城の謎を探る
鞠智城シンポジウム成果報告 2013
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日